

小反遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第148集



2006

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



こ ぞ り
小反遺跡

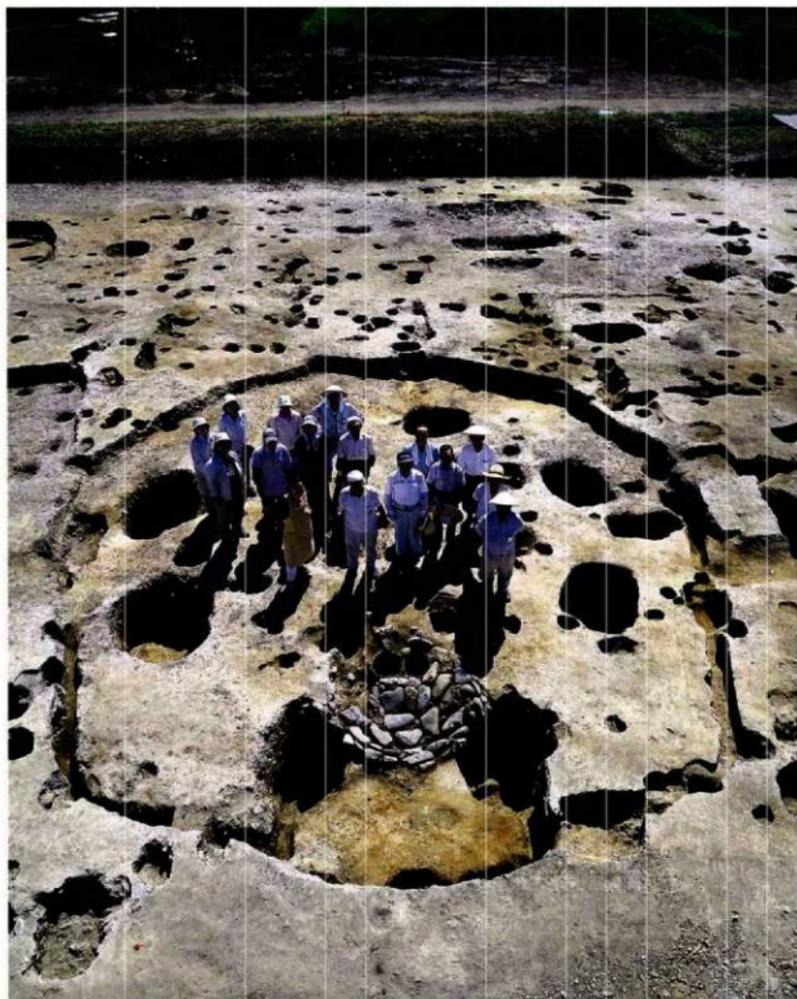
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第148集

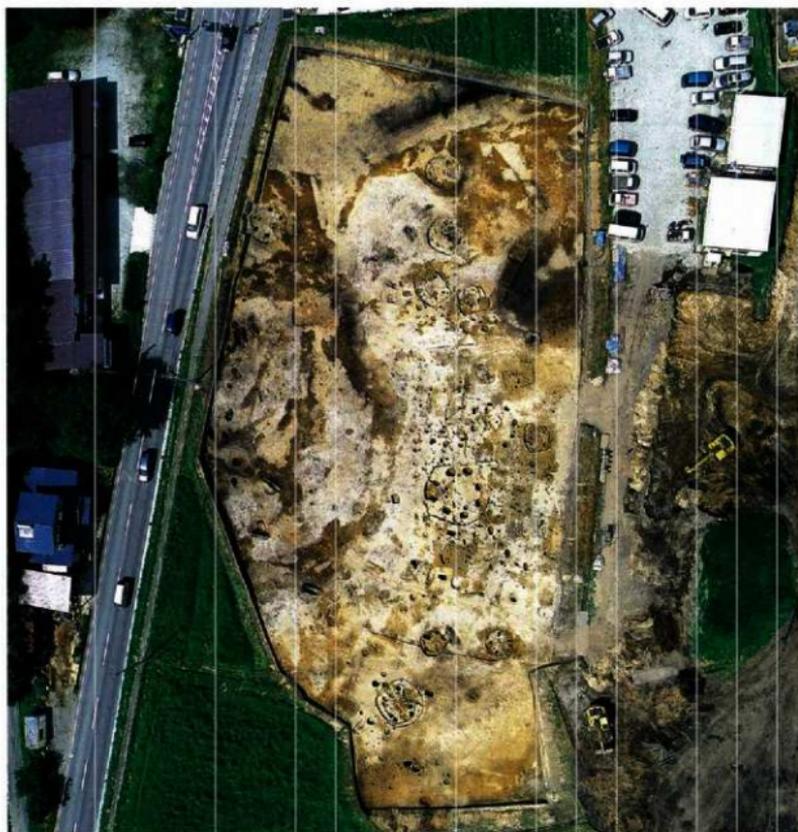
平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

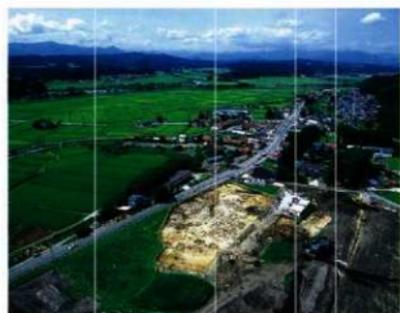




整穴住居ST5（西から）



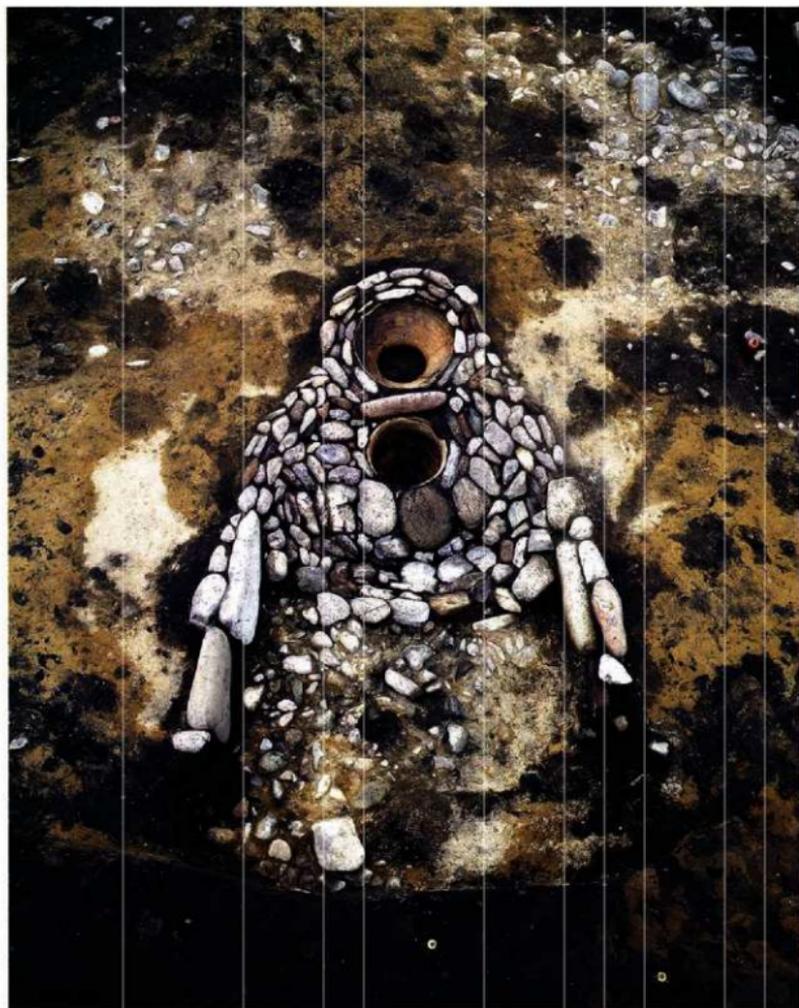
調査区全景（上が北）



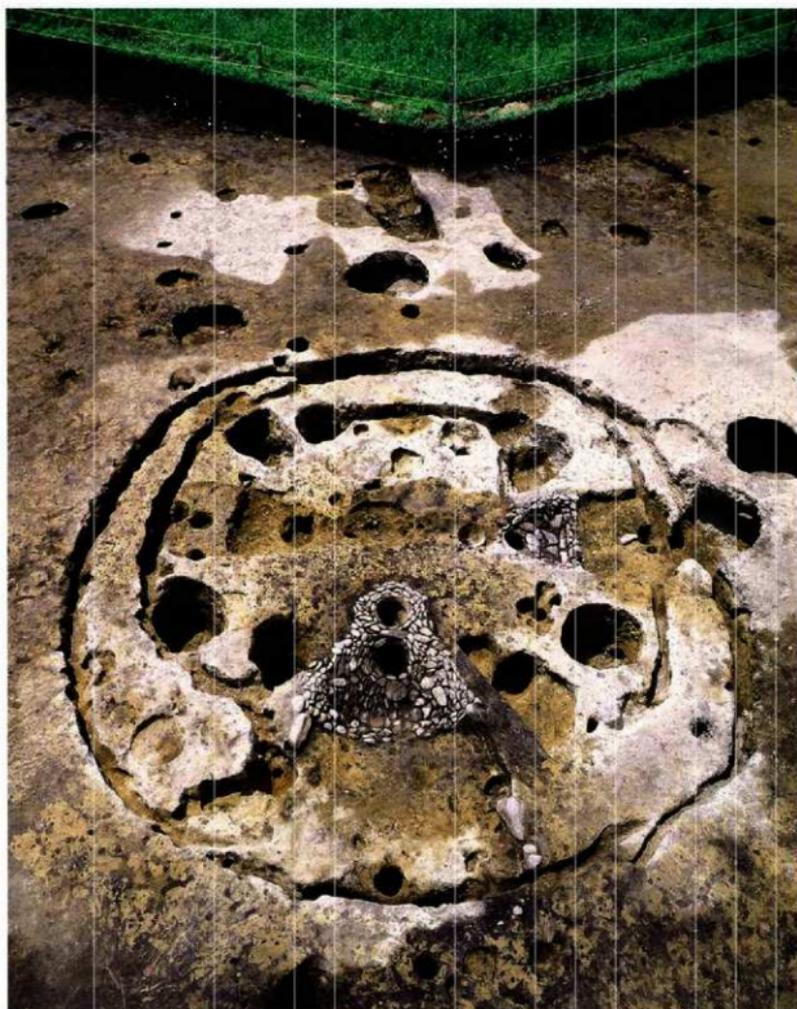
調査区遠景（南東から）



調査区遠景（北東から）



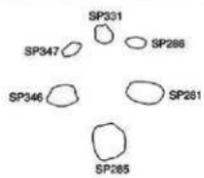
模式炉 E.L.87 (巖穴住居 ST 1, 南東から)



壘穴住居 S T35 (北東から)

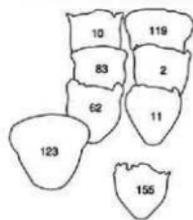


瓶立柱建物S B 349 (南から)



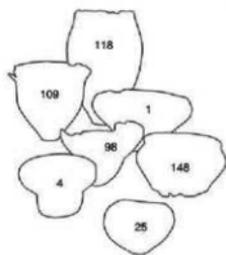


大木9式土器





大木10式土器





107

模式炉 E L 263 罐設土器 (豎穴住居 S T 35)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、小反遺跡の調査成果をまとめたものです。

小反遺跡は、山形県北部に位置する鮭川村に所在します。その中央を鮭川が南北に流れ、南西に月山、北西には鳥海山を望むことができます。また、鮭川村は「キノコ王国」とも呼ばれ、山形県のキノコ生産量の約半分を占めるほど栽培が盛んです。

このたび、県営ほ場整備事業鮭川左岸地区に伴い、工事に先立って小反遺跡の発掘調査を実地しました。

調査では縄文時代の遺構として竪穴住居、掘立柱建物、陥穴、貯蔵穴などが検出されました。いずれの竪穴住居にも、土器と石を組み合わせて構築した複式炉と呼ばれる遺構が残されていました。縄文時代中期末葉の複式炉は、最も大きく、精巧かつ丁寧に作られることが知られています。本遺跡の複式炉もその例にもれず、見る者の心を奪う造形でした。

ほかには、直径9mを越える大型の竪穴住居や、県内では最古となる独立棟持柱を持つ掘立柱建物を検出したことなどが、特筆すべき調査成果として挙げられます。これらから、小反遺跡がこの地域における拠点的な集落であったと考えられます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んだ貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた各位に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 敏彦

本書は、県営ほ場整備事業鮎川左岸地区に係る「小反遺跡」の発掘調査報告書である。
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物・調査記録類は、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	こまろ 小反遺跡
遺跡番号	1049
所在地	山形県最上郡鮎川村大字京塚字小反704
調査委託者	山形県
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成16年4月1日～平成17年3月31日 平成17年4月1日～平成18年3月31日
現地調査 調査担当者	平成16年5月24日～8月17日
平成16年度	調査第一課長 野尻 侃 (県農林公共事業関係発掘調査担当) 主任調査研究員 黒坂 雅人 調査研究員 水戸部 秀樹 (調査主任) 調査員 渋谷 純子 調査員 鈴木 健太郎 調査員 阪 英子
平成17年度	調査第一課長 野尻 侃 (県農林公共事業関係発掘調査担当) 主任調査研究員 須賀井 新人 調査研究員 水戸部 秀樹 (調査主任) 調査員 渋谷 純子 調査員 阪 英子
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県総合支庁産業経済部農村整備課 最上教育事務所 鮎川村教育委員会 鮎川村農村整備課

凡 例

- 1 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章	水戸部 秀樹
第Ⅱ章	水戸部 秀樹、阪 英子
第Ⅲ章 第1節	水戸部 秀樹
第Ⅲ章 第2節	阪 英子
第Ⅳ章 第1節	渋谷 純子
第Ⅳ章 第2節	高桑 登
第Ⅴ章	村本 周三（総合研究大学院大学、博士課程）
第Ⅵ章	水戸部 秀樹

- 2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは標高で表す。また、方位は座標北を表す。

- 3 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴住居・堅穴建物	S B…掘立柱建物	S A…掘立柱列
S K…土坑・陥穴・貯蔵穴	S P…柱穴・ピット	S D…溝・周溝
S G…川跡	S X…配石遺構・性格不明遺構	
E L…複式炉・地床炉	E U…埋設土器遺構	

- 4 遺構・遺物実測図の縮尺、網点などの用法は各図に示した。

- 5 土層図の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

- 6 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

岡本篤志、小島朋夏、佐々木浩一、鈴木健太郎、竹田純子、手代木美徳、松田泰典、村本周三

- 7 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務	有限会社京業技術
地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務	日本特殊撮影株式会社
遺構写真実測・図版編集業務	株式会社セビアス
遺物実測業務（石器）	創和システム株式会社

目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の環境と概要	3
III 縄文時代の調査成果	9
IV 中世・近世の調査成果	44
V 理化学的分析	52
VI 総 括	55

報告書抄録	巻末
遺構全体図(縄文時代)	付図1
遺構全体図(中世・近世)	付図2

表

表1 中世・近世の掘立柱建物	45	表4 石器	63
表2 測定試料一覧	52	表5 中世・近世の遺物	66
表3 縄文土器	59		

図 版

第1図 調査区概要図	2	遺構実測図(縄文時代)	
第2図 小区遺跡周辺の地形分類図	4	第17図 竪穴住居ST1	79
第3図 遺跡位置図	6	第18図 竪穴住居ST2	80
第4図 複式炉各部名称図	10	第19図 竪穴住居ST4・230, 埋設土器遺構EU268	81
第5図 縄文土器分類図	32・33	第20図 竪穴住居ST3・9	82
第6図 暦年校正の結果	54	第21図 竪穴住居ST3・9	83
遺構実測図		第22図 竪穴住居ST5	84
第7図 遺構実測図の割付	69	第23図 竪穴住居ST5	85
第8図 遺構実測図1	70	第24図 竪穴住居ST5	86
第9図 遺構実測図2	71	第25図 竪穴住居ST28	87
第10図 遺構実測図3	72	第26図 竪穴住居ST33	88
第11図 遺構実測図4	73	第27図 竪穴住居ST34	89
第12図 遺構実測図5	74	第28図 竪穴住居ST35	90
第13図 遺構実測図6	75	第29図 竪穴住居ST35	91
第14図 調査区壁土層図セクションポイントの配置	76	第30図 竪穴住居ST50	92
第15図 調査区壁土層図a-a'	77	第31図 竪穴住居ST338	93
第16図 調査区壁土層図b-b'	78	第32図 竪穴住居ST356	94
		第33図 竪穴住居ST356	95
		第34図 複式炉EL73・115・348, 埋設土器遺構EU63,	

	配石遺構 S X 284	96
第 35 図	掘立柱建物 S B 349	97
第 36 図	陥穴 S K 351・278・211・125・215・311	98
第 37 図	貯蔵穴 S K 36・44・59	99
第 38 図	貯蔵穴 S K 142・216・248・306	100
第 39 図	川跡 S G 6	101
	遺物実測図 (縄文時代)	
第 40 図	竪穴住居 S T 1 の複式炉 E L 87 埋設土器	102
第 41 図	竪穴住居 S T 1 とその周溝 S D 126 出土土器	103
第 42 図	竪穴住居 S T 2 の複式炉 E L 92 埋設土器	104
第 43 図	竪穴住居 S T 2 の複式炉 E L 92・352 出土土器	105
第 44 図	竪穴住居 S T 2 出土土器	106
第 45 図	竪穴住居 S T 3 と その複式炉 E L 154・324 出土土器	107
第 46 図	竪穴住居 S T 4 の複式炉埋設土器と竪穴住居 S T 5 の複式炉・柱穴・周溝出土土器	108
第 47 図	竪穴住居 S T 5 とその複式炉 E L 308 出土土器	109
第 48 図	竪穴住居 S T 5 出土土器	110
第 49 図	竪穴住居 S T 9 の複式炉 E L 136 埋設土器	111
第 50 図	竪穴住居 S T 9 とその複式炉 E L 136 埋設土器	112
第 51 図	竪穴住居 S T 28 の複式炉 E L 167 出土土器	113
第 52 図	竪穴住居 S T 28 とその複式炉 E L 167 出土土器	114
第 53 図	竪穴住居 S T 33 の複式炉 E L 218 埋設土器	115
第 54 図	竪穴住居 S T 33 の複式炉 E L 218 出土土器	116
第 55 図	竪穴住居 S T 33 出土土器	117
第 56 図	竪穴住居 S T 34 とその複式炉 E L 217 出土土器	118
第 57 図	竪穴住居 S T 35 の複式炉 E L 263・283 出土土器	119
第 58 図	竪穴住居 S T 35 とその複式炉 E L 222 出土土器	120
第 59 図	竪穴住居 S T 35 の複式炉 E L 222 埋設土器	121
第 60 図	竪穴住居 S T 50 の複式炉 E L 74 埋設土器	122
第 61 図	竪穴住居 S T 50 とその複式炉 E L 74・ 柱穴 S P 91 出土土器	123
第 62 図	竪穴住居 S T 50 出土土器	124
第 63 図	竪穴住居 S T 50 出土土器	125
第 64 図	竪穴住居 S T 280 の複式炉 E L 266 出土土器	126
第 65 図	竪穴住居 S T 338 の複式炉 E L 46 埋設土器	127
第 66 図	竪穴住居 S T 356 の複式炉・柱穴・ 複式炉 E L 73・115 出土土器	128
第 67 図	掘立柱建物 S B 349 の柱穴 S P 331、埋設土器遺構	

	E U 63・268、配石遺構 S X 284 出土土器	129
第 68 図	陥穴 S K 311、貯蔵穴 S K 36・44・248 出土土器	130
第 69 図	土坑 S K 37・282、ピット S P 329、川跡 S G 6、 溝 S D 353 出土土器	131
第 70 図	遺物包含層出土土器、出土地点不明の円盤状石製品	132
第 71 図	石鏃、石匙、石笥、石鏃	133
第 72 図	石鏃、接器	134
第 73 図	削器	135
第 74 図	麻糸剥片、石核	136
第 75 図	石核、接合資料	137
第 76 図	接合資料	138
第 77 図	接合資料	139
第 78 図	磨製石斧、石鏃	140
第 79 図	軽石製石製品、円盤状石製品、磨石	141
第 80 図	磨石	142
第 81 図	磨石	143
第 82 図	磨石	144
第 83 図	凹石、石皿	145
第 84 図	石皿	146

遺物実測図 (中世・近世)

第 85 図	中世・近世の建物配置図	147
第 86 図	中世・近世建物, 第 1 群	148
第 87 図	中世・近世建物, 第 1 群	149
第 88 図	中世・近世建物, 第 2 群	150
第 89 図	中世・近世建物, 第 2 群	151
第 90 図	中世・近世建物, 第 3 群	152
第 91 図	中世・近世建物, 第 4 群	153
第 92 図	中世・近世建物, 第 5 群	154
第 93 図	中世・近世建物, 第 6 群	155
第 94 図	中世・近世建物, 第 7・8 群	156
第 95 図	中世・近世建物, 第 9・10・11 群	157
第 96 図	竪穴建物 S T 15・207、土坑 S K 212・213	158
第 97 図	土坑 S K 16・32・124・357	159
第 98 図	土坑 S K 11・12・67・79・134・135	160
第 99 図	土坑 S K 55・56・98・132・161	161

遺物実測図 (中世・近世)

第 100 図	竪穴建物 S T 207、土坑 S K 56・93・98・124・ 149・161・213、柱穴 S P 152 出土土器	162
第 101 図	柱穴 S P 330、配石遺構 S X 284、 遺構包含層出土土器	163
第 102 図	遺物包含層・表土出土土器、砥石	164

写真図版

- 巻頭写真1 竪穴住居 S T 5
巻頭写真2 調査区全景・遺景
巻頭写真3 複式炉 E L 87 (竪穴住居 S T 1)
巻頭写真4 竪穴住居 S T 35
巻頭写真5 独立柱建物 S B 349
巻頭写真6 大木 9 式土器
巻頭写真7 大木 10 式土器
巻頭写真8 複式炉 E L 263 埋設土器 (竪穴住居 S T 35)
- 縄文時代の遺構**
- 写真図版1 遺構検出状況, 調査区北壁・調査区南壁
写真図版2 竪穴住居 S T 1
写真図版3 竪穴住居 S T 1
写真図版4 竪穴住居 S T 2
写真図版5 竪穴住居 S T 3
写真図版6 竪穴住居 S T 5
写真図版7 竪穴住居 S T 5
写真図版8 竪穴住居 S T 4
写真図版9 竪穴住居 S T 9
写真図版10 竪穴住居 S T 28
写真図版11 竪穴住居 S T 33
写真図版12 竪穴住居 S T 34
写真図版13 竪穴住居 S T 50
写真図版14 竪穴住居 S T 35
写真図版15 竪穴住居 S T 35
写真図版16 竪穴住居 S T 280
写真図版17 竪穴住居 S T 356
写真図版18 単独で検出された複式炉, 埋設土器遺構, 配石遺構
写真図版19 独立柱建物 S B 349
写真図版20 陥穴
写真図版21 貯蔵穴
写真図版22 貯蔵穴, 土坑, 川跡
- 縄文時代の遺物**
- 写真図版23 竪穴住居 S T 1 の複式炉 E L 87 埋設土器
写真図版24 竪穴住居 S T 1 とその周溝 S D 126,
竪穴住居 S T 2 の複式炉 E L 92 出土土器
写真図版25 竪穴住居 S T 2 の複式炉 E L 92・352 出土土器
写真図版26 竪穴住居 S T 2 出土土器
写真図版27 竪穴住居 S T 3・5 とその複式炉・柱穴・
周溝出土土器
- 写真図版28 竪穴住居 S T 4・5 とその複式炉出土土器
写真図版29 竪穴住居 S T 5 と竪穴住居 S T 9 の
複式炉 E L 136 出土土器
写真図版30 竪穴住居 S T 9・28 とその複式炉出土土器
写真図版31 竪穴住居 S T 28 と竪穴住居 S T 33 の
複式炉 E L 218 出土土器
写真図版32 竪穴住居 S T 33 と
その複式炉 E L 218 出土土器
写真図版33 竪穴住居 S T 34 と
その複式炉 E L 217 出土土器
写真図版34 竪穴住居 S T 35 の
複式炉 E L 222・263・283 出土土器
写真図版35 竪穴住居 S T 35 と
その複式炉 E L 222 出土土器
写真図版36 竪穴住居 S T 50 の複式炉 E L 74 出土土器
写真図版37 竪穴住居 S T 50 とその柱穴 S P 91 出土土器
写真図版38 竪穴住居 S T 50 出土土器
写真図版39 竪穴住居 S T 280・338 の複式炉出土土器
写真図版40 竪穴住居 S T 356 の複式炉・柱穴, 複式炉 E L
73・115, 独立柱建物 S B 349 出土土器
写真図版41 埋設土器遺構, 配石遺構, 陥穴, 貯蔵穴, 土坑,
ピット, 川跡, 溝出土土器
写真図版42 土坑, 遺物包含層出土土器,
および出土地点不明の円盤状土製品
写真図版43 石鏃, 石匙, 石鏃, 石錐, 棒器, 削器
写真図版44 縦長刮片, 石核, 接合資料
写真図版45 磨製石斧, 石錐, 軽石製石製品, 円盤状石製品,
磨石
写真図版46 磨石, 凹石, 石皿
- 中世・近世の遺構**
- 写真図版47 独立柱建物 S B 401・402・403・404 の柱穴
写真図版48 独立柱建物 S B 405・406・408・411・412・
416・419・420・421・429・437・441・445 の柱穴,
独立柱列 S A 447 の柱穴
写真図版49 竪穴建物, 土坑
写真図版50 土坑
- 中世・近世の遺物**
- 写真図版51 中世・近世の土器
写真図版52 中世・近世の遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

小反遺跡の発掘調査は、山形県による県営ほ場整備事業鮎川左岸地区に伴って行なわれた。同遺跡周辺からは以前から縄文土器や石器などが出土することが知られており、隣接する県道35号線の工事の際にも多量の土器が出土したと言われていた。

ほ場整備事業
鮎川左岸地区

ほ場整備事業に先立ち、平成14年10月に山形県教育委員会が実施した試掘調査では、地表下19～46cmから縄文時代中期末葉の土器が出土し、また土坑・ピットなどの遺構が検出された。よって、遺跡範囲内ではほ場整備事業を行う際には、発掘調査を行い記録による保存を行う必要があると判断された（渋谷ほか2004）。

記録による保存

上記の判断により、平成16年4月1日付で山形県知事と財団法人山形県埋蔵文化財センター理事長の間で委託契約書が交わされ、小反遺跡の発掘調査が行われることになった。

平成16年5月18日には、鮎川村中央公民館において、山形県教育委員会、ほ場整備事業を担当する最上総合支庁産業経済部農村整備課、鮎川村教育委員会、同農村整備課、財団法人山形県埋蔵文化財センターによる事前打ち合わせを行い、調査期間、調査方法、事務所・駐車場設置場所、調査工程などの確認を行った。

なお、このほ場整備事業ではもう1カ所の遺跡が調査対象となっている。小反遺跡から南へ約600mに位置する上野遺跡である。調査は小反遺跡と同じ担当者が行うため、先に小反遺跡の調査を終了させてから、上野遺跡の調査に移行した。

上野遺跡

2 調査の経緯

調査期間は、平成16年5月24日から同年10月15日までの予定であったが、これは小反遺跡と上野遺跡の2遺跡の調査期間を併せたものである。先に調査を開始した小反遺跡の調査に並行して、上野遺跡の表土除去、遺構検出を行ったところ、地山面で無数の柱穴とそれらを取り囲む幾重もの堀跡が姿を現した。これらの調査を行うには相当の日数が必要だと判断されたため、小反遺跡の調査を急いで終了させ、上野遺跡の調査に移らなければならなかった。ところが、小反遺跡でも14棟の竪穴住居を検出、またその何れもが複式炉を有していたこともあり、記録作業などに遅れを生じた。結果、小反遺跡の調査は8月17日まで行われることとなった。

当初、小反遺跡と上野遺跡は、発掘調査から報告書作成までを平成16年度内に行う予定であったが、上述したとおり、両遺跡の規模・内容では同一年度内に整理作業を終了し、報告書を刊行することは困難な状況となった。そのため、平成16年7月12日に山形県最上総合支庁産業経済部農村整備課と対応を協議した。その結果、現地での調査は予定通り行うこととしたが、整理作業を次年度に繰り越し、報告書刊行を平成17年度に行うこととなった。

平成16年8月8日（日曜日）には現地にて調査説明会が開催され、約180名の参加があった。また報道機関による取材も数社あり、テレビ、新聞などで説明会の様子が紹介された。

約180名
の参加者

3 調査の方法

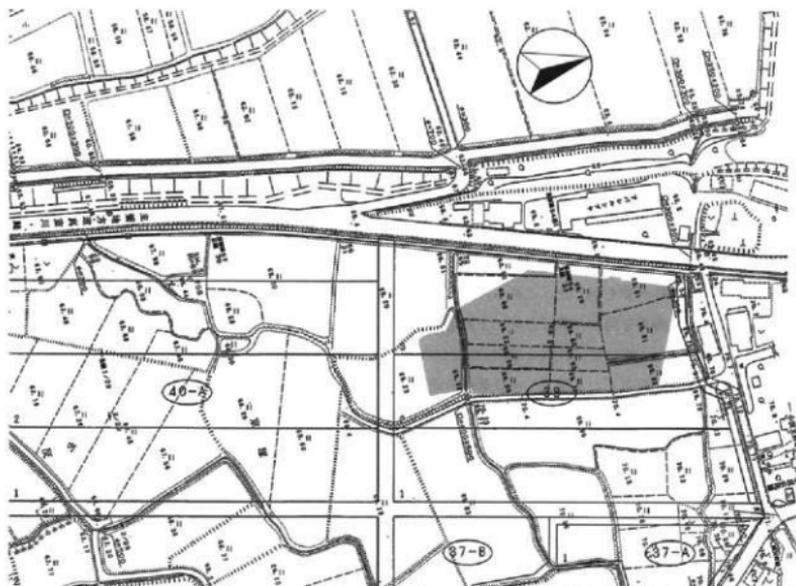
調査区の表土と旧表土は重機を用いて除去した。また、遺物の包含されていない黒色土についても同様である。遺物が出土する黒色土は、遺物包含層として扱い調査の対象とした。

世界測地系
グリッドの設定

調査区内に設置したグリッドの方角は平面直角座標系第X系（世界測地系）に沿う。グリッドの名称はハイフンによって繋がれた二組の数字（例：840・40）で表した。グリッドの数値は座標の数値を省略したものを使用している。つまり、南北に増減するX軸の数値の下3桁と、東西に増減するY軸の下2桁の数値の組みあわせでグリッドの位置が表されるようになっている。また、本来はX軸、Y軸ともマイナスの値であるが、ここでは自然数の値に置き換えて使用した。例えば、Xの値が“-129,810”、Yの値が“-51,410”を示す地点のグリッドならば、“810・10”と表されることになる。今回の調査では、グリッドは2mおきに設置しているので、グリッドが移動するとその数値は“2”ずつ増減する。また、グリッド名が示す範囲は、X軸とY軸の交点の第一象限となる2m四方の4平方mである。

表土・旧表土を除去した後は、遺構検出、遺構調査、遺構断面図・遺構平面図の作成、遺構断面・遺構の完掘状況・遺物出土状況の写真撮影などの調査・記録作業を行なった。終盤ではラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影を行なった。

遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構と層位とグリッドにより、遺構外から出土したものはグリッドと層位によった。



第1図 調査区概要図 (1:2,000)

II 遺跡の環境と概要

1 地理的環境

小反遺跡は山形県最上部鮭川村大字京塚字小反704に位置する。鮭川村立大豊小学校の北方約700m、県道35号線（主要地方道真室川・鮭川線）の東側である。調査区中心付近の経緯度は北緯38度49分46秒、東経140度14分29秒である。立地は鮭川左岸の段丘の末端部であるため、遺跡西側の県道35号線を越えるとすぐに崖があり、低地へと至る。

鮭川村は、山形県最上部の中央部にあたる新庄盆地の西縁部に位置し、遺跡からは南西に月山、北西に鳥海山を望むことができる。規模は東西20km、南北12km、総面積は1223平方kmである。東部は新庄市、南部は戸沢村、北部は真室川町、西部は酒田市に接する。また、東側の奥羽山脈の支脈と西側の出羽丘陵によって挟まれる谷状の地形を示している。

遺跡の西側を流れる一級河川である鮭川は、鮭川村の中央部を南流した後、戸沢村津谷付近で最上川に合流する。鮭川本流は自由蛇行を繰り返し、左右に折れる複雑な形状を呈している。そのため、鮭川沿岸部は水害の常習地であり、集落はこれを避けるように兩岸の段丘と、鮭川が曲流する個所の内側である中央部低地に形成されている。侵食されずに残った地塊には中世の館跡が残り、神社などが祀られている。

村西部の出羽山地の樹木はブナが主な植生であり、高度が下がるにつれてミズナラ・クリ・コナラ林になる。これらの林を伐採したあとに杉や一部にカラマツを植栽している。この村西部に位置する曲川の小杉には、村指定文化財天然記念物の「小杉の大杉」と呼ばれる杉の巨木がある。根回り6.3m、高さ20mになる推定樹齢700～800年の天然杉である。最上峡谷に群生する天然杉と同種のものであり、神代杉とも呼ばれる。傍には山神の小祠があり、この巨木が神木として信仰の対象とされていたことがうかがえる。

気候は積雪寒冷地帯に属するため、春から夏にかけては多雨多湿であり、集中豪雨による災害が起こる場合もある。年間の積雪期は約5カ月と長く、積雪量も多い。このような厳しい気候のため果樹栽培は難しい地域であり、鮭川本流域の肥沃な土地を利用した水稲、畑作が営まれている。ほかに良質の杉材を利用した木材加工業や、キノコ栽培・山菜加工業、サケのふ化放流や養殖業などの地場産業も盛んである。

2 歴史的環境

鮭川村周辺で現在まで確認されている縄文時代遺跡の多くは、鮭川・真室川・泉田川・金山川流域の段丘に立地している。小反遺跡の南方約600mに位置する上野遺跡（2）は、小反遺跡と同時に発掘調査を行ったが、検出された縄文時代の遺構は陥穴のみであった。さらに南方の同じく鮭川左岸の段丘には山の神遺跡（48）がある。北方では、同じ水系の真室川・金山川流域となるが、山神神社遺跡（14）をはじめ多数の遺跡が確認されている。また、両河川の右岸にも秋山C遺跡（11）などの遺跡が密集している。比較的規模の小さい真室川・金山川の流

遺跡の位置

鮭川村

鮭川

自然環境

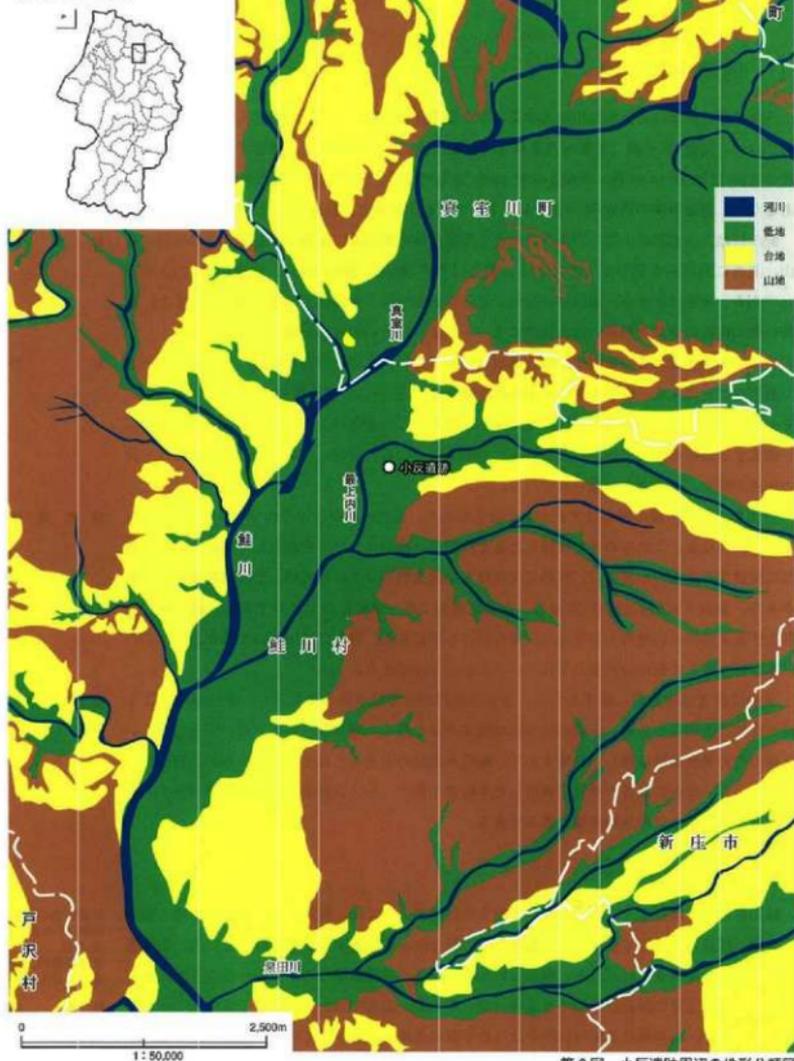
積雪寒冷地帯

※遺跡名の後の括弧内の数字は「第3回遺跡位置図」の番号に対応する

鮭川

II 遺跡の環境と概要

※ 本図は「土地分類基本調査 新庄」(山形県企画調整部土地対策課1980)、同じく「清川」、「大沢」、「羽金山山」の「地形分類図」を合成し、一部加筆したものである。



第2図 小反遺跡周辺の地形分類図

域は、大きな氾濫なども起こりにくく安定して遺跡が営まれたのであろう。

鮭川と泉田川が合流する付近の鶴田野は、両河川が作り出した広大な段丘に立地しており、鶴田野遺跡(54)をはじめとした遺跡の密集地帯となっている。

鮭川右岸に目を向けると、やはり段丘沿いに遺跡の分布を看取できる。中でも庭月に所在する庭月観音堂遺跡(43)は、1987・1988年に鮭川村教育委員会により確認調査(鮭川村教育委員会1989)が行われている。庭月観音堂は最上三十三観音の打ち止めの札所であり、遺跡はその境内より発見された。確認された配石遺構は5群からなり、それぞれ立石や大石を中心に多数の石を円形に配したものと報告されている。中でも最大のものは、直径約1.6mを測り、形状は円形を呈する。直径15cm、長さ60cmほどの磨製の石棒を垂直に立て、それを中心に大小約50個の川原石を並べたものである。また、内に焼土が認められる配石遺構もあり、炉としての機能も有していたと考えられている。これらの配石遺構の規模・配置から、総体で環状列石との指摘もある(大友2002)。遺物は縄文時代中期末葉の土器などが出土している。

上記の庭月観音堂遺跡の調査は確認調査とされており、鮭川村における本格的な縄文時代遺跡の発掘調査は、小反遺跡がはじめてとなる。詳細の明らかにされていない同村の縄文文化の内容解明に向けて、多くの成果が期待されることになった。

鮭川流域ではないが、同じ水系に属する真室川・金山川・泉田川・升形川の流域では度々発掘調査が実施されており、その成果が報告されている。以下にその概要を記す。

真室川町大字釜淵字五郎前に位置する釜淵C遺跡からは、国指定重要文化財となった土偶が出土している。立地は真室川左岸の谷底平野である。その土偶は1912年に出土、1965年に指定を受け、現在は真室川町の正源寺に保管されている。1985年に真室川町教育委員会によって行われた発掘調査(長沢ほか1986)では、縄文時代後期から晩期に属する遺物が出土している。さらに2001年にも財団法人山形県埋蔵文化財センター(以下「山形埋文」という)による発掘調査(黒坂2003)が行われた。11棟の竪穴住居のほか、配石遺構・列石遺構・敷石遺構などが検出されている。竪穴住居の大半は複式炉を有しており、小反遺跡との類似性も認められるが、土器型式によれば釜淵C遺跡のものの方が新しいと判断される。遺物は縄文時代中期末葉と晩期に属するものが数多く出土し、その箱数は918箱を数えた。

さらに上流の字中台でも、2000年に中台4・5遺跡の発掘調査(黒坂ほか2001)が山形埋文により行われた。竪穴住居8棟、ほかに土坑・河川跡などが検出されている。また、釜淵C遺跡のものとはほぼ同じ型式の土器を埋設する複式炉も6基検出された。

真室川の支流である金山川の流域では、1980年に金山町大字金山字本町に位置する本町遺跡の発掘調査(長沢1981)が、金山町教育委員会により行われている。遺跡の立地する金山川左岸の段丘は集落を営むのに適していたようであり、竪穴住居が13棟検出された。ほかに、中心に石棒を直立した状態に据え周囲に8基の柱穴を有する遺構が、祭壇跡として報告されている。なお、据えられた石棒の周りには粘土が敷き詰められていたようである。遺物は縄文時代前期中葉から中期後半までのものが出土している。

新庄市の市街地を貫流し鮭川へと注ぐ升形川の流域では、1968年に右岸の段丘に立地する宮内遺跡の発掘調査(長沢2002)が行われている。新庄市新町に所在する新庄警察署の建設時に発見された。縄文時代晩期の遺物が数多く出土したようであるが、遺構は検出されてい

環状列石

重要文化財
真室川小反遺跡との
類似性

金山川

升形川



南国土理院発行2万5千分の地形図「羽前金山」・「大沢」・「新庄」・「羽沢温泉」を使用。

第3図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

い。彫形土器や、石棒、石剣、石刀、土偶、独鈷石などの祭祀に関連する遺物も出土している。

1999年と2000年には、同じ新庄市内の大字十日町字中川原の中川原C遺跡の発掘調査(佐竹ほか2002)が、山形埋文により行われている。鮎川の支流である泉田川の右岸の段丘に立地している縄文時代中期、および中世の集落遺跡である。3次にわたる調査が行われたが、特に1次調査の調査区から縄文時代の遺構・遺物が数多く確認され、拠点集落として位置付けられた。竪穴住居は掘り込みが浅いため確認されていないが、その内部施設とみられる柱穴や炉跡は幾つも検出された。よって、その数は不明ながらも本来的には相当数存在していたことが推察される。ほかに大型住居、独立柱建物も検出されている。大型住居は、全長13mを測り、その中軸線上に2基の石囲炉を有するものなどがある。独立柱建物は4基の柱穴より構成されるものが4棟検出されている。小反遺跡で検出された6基の柱穴からなる独立棟持柱を持つ独立柱建物とは構造が異なるものと考えられる。ほかに東西に連なる陥穴列が1列検出されたが、この陥穴列には含まれず単独で検出された陥穴の中には、底面の四隅に立てられた逆茂木が遺存しているものが確認された。しかし、その逆茂木の放射性炭素年代測定による分析結果は、7世紀ごろを示した。逆茂木の検出された陥穴は、さらにもう1基確認されている。また、やはり単独での検出例となるが、断面で逆茂木の痕跡を確認できる陥穴が検出された。逆茂木が立てられた6基のビットをその底面で検出している。これら3基の陥穴は縄文時代のものとは断じ難いが、希少な検出例として特記されよう。

中川原C遺跡から南西へ約300mの地点に位置する立泉川遺跡は、1999年に山形県教育委員会による発掘調査が行われたが、整理作業と報告書刊行は山形埋文が行っている(佐竹ほか2002)。出土した土器は、県内では例の少ない縄文時代中期末葉の大木10式から後期初頭に属するものである。

泉田川

竪立柱建物

逆茂木出土

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	小反	縄文	集落跡	27	鮎延城	城跡	53	鶴頭坂	縄文		散布地
2	上野	縄文・中世	集落跡	28	岩下・後野	縄文	集落跡	54	鶴田野	縄文・平安	集落跡
3	長野	縄文	集落跡	29	岩下	縄文	集落跡	55	上大岡	縄文	集落跡
4	川の内	縄文	集落跡	30	岩田野	縄文	集落跡	56	鶴田野3	縄文	集落跡
5	平岡館	縄文	城跡	31	環田	鎌倉	集落跡	57	鶴田野	縄文	散布地
6	悪戸	縄文	集落跡	32	谷地	縄文	散布地	58	古岡屋2	縄文	散布地
7	上野	縄文	集落跡	33	石名坂	縄文	集落跡	59	鶴田野2	縄文	散布地
8	中ノ瀬館	城跡	城跡	34	平坂山	縄文	散布地	60	蛇館		館
9	滝ノ沢山	縄文(後期)	集落跡	35	八幡館		館	61	平家館		館
10	秋山B	旧石器・縄文	集落跡	36	船月館		館	62	川口館		館
11	秋山C	縄文	集落跡	37	小十郎館		館	63	中基山	縄文(早期)	散布地
12	秋山A	縄文	集落跡	38	支審館		館	64	泉ヶ丘	縄文(中期)	集落跡
13	宮沢	縄文	集落跡	39	ミタケ館		館	65	中谷地	縄文(早・中・晩期)	散布地
14	山神神社	縄文	集落跡	40	ミクラ館		館	66	高堂道	旧石器・縄文(早期)	散布地
15	赤出福前神社	縄文	集落跡	41	五枚田沢	縄文	散布地	67	八幡坂	旧石器	散布地
16	新田平岡	縄文	集落跡	42	観音寺	縄文	集落跡	68	滝ノ倉	旧石器・縄文(早・前期)	散布地
17	小林	旧石器・縄文	集落跡	43	庭月観音堂	縄文	集落跡	69	滝ノ倉前A	縄文	散布地
18	赤田	縄文	集落跡	44	京塚館		館	70	滝ノ倉前B	縄文	散布地
19	塩野	縄文	集落跡	45	京塚	室町	館	71	上新田A	縄文(前期)	散布地
20	片杉野	縄文	散布地	46	セゴロ館		館	72	上新田B	縄文(前・晩期)	散布地
21	豊の瀬	縄文(後期?)	散布地	47	熊野館		館	73	山崎D	旧石器	散布地
22	蓮花城	縄文	集落跡	48	山の神	縄文・古墳	集落跡	74	山崎C	旧石器	散布地
23	木の下	縄文(後期)	集落跡	49	向田新道	縄文	集落跡	75	山崎B	縄文(前期)	散布地
24	正源寺境内	縄文	集落跡	50	松沢	縄文	集落跡	76	山崎A	旧石器	散布地
25	神ヶ沢墳墓	鎌倉	集落跡	51	真木	縄文	集落跡	77	下山崎A	縄文	散布地
26	オクミ館	城跡	城跡	52	長者原		館				

3 遺跡の概要

A 調査区の設定

調査区は山形県教育委員会の指示のとおり、南北 110 m、東西 60 m の範囲内に設定した。面積は 4,500 平方 m、調査前の現状は水田である。調査区内は西へ向かってなだらかに傾斜している。遺構検出を行った地山面の標高は 68.2 ~ 69.4 m である。調査区西端、中央部付近が最も低く、雨天時などは水が溜まり池状を呈した。

検出された遺構のまとめ、分布からすれば、おそらく調査区外までは遺構は続かないものと判断される。つまりこの調査区内に、現存する小反遺跡のはほぼ全容が取まるものと考えられる。調査区西隣の県道 35 号線部分も本来は遺跡範囲であったが、その敷設の際に失われている。また、調査区の南西隅も耕地整理の際に削平されている。

B 基本層序

調査区壁土層図は北壁と南壁の 2 ヶ所を図化した。第 15・16 図に示し、第 14 図にそれぞれの土層図のセクションポイントの位置を示した。遺跡の層序は、上から表土、旧表土、遺物包含層、地山の順である。遺構検出面は、黒色系シルトである遺物包含層の直下の黄色系シルト、黄色系粘質土、礫層などである。これら遺構検出面以下の土層を地山とした。

第 15 図は調査区北壁の土層図である。18 層の遺物包含層から出土した遺物は多くない。地山として扱ったのは 19 層以下の土層である。調査区全体の地形は東から西へ緩く傾斜しているのに対し、この調査区北壁の土層を観察すると、地山は逆に西から東へ緩く傾斜していることが分かる。これは調査区北端部の地形が、遺跡の北東側に流れる最上内川へ向かって傾斜しているためである。調査区北部の堅穴住居 S T 2 付近が最も標高が高い地点であり、ここを境に西側は鮎川へ向かう斜面となり、北東側は最上内川へ向かう斜面となる。

第 16 図は調査区南壁の土層図である。5 層の遺物包含層からの出土遺物の量は少なかった。7 層以下とした地山は、東から西へ向って傾斜している。東端の礫層である 9 層は、調査区西半部へいたると遺構検出面に露出するようになる。

C 遺構と遺物の分布

縄文時代に属する遺構は、堅穴住居 14 棟、複式炉 21 基、独立棟持柱を持つ掘立柱建物 1 棟、陥穴 7 基、貯蔵穴 7 基など、中世・近世では堅穴建物 2 棟、掘立柱建物、掘立柱列、土坑などが検出された。堅穴住居は調査区の中心線付近で列状に検出されている。そのほとんどは重複せずに構築されたものである。西端の堅穴住居 S T 50 と掘立柱建物 S B 349 が、やや離れた地点に位置する。中世・近世の遺構は、調査区中央部付近を中心に存在する。掘立柱建物は重複するものが多く、幾度も建て替えられた様子が看取される。

出土遺物は、全部で 125 箱、内訳は土器 80 箱、石器 45 箱である。遺物包含層からの出土は少ないが、堅穴住居直上の遺物包含層からは比較的多く出土している。本来は堅穴住居の覆土中に含まれるものであろう。

III 縄文時代の調査成果

1 遺 構

A 竪穴住居

竪穴住居ST1（第17図、巻頭写真3、写真図版2・3）

検出された竪穴住居は全部で14棟、ST1はその中でも最北の822・24グリッド付近に位置している。平面形は円形、直径は5m、深さは検出面から0.2～0.3mである。中央部から東方に向かって複式炉EL87が構築されている。主柱穴は柱穴SP110・111・112の3基が確認されたが、本遺跡の竪穴住居の場合4基以上の主柱穴を持つものが多く、ST1の場合も4基の主柱穴を有していた可能性がある。SP112の西側の位置はすでに地山の礫層が露出しており、柱穴の検出は困難な個所であった。また、SP111のように非常に浅い柱穴であれば検出はさらに難しい。おそらくこの付近にさらに1基の柱穴が存在し、全体で台形状に柱が配置されていたと考えられる。あるいは地山が硬くしまった礫層であるため、柱穴を設けずにそのまま柱を立てた可能性もある。SP113やSP112付近のピット、周溝内のピットなどには、補助的に建物を支える柱を埋設したのであろう。

竪穴住居14棟

周溝はSD126・127の2条が一部重複した状態で検出された。SD127がSD126を切り込んでおり、SD127が後に掘り込まれたことが分かる。SD126がST1構築時の周溝であり、その後ST1が西側に拡張された際に、新たに掘り込まれた周溝がSD127である。両者の覆土は、遺物包含層を起源とする黒色系シルトの中に、地山を起源とする黄褐色粘土・シルトを、粒状にかつ偏りなく含んでおり、短時間の内に堆積した状態を示している。つまり、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。ほぼ垂直に立ち上がる壁を崩落から護るため、^{土板}埋板として板材、あるいは丸太材などを周溝内に落とし込み、さらに周溝に土を埋め戻し木材を固定したのであろう（2005 高田）。しかし、周溝の断面では埋板として用いた木材、またはその痕跡は確認されていない。住居を廃絶する際に抜き取ったと考えられるが、この点についてはさらに検討を要する。また、ST1の壁際に堆積する5層も周溝の覆土と同様の特徴を持つ層であり、周溝と一体のものと考えた方がよい。周溝の埋め戻しと同時に、壁を保護するために盛り上げられた層と推察される。5層は壁に向かって傾斜しており、壁の崩落を防ぐためには、より高い効果が期待できる。

柱穴SP110の覆土は地山を起源とする褐色系のシルト・粘土が主であり、柱痕も検出できない。柱を抜き取った際に層序が大きく攪乱された上に、抜き取った後の空隙も地山土を多く含む土により床面まで埋め戻されているからである。おそらく柱を固定する時点で埋め戻しに使用した土が3層、柱抜き取り後の空隙の埋め戻しに使用した土が1・2層であると推察される。SP110はST1の拡張前の主柱穴であり、拡張後はSP110の南東に隣接している柱穴に作り直される。この柱穴は拡張前の周溝SD126と重複している。両者の新旧関係は検出面

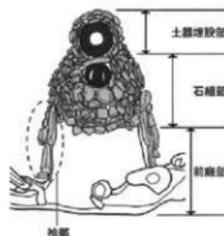
床面まで埋め戻す

で確認しており、柱穴が後に掘り込まれたことは間違いない。SP 110から柱を抜き取った後に床面まで埋め戻したのは、住居を拡張した後にSP 110上を床面としてして利用するためであることが分かる。

柱穴SP 111の場合は、埋め戻されて床面とされた痕跡もなく、南東に隣接するピットの覆土も周溝と同様の土であることから、柱穴が移設された可能性はない。拡張後もSP 111はそのまま柱穴として使われたと考えられる。

竪穴住居ST 1の4層には焼土と10cm前後の炭化材が多く含まれており（写真図版2）、焼失家屋ST 1は火災により焼失した可能性が高い。炭化材は、中央部と複式炉EL 87上には少ないが、ほか住居内全域に分布している。また、壁からやや離れた位置に、ST 1の中心部を向いて出土していることから、上層構造が焼け落ちたものの可能性が高い。多量の焼土は、屋根に土が

土葺き



第4図 複式炉各部名称図
※竪穴住居の中心付近に位置し、土器を埋設し周囲を石で囲んでいる部分が土器埋設部。土器埋設部の外側に位置し、石を組んだ部分が石組部。小反遺跡の複式炉の場合は、石組部の中にも土器が埋設されている。さらに外側の掘り込み部分は前庭部。前庭部の両側に石を直線状に配している部分を袖部とした。

葺かれていた可能性を示すものである。炭化材の遺存状態は悪く、詳細は不明であるが、焼土と併せて住居の上層構造を推測することのできる検出例である。貼床はST 1の7層にわずかに検出されたのみであり、平面的な広がりには確認できなかった。

複式炉EL 87は拡張前の住居の中心から東方に向かって構築されている。以後、複式炉各部の名称は第4図に従って記述する。EL 87の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として、北で東に70度である。長さ2.4m、幅1.5m、住居の床面から石組部に埋設された土器の底面まで0.37mである。前庭部はST 1の東壁に接し、周溝に連結する。前庭部中央の壁際にはピットが検出された。

埋設された土器の内面は、両者とも強く被熱している。土器の周囲の石も同じく被熱により赤化している。土器1と2の間に立位で埋設されていた大型の板状石は、特に強く熱を受けている。ほかの石組部の石では埋設土器付近のもの以外は、熱を受けた痕跡が明瞭でない。また前庭部の底面も同様である。石組部に熱を受けて赤化している石が、点々と見受けられ

るのは、再利用されたものが含まれているからであろう。

EL 87の1層は住居廃絶後の堆積土である。2～4層は埋設土器の底面付近に堆積しており、灰・炭などが変質したものと考えられる。7層～10層が複式炉の掘形である。複式炉の形状に合わせて掘り込んだ後に、土器と石を配置し、裏込め土を詰め込みながら構築している様子が看取される。また、石組部の埋設土器2の底部は欠損しており、その底面に土器片3が敷かれている。埋設土器1の底部も欠損しているが、こちらはそのままの状態で見出された。2の口縁部の一部には打ち欠きによる調整が行われている。これにより土器の上端部の高さ、土器に接する前庭部側の石組部の高さがそろえられる。

土器の調整

埋設土器1は大木10式、2は大木9式に相当し、2の方が型式的に古いと考えられる。これらの埋設土器は通常の使用を経た後に、複式炉の炉体としてそれぞれ個別に用意されたものであろうから、両者が全く同じ時期の所産である必然性はない。

竪穴住居ST 2（第18図、写真図版4）

竪穴住居ST 2は竪穴住居ST 1の南隣、832・24グリッド付近に位置する。平面形は円形、

直径は5.6m、深さは検出面から0.21～0.42mである。中央部からほぼ真東に向かって複式炉E.L.92が構築されている。主柱穴は柱穴S.P.116・117・118・121・122の5基が検出された。複式炉の中軸線を延長し住居の中軸線とした場合、その配置はほぼ左右対称を示す。いずれの柱穴の深さも床面から0.15～0.3m程度と非常に浅い。

左右対称
の柱配置

検出された周溝はS.D.120のみであり、住居を拡張した痕跡は見られない。柱穴と周溝の覆土は、S.T.2付近の地山である礫層を起源とする石と黒色系シルトが主となる。S.T.2の5層は周溝上にあり、やはりS.T.1の場合と同様に周溝と一体の層と推察される。壁を保護するための木材を固定したのであろう。

S.T.2の1～3層には、周囲から廃棄されたと考えられる多量の石と縄文土器をはじめとした遺物が多く含まれていた。脚付方形皿27のように希少な土器も出土している。

複式炉E.L.92の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で東に94度である。長さ1.8m、幅1.5m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.69mである。土器埋設部の位置はS.T.2の中心部からやや東へ移動した個所であり、前庭部は壁とも周溝とも接しない。また、前庭部の東側の周溝内にピットが検出された。

土器埋設部の埋設土器12は逆さまの状態で見られる。内面は被熱しており、特に体部が顕著である。石組部の埋設土器は、10と11が上下に重なる状態で埋設されていた。上段が10、下段が11である。両者とも、内面が被熱により剥離している。11は前庭部側に約13度、10は同じく約26度傾斜した状態で埋設されている。土器10は口縁部が打ち欠かれ、この土器に接する前庭部側の石と高さがそろうように整えられている。また、土器埋設部の土器の周辺部に配されている石や、石組部の中央部も被熱のため赤化している。石組部では煤の付着が看取された。中でも土器10と12の間に立位状態で配された大型の板状石は特に強く被熱している。前庭部および石組部では、被熱の痕跡は明らかでなかった。

傾斜した
埋設土器

E.L.92の1層は複式炉全体に見られる住居廃絶後の堆積土だが、2・3層はそれぞれ埋設された土器中のみ確認される層であるため、複式炉使用中に堆積したものと考えられる。4～8層が掘形である。石組部の埋設土器は、上下に2個体埋設されるため、非常に深い掘形となっている。堆積順を追うと、石組部の埋設土器を埋設した後に土器埋設部を構築したことが分かる。また、5層は、土器内で火を使用した際の熱が伝わったため赤化している。E.L.92の掘形にも炭や焼土が多く含まれている。E.L.92は複式炉E.L.352と重複しており、前者が後者を解体した後に、構築されている。E.L.92の掘形に含まれる炭や焼土は、E.L.352を解体した際に排出されたものが混入したと推察される。

重複した複式炉

複式炉E.L.352はE.L.92のやや南側に構築されていた。調査では断面で確認されたのみであったが、土器埋設部、石組部の掘形・石組部の石などが検出され、E.L.92に先行する複式炉であることが確認された。ほとんどの石と土器が抜き取られた状態であり、あるいはE.L.92の構築時に再利用されたとも考えられる。しかしその規模は検出した断面から推測すると、E.L.92より小型であったと考えられる。

前述した通りE.L.92の中軸線をS.T.2の中軸線とした場合、S.T.2の柱穴5基の配置は左右対称となる。この場合、E.L.92とS.T.2は非常に有機的な位置関係を有すると考えられる。では、E.L.92に先行するE.L.352と柱穴の配置はどのような関係を持つのであろうか。調査

ではEL 352の全容は確認できなかつたが、EL 92より南側に位置することは明らかであり、当然その中軸線上にST 2の5基の柱穴は左右対称の位置には並ばない。ST 2の柱穴とEL 352の位置に関連性はなく、EL 352が複式炉として機能している間は、ST 2の柱穴も別の位置にあったと考えるべきである。調査では、EL 352と対応する柱穴・周溝は検出されなかつた。遺構が地山である際によって埋め戻された場合には、検出が非常に困難となる。また、SP 117などと同様に取り込みが浅ければなおさらである。しかし、EL 352と同段階の周溝と考えられる遺構の痕跡は、EL 352断面の3・4層としてわずかに残っていた。EL 352はEL 92より小型であるため、住居そのものも小型であった可能性がある。よって周溝の位置もSD 120より内側に掘り込まれていたことになり、上記の3・4層を周溝の断面とすることができる。つまりST 2は、かつて今より小型の規模で存在し、その拡張とともに複式炉・柱穴・周溝が新たに作り直され現状の規模と配置になったと考えられる。EL 352の断面から推測される住居の規模は3.7mとなる。住居の中心に複式炉の土器埋設部があり、1層の西端を土器埋設部、3・4層を周溝として復元した数値である。

EL 92の埋設土器10・11は大木9式新段階のものと考えられる。EL 352出土の15と時期的な相違はない。ST 2の覆土からは、これらよりやや新しいと考えられる大木10式古段階の土器24・25なども出土している。

竪穴住居ST 3・9 (第20・21図, 写真図版5・9)

竪穴住居ST 3と竪穴住居ST 9は近接しており、検出時には重複していると考えていたが、両者の間には性格不明遺構SX 69が存在していることが判明した。よって、ST 3とST 9の新旧関係は、遺構の重複関係からは確認できなかつた。

重複せす

ST 3の平面形は南東部分がやや膨らむが、おおよそ隅丸方形を呈する。ST 2よりさらに南側、840-22グリッド付近に位置する。南北4.1m、東西4.5m、深さは検出面から0.12~0.24mである。中央部からはほぼ真南に向かって複式炉EL 154が構築されている。ST 3は一度拡張されているが、拡張後の主柱穴は検出されなかつた。周溝SD 155内のピットやその周辺のピットが柱穴であったのだろう。ST 3は比較的小規模な住居であり、主柱穴を必要としなかつた可能性もある。第20図の断面図a-a'の24層がST 3の周溝SD 155である。住居廃絶後の堆積土である21層とは異なる土質であり、周溝との境も住居の床面と同じ高さであることから、住居が機能していた時点ですでに埋め戻されたと考えられる。やはり周溝に住居の壁を保護する木材などを固定していたものと推察される。

複式炉EL 154の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で東に9度である。長さ2.1m、幅1.44m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.39mである。土器埋設部の位置は住居のほぼ中央であり、前底部は壁と周溝に接している。

再利用の土器

土器埋設部の埋設土器28の内面は被熱し赤化している。また、外面の底部付近には炭化した附着物が見られ、埋設以前にも使用した痕跡を示している。石組部の埋設土器29の内面は特に強く被熱しており、剥離も顕著である。28は約5度、29は同じく約15度前底部側に傾斜した状態で掘られている。28は口縁部を、29は体部上半を欠損しているが、これは複式炉に埋設する際に、周囲の石との配置を調整するため打ち欠いたためと考えられる。

土器埋設部の石には被熱の痕跡は乏しいが、石組部の石は被熱し赤化している上、煤も多く

付着している。前庭部では被熱の痕跡は検出されなかった。

E L 154 の 5・6 層は、炭を含み、土器の底部にのみ堆積しているため、その成因は複式炉使用時に生じた炭や灰から変質したものと推察される。これより上層の土層は複式炉内に廃棄された土が流れ込んだ堆積状況を示している。7・8 層が複式炉の掘形であり、土器の内部から伝わった熱を受け赤化している。ほぼ複式炉と同じ形に掘り込まれ、その中に土器と石が裏込め土とともに埋設されている。E L 154 の西側の袖部は、後に柱穴 S P 70 が同じ位置に掘り込まれたことによって失われている。S P 70 は S T 3 の覆土上から掘り込まれている中世あるいは近世の孤立柱建物 S B 425 の柱穴である。

S T 3 の床面上には、円形に廻る周溝 S D 464 が検出されており、住居の拡張が行われたことが分かる。また、主柱穴と複式炉も拡張以前に使用されていたものが検出された。よって、S T 3 は円形を呈する主柱穴を有する小型の住居から、隅丸方形を呈する主柱穴を有しない住居に、作り直されていたことが判明した。その際床面積は約 2.4 倍まで拡張されている。当初の住居の直径は 2.9 m、複式炉 E L 324 は中央部付近から西へ向かって構築されている。複式炉は石も埋設土器もほとんど抜き取られており、わずかに土器片と数個の石組部の石、被熱した地山が痕跡として残るのみであり、その全容は確認できない。柱穴 S P 182・461・462・463 の 4 基が S T 3 拡張前の主柱穴と考えられる。いずれも周溝上、あるいは周溝に非常に近い位置に配されている。複式炉が住居内で大きな空間を占めるため、小型の住居内では柱穴を周溝付近に配さざるを得ないのであろう。また、可燃性のある柱材を複式炉から離す必要もあったと推察される。S P 182 の断面では 1 層の黄色系の粘土が、柱の抜き取り後に床面造成のために敷かれた整地土と考えられる。この層の直上が拡張後の S T 3 の床面となる。2～4 層が柱抜取である。S P 182 は S T 3 の拡張後はすでに埋め戻され床面となっているため、拡張後は柱穴として使用されなかった。ほかの 3 基の柱穴も同様であったと推察される。

E L 154 の埋設土器 28 は大木 10 式の浅鉢形土器、29 は大木 9 式の深鉢形土器である。いずれも複式炉の炉体として再利用されたものと考えられる。

竪穴住居 S T 9 の平面形は西南辺がやや膨らむが、隅丸長方形を呈する。S T 3 の西側に近接し、838-28 グリッド付近に位置する。長軸 5.6 m、短軸 4.9 m、深さは検出面から 0.08～0.19 m である。中央部から南西に向かって複式炉 E L 136 が構築されている。S T 9 もわずかだが、面積が拡張された痕跡を有する。住居の北西辺と北東辺の、周溝 S D 156 が 2 重に掘り込まれている部分である。床面で周溝を観察すると、その覆土内に地山起源である黄色系のシルト・粘土が痕跡に検出された。やはり、人為的に埋め戻されたものと推察される。

主柱穴は柱穴 S P 137・138・139・465 の 4 基であり、住居内に四角形状に配される。S P 137・138・139 の 1 層は共に黒色系シルトであるため、住居の覆土と同質のものと考えられる。住居廃絶後に柱を抜き取った状態で放置したため、その空隙に住居の覆土と同じ土が流入したのであろう。ほかのピットは中世・近世に属する柱穴の可能性が高い。

複式炉 E L 136 の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で西に 62 度である。長さ 2.6 m、幅 1.7 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.27 m である。土器埋設部の位置は住居のほぼ中央であり、前庭部は壁と周溝に接する。ピット S P 466 が前庭部内で検出されている。

土器埋設部には、58～61 の 4 点の土器片を部分的に重ねながら、組み合わせで筒状にした

円形から隅丸方形へ

抜き取り後は放置

破片を再利用

ものが埋設されていた。埋設した状態の土器片の上方の破面とその周辺の内面と外面は、被熱し赤化している。土器埋設部に配された石は少なく、住居廃絶時に抜き取られた可能性がある。石組部に埋設された土器 62 の内面は被熱のため剥離し、また煤や炭化物も付着している。その底部には土器片 63 が落し込まれていた。しかし 62 は底部を欠損してはならず、その理由は判然としない。62 の口縁部は、その周囲の接する石と高さをそろえるために打ち欠かれ調整されている。62 の周囲の石は、赤化しており、被熱の痕跡が明瞭である。石組部には煤の付着が見られる。

E L 136 の 1～3 層は住居廃絶後の堆積土、4 層は破片同士を繋ぎ合わせた埋設土器を内側から固定したもの、5 層は炭を多く含むため、複式炉使用時の残滓に由来する層と推察される。7 層が複式炉の掘形であるが、炉自体より大きく掘り込まれている。埋設土器 62 はその中にほぼ垂直に据えられている。

手数を省いた ほかの住居の複式炉と比較すると明らかであるが、E L 136 は大幅に手数を省いた手法で構築されている。それは、破片を組み合わせただけの埋設土器、不ぞろいの大きさの石を左右対称とは程遠い位置に配した石組部、大き過ぎる複式炉の掘形、前庭部とほぼ同じ高さの石組部の底面などから看取されよう。また住居自体でも、歪な平面形であること、不自然な拡張の仕方、南東側に偏った柱配置、住居の掘り込みが浅いことなどが挙げられ、複式炉と同様に手数を省いていると判断せざるを得ない。

複式炉の出土土器 58～63 はいずれも大木 9 式新段階に属する深鉢である。また、住居の覆土には、それより新しい大木 10 式古段階の土器 65 が含まれている。

堅穴住居 S T 4・280、埋設土器遺構 E U 268 (第 19 図、写真図版 8・16)

重複する住居 堅穴住居 S T 4 と堅穴住居 S T 280 は重複して検出されたが、両者とも地山に対する掘り込みが浅いため、直接新旧関係を確認することはできなかった。しかし、S T 4 の周溝と埋設土器遺構 E U 268、E U 268 と S T 280 の複式炉 E L 266 の新旧関係は確認されたため、古い方から S T 4、E U 268、S T 280 の順になることが分かった。さらに S T 356 も重複しているが、この点については後述する。

新旧関係

S T 4 の平面形は、南辺部分が検出されていないものの、遺存部から隅丸方形を呈していると考えられる。S T 3 の南側、856・26 グリッド付近に位置する。東西 6 m、南北も同程度であろう。中央部から西に向かって複式炉 E L 166 が構築される。S T 4 に拡張の痕跡はない。

主柱穴は柱穴 S P 245・279・467・468 の 4 基であり、台形状に配される。S P 245 の断面では柱の抜取痕が確認され、住居廃絶時に抜き取ったと考えられる。

S T 4 上を南北に縦断する溝 S D 354 は後世、水田に引かれた用水路である。そのために複式炉の土器埋設部が失われている。床面上に見られるピットの多くは中世・近世の掘立柱建物の柱穴である。周溝は S T 4 を全周していたと推察されるが、遺構検出面では住居の南辺が検出されなかった。掘り込みが浅いため遺存しなかったようである。

掘形の半分

複式炉 E L 166 の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で東に 102 度である。土器埋設部は失われているものの、複式炉から S D 354 を挟んだ東側に、その掘形が半分ほど検出されている。この掘形から複式炉の大きさを計測すると、長さ 2.97 m、幅 2.1 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.42 m となり、非常に大きな複式炉であったことが分かる。土器

埋設部の位置はやはり住居のほぼ中央であり、前底部は壁と周溝に接している。前底部の壁際でピットが検出された。また、石組部の石の中でも、その上部に配置されるもの多くはすでに失われている。石組部の埋設土器 35 の内面は強く被熱し、剥離を起こしている。また煤の付着も顕著である。土器は前底部側に約 24 度傾斜した状態で埋設されていた。上半部が欠損していたが、石組部と高さをそろえるために調整したものと推察される。埋設土器の周囲の石も被熱のため赤化している。また、石組部の底部には煤が多く付着していたが、前底部では被熱の痕跡は確認されなかった。E L 166 の 1 層が複式炉の掘形である。複式炉より大きく掘り込まれ、その中に土器と石が裏込め土とともに掘えられている。付近の地山が砂礫層であるため、裏込め土にも礫が多く含まれる。石組部には扁平な円石が貼り付けられるように配置され、播鉢状の形状に整えられる。住居中央部に位置する E L 247 は後述する堅穴住居 S T 356 に付属するものと考えられ、S T 4 と関連性はない。

E L 166 の埋設土器 35 は大木 9 式に属する特徴を有する深鉢である。本遺跡で出土する大木 9 式土器の中でもより古層の土器である。

埋設土器遺構 E U 268 に埋設された土器 168 は、地文のみが施される深鉢形土器である。逆さまの状態出土した。底部のみ欠損しているが、ほぼ埋設された状態のまま出土したと考えられる。S T 4 の周溝と重複しているものの、E U 268 の断面では周溝は検出されていないため、E U 268 の方が周溝より後に掘り込まれたと判断される。土器 168 に、周溝によって破壊された痕跡がないことから同様の判断が可能である。E U 268 の位置は複式炉の中軸線の延長上で、かつ周溝の直上でもある。その位置関係に何らかの意図があると考えれば、住居が機能している間に、その中に構築された遺構とも考えられよう。

堅穴住居 S T 280 の掘り込みは遺存しておらず、複式炉と周溝のみが検出された。S T 280 の平面形は、北隅と南隅部分が検出されていないものの、遺存部分から隅丸方形を呈していると考えられる。S T 4 の東側に半分ほど重複し、858・22 グリッド付近に位置する。規模は、複式炉の中軸線延長上で 3.2 m、その軸に直交する方向では 2.7 m を測る。複式炉 E L 266 は中央部から南東に向かって構築される。床面積を拡張した痕跡はなく、また支柱穴も検出されていない。住居内に見られるピットは中世・近世の柱穴と見られる。遺構検出の時点で、複式炉 E L 266 が E U 268 より新しいことが確認されている。

複式炉の土器埋設部の土器 149 は底部付近のみ遺存していた。土器の周囲に配置される石も見られない。本来床面上で検出される部分が、削平によってすでに失われていると考えられる。床面ごと削平を受けているため、支柱穴なども本来存在していたかどうか判断としない。

E L 266 の中軸線方向は、土器埋設部を先端として北で西に 35 度である。遺存している部分で計測すると、長さ 1.3 m、幅 0.6 m、検出面から石組部の埋設土器の底部までは 0.3 m である。土器埋設部の位置は住居のほぼ中央である。前底部は壁にも周溝にも接しない。石組部内の埋設土器 148 は器体下半部が欠損している。ほぼ垂直に逆さまの状態に埋設されており、欠損した胴部の破面付近は被熱のため剥離を起している。

石組部の石の中でも、高い位置に配置されるもの多くはすでに失われており、底部付近の石のみ遺存していた。

E L 266 の 1・2 層は住居廃絶後の堆積土、3 層は土器 149 を埋設する際の裏込め土、同様

に4層は土器148の裏込め土と推察される。また、埋設された土器148・149は両者とも大木10式に属する。重複するST4の複式炉の埋設土器が大木9式であるため、土器型式の面からもST280が新しいと判断される。

竪穴住居ST5（第22～24図、巻頭写真1、写真図版6・7）

大 竪穴住居ST5は、本遺跡で検出された住居の中では最も規模が大きい。ST4の南隣、866・28グリッド付近に位置する。平面形は五角形、東西9.39m、南北8.88m、深さは遺構検出面から0.15～0.25mである。中央部西寄りの位置から西へ向かって複式炉EL308が構築される。主柱穴は、柱穴SP228・229・230・231・232・233・340・341の8基であり、ほぼ正八角形に配されている。複式炉の中軸線を住居の中軸線とした場合、柱穴の配置はほぼ左右対称を示す。

8基の主柱穴

周溝はSD289のみが検出されており、住居を拡張した痕跡は見られない。周溝は住居の壁に沿って掘り込まれるものの、住居の北東部分では検出されなかった。また、周溝の底面の高さは、南東部分のように規則的に高い面と低い面が繰り返される箇所や、ピット状に掘り込まれる箇所などがあり一様ではない。壁の崩落を防ぐための木材を固定した痕跡と推察される。ST5の50～52層は東壁に接した箇所検出された土層であり、黒色系シルトと黄色系の粘土が交互に堆積した状態を示している。また、これらの土層を確認した地点は周溝が途切れている部分であるため、壁際に50～52層の土を盛り壁の崩落を防いだとも考えられる。

ST5の1～29層は覆土上から掘り込まれた遺構であり、その多くは中世・近世の柱穴である。床面上に残る多数のピットも同様である。ST5付近が中世・近世の遺構が集中する箇所となっているためであり、縄文時代に属する遺構と判明しているものは、複式炉と8基の主柱穴、周溝のみである。30層以下がST5の覆土となる。その覆土には地山を起源とする土や遺物が含まれており、ある程度は人為的に埋め戻された可能性が高い。

住居と同様に主柱穴も規模が大きく、直径は0.93～1.26m、床面からの深さはSP228～233は0.8～0.9m、SP340・341は複式炉前庭部の底面から0.5mを測る。平面形は柱を抜き取る際に変形しているが、隅丸方形・隅丸長方形であったと考えられる。八角形に配された柱穴の間隔は、その中心同士で約2.4mを測る。また、互いに直面する柱穴同士の間隔は、いずれの場合も中心同士で約6.2mを測り、柱位置はほぼ正確な八角形を呈していたと考えられる。柱穴SP228・230・231・232・233では床面から大きく掘り込まれた柱採取痕が確認された。複式炉の袖部に位置する柱穴SP340・341では柱痕は検出されたが、柱採取痕は検出されていない。柱痕の直径は約25cmであり、柱自体もこれに近い直径であったと推察される。柱穴SP229の断面を観察した箇所では柱痕、柱採取痕ともに確認できなかった。柱の掘削内には地山である黄色系シルト・粘土が埋め戻されている。また、その中には層状に黒色系シルトを挟む場合が多い。版築なのか、どのような意図によるものか判然としない。

柱の直径は約25cm

複式炉EL308の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として北で東に103度である。本遺跡のほかの複式炉とは異なり、土器埋設部がなく、また石組部には2体の埋設土器が横に並んで据えられている。土器埋設部が設けられる位置は、広い範囲で風状にくぼみ、さらに地山が敏熱しており、地床炉であったと判断される。そして石組部と地床炉は密着し一体となっている。つまりEL308は土器埋設部を地床炉に置き換え、石組部、前庭部とあわせて一つの複式炉と

並列された土器

地床炉

して機能していたと考えられる。また、袖部には石はなく、柱穴が配される位置となっている。

長さとは地床炉まで含めて 3.9 m、地床炉を含めない場合は 3.2 m、幅は 2.9 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.6 m である。地床炉の位置は S T 5 の中心部からやや西へ移動した地点であり、前底部は壁と周溝に接続する。また、前底部の東壁の周溝内にピットが検出された。E L 308 覆土の 13 層に当る。

地床炉は皿状をなし、その深さは床面から 3 cm ほどである。平面形はほぼ円形を呈し、その直径は約 1.1 m を測る。地床炉は激しく被熱しており、その底面から地下 5 cm あまりの深さまで赤化している。

石組部の埋設土器 41・42 は、左右に並列し、前底部側に約 20 度傾斜した状態で掘えられている。北側の 41 の残存高は 416 mm、南側の 42 は 472 mm を測る大型の深鉢形土器である。器面には地文のみ施されている。また、口縁部を欠損しているが、複式炉構築時に石と土器の高さを合わせるため、打ち欠くなどして調整されたためである。両者とも内面は被熱のため赤化し、剥離、煤の付着も顕著である。また、埋設土器の周辺の石も強く被熱し、赤化、剥離などしている。石組部の中央部では煤の付着が看取された。

石組部の北側と東側の一部は中世・近世の柱穴により失われている。石組部の中央部には大型で扁平な石が敷き詰められ、その周囲には縦長の石が中央部を囲むように並べられている。前底部の掘り込みは非常に深く約 0.55 m を測る。また、石組部の底部から埋設土器へ向かって約 33 度の傾斜がある。

E L 308 覆土の 2～10 層には、地山を起源とする黄色系シルト・粘土が主体となる層、あるいはそれらを含む層が多い。さらにその堆積は両側から流入した状況を示し、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。また、埋設土器底部の 11 層・石組部底部の 12 層は、炭・焼土を含むことから、複式炉使用時に堆積した残滓に由来する土層と推察される。

E L 308 の掘形は、最小限度と判断される深さに掘り込まれる。1 層が裏込め土であるが、複式炉使用時の土器内の熱が伝わり赤化している。

S T 5 の覆土からは、大木 9 式新段階の土器が多く出土している。柱穴からも同様であり、遺構の構築年代を示すものと考えられる。本遺跡には、ほかに大木 10 式期に属する住居もあり、S T 5 の廃絶後も集落は存続したと見られる。E L 308 に顕著であった人為的な埋め戻しによる土層は、S T 5 廃絶以後に、住居などを構築する際の廃土が投げ込まれたものであろう。竪穴住居 S T 28 (第 25 図、写真図版 10)

竪穴住居 S T 28 は竪穴住居 S T 4 の東側、860・16 グリッド付近に位置する。平面形は一部膨らむもの方形を呈し、その規模は、東西 3.6 m、南北 4.1 m を測る。深さは検出面から 0.19～0.25 m である。中央部からはほぼ真西に向かって複式炉 E L 167 が構築されている。

住居の壁面に沿って周溝が検出されたが、その四隅に限り周溝が二重に掘り込まれている。四隅のみ拡張周溝は、地山起源の黄色系粘土・シルトで埋められている。内側の周溝は拡張後に床面にされたと考えられる。S T 28 の 5・8・12 層は周溝上にあり、周溝と一体の層と推察される。拡張後の壁を保護するための木材を固定したのであろう。

主柱穴は柱穴 S P 190・191・192・193・469・470 の 6 基が床面上で検出された。ただしこれら 6 基の柱穴は同時に使用されたのではない。S P 190・192・193 には柱抜取痕があり、地

複式炉も大型

埋め戻し

四隅のみ拡張

山を起源とする黄色系粘土・砂を含む土が堆積している。住居の廃絶後に床面上に堆積した覆土とも明らかに異なるため、人為的に埋め戻しを行ったと考えられる。床面の高さまで埋め戻されており、柱を抜いた後も他所に柱を移し替え住居の使用を継続したと推察される。S P 469も床面上で確認したところ、やはり同様の覆土で埋め戻されていると判断される。よってS P 190・192・193・469は、当初柱穴として使用したが、その後柱を抜き取り、さらに埋め戻しを行い床面を造成したと考えられる。

住居の覆土で柱痕を検出

前述の4基の柱穴に対して、柱穴S P 191は住居の廃絶まで使用されたことが、S T 28の断面を観察することによって判明した。S P 191断面の1層が柱痕であり、S T 28の6層と同一の層である。6層は、S T 28廃絶後に堆積した7層より後に、柱が抜き取られたか腐朽した痕跡と判断される。S P 191の柱は住居の廃絶後も一定期間立てられたままであったことが分かる。複式炉を挟み、その北側に対称する位置にS P 470がある。ほかに位置的に適した柱穴は検出されず、おそらくS P 191と同様に住居の廃絶時まで利用された柱穴と推察される。S P 191とS P 470の2基の柱穴だけで屋根を支えたのか疑問であるが、周溝内にみられるピットなどにも補助的な柱が立てられた可能性はある。住居の北東隅、南東隅、複式炉の前庭部に見られるピットなどが該当するであろう。

S P 191・470は住居廃絶まで柱穴として使用されたと考えられるが、先に埋め戻されたS P 190・192・193・469と同時に使用されていた可能性も残る。いずれにせよ、住居が大幅に改変されたことには変わりなく、S P 190・192・193・469が埋め戻された時点がその契機となる。住居の拡張と対応すると考えれば、拡張前の柱穴がS P 190・192・193・469であり、拡張後の柱穴がS P 191・470となる。S P 191とS P 470を結ぶ軸は、S P 190とS P 469、S P 192とS P 193を結ぶ軸と6度ほどずれており、やはり同時に作られたものとは考え難い。

北で東に92度

複式炉E L 167の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で東に92度である。長さ1.95m、幅1.11m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.37mである。土器埋設部の位置はS T 28のほぼ中央であり、前庭部は塋と周溝とに接し、塋際にピットが2基検出された。

土器埋設部の埋設土器66は底部付近以外を欠損し、内面には被熱のため赤化・剥離などが見られる。石組部の埋設土器67は一周しない半周分のみの資料であり、さらに口縁部と底部を欠損する。半周分が残る側を土器埋設部側に、失った側を前庭部側に向けて埋設している。半周分を失った側には、大きく扁平な石が上位に、下位には土器片が当てられるため、土器内の空間は閉じている。内面はやはり強く被熱し、剥離も著しい。石組部底部の西半は石が敷かれず、また被熱の痕跡は特に認められない。土器埋設部の石と石組部埋設土器の周囲の石は被熱のため赤化している。

E L 167の2層は複式炉全体に見られる住居廃絶後の堆積土、4・5・6層はそれぞれ埋設された土器、石組部底部中のみ確認される層であるため、複式炉使用中に堆積した残滓に由来する層と考えられる。7層は地山起源の黄色系粘土が主体の層であり、人為的に埋められた層と考えられる。前庭部ピットの直上であり、ピットに柱が立てられたとすれば、柱を固定するための、あるいは護壁用の木材を固定するための積土とも推察される。9～15層が掘形である。複式炉の深さに対して大きく余裕があり、また、掘形内には多数の石が埋設されているため、複式炉に対して全面的な改修が加えられた可能性が浮上する。当初は掘形底部まで土器

複式炉を改修

や石は埋設されていたが、改修後は掘形を底上げし、より浅い複式炉に作り変えたと推察される。浅くなることにより埋設する石は少なくなり、余分とされる石は掘形内に埋め込まれたのであろう。E L 167は対象性に欠け、使用する石の大きさもまちまちである。改修をあり合わせの石で済ませたことによる可能性が高い。改修が住居の拡張と同時に行われたとすれば、住居の拡張は住居内の全ての遺構に及ぶ大掛かりなものということになる。

住居の拡張後の柱穴 S P 191 と S P 470 を結ぶ軸は北で東に2度の方向を指す。またこの軸に直行する軸は北で東に92度となり、複式炉の軸と一致する。E L 167は住居拡張後の軸線上に位置していることになり、拡張以前に現在の方角で作られたとは考え難い。拡張以前の柱穴の方角と同一の軸線を持つ複式炉がかつて存在し、これを改修したものが検出されたE L 167であると推察される。改修の際に、拡張後の柱穴の軸線と同一の方角に合わせたのであろう。つまり、住居内の柱穴、複式炉は住居の拡張後、あるいは同時に西へ6度回転した方向に作り変えられたと考えられる。住居の平面形でも同様のことが言える。方形の住居を拡張しながら北で西に回転させると、南西隅は南方に、南東隅は東に、北東隅は北に、北西隅は西に膨らむことになり、北西隅以外はS T 28の拡張方向と一致する。北西隅は大きく張り出しているため、何らかの施設が設けられた可能性がある。S T 28はその内部施設も含めほぼ全てを作り替えられ、さらに住居の軸線も変更されたと考えられる。

西へ6度回転

複式炉に埋設された土器には文様が施されていないため、住居の正確な時期は特定できない。複式炉および住居の覆土内からは大木9式新段階に属する土器が出土している。他の時期に属する遺物は出土しておらず、住居の使用時期も同様に大木9式新段階と考えられる。

竪穴住居 S T 33 (第26図, 写真図版11)

竪穴住居 S T 33は調査区南部、886-34グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、その規模は、直径3.8mを測る。深さは検出面から0.27～0.36mである。中央部から南東に向かって複式炉E L 218が構築されている。

住居の壁面に沿って周溝 S D 239 が、その内側に同じく周溝 S D 471 が検出されている。両者は直接的な重複関係を持たないが、S T 33の覆土中に内側の周溝 S D 471 に対応する壁が見られないため、外側の周溝 S D 239 が後に掘り込まれたと判断される。よって S D 239 は住居の拡張に伴って新たに掘り込まれた周溝と考えられる。拡張前の住居の規模は直径3.1mである。主柱穴は柱穴 S P 219・221 が検出された。両者は内側の周溝 S D 471 と重複関係にあるが、その断面には周溝は検出されず、柱穴が周溝より後に掘り込まれたことが分かる。また、柱穴の掘形は内側の周溝 S D 471 から外側にはみ出ているため、拡張後に新たに掘り込まれたと判断される。拡張以前の主柱穴は検出されなかった。柱穴を作り替える際には、古い方の柱穴は完全に埋め戻され床面に造成されることが多い。そのため検出が非常に困難な場合がある。S P 219・221には柱放棄痕が検出されており、住居の廃絶時に柱が抜き取られたと考えられる。両者の土層に埋め戻された痕跡はなく、そのまま放棄されたと思われる。また、周溝 S D 471の北端にその底部がビット状に落ち込む箇所がある。検出時でも黒色系シルトを覆土とするビットが確認されており、補助的な柱を立てた痕跡と推察される。

周溝 S D 239・471は両者とも覆土に地山起源の黄色系粘土を多く含んでいることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。S T 33の南側と東側の9層は周溝 S D 239の直上に位置

し、同じ土質であることから周溝と一体の土層と考えられる。9層はS T 33の床面上に堆積している10層を上から掘り込んでおり、さらに10層と同じ高さまで埋め戻されている。この10層と周溝である9層の2つの層で住居の壁を保護したものと推察される。10層も住居の拡張後の床面上に堆積しているため、人為的に積まれた層と考えられる。やはり壁面沿いの周溝に木材を落し込み、壁を保護したのであろう。S T 33の北側と西側の9層も同様に周溝S D 239の直上であり、S D 239と一体の土層である。同様に壁を保護するために積み上げられた層と推察される。周溝S D 471にも護壁用の木材を埋設したのだけれど、住居を拡張する際に木材は抜き取られ、さらに床面とするため埋め戻されているはずである。

複式炉E L 218の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として北で西に25度である。規模は長さ1.67 m、幅0.97 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.36 mである。土器埋設部の位置は竪穴住居S T 33の中央からやや東に寄っているが、そこは拡張前の住居の中央部に当たる。よって複式炉の位置は、拡張以前の住居の中央部に合わせて決定され、その後廃絶まで維持されたと考えられる。前底部は壁と周溝S D 239に接し、S D 471と重複する。前底部の覆土は、埋め戻されたS D 471上に堆積している。また、S D 471より外側にはみ出ており、住居の拡張後に前底部も壁の方向へ拡張したと見られる。

土器埋設部の埋設土器82は器体上半と底部を欠損し、その内面は被熱のため赤化している。石組部の埋設土器83は底部を欠損する。内外面とも被熱による剥離が著しい。外面の被熱は、複式炉に埋設する以前にも煮沸などに使用された痕跡である。内面には煤の付着も顕著である。埋設土器80・81は共に破片資料であり、82の外周を囲むように埋設されていた。

土器埋設部の石、石組部の石とも被熱による赤化が見られる。石組部には煤の付着も顕著である。E L 218の石組部は規模が小さく、埋設土器を囲む程度の大きさであり、袖部もない。

E L 218の1層は複式炉全体に見られる住居廃絶後の堆積土、2層が掘形である。掘形内には黄色系シルトと焼土・炭が含まれている。この内の焼土と炭は、E L 218がかつて改修を受けたことを示唆するものと考えられる。E L 218の改修前に生成された焼土と炭が、改修時にその掘形内に混入したと想定されるからである。ただし、前述のように複式炉の位置は当初より変更されていないため、改修は住居の拡張以前に行われたか、あるいは単に拡張後も位置を変更しなかったかのいずれかであろう。E L 218に埋設された土器80～83は大木9式新段階に属する。E L 218およびS T 33の覆土からは大木10式古段階に属する土器も出土している。

S T 33の北側に地床炉E L 240が検出された。その規模は直径0.3 m、深さ0.2 mである。内面は被熱し赤化している。埋め戻された痕跡はなく住居廃絶時まで使用されていたと考えられる。E L 240に重複する小型のピットS P 273・274は、何れも地山起源の黄色系粘土・砂・シルトによりE L 240構築以前に埋め戻されている。陥穴S K 220は、E L 240・S P 274と重複しているが、こちらはS T 33構築以前の遺構である。S K 220については後述する。

竪穴住居S T 34 (第27図, 写真図版12)

竪穴住居S T 34はS T 33の東側、888・26グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、その規模は、直径4.3 m、深さは検出面から0.06～0.12 mである。中央部から南東に向かって複式炉E L 217が構築されている。

住居の壁面に沿って周溝S D 355が、その内側に同じく周溝S D 252が検出されている。両

者の重複関係から、S D 252の方がS T 34の拡張に伴い後から掘り込まれたことが分かる。

主柱穴は柱穴S P 242・244・277・472が検出された。S P 242では断面に柱抜き痕跡が確認されているが、その覆土の堆積状況には人為的な埋め戻しが行われた痕跡は見られない。柱の抜き取り後はそのまま放置されたと判断されるため、住居の廃絶時まで使用された柱穴であると考えられる。ほかの柱穴も同様であろう。

抜き取り
痕跡は取
り置

住居の拡張以前に使用されたと分かる柱穴は確認できなかったが、S T 34内には多数のピットが検出されており、これらの中に柱穴に該当するものが存在するのであろう。また、住居廃絶時まで使用された主柱穴S P 242・244・277・472が、拡張以前から使用されていたとも想定できるが、ほかの住居を例にとった場合、拡張時に柱穴も作り替える場合が多く確認されていることから、その可能性は少ないと考えられる。

周溝S D 252・355は、両者とも覆土に地山起源の黄色系粘土・砂を多く含んでいることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。S T 34の南側と東側の4・5層は、周溝S D 252の直上に位置し、また土質も同様である。周溝に埋め戻した土をさらに床より上位まで積み上げ、護壁用の木材を固定したと推察される。

複式炉E L 217の中輪線の方角は、土器埋設部を先端として北で西に36度である。規模は長さ2.25 m、幅1.35 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.38 mである。土器埋設部の位置は竪穴住居S T 33のほぼ中央に位置し、前底部は壁と2条の周溝に接する。前底部内には複数のピットが検出された。

土器埋設部の埋設土器99は器体上半を欠損し、前底部側に約16度傾いた状態で埋設されている。土器の内面は、被熱により赤化し、剥離も顕著である。石組部の埋設土器98は底部と口縁部の一部を欠損し、内面は被熱による剥離が顕著である。また煤の付着も認められる。口縁部には、土器と接する石との位置調整を行うために打ち欠くなどの加工が施されたと推察される。破片資料である埋設土器100は、99の南西隣の石との間に挟みこまれていた。土器埋設部の石、石組部の埋設土器周囲の石とも被熱による赤化が見られる。石組部の底部には煤の付着も認められた。

E L 217の1層は複式炉全体に見られる住居廃絶後の堆積土、2・3層は埋設土器の底部に堆積しており、複式炉使用時の残滓に由来とする層と推察される。5層は周溝S D 252、4層はいずれもピットであるが、内最も南東側のものが前庭部のピット、その北西側のピットが住居拡張以前の周溝S D 252の痕跡と考えられる。

E L 217には、その位置の変更を伴う改修が行われた痕跡が検出された。6～8層がE L 217の掘形であり、特に7層には焼土・炭など改修前の複式炉から排出されたと推察されるものが多く混入している。8層中には器体下半の半周分のみ遺存している埋設土器101が掘えられている。101はE L 217改修前の石組部の埋設土器と見られ、改修時に抵触する個所が除かれたため、大きく欠損していると考えられる。改修後の石組部埋設土器より北西側に掘えられており、複式炉全体も同様に北西側に移動した位置に構築されていたであろう。E L 217の北西側のピットS P 243が、拡張以前のS T 34の中心に位置しており、改修前のE L 217の土器埋設部であったと推察される。ほかに改修前のE L 217の痕跡として、改修後のE L 217の石組部と前庭部の境に位置するピットが挙げられる。E L 217断面の4層のうち石組部に接す

複式炉の改修

るピットがこれに該当する。改修前の前庭部のピットと考えられる。

E L 217 に埋設された土器 99 は大木 9 式新段階に、100・101 は大木 10 式古段階に属する。改修前の E L 217 の埋設土器と見られる 101 には文様が施されていないため、詳しい時期は不明である。

竪穴住居 S T 35 (第 28・29 図、巻頭写真 4、写真図版 14・15)

3 基の複式炉

竪穴住居 S T 35 は竪穴住居 S T 33 の南西側 894・40 グリッド付近に位置する。平面形は円形、直径は 6.7 m、深さは検出面から 0.08～0.25 m である。中央部から北東に向かって複式炉 E L 222、北西に向かって E L 263、南東に向かって E L 283 が構築されている。ただし E L 283 からは石も土器も全て抜き取られている。調査で確認できた住居の変遷は、床面積の拡張が 1 度、柱穴の作り替えが 1 度、複式炉の作り替えが 2 度である。以下新しいものから順に記述する。

石も土器も抜き取られた複式炉

S T 35 の廃絶時に使用されていた複式炉は 3 つの内 E L 222 のみである。ほかは地山起源の黄色系粘土・砂によって埋め戻され、床面に造成されていた。周溝は S D 259・S D 258 の 2 条が検出されており、後者の方が新しく廃絶時の住居の規模を示している。S T 35 の 4 層が S D 259 上で途切れず遺構全体に広がることから、住居は拡張されたものと判断される。拡張は S T 35 の南西辺を除く各辺で行われた。同じく 5 層は S D 258 と同質の土層であり、その直上に堆積している。S D 258 の埋め戻しと同時に積み上げた層と推察される。その目的は、やはり壁を保護するための木材を固定するためと想定される。

抜き取り後は放置

住居廃絶時の主柱穴は柱穴 S P 249・250・251・262 の 4 基が検出された。この 4 基に作り替える以前の柱穴がやはり 4 基検出されているものの、こちらは柱を抜き取った後、地山起源の黄色系粘土で埋め戻され床面に造成されていることから、住居廃絶時の柱穴とはならない。S P 249・250・251・262 のいずれの断面にも柱抜取痕が確認された。柱を抜き取った後に堆積した土は、S T 35 の覆土に類する黒色系シルトが主体を占めており、埋め戻しを行ったとは考えられない。これらの柱穴は、住居廃絶時に柱を抜き取った後、そのまま放置されたと推察される。

最終段階

住居廃絶時まで使用されていた遺構は、複式炉 E L 222、周溝 S D 258、柱穴 S P 249・250・251・262 となる。この 3 者の組み合わせが、S T 35 の最終段階の状況である。

複式炉 E L 222 の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として北で西に 112 度である。長さ 3.15 m、幅 2.45 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.76 m を測る大型の複式炉である。土器埋設部の位置は S T 35 の中心部からやや北東へ移動した個所であり、前庭部は壁と周溝に接し、その壁際にはピットが検出されている。袖部の石は部分的に残っている。

被熱した石を再利用

土器埋設部の埋設土器 109 は、ほぼ完形のまま直立した状態で埋設されていた。口縁部内面の被熱が顕著であり、赤化と剥離が認められる。石組部の埋設土器 118 は、内外面とも被熱しており、剥離を起こしている。118 は前庭部側に約 12 度傾斜した状態で埋設される。口縁部には打ち欠くなどの加工が施され、この土器に接する石と高さがそう。両者とも大木 10 式新段階に属する。石組部の底部には煤の付着が看取された。被熱し赤化した石も埋設されているが、まとまっておらずその位置は点々としている。埋設後に被熱したのではなく、被熱した石を再利用したためと推察される。また、前庭部には被熱の痕跡は認められなかった。

E L 222 の 1・2 層は住居廃絶後の堆積土だが、3・4 層はそれぞれ埋設された土器の底部にのみ堆積しており、複式炉使用中の残滓に由来する層と考えられる。6～9 層が掘形であり、その堆積順から、石組部に土器を埋設した後に土器埋設部と石組部を構築したと判断される。掘形は土器の大きさに合わせて掘り込んであり、大規模な改修などはなかったと見られる。これらの掘形、および地山である 10・11 層も、土器内で火を使用した際の熱が伝わったため赤化している。

残りの二つの複式炉 E L 263・283 の新旧関係は、直接的な手がかりがないため判然としない。両者とも住居が廃絶された時点では、床面に造成されていた。E L 283 の前庭部の南端は拡張前の周溝 S D 259 までであり、両者は同時に使用されたと考えられる。土器埋設部の位置も拡張以前の S T 35 の中心である。柱穴 S P 301・302・303・473 も拡張以前の S T 35 の四隅に配置されており、やはり S D 259 と同時に使用されていたと考えられる。よって、拡張以前の S T 35 内の施設の組み合わせは、複式炉 E L 283、周溝 S D 259、柱穴 S P 301・302・303・473 の三者になると推察される。しかし、E L 263 もこれらの条件にはほぼ当てはまり、やはり拡張以前の S T 35 の組み合わせに入るため、少なくとも E L 263 は住居の拡張以前には構築されていたと判断される。あるいは E L 283・263 が同時に使用された可能性もうかがえる。

E L 263 の前庭部は S D 259 からはみ出し S T 35 の壁近くまで達している。複式炉のみ住居の平面形から突き出すことは通常行われなため、拡張後の S T 35 の壁に向かって前庭部を拡張したと推察される。つまり、E L 263 は S T 35 の拡張前後にまたがって使用されたことになる。よって 3 基の複式炉が同時に使用されていないとすれば、その構築は E L 283、E L 263、E L 222 の順で行われたと考えられる。

E L 283 内からは土器と石が全て抜き取られている。単に床面を造成するためならば、E L 263 のように、その障害になる上位の石のみ抜き取り、埋め戻せば済むはずである。全て抜き取ったのは石と土器を再利用するためではないだろうか。隣接し、ほぼ同じ規模をもつ複式炉 E L 263 の構築に使用した可能性が最も高い。ただし、E L 263 に埋設されている土器の器高では E L 283 には大きすぎるため、E L 283 に埋設していた土器は E L 263 において再利用しなかったとせざるを得ない。新たに用意した土器を埋設したと考えられる。

同様に E L 222 を構築する時点で、E L 263 から障害となる石が抜き取られ床面が造成されている。E L 263 に E L 283 の石を移設したように、E L 222 に E L 263 の石を移設しなかったのは、使用する石の大きさや形状の違いによると推察される。規模は E L 222 の方が格段に大きいため使用する石も多くなる。よって移設を行った方が労働の軽減につながるはずである。E L 263 に残された石は E L 222 に埋設された石に比べて大きいものが目立つ。また、E L 222 の石が丸みを持つ石であるのに対し、E L 263 の石は割れていたり角のあるものばかりである。E L 222 に埋設する石として適当でないため、放棄されたと考えられる。しかし E L 263 の土器埋設部の石や袖部の石の中には、移設されたものもあるだろう。単に床面の造成の障害になるため抜き取ったのであれば、E L 263 を埋め戻す際に、抜き取った石もその中に廃棄されることが考えられるが、実際には出土していない。いずれにせよ E L 222 の構築に使用した石の大半、土器とも新たに用意されたものである。

複式炉 E L 263 の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として北で東に 154 度である。長さ 2.48

床面に造成

複式炉の構築順

新たに土器を用意

新たに石と土器を用意

m、幅 1.24 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.65 m である。土器埋設部の位置は拡張以前の S T 35 の中心部からやや北西へ移動した個所であり、前庭部は拡張以前の壁と周溝に接するが、拡張後の壁、周溝と接する個所は貯蔵穴 S K 248 によって切られているため判然としない。その壁際にはピットが検出されている。袖部の石は残っていない。

土器埋設部の埋設土器 106 は、器体上半と底部を欠き、直立した状態で埋設されていた。上端部の被熱が顕著であり、内外面とも赤化、剥離が認められる。石組部の埋設土器 107 は底部を欠損し、その内面では被熱による剥離が起きている。また煤の付着も看取される。107 は逆さのまま前庭部側に約 18 度傾斜した状態で埋設されている。底部付近には打ち欠くなどの加工が施され、土器に接する石と高さがそろえられる。106・107 とも文様を持たない土器であり詳細な時期は判然としないが、E L 263 の覆土からは大木 10 式古段階に属する土器が出土している。ほかに被熱による赤化が看取される個所は、土器埋設部の土器の周囲の地山、石組部の埋設土器の周囲の石などである。石組部の底部には煤の付着が看取されたほか、被熱し赤化した石も散見されるが、これは被熱した石を再利用したためと推察される。また、前庭部には被熱の痕跡は認められなかった。

床面を造成 E L 263 の 1～6 層は複式炉廃絶後に床面を造成するために埋めた土であり、黄色系粘土・砂を多く含んでいる。7～9 層は、それぞれ埋設された土器の底部にのみ堆積している炭・焼土を多く含む黒色系シルトであり、複式炉使用中の残滓に由来する層と考えられる。10～12 層が掘形であり、その堆積順から、石組部に土器を埋設した後に石組部を構築したと判断される。掘形は土器の大きさに合わせて無駄なく掘り込まれており、大規模な改修などはなかったと見られる。埋設土器部分の掘形である 11・12 層は、土器内で火を使用した際の熱が伝わったため赤化していた。

複式炉 E L 283 の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で西に 21 度である。E L 283 からは埋設された石も土器もすべて抜き取られているため、複式炉本来の規模は分からない。調査で検出された E L 283 は、その掘形と土器と石を抜き取った痕跡を合わせた遺構となっている。規模は長さ 2.95 m、幅 1.04 m、床面から石組部埋設土器の抜取痕の底部までは 0.34 m である。土器埋設部の位置は拡張以前の S T 35 の中心部であり、前庭部は拡張以前の壁と周溝に接し、その中にはピットが 2 基検出されている。

E L 283 断面の 10 層が周溝 S D 259、ほかの 1～9 層までは複式炉を解体した際に崩落した層と床面を造成するために埋めた土である。黒色系シルトのほかには地山起源の土、炭、焼土、石などが多く混入しており、短時間に埋め戻した状況を呈している。また、その掘形の断面形状も複式炉の形態をよく表しており、北から土器埋設部、石組部埋設土器、石組部底部、前庭部の順となる。出土した土器は大木 10 式古段階に属するものである。

S T 35 の変遷は非常に複雑であるが、これまで推論を含めながら記述した。当初は周溝 S D 259 と複式炉 E L 283、柱穴 S P 301・302・303・473 の組み合わせで住居が構築される。その後、複式炉のみを E L 263 に作り替え、ほか前段階と同じ周溝と柱穴が使われた。次の段階では、E L 263 は前庭部のみを拡張するがそのまま残し、周溝は S D 258 に、柱穴は S P 249・250・251・262 に作り替えられる。最後は複式炉を E L 222 に作り替え、周溝と柱穴は前段階のものをそのまま使用した。よって、S T 35 には 4 段階の変遷があったと推察される。

ST 35内にはほかに性格の判明しないピットなどが多数認められるが、これらには補助的な柱を立てた柱穴などが含まれると推察される。SP 301とSP 473の間に検出した溝は、一見すると周溝のようであるが、その先には延長しないため周溝とは考えられず、性格は判然としない。ST 35の北端に重複している貯蔵穴SK 248からは後期初頭の土器片が出土しており、ST 35とは時期的に離れているため、直接的な関係はない。またST 35の覆土からも後期初頭の土器が出土しているが、覆土上から掘り込まれた遺構などに含まれていたものであろう。ST 35とはやはり関係しない。

竪穴住居ST 50 (第30図, 写真図版13)

竪穴住居ST 50は調査区北半の西壁に接し、824・48グリッド付近に位置する。平面形は不整な隅九五五角形と見られる。長軸6.25m、短軸5.46m、深さは検出面から0.19～0.32mである。中央部から南東に向かって複式炉EL 72が構築されている。

主柱穴は柱穴SP 88・89・90・91の4基が検出された。複式炉の中軸線と住居の中軸線とした場合、その配置はほぼ左右対称を示す。SP 88・89・91では柱抜取痕が確認された。該当する層は、いずれも底部から床面に上るに従い広がる様相を呈している。柱を抜き振り、抜き取った痕跡と想定される。柱抜取痕内の層は、崩落した掘形の層とST 50の覆土と同質の層からなる。柱を抜き取った後に意図的に埋め戻した痕跡はなく、そのまま放置したと考えられる。SP 90では柱痕部分を検出できなかったが、その1層はST 50の覆土と同質である。

周溝はSD 109の1条のみが検出されており、住居を拡張した痕跡は見られない。SD 109の覆土は、周囲の地山と黒色系シルトが主となり、人為的な埋め戻しが行われたと推察される。壁を保護するための木材を固定したのであろう。ST 50の2・3層には、周囲から廃棄された多量の遺物が含まれている。4層が貼床である。

複式炉EL 74の中軸線の方向は、土器埋設部を先端として北で西に41度である。長さ2.49m、幅1.75m、床面から石組部の埋設土器の底部までは0.31mである。土器埋設部の位置はST 50の中心部からやや南東へ移動した個所であり、前底部は壁と周溝に接する。前底部の南東側の周溝内にはピットが検出された。

体部下半を欠く土器埋設部の埋設土器119は垂直に、口縁部と体部下半を欠く石組部の埋設土器120は前底部側に約18度傾斜した状態で埋設されている。両者ともその内面は被熱しており、赤化・剥離などが看取される。120の内面には煤の付着も認められる。また、口縁部には打ち欠くなどの加工が施され、土器に接する石組部の石と高さがそろう。119の底部には扁平な石が3点敷かれているが、欠損した土器の底部の代用であろう。

土器埋設部の土器の周辺部に配されている石や、石組部の埋設土器周囲の石は被熱し赤化している。ほかに石組部の西南部に赤化した石がまとまって埋設されている。石組部の底部には石は敷かれていない。石組部の南東部と袖部でも石が欠けているが、これらは住居廃絶時に抜き取られたものと推察される。

EL 74の1・3層は複式炉全体に見られる住居廃絶後の堆積土だが、2・4層はそれぞれ埋設された土器中のみ確認される層であるため、複式炉使用中の残滓に由来する層と考えられる。7・8層が掘形である。埋設土器120直下の8層が特に深く掘り込まれている。当初は120より器高の大きい土器が埋設されており、その後120に入れ替えられた可能性がある。8

左右対称
の柱配置

拡張はない

多量の遺物

土器の入れ替え

層中に炭が多く含まれているのは、土器の入れ替えの際にそれまでに排出した炭が混入したためと考えられる。

E L 74 の埋設土器 119 は大木 9 式新段階に属する。120 には文様が施されていないため、詳細な時期は判然としない。S T 50 の覆土からは、大木 10 式古段階の土器も出土するが、その多くはやはり大木 9 式新段階に属する。

竪穴住居 S T 338 (第 31 図, 写真図版 16)

竪穴住居 S T 338 は調査区中央部の東側、852・18 グリッド付近に位置する。遺存状態が悪く複式炉と周溝の一部が確認されたのみである。よって、平面形や主柱穴も判然としない。周溝は S D 337 が東半部分のみ検出された。これを複式炉の前底部西端部まで延長して復元すると、南北 3.6 m、東西 4.4 m の不整な隅丸長方形を呈する住居となる。また、S D 337 の北東で検出された弧状に連なるピット群を周溝底部の一部と想定し、E L 46 の土器埋設部を中心に復元すると、直径 6 m のほぼ円形を呈する住居となる。あるいは両者が S T 338 の拡張を示すとも考えられる。S D 337 の覆土はやはり人為的な埋め戻しを行った堆積状況を示している。

複式炉 E L 46 の中軸線の方角は、土器埋設部を先端として北で東に 1 度である。長さ 2.34 m、幅 1.62 m、床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.37 m である。土器埋設部の位置はやはり S T 338 の中心部と推察される。前底部内西端には周溝の一部と見られる掘り込みが残っており、壁と周溝に接していたと考えられる。また、前底部の西端にはピットが検出された。

体部上半と底部を欠く土器埋設部の埋設土器 153 は垂直に、体部下半を欠く石組部の埋設土器 152 は逆さまのまま前底部側に約 18 度傾斜した状態で埋設されていた。両者ともその内面は被熱しており、赤化・剥離などが看取される。152 の体部下半の欠損部分には打ち欠くなどの加工が施され、土器に接する石組部の石と高さがそろえられる。

土器埋設部の石はほとんど残っていないが、埋設土器周辺の地山と石組部の埋設土器周囲の石は被熱により赤化している。石組部の底部には煤の付着が認められた。前底部には被熱の痕跡はなく、袖部の石も残っていない。抜き取った痕跡も検出されないうえ、当初より埋設されなかったとも考えられる。

E L 46 の 1・2・4 層は、その中に地山起源の黄色系シルトを多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。しかし住居廃絶後の堆積土と推察される 3 層は 4 層の上位に堆積しており、埋め戻しとその途中で取り止められた状態となっていた。7～10 層が掘形であり、10 層中から埋設土器 154 が出土した。153 以前に土器埋設部に埋設されていた土器と推察され、土器の入れ替えが行われたと判断される。8・10 層中に炭と焼土が多く含まれるのは、入れ替えの際にそれまでに排出した炭と焼土が混入したためと考えられる。石組部の埋設土器が入れ替えられた痕跡は検出されなかった。

E L 74 の埋設土器 154 は大木 9 式新段階に属する。152・153 には文様が施されていないため、詳細な時期は判然としない。

竪穴住居 S T 356 (第 32・33 図, 写真図版 17)

竪穴住居 S T 356 は S T 4・280 と重複し、858・24 グリッド付近に位置する。遺存状態は悪く、住居の掘り込み、周溝などは検出されず、複式炉 E L 247 と柱穴 S P 75・76・83・238・241・335・474・475 のみが検出された。ほかに、柱穴 S P 30 も S T 356 の柱穴の可能性があるので、

S T 4・
280 と重複

比較的小型の柱穴であり補助的な柱穴であろう。S P 474・475 は中世の竪穴建物によりその大半が失われており、遺存しているのは底部付近のみである。

主柱穴 S P 75・76・83・238・241・335・474・475 は八角形状に配され、S T 5 と同様の柱配置を示す。平面形はもはや知ることはできないが、おそらく S T 5 と同じく五角形、あるいは円形であったと推察される。それぞれ向かい合う柱穴同士の距離を、柱穴の中心から測ると平均で 6.72 m となる。S T 5 の場合は 6.33 m であり、柱穴の間隔だけで比較すると S T 5 より大規模な住居と推測される。しかし、柱穴の規模については S T 5 の方が明らかに大きく、柱痕から推測される柱の直径も S T 356 が 15cm 程度であるのに対し、S T 5 の場合は 25cm となる。床面積のみならば S T 5 と同等か、あるいはそれより広い住居であったと推定される。

八角形状の柱配置

S T 5 より大きい？

複式炉 E L 247 は、石組部の埋設土器とその周囲に埋設された石のみが遺存している。また南東側に隣接するピット S P 300 が、土器埋設部から土器を抜き取った痕跡と考えられ、本来は E L 247 と一体であったと考えられる。E L 247 中軸線の方向は、遺存部分が少ないため判然としませんが、およそ南東を向く。土器埋設部の痕跡 S P 300 の位置は住居の中央部から遠く、柱穴付近まで下がる。E L 247 本来の規模は不明だが、住居の大きさに対して明らかに小さい複式炉であったと推察される。床面から石組部の埋設土器の底部までは 0.24 m となる。

石組部の埋設土器 155 は口縁部の一部を欠損し、その内面には被熱による剥離、煤の付着が認められる。また 155 の周囲には、破片資料である 156・157 が埋設されている。土器の周囲にわずかに残る石組部の石は被熱により赤化している。

E L 247 断面の 1～4 層は、地山起掘の黄色系シルトを含み、住居焼絶時に埋め戻された土層と推察される。1 層は S P 300 に該当し、土器埋設部の土器を抜き取った痕跡である。よって土器を埋設する際の掘形より大きいと推察される。5 層は土器の底部に堆積している黒色系シルトであり、複式炉使用時の残滓に由来する土層であろう。6 層が掘形、埋め戻された地山を起源とする土層であるが、その大きさに余分はなく、改修の痕跡などは見られない。

S T 356 は S T 4 と重複しており、複式炉 E L 247 も S T 4 内に入る。E L 247 が解体され埋め戻されているのは S T 4 の床面を造成するためと推察される。よって遺構同士の直接的な前後関係は判然としなかったが、上記の事由により S T 356 が S T 4 に先行して構築されたと判断される。一方、同じく重複する S T 280 の複式炉 E L 266 には埋め戻された痕跡がなく、この場合は S T 280 の方が新しいと推察される。

E L 247 に埋設された土器 155～157 は大木 9 式新段階に属し、8 基の柱穴から出土した土器も同様である。ただし、S P 75 の 1・2 層からは後期初頭の土器 159 が出土している。これらの層は S P 75 と重複する別の土坑のものであるため、S T 356 とは関連しない。また、重複する S T 280 の複式炉に埋設された土器はいずれも大木 10 式であり、やはりこちらが新しいものと考えられる。よって 3 棟の住居の新旧関係は古い方から、S T 4、S T 356、S T 280 の順となる。

住居の新旧関係

B 単独で検出された複式炉

複式炉 E L 73 (第 34 図, 写真図版 18)

ここで取り上げる 3 基の複式炉は、住居を伴わず単独で検出されたものである。本来は住居

内に構築されたものと考えられるが、遺存状況が悪いため、住居自体は検出されなかった。

E L 73は調査区中央部の東側、846・12グリッド付近に位置している。石組部の一部とその埋設土器と前底部のみが遺存している。中軸線の方角は、石組部の埋設土器を先端として北で西に140度である。残存する長さは1.25 m、幅0.63 m、検出面から石組部の埋設土器の底部までは0.1 mである。前底部の北東側にはビットが検出された。

底部付近のみ遺存する石組部の埋設土器162は、前底部側に約35度傾斜した状態で埋設されている。その内面は被熱しており、赤化・剥離などが看取される。また土器の周囲の地面も赤化している。土器の上端部も削平などにより欠損しており、本来の埋設土器の大きさは失われている。E L 73の埋設土器162は地文のみ有する土器であり、詳細な時期は判然としない。

複式炉 E L 115 (第34図, 写真図版18)

E L 115はS T 5の南側、878・26グリッド付近に位置する。石組部とその埋設土器のみが遺存している。中軸線の方角は、石組部の埋設土器を先端として北で東に42度である。残存する長さは0.77 m、幅0.48 m、検出面から石組部の埋設土器の底部までは0.14 mである。

器体下半部のみ遺存する石組部の埋設土器163は、前底部側に約20度傾斜した状態で埋設されている。その内面には被熱のための剥離や、煤の付着などが看取される。埋設土器163は大木9式新段階に属する。

1・2層が掘形である。埋設土器直下の1層が大きく掘り込まれており、土器の入れ替えなどの改修が行われた可能性がうかがえる。1層中に炭と焼土が多く含まれているのは、土器の入れ替えの際にそれまでに排出した炭・焼土が混入したためと考えられる。

複式炉 E L 348 (第34図, 写真図版18)

E L 348はS T 338の北側、848・16グリッド付近に位置する。石組部がわずかに遺存するのみであり、埋設土器も残っておらず、複式炉のどの部分か、複式炉なのかどうかも判然としないが、本遺跡では他時期の住居は検出されていないため、同時期の遺構と考え複式炉とした。遺存している石の配置と大きさから、石組部の埋設土器と底部の間に見られる傾斜面の部分と推察される。中軸線の方向は南西を向き、石組の南西側に土器埋設部、北東側に前底部が存在していたと想定される。

C 埋設土器遺構

埋設土器遺構 E U 63 (第34図, 写真図版18)

埋設土器遺構はE U 63とE U 268の2基が検出された。E U 268については、前々節の堅穴住居S T 4・280の項ですでに述べた。

E U 63はS T 338の西側、852・22グリッド付近に位置する。底部付近のみの土器167が垂直に埋設されている。その特徴から後期初頭の土器と考えられるが、文様も持たないため判然とはしない。埋設土器が後期初頭の可能性を持つこと、土器周辺の地面、土器に被熱の痕跡がないことなどから、一部のみ遺存した複式炉とはしなかった。

D 配石遺構

配石遺構 S X 284 (第34図, 写真図版18)

配石遺構 S X 284 は調査区中央部の西端、842・58 グリッド付近に位置する。S X 284 は西壁に接しており、調査区内では部分的に検出されたのみであり、その全貌は不明である。拳大から人頭大の石を配置しているが、どのような意図に基づいたものか判断としない。主に棒状の石を使用し、繋げることにより遺構を構築したと推察される。中には磨石 300・石皿 322 など含まれる。周辺からは中世の遺物も出土しているが混入であろう。ほかに後期初頭に属する土器 169 が出土している。おそらく S X 284 も後期初頭の所産であろう。

E 掘立柱建物

掘立柱建物 S B 349 (第 35 図, 巻頭写真 5, 写真図版 19)

縄文時代に属する掘立柱建物は S B 349 の 1 棟のみ検出された。6 基の柱穴からなる独立棟持柱を持つ掘立柱建物である。梁行 1 間、桁行 1 間、さらに両妻の外側に柱穴が 1 基ずつ配置され、柱穴の配置は亀甲形を呈する。柱間は、梁行 3.87 m、桁行 4.44 m、棟持柱同士の間隔は 6.97 m である。建物の方位は北で西に 19 度 53 分 31 秒振れる。

独立棟持柱の柱穴 S P 331 は妻から約 1 m 外側の位置に、S P 285 は同じく妻側から 1.92 m の位置に配置される。柱穴の底面の標高は 66.62 ~ 67.3 m、中でも S P 331 の 66.62 m が極端に低く、ほかの 5 基の平均値 67.2 m を大きく下回る。ただし、S P 347 では柱穴の底面を 0.25 m ほど埋め戻した後に柱が立てられたため、柱根の下端部を底面の標高とした。柱根はいずれの柱穴からも出土しなかった。また、建物内部の施設に関する遺構も検出されなかった。

最も平面形の大きい柱穴では直径 1.65 m、また最も深い柱穴の深さは 1.56 m を測る。いずれも大型の掘形を有する柱穴であり、推定される柱の直径もほかの堅穴住居のものと比較すると非常に大きい。柱の太さは、柱痕の検出された柱穴から復元すると 25 ~ 35 cm ほどとなる。柱を抜き取った痕跡はいずれの柱穴からも検出されなかった。掘形内には S B 349 周辺の地山である礫層を起源とする石が多量に含まれていた。

独立棟持柱を持つ掘立柱建物の上部構造については諸説あるが、未だ明確な結論を得ていない。S P 331 から大木 9 式新段階に属する土器 166 が出土している。小破片であるが、S B 349 の時期を示していると考えられる。県内において、縄文時代に属する独立棟持柱を持つ掘立柱建物の検出例は、最上町かつば遺跡、長井市空沢遺跡について 3 遺跡目となる。本遺跡の S B 349 は、中でも最も古い時期の検出例である。

F 陥 穴

陥穴 (第 26・36 図, 写真図版 20) は全部で 7 基が、1 列に並んで検出された。いずれも平面形は長方形で、底面に逆茂木痕が検出されたものが多い。同時期に構築され、使用したと考えられる。規模は、長軸 1.17 m、同じく短軸 0.67 m、遺構検出面からの深さ 0.9 m、いずれも 7 基の平均値である。遺構の上端部はすでに崩落していると考えられる。また、当時の生活面は遺構検出面より上位にあるため、いずれの数値も陥穴本来の規模ではない。

陥穴は南北に並び、北から S K 351、S K 278、S K 211、S K 125、S K 220、S K 215、S K 311 の順となる。陥穴同士の間隔は、6.2 ~ 13.2 m、平均値は 9 m である。調査区内の地形は、中央部から西側に向かって下がっている。陥穴列は、その傾斜面手前の台地縁辺に平行

6 基の柱穴
独立棟持柱

3 遺跡目
県内最古

7 基が 1 列に

台地縁辺に平行

した位置に配置されている。

それぞれの底部には逆茂木痕が1基、あるいは2基検出されている。SK 278・220では検出されなかった。逆茂木痕は、その中に逆茂木を立てた後、地山で埋め戻して固定する場合が多く、検出が困難なことがある。

覆土内には地山崩落土と見られる黄褐色系のシルト・砂が下半部の層に含まれているものが多い。上半部の層では腐葉土である黒色系のシルトが堆積している。埋め戻しを行った痕跡はなく、各層はいずれも自然堆積による。SK 220は竪穴住居ST 33と重複しており、ST 33が後から構築されたことが判明している。各陥穴は一連のものであり、SK 220と同様にST 33構築以前のもと考えられる。陥穴に埋め戻しの痕跡はないため、陥穴の使用を止めた後覆土が自然堆積する期間を経て住居が構築されたと判断される。

SK 311から大木9式新段階に属する土器170が出土している。各住居から出土した土器と同時期のものであるが、陥穴と集落は共存しないため、170はSK 311が放棄された後に混入した遺物と推察される。陥穴の時期を推定できる遺物は出土しておらず判然としないが、大木9式新段階以前のいずれかの時期に該当しよう。

G 貯 蔵 穴

貯蔵穴(第37・38, 写真図版21・22)はSK 36・44・59・142・216・248・306の7基を検出した。調査区南端部に集中している。貯蔵穴とした土坑は、平面形が円形を呈し、下端より上端の方が狭いフラスコ状のものである。地山の崩落により本来の形状をとどめていないと考えられる円筒状の土坑も貯蔵穴に含めた。底面にピットを有するものはなかった。規模は大小あるが、直径は0.72～1.5m、遺構検出面からの深さは0.28～0.72mである。

覆土は主に黒色系シルトであるが、中には地山崩落土と見られる黄色系粘土を含むものもある。また、拳大から人頭大の石や焼土が投棄される場合もある。中でもSK 44内には混じり合った黒色系と黄色系のブロック状のシルトが、底部から上端まで堆積しており人為的に埋め戻されたと判断される。貯蔵穴から貯蔵物自体は出土しなかった。

出土遺物には大木9式など中期の土器も見られるが、SK 38・44・248などからは後期初頭

後 期 初 頭 おそらくいずれの貯蔵穴も後期初頭の所産と推察される。

H 川 跡

川跡SG 6(第39図, 写真図版22)

北 東 へ 下 る 川跡SG 6は調査区北端、812・20グリッド付近に位置する。調査区内から北東へ向かって下る旧河道である。調査区内では、ST 2付近が最も標高が高く、西、北、北東へ向かい下る地形を呈する。SG 6はこの内北東へ下る傾斜面に開析された非常に小規模な川跡である。

出土した遺物は非常に少ない。大木9式新段階に属する土器188が出土しているが、集落を営んでいる期間内に川跡SG 6が開口していたとすれば、より多くの遺物・石・焼土などが廃棄されているはずである。よって中期末段階ですでに自然堆積により埋没していたと考えられる。土器188はSG 6上から掘り込まれた遺構などに混入した遺物と推察される。

2 遺物

A 縄文土器 (第40～70図1～200)

i 分類 (第5図)

分類

出土遺物を取納したコンテナ (55 × 39 × 14cm) は125箱を数える。内縄文土器は80箱である。出土した土器群が属する主な時期は、縄文時代中期末葉である。ほかに中期中葉・後期初頭・後期中葉に属する土器がわずかに出土した。遺構出土の遺物190点は出土した遺構ごとに掲載し、遺構外出土の遺物10点は最後にまとめた。

200点

出土した縄文土器は、器形や文様により以下の通りに分類した。第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群の深鉢形土器は、点数が多くさらに細分することができた。

第Ⅰ群 大木8a式に属する土器とした。器形は口縁部が内湾するものと、外傾または外反するものがある。口縁部の文様には渦巻文・横位S字状文・大波状文があり、胴部文様には波状文や渦巻文がある。

第Ⅱ群 大木9式古段階に属する土器とした。口縁部が外反または内湾し、頸部はくびれ、胴部が膨らむ器形を持つ。文様は隆線による縦位渦巻文や楕円文が施される。

第Ⅲ群 大木9式新段階に属する土器とした。縦方向へ展開する楕円形・円状・ステッキ状などの区画文が施される。中でも器形の判明する深鉢形土器については次のように細分した。

- a類 口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形を有する土器。沈線による文様が施される。
- b類 口縁部が内湾し、頸部がくびれ、胴部が膨らむキャリバー形の土器。沈線による文様が施される。
- c類 隆沈線および隆線による文様が施されるキャリバー形の土器。

第Ⅳ群 大木10式古段階に属する土器とした。横方向へ展開するS・U・eのアルファベット状区画文が施される。中でも器形の判明する深鉢形土器については次のように細分した。

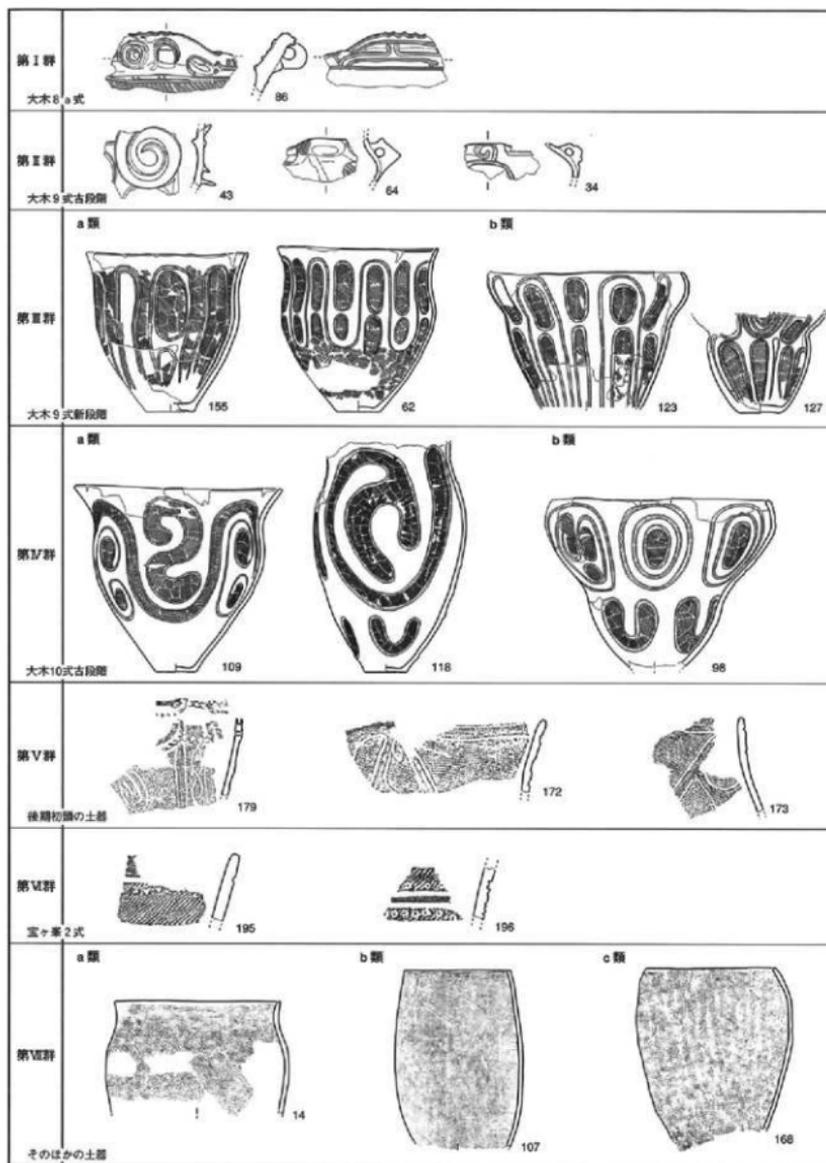
- a類 第Ⅲ群a類と同系統と考えられる土器。口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形を有する。沈線によるアルファベット状区画文が施される。
- b類 第Ⅲ群b類と同系統と考えられる土器。器形はキャリバー形、器体上半と下半に異なる文様が施される。文様は、同心円文、S・U・e字状区画文などが施される。
- c類 第Ⅲ群c類と同系統と考えられる土器。前段階の文様を簡略化した文様が中心となる。器形はキャリバー形、文様はアルファベット状区画文などが施される。口縁部は段を有する無文帯となる。

第Ⅴ群 後期初頭に属する土器とした。器厚は薄く、胎土に大型の砂粒が含まれる。沈線によって縦位に展開する文様や撫糸文が施される。

第Ⅵ群 宝ヶ峯2式 (加曾利B2式併行) に属する土器とした。東北地方に特徴的な十厘内Ⅱ群b類と同種の土器である。

第Ⅶ群 そのほかの土器として、上記の分類に該当しないものをまとめた。縄文のみ施さ

III 縄文時代の調査成果

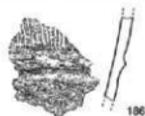


c類



o類

流鉢



d類

e類



第5図 縄文土器分類図 (縮尺は不同)

れる土器、無文の土器、底部付近のみの土器などがある。中でもおよそ器形の判明する深鉢形土器については次のように細分した。

- a 類 口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ器形を有する土器。
- b 類 口縁部が内湾し、胴部がやや膨らみ、底部が緩やかにすぼむ器形を有する土器。
- c 類 口縁部が強く内湾し、胴部が大きく膨らみ、底部がすぼむ器形を有する土器。
- d 類 口縁部が内湾し、頸部がくびれ、底部がすぼむ器形を有する土器。
- e 類 口縁部が直立、あるいは外傾し、胴部が直線的に外傾する器形を有する土器。

ii 竪穴住居出土の土器

竪穴住居ST1(第40図1~3, 第41図4~9) 1・2・3は複式炉EL87の埋設土器である。3は2の底部に落し込まれており、4は周溝SD126から出土した。いずれも深鉢形土器である。1・4は第IV群c類、2は第III群a類、3は第VII群とした。1は口縁部と胴部下半を欠損する。くびれ部から大きく外傾しながら内湾する器形を有する。横位のS字状区画文が3単位施され、その中に縄文が充填される。また、その区画文の湾曲した両端部に抱かれた無文部は隆起している。巻きの強いU字状区内も隆起する。くびれ部には横位の沈線が施文される。2は曲線的な区画文が5単位と楕円形区画文が施され、その中に縄文が充填される。4はくびれ部を境に文様が上下に分けられる。口縁部には有段の無文帯があり、その下位に縄文が充填された巻きの強いU字状区画文が施される。

5~9はST1の覆土内から出土した深鉢形土器である。5は第III群c類、6・7は第III群、8は第IV群a類、9は第VII群b類とした。5には中心部に刺突を有する渦巻文が施される。6は波状口縁を有する土器の口縁部のみの資料である。隆沈線による曲線的な文様が施され、その中には縄文が充填される。8の口縁部は外反し、e字状区画文が施される。

竪穴住居ST2(第42図10・11, 第43図12~15, 第44図16~27) 10・11・12は複式炉EL92の埋設土器、13・14はEL92の覆土から出土した。13は浅鉢形土器、ほかは深鉢形土器である。10・11は第III群a類、13は第IV群、12・14は第VII群a類とした。10には、U字状区内にC・S・U字状区画文が施される単位と、複節縄文が充填される単位が交互に展開する。11の口縁部は無文帯となり、胴部には楕円形区画文と定形化していないC・S字状の区画文が施される。13の底部は上げ底であり、底部から続くC字状などの区画文が施される。

15は複式炉EL352から出土した第III群a類の深鉢形土器である。外反する口縁部に曲線的な区画文が施され、その中に縄文が充填される。

16~27はST2の覆土から出土した。25は浅鉢形土器、26は円盤状土製品、27は脚付方形皿、ほかは深鉢形土器である。16は第II群、17・18は第III群a類、19は第III群b類、20・21・26は第III群、22・23・24は第IV群c類、25は第IV群とした。16の口縁部は無文帯、隆帯の下位には隆沈線による渦巻文が施され、その中に縄文が充填される。17・18には沈線による区画文が施され、その中に縄文が充填される。19の口縁部には横位の沈線が施され、その上位には縄文が充填される。下位には楕円形区画文が施される。20は沈線による文様間の空隙に刺突が施される。21の沈線による区画文内には赤色顔料が塗布される。22・23は同一個体、内外面とも丁寧に磨かれる。U字状区画文が施され、無文部分は隆起する。24は口縁部が無文帯、横位沈線の下位に巻きの強いU字状区画文が施され、その両端部は隆起する。25の波状口縁

第III・IV群が伴出

不定形

脚付方形皿

赤色顔料

は3単位であり、内外面ともに丁寧に磨かれる。口縁部は段を有する無文帯となり、波頂部の下位には巻きの強いU字状区画文が施される。26は打ち欠きによる成形である。27は方形を呈する皿に4本の短い脚が付く特殊な器形の土器である。左側の端部には、斜位方向の孔が上方から2カ所開けられている。

竪穴住居 S T 3 (第45図28～34) 28・29は複式炉 E L 154の埋設土器、30・31・32は E L 154の覆土より出土、33は E L 324の埋設土器、34は S T 3の覆土から出土した。28は浅鉢形土器、34は把手付鉢形土器、ほかは深鉢形土器である。28は第IV群、29は第III群、30・31・33は第III群b類、32は第VII群、34は第II群とした。28には横位S字状などの区画文が施される。縄文の充填は区画文の中に施される場合と外の場合がある。29の胴部上半には沈線による渦巻文が施され、下半には地文のみ施される。地文は複節縄文である。30・31は同一個体である。30・31・33には、双頭渦巻文を内包する波状文が沈線により施される。34の把手には渦巻文が施される。

竪穴住居 S T 4 (第46図35) 複式炉 E L 166に埋設された第III群の深鉢形土器である。やや膨らみ胴部に沈線による楕円形区画文とU字状区画文が施され、補修孔が2カ所開けられる。

竪穴住居 S T 5 (第46図36～40, 第47図41～48, 第48図49～57) 41・42は複式炉 E L 308の埋設土器、36・37は E L 308覆土内の出土遺物である。37は円盤状土製品、ほかは深鉢形土器である。41・42は第VIII群c類、36・37は第III群とした。41は胴部が大きく膨らみ、42は緩やかに内湾しながら立ち上がる。36には赤色顔料が塗布される。37は打ち欠きにより成形される。

38は柱穴 S P 228、39は柱穴 S P 232、40は周溝 S D 289から出土した。38・40は深鉢形土器であり、第III群c類とした。隆沈線による渦巻文が施され、その中に縄文が充填される。

39は小型の壺形土器である。強く屈曲する肩部に横位沈線が1条施文され、ほかは無文となる。後期前葉の東北地方北部に特徴的な土器であり、S P 232の時期とは合致しないため、混入したものと判断される。本遺跡出土の後期初頭の土器群と一連のものである可能性が高く第V群とした。

43～57は S T 5の覆土内から出土した。いずれも深鉢形土器である。43・44は第II群、45～48は第III群a類、49・50は第III群b類、51～54は第III群、55は第VII群d類、56・57は第VIII群とした。43には隆沈線による渦巻文が施される。その中心部ほど隆線は低い。45～47は同一個体であり、楕円形区画文とU字状区画文が施される。49のくびれ部から上位には、双頭渦巻文と楕円形区画文が施され、その間を縫うように波状文が施される。51は赤色顔料が塗布された波状口縁の土器である。口縁部は無文帯、頸部には2条の横位沈線が施され、胴部には楕円形区画文が施される。54の胴部は大きく膨らみ、2条の沈線による波状文が施される。また頸部のくびれには連続した刺突が施される。56の底には網代痕が残る。

竪穴住居 S T 9 (第49図58～61, 第50図62～65) 58～62は複式炉 E L 136の埋設土器、63は E L 136の覆土から出土した。いずれも深鉢形土器である。58～61・63は第III群、62は第III群a類とした。58・59には双頭渦巻文が施され、その間を縫うように波状文が施される。60の直線的に立ち上がる胴部には、U字状で囲まれた双頭渦巻文が施される。61には不定形な区画文が施され、その中に縄文が充填される。62には楕円形およびU字状の区画文が施され、

有 孔

赤 色 顔 料

赤 色 顔 料

その間を縫うように波状文が施される。

64・65はS T 9の覆土から出土した。64は第Ⅱ群の鉢形土器、65は第Ⅳ群b類の深鉢形土器とした。64の把手部分には、簡略化した渦巻文が施される。65の口縁部には横位沈線が、その下位には同心円文に囲まれた円形区画文が施される。

竪穴住居S T 28（第51図66～69、第52図70～79）66・67は複式炉E L 167の組設土器、68～73はE L 167の覆土から出土した。いずれも深鉢形土器である。67は第Ⅵ群c類、68は第Ⅲ群a類、66・69～72は第Ⅲ群、73は第Ⅶ群e類とした。66は底部のみであるが、残存部分には沈線がわずかに残る。68・69・70には不定形な区画文が施され、その中に縄文が充填される。71の外反する口縁部は無文帯であり、胴部には刺突が充填された逆三角形の区画文と、縄文が充填された曲線的な区画文が施される。72は底部付近まで波状文と双頭渦巻文が施される。

74～79はS T 28の覆土から出土した深鉢形土器である。74は第Ⅲ群a類、75は第Ⅲ群b類、76は第Ⅲ群、77・78は第Ⅶ群a類、79は第Ⅶ群e類とした。76には橋状の裝飾と楕円形区画文が施される。

竪穴住居S T 33（第53図80～82、第54図83～85、第55図86～97）80～83は複式炉E L 218の埋設土器、84・85はE L 218の覆土から出土した。いずれも深鉢形土器である。80・81は第Ⅲ群c類、82は第Ⅲ群、83は第Ⅲ群a類、84は第Ⅳ群a類、85は第Ⅶ群b類とした。80・81は同一個体であり、半肉彫的な渦巻文・楕円形区画文・U字状区画文などが施される。U字状区画文は第Ⅳ群に特徴的であるが、第Ⅲ群でも一部の土器に施文されることがある。83には縦方向へ展開する6単位のステッキ状区画文と、円状区画文が施される。

半肉彫的手法

86～97はS T 33の覆土から出土した。92は鉢形土器、94は注口土器、95は器台形土器、ほかは深鉢形土器である。86は第Ⅰ群、87・88は第Ⅲ群a類、89は第Ⅲ群b類、90は第Ⅲ群、91は第Ⅳ群c類、92・93・94は第Ⅳ群、95は第Ⅶ群、96・97は第Ⅶ群a類とした。86の文様は調整が施されない粘土紐による。突起部分の外側には空洞を有する張り出しがあり粘土紐による縁取りがなされる。突起部分の内側には立体的な横位S字状文が施される。90の胴部は大きく膨らみ、ステッキ状の区画文が施される。91にはe字状と推察される区画文が施され、その中に複節縄文が充填される。92の口縁部は段を有する無文帯である。その下位には備縁が隆起する曲線的な区画文が施される。94にも曲線的な区画文が施され、その中に縄文が充填される。鉢形、あるいは浅鉢形土器に注口部が付されたものと考えられる。95は4カ所の孔を有するものと推測される。

竪穴住居S T 34（第56図98～103）98～101は複式炉E L 217の組設された深鉢形土器である。98は第Ⅳ群b類、99は第Ⅲ群、100は第Ⅳ群、101は第Ⅶ群とした。98のくびれ部から上位には沈線による同心円文などが8単位、下位にはU字状区画文が5単位施文される。99には不定形な区画文が施される。100には曲線的な区画文が施され、その中に縄文が充填される。

102・103はS T 34の覆土から出土した。102は深鉢形土器、第Ⅳ群c類とした。口縁部は無文帯となり、その下位に巻きの強いU字状区画文が施される。103は打ち欠きにより成形された円盤状土製品、第Ⅲ群とした。

竪穴住居S T 35（第57図104～108、第58図109～117、第59図118）104・105は複式炉

E L 283 の覆土から出土した深鉢形土器である。104 は第Ⅳ群、105 は第Ⅳ群 c 類とした。104 のくびれ部の上位には曲線的な区画文が、下位には巻きの強い U 字状区画文が施される。105 の口縁部は段を有する無文帯となり、その下位には U 字状区画文などが施される。

106・107 は複式炉 E L 263 の埋設土器、108 は E L 263 の覆土から出土した。いずれも深鉢形土器である。106 は第Ⅶ群、107 は第Ⅶ群 b 類、108 は第Ⅳ群とした。106 の縄文は縦位に施され、その単位間に空隙が残る。108 には曲線的な区画文が施される。

109・118 は複式炉 E L 222 の埋設土器、110～112 は E L 222 の覆土から出土した。112 は円盤状土製品、114 は注口土器、ほかは深鉢形土器である。109・118 は第Ⅳ群 a 類、110・112 は第Ⅲ群、111 は第Ⅳ群 c 類とした。109 の口縁部は強く外反し、S 字状区画文・双頭渦巻文・C 字状区画文が施され、その間を縫うように波状の区画文が展開する。118 は、木道跡では最大最大最大の土器であり、残存高が 608 mm を測る。胴部には変形した e 字状区画文が 3 単位、その下位には U 字状区画文が 4 単位施される。また、区画文の側縁はやや隆起している。111 の口縁部は無文帯となり、その下位に沈線による巻きの強い U 字状区画文が施される。112 は打ち欠きにより成形される。

113～117 は S T 35 の覆土から出土した。114 は注口土器、ほかは深鉢形土器である。113 は第Ⅲ群 a 類、114 は第Ⅶ群、115～117 は第Ⅴ群とした。114 は鉢、あるいは浅鉢形土器に短い注口部が付された土器と考えられる。115～117 の器厚は薄く、胎土には大型の砂粒が多く含まれる。116・117 には波状の垂下沈線と摺糸文が施される。後期初頭に特徴的な文様構成である。

竪穴住居 S T 50 (第 60 図 119・120、第 61 図 121～127、第 62 図 128～137、第 63 図 138～147) 119・120 は複式炉 E L 74 の埋設土器、121 は E L 74 の覆土から出土した。119 は第Ⅲ群 c 類、120 は第Ⅶ群 a 類、121 は第Ⅲ群 b 類とした。119 には隆線による同心円文が、その中心には双頭渦巻文が施される。また胴部下半には楕円形区画文が施される。120 は頸部より上位が無文となる。

122 は柱穴 S P 91 出土の深鉢形土器、第Ⅲ群 b 類とした。

123～147 は S T 50 の覆土から出土した。137 は鉢形土器、145 は脚付鉢形土器、146・147 は円盤状土製品、ほかは深鉢形土器である。123～127 は第Ⅲ群 b 類、128～133・146・147 は第Ⅲ群、134 は第Ⅲ群 c 類、135 は第Ⅳ群 b 類、136・137 は第Ⅳ群、138・140 は第Ⅶ群 a 類、139 は第Ⅶ群 b 類、141 は第Ⅶ群 e 類、142～145 は第Ⅶ群とした。

123 には沈線による楕円形区画文・円状区画文・円状文が施される。同様の文様が施される土器に 124・125 がある。127～131 は、頸部のくびれ部を境に文様が上下に分かれる。130 のくびれ部の上位には沈線による円形区画文が、下位には円状区画文が施される。134 は大きく外傾しながら内湾する波状口縁の口縁部の資料である。半内彫的手法による横位の双頭渦巻文と、刺突が充填された三角形区画文が施される。137 の口縁部は、外反する 3 単位の波状口縁であり、かつ無文帯となる。胴部は大きく膨らみ、U 字状、円状、楕円形区画文が施される。145 の脚部は中実、文様は地文のみである。146・147 は打ち欠きにより成形される。

竪穴住居 S T 280 (第 64 図 148～151) 148・149 は複式炉 E L 266 の埋設土器、150・151 は E L 266 の覆土から出土した。150 は浅鉢形土器、ほかは深鉢形土器である。148 は第Ⅳ群

最大

注口土器

脚付鉢

半内彫的手法

c類、149は第IV群、150は第III群、151は第IV群a類とした。148の口縁部は直立し無文帯となる。胴部には渦巻状・U字状区画文が施され、逆三角形区画内には刺突が充填される。150の胴部は大きく膨らみ、沈線による区画文に孔が2カ所開けられている。また区画文の外側には赤色顔料が塗布される。

赤色顔料

竪穴住居 S T 338 (第65図152～154) 152～154は複式炉 E L 46に埋設された深鉢形土器である。152はⅥ群b類、153はⅥ群、154はⅢ群とした。154には沈線による曲線的な文様が施される。文様が折り返し、袋状となった箇所の内側に縄文が充填される。

竪穴住居 S T 356 (第66図155～161) 155～157は複式炉 E L 247の埋設された深鉢形土器である。155は第Ⅲ群a類、156・157は第Ⅲ群c類とした。155には楕円形区画文と口状区画文が施される。156・157は同一個体、全面に赤色顔料が塗布される。隆線による渦巻文が施され、その中心部に縄文が充填される。

赤色顔料

158・159は柱穴 S P 75、160は S P 76、161は S P 241から出土した。158・159は深鉢形土器、160・161は円盤状土製品であり、158は第Ⅲ群b類、159は第V群、160・161は第Ⅲ群とした。159の器厚は薄く胎土には大型の砂粒が多く含まれ、縦位の沈線が施される。160・161は打ち欠きにより成形される。また161は口縁部を利用している。

iii 単独で検出された複式炉出土の土器

複式炉 E L 73 (第66図162) 複式炉 E L 73に埋設された深鉢形土器、第Ⅵ群とした。

複式炉 E L 115 (第66図163～165) 163は複式炉 E L 115の埋設土器、164・165は E L 115の覆土から出土した。3者とも深鉢形土器である。163・165は第Ⅲ群、164は第Ⅲ群a類とした。163の胴部には曲線的な区画文、その下位には口状区画文が施される。

iv 独立柱建物 S B 349 出土の土器

独立棟持柱

柱穴 S P 331 (第67図166) S B 349の独立棟持柱を埋設した柱穴 S P 331内から出土した。第Ⅲ群とした。

v 埋設土器遺構出土の土器

埋設土器遺構 E U 63 (第67図167) 深鉢形土器の底部のみの資料であり、器厚が少なく、胎土に大型の砂粒を多く含むことから第V群とした。残存部に文様はない。

埋設土器遺構 E U 268 (第67図168) 口縁部を下にした状態で埋設された深鉢形土器である。第Ⅵ群c類とした。口縁部は無文、胴部には地文が縦位に施される。

vi 配石遺構出土の土器

配石遺構 S X 284 (第67図169) 第V群とした。横位の沈線が施され、その下位に隆線による曲線的な文様が施される。

vii 陥穴出土の土器

陥穴 S K 311 (第68図170) 深鉢形土器、第Ⅲ群b類とした。口縁部は内湾し楕円形区画文が施される。陥穴埋没後に混入したと推察される。

viii 貯蔵穴出土の土器

171～178は深鉢形土器である。第V群とした。

貯蔵穴 S K 36 (第68図171) 底部から直線的に立ち上がる胴部下半のみの資料である。地文は燃糸文、底には木葉痕が残る。

貯蔵穴SK 44 (第68図172~176) 172は緩やかな波状口縁を有する深鉢形土器である。口縁部の沈線は、曲折し縦位方向に展開する。173の口縁部は無文帯となり、下位には沈線による三角形などの文様が施される。174にも沈線による文様が施される。175の口縁部は無文帯となり、以下は地文のみ施される。176の底部内面にはわずかに赤色顔料が付着する。

赤色顔料

陥穴SK 248 (第68図177~178) 177は直線的に外傾する波状口縁の深鉢形土器である。口縁部は無文帯となり、以下は地文のみ施される。178には斜位方向の沈線が施される。

ix 土坑出土の土器

179~186は深鉢形土器である。第V群とした。

土坑SK 37 (第69図179~181) 179の口縁部には刻目が付された隆帯が貼り付けられる。波頂部には孔が4カ所、口唇部には刺突が3カ所施される。胴部の沈線は縦方向に展開する。180の波頂部には押圧痕があり、器体には沈線が施される。181は2単位の波状口縁を有する深鉢形土器である。波頂部は無文、胴部には沈線が縦位と横位に施され、さらに横位の捻糸文が施される。

捻糸文

土坑SK 282 (第69図182~186) 182はやや外傾しながら、直線的に立ち上がる器形を有する。沈線による波状文、捻糸文が施される。183は網代痕が残る底部のみの資料である。184には垂下沈線と波状文が施される。185には2本の沈線による無文帯があり、その上下に捻糸文が施される。186には横位の隆文が施され、その上位には捻糸文が施される。

x ビット出土の土器

SP 329 (第69図187) 第III群とした。沈線による口状文が施される。

xi 川跡出土の土器

川跡SG 6 (第69図188) 深鉢形土器、第III群c類とした。口縁部は段を有する無文帯となり、その下位には半内彫的手法による曲線文と、刺突が充填された隆沈線による三角形区画文が施される。

半内彫的手法

xii 溝出土の土器

溝SD 353 (第69図189・190) 189・190は打ち欠きにより成形された円盤状土製品、第III群とした。両者とも縄文が充填された区画文を有する土器片を利用したと推察される。

xiii 遺構外出土の土器

大木9式土器古段階 (第70図191) 断面が三角形の隆線による渦巻文が施され、その中心部には孔が開く。孔の下位には沈線による渦巻文などの文様が施される。第II群とした。

大木9式土器新段階 (第70図192~194) 192は深鉢形土器、第III群a類とした。楕円形区画文と口状区画文が施され、その中に複節縄文が充填される。193は深鉢形土器、第III群b類とした。口縁部は段を有する無文帯となり、その下位には沈線による渦巻文が施される。194にも沈線と刺突が施される。第III群とした。

宝ヶ峰2式土器 (第70図195・196) 195・196の横位沈線には、連続刺突が平行する。縄文には、

連続刺突

非常に小さい節を有する原体が使用される。両者とも第VI群とした。

底部 (第70図197・198) 197・198の底には網代痕が残る。いずれも第VII群とした。

円盤状土製品 (第70図199・200) 199・200は打ち欠きにより成形された円盤状土製品である。

前者は第III群とした。後者は第V群、捻糸文が施される。

B 石 器 (第71～84図201～332)

本遺跡ではコンテナ45箱分の石器が出土した。掲載したのは131点である。種類ごとにまとめているが、各遺物の詳細は遺物観察表を参照されたい。

i 石 鏃 (第71図201～205)

タール付着

石鏃は5点出土した。いずれも凹基無茎鏃(鈴木1995)である。基部に挿入があり、基部を持たない。201の刃部は丸みを持ち、器厚も大きい。石材は鉄石英である。202は珪質頁岩製、先端部を欠損する。表裏面にタールが付着する。203は黒曜石製、先端部を欠損する。右側縁が挟られる。204は珪質頁岩製、表表面の中央部にタールの付着が顕著に認められる。205も珪質頁岩製、長さ44.6mmを測る大型の石鏃である。両側縁は弧状をなす。

ii 石 匙 (第71図206～212)

206は玉匙、ほかは珪質頁岩製である。身部の直上につまみが作出されるものを縦型、斜位の場合を斜型とした。縦型は206～210、斜型は211・212である。207・209は下端部を欠損する。刃部の加工は表面を主として行われるが、つまみ部は両面に行われる場合が多い。207・208の加工は表面全面に及ぶが、ほかは周縁に限定した加工が施される。206・209・210の右側縁は大きく折り取られるが、211・212は素材剥片の形態を大きく変えずに整形している。

iii 石 筥 (第71図213)

再加工

珪質頁岩製の石筥が1点出土した。表表面の全面に及ぶ加工が施される。刃部は末端部の裏面から3回のみ大きな剥離で整形され、さらに表面から微細な調整が施される。両側縁に施された一連の加工より後に行われており、折損後の再加工と考えられる。

iv 石 錐 (第71図214・215, 第72図216～220)

分類は矢島國雄・前山精明による方法(矢島・前山1995)に従った。分類名も同様である。石材はいずれも珪質頁岩である。214・215はD1類、錐部がしだいに太くなり、頭部の区分が不明瞭なもので、両面もしくは片面の全体が加工が施される。214は両側縁に表裏両面から加工が施され、その断面形は変形を呈す。215は表面に主要剥離面を大きく残すが、錐部の両側縁には表裏両面から加工が施される。216～220はD2類、錐部がしだいに太くなり、頭部の区分が不明瞭なもので、錐部の両側縁に加工が施されるが、素材の形状をとどめるものである。加工は表面を中心に行われるが、いずれも不定形な素材の形状をとどめている。

v 搔 器 (第72図221～229)

縦長剥片

いずれも珪質頁岩製であり、素材も縦長剥片のみを用いる。また、打面側を基部に末端側を刃部とする点も共通している。表面には1・2条の稜を有し、主要剥離面と同じ方向から行われた剥離痕を残している。また、打面調整痕を有するものも多いため、これらの搔器に用いられた素材剥片は同一の縦長剥片剥離技法により生産されたと考えられる。中でも末端部に厚みを残す剥片が主に用いられる。

共通した技法

加工技術もほぼ共通している。縦長剥片を素材としているため、両側縁の加工はその素材の形状を大きく変えるほどには行われない。刃部には急角度の加工が行われるが、その先端となるのは末端部で最も器厚の大きい箇所、つまり表面の稜上となる。ここを中心に両側縁へ向かい急角度の加工が施される。角度をある程度維持したまま厚みのある刃部を作出するには、器

厚の大きい稜付近から遠ざかることはできない。よって、表面の稜が224のように右に寄る場合は、刃部先端から左側縁への加工は素材の末端部を避けるように後側に寄る。結果として素材の形状を大きく変えてしまうものになる。一方右側縁は稜に近いため器厚の維持が容易であり、わずかな加工で刃部が作出される。刃部先端の位置は、素材の厚みが最も大きい箇所によって決められるため、222のように稜が素材の中央に位置する場合は刃部先端も中央となり、226のように稜が素材の左に寄る場合は刃部先端も左に寄ることになる。本遺跡出土の定形的な搔器はいずれも上記の技法により製作される。

vi 削器 (第73図230～241)

230～237には両側縁へ、238～241には片側縁へ連続した加工が施されている。表面に稜を有し、打面調整も施されている縦長剥片を素材とするものが多い。側縁への加工は浅い角度で行われているため、素材の形状を大きく変えたものはない。いずれも珪質頁岩製である。

vii 縦長剥片 (第74図242～250)

珪質頁岩製で、同一の縦長剥片剥離技法により剥離されたと考えられる縦長剥片である。表面に稜を有し、打面調整が施されている縦長剥片を抽出した。搔器・削器の素材剥片を生産した技法と同一であろう。245の右側縁の裏面には連続した微細な剥離がある。剥片のまま利器として使用されたと考えられる。

viii 石核 (第74図251・252, 第75図253・254)

251～253は珪質頁岩、254は黒曜石製である。251の表面には打面調整痕、両側面には自然面が残る。打面再生も行われている。最終作業面である表面には上方と下方から、表面には下方と左方から剥片剥離が行われ、頻繁な打面転移が行われたと判断される。剥片剥離の初期段階では縦長剥片が採取されたと考えられるが、最終段階では石核の大きさに限定された矩形の剥片が採取された。252は表面と右側面のいずれかが最終作業面と考えられる。また両者とも打面調整痕を有している。両側面には自然面が残り、採取された剥片はそのいづかに自然面を有することになる。表裏面ともに頻繁な打面転移により、求心的な剥片剥離が行われ、自然面が打面とされる箇所も見られる。253は全面に大きく自然面を残しており、原石の大きさと形状を大きく変えていない。表面には打面調整痕も見られるが、行われた剥離は原石の表皮を除去する程度に限られる。作業は石核調整段階でとどまり、廃棄されたと考えられる。254は大型の縦長剥片を素材とする石核である。表面に大きく自然面を残し、両側面が作業面となる。また主要剥離面が打面となる。左側面には打面調整痕があり、さらに剥片を採取する用意が行われていた。採取される剥片は、石核の器厚ほどの長さの矩形剥片に限られる。石核などの小型の石器に供せられる剥片を採取したのであろう。

ix 接合資料 (第75図255・256, 第76図257～262, 第77図263～271)

255～262は壱穴住居S T 35の周溝S D 259から1カ所にまとまって出土した。ほかにも **まとまって出土** 多数の剥片が出土したが、接合したのは8点のみである。

255+256 珪質頁岩製の剥片2点が接合する。剥離は上方から行われ、下面には自然面を残す。打面調整が行われた後に255が先行して剥離され、その後再び打面調整が行われ256が石核から剥離された。

257+258 珪質頁岩製の剥片2点が接合する。両者とも剥離は上方から行われ、下面には自然

面を残す。表面にも上方から剥片剥離が行われた痕跡を有しており、連続して剥片が採取されたことが分かる。先行して257が剥離され、その後数回の剥離、打面再生、打面調整を経て258が剥離されている。

259+260 珪質頁岩製の剥片2点が接合する。表面は自然面である。剥離はいずれも上方から行われている。先に259が剥離され、わずかな打面調整を経て260が剥離された。2点とも本格的な剥片剥離に先行して、原石から表皮を除去する際に剥離された剥片と考えられる。

261+262 珪質頁岩製の剥片2点が接合する。左側面と下面に自然面を残す。先に左方から261が剥離され、上面が打面再生を経た後に上方から262が剥離される。矩形的の剥片が打面転移を行いながら剥離されている。

263+264+265+266+267+268+269+270+271 竪穴住居ST2の柱穴SP116の覆土内からまとまって出土した。黒曜石製の剥片8点と石核1点が接合する。全面に自然面が残っており、原石から大きく形が変わっていないことが分かる。最初は原石が2つに分割される。一つは本接合資料であるが、もう一方は263を含む小型の石核である。この時点で分割された石核から263は剥離されている。その後264、265、266、267、268、269、270の順に271の上面を一周するように頻繁な打面転移を繰り返しながら剥片を剥離している。264・267・269は打面調整あるいは石核調整のために剥離されたと考えられる。また、これらの剥離を行う過程で、ほかにも多数の剥片が剥離されているが、それらは接合していない。次に上記の剥離を行った作業面を打面として、271の表面から自然面を除去するための剥離が行われた。

黒 曜 石

255～271の接合資料はいずれも住居内の施設から1カ所にまとまって出土している。素材として利用可能と推察される剥片を多く含んでいるため、単に廃棄したのではなく、一時的に埋納された可能性もある。調査では土中から出土したが、当時は石器を埋納した個所だけでも開口していたとも、あるいは有機質の容器・袋などに収納して埋納したとも推測される。

埋 納 か？

× 磨製石斧（第78図272～277）

272～275は基部へ向かい幅が狭くなる分銅形を呈する。272は全面が丁寧に研磨され稜が発達しているが、下半部を欠損する。273は基部を欠損し、弧状の刃部を持つ。丁寧に研磨され両側縁の稜は発達しているが、表土より出土したため後世に受けた傷が全面を覆う。274には剥離痕と擦痕が重複している。粗い剥離と研磨を行い製作されたが、その後刃部が欠損したため再加工が行われる。再び刃部を作出している途上で放棄された資料である。275は剥離による加工の後、研磨が行われている途上の資料である。しかし、基部付近には装着痕と推察される擦痕も見られる。この状態ですでに使用されていた可能性がうかがえる。

再 加 工

276・277は小型で、基部に向かい幅が狭くなる分銅形を呈する。両者とも丁寧に作られているが、やはり刃部には使用痕が確認される。277は刃部を欠損している。

× i 石 錘（第78図278・279）

278は上下端に切り込みを持つ。自然礫を素材としているが、全面に研磨を受け整形されている。279も上下端に切り込みを持つ大型の資料である。表表面にタールが付着している。自然礫を素材としており、研磨は行われていない。

タ ー ル 付 着

× ii 軽石製石製品（第79図280）

上下端を欠損している。全面に研磨による加工が施される。上部に横方向に貫通する孔が開

けられている。

x iii 円盤状石製品 (第79図 281・282)

2点とも板状摂理により割れた素材を使用し、表面を一周する加工が施され整形される。 板状摂理

x iv 磨石 (第79図 283～292, 第80～82図 293～320)

磨石・凹石・石皿の中には複式炉の構築材として再利用されたものが多い。283～300は 複式炉の構築材
円形の磨石。表裏面に明瞭な擦痕を有する。長さは小さいものでは35mm、大きいものでは189mmである。断面形も扁平なものから厚みの大きいものまでさまざまである。その大きさ形状は、使用する目的により、あるいは素材とする礫の大きさにより、使用の過程での擦り減りの度合いによるものと考えられる。301～303は棒状を呈する。断面形は台形、方形などがある。304・305は板状を呈する。表裏面に擦痕を有する。306～308は大型の磨石。306は下半部を欠損する。表面の中央部が研磨により極状となる。307は複式炉に再利用されたために、裏面が被熱し剥離している。308の裏面には極状の研磨痕が多数見られる。

309～320は凹部を有する磨石である。円形や楕円形のものがある。両面あるいは片面に明 凹部を有する
瞭な擦痕および敲打による凹部を有する。凹部は磨石の中央付近に多く、その数は1カ所に限られない。

x v 凹石 (第83図 321・322)

2点とも下半部を欠損する。棒状の自然礫の表面に、敲打による複数の凹部を有する。

x vi 石皿 (第83図 323～326, 第84図 327～332)

323は方形を呈する定型的な石皿の右下半部のみ資料である。砂岩製で、風化により非常に脆弱な状態である。表面には皿部と、岸部が作り出されている。

324～332は扁平な大型礫を用いる不定形な石皿である。片面あるいは両面が皿状に凹む。皿状にするために行った加工はなく、使用の過程で擦り減ったため形成されたものである。棒状の332は断面形が方形を呈するが、擦痕を有する面が皿状に凹む。

IV 中世・近世の調査成果

1 遺 構

A 掘立柱建物

i 概 要 (第85図, 付図2, 表1)

掘立柱建物44棟 掘立柱建物は44棟確認した。主に調査区の東側中央部に集中する。柱穴の径は、長径で12～129cmとばらつきがある。柱材が遺存していた柱穴は1基のみであった。建物の主軸方向は、いずれも北で西に31度から北で東に38度の間に収まるが、北で東に5度から北で東に26度の間に全体の8割が集中する。このほかに構造上建物とならない掘立柱列14基を確認した。これらは、堀などの区画施設や、一部の柱穴が失われた建物の可能性がある。

掘立柱建物・掘立柱列は主軸方向を基本として、構造、柱穴の規模を加味し、第1～11群に分類した。S B 401～403を第1群、S B 404～408、S A 446を第2群、S B 409～413を第3群、S B 414～417、S A 447・448を第4群、S B 418～424、S A 449を第5群、S B 425～434、S A 450～454を第6群、S B 435～438を第7群、S B 439～S B 441、S A 455を第8群、S B 442・443を第9群、S B 444を第10群とし、どの群とも主軸方向を異にする掘立柱列を第11群にまとめた。第11群を除き、同一群内の掘立柱建物・掘立柱列は、同時期もしくは近い時期の所産である可能性が高いと考えられる。また、同一群内でも掘立柱建物・掘立柱列が重複する場合があります。数度の建て替えが行われたと推定される。各群同士の新旧関係は確定できなかったが、第1・2群の建物を構成する柱穴は、掘形が大型であることから、ほかの群よりも時期が古いことが推察される。

ii 第1群 (掘立柱建物 S B 401～403, 第86・87図)

主軸が座標北から東へ約15～18度振れる一群である。掘立柱建物が集中する調査区東側中央部に位置し、大型で楕円形の柱穴を持つ。桁行と梁行の差は小さく、正方形に近い構造である。本群の各建物同士は重複しない。

掘立柱建物 S B 401の構造は梁行を南北とし、桁行2間、梁行1間である。柱穴は長径56cm～116cm、短径49～74cmの楕円形である。柱穴 S P 152から肥前陶器(345)が出土している。S B 402の構造は桁行を南北とし、桁行2間、梁行2間である。柱穴は長径60～110cm、短径51～78cmの楕円形である。S B 403の構造は梁行を南北とし、桁行2間、梁行1間である。柱穴は長径78～94cm、短径56～75cmの楕円形である。柱穴 S P 101は、掘形の覆土に多量の礫を含む。

iii 第2群 (掘立柱建物 S B 404～408, 掘立柱列 S A 446, 第88・89図)

主軸が座標北から東へ約5～9度振れる一群である。掘立柱建物が集中する調査区東側中央部に位置するが、S A 446は北側にやや離れる。第1群と同様に大型の柱穴を持つが、構造は桁行が2～4間、梁行が1～3間となり、桁行が長い建物群である。本群内で S B 405～408

表1 中世・近世の獨立柱建物

群	遺構番号	グリッド	桁行×梁行 (構造)	桁行×梁行 (規模) m (尺) × m (尺)	主軸方向	備考
1	S B 401	860 - 30	付添 2 × 1 間	4.55 (15.0) × 4.09 (13.5)	N 18° 20' 35" E	
1	S B 402	868 - 32	付添 2 × 2 間	4.55 (15.0) × 3.94 (13.0)	N 14° 53' 49" E	
1	S B 403	878 - 24	付添 2 × 1 間	4.39 (14.5) × 4.85 (16.0)	N 17° 10' 8" E	
2	S B 404	860 - 32	付添 2 × 2 間	4.09 (13.5) × 4.55 (15.0)	N 9° 2' 36" E	南側に張り出し部あり
2	S B 405	870 - 20	付添 4 × 2 間	7.42 (24.5) × 4.85 (16.0)	N 6° 41' 42" E	
2	S B 406	874 - 24	付添 2 × 2 間	8.79 (29.0) × 5.00 (16.5)	N 5° 27' 29" E	
2	S B 407	874 - 22	付添 3 × 2 間	4.85 (16.0) × 4.55 (15.0)	N 5° 5' 17" E	
2	S B 408	876 - 20	付添 1 × 1 間	5.15 (17.5) × 2.27 (7.5)	N 4° 53' 42" E	
3	S B 409	844 - 22	付添 1 × 1 間	3.49 (11.5) × 1.21 (4.0)	N 19° 49' 56" E	
3	S B 410	862 - 22	付添 2 × 1 間	4.55 (15.0) × 1.97 (6.5)	N 21° 42' 22" E	
3	S B 411	870 - 30	付添 3 × 1 間	6.36 (21.0) × 3.49 (11.5)	N 22° 15' 36" E	
3	S B 412	870 - 30	付添 3 × 2 間	6.06 (20.0) × 5.00 (16.5)	N 21° 35' 24" E	
3	S B 413	876 - 16	付添 2 × 2 間以上	4.55 (15.0) × 2.27 (7.5) 以上	N 21° 7' 30" E	
4	S B 414	848 - 46	付添 2 × 2 間	4.70 (15.5) × 2.12 (7.0)	N 26° 13' 34" E	
4	S B 415	868 - 32	付添 2 × 2 間	3.33 (11.0) × 3.03 (10.0)	N 24° 12' 11" E	
4	S B 416	872 - 28	付添 2 × 1 間	4.55 (15.0) × 3.49 (11.5)	N 24° 48' 29" E	北西側 1 間
4	S B 417	904 - 44	付添 2 × 1 間	3.64 (12.0) × 2.58 (8.5)	N 24° 40' 12" E	
5	S B 418	842 - 42	付添 2 × 1 間	4.24 (14.0) × 3.03 (10.0)	N 13° 11' 6" E	
5	S B 419	850 - 30	付添 3 × 2 間	5.76 (19.0) × 3.94 (13.0)	N 13° 24' 11" E	
5	S B 420	860 - 30	付添 5 × 2 間	15.09 (49.5) × 6.06 (20.0)	N 14° 9' 40" E	南側に張り出し部あり 北西側 1 間
5	S B 421	868 - 30	付添 3 × 1 間	4.85 (16.0) × 1.52 (5.0)	N 17° 29' 36" E	
5	S B 422	874 - 28	付添 2 × 1 間	3.64 (12.0) × 1.68 (5.5)	N 13° 49' 5" E	
5	S B 423	878 - 22	付添 2 × 1 間	4.09 (13.5) × 2.58 (8.5)	N 17° 22' 12" E	
5	S B 424	892 - 50	付添 1 × 1 間以上	4.24 (14) 以上 × 0.76 (2.5) 以上	N 14° 6' 58" E	北北側 1 間
6	S B 425	838 - 26	付添 2 × 2 間	4.24 (14.0) × 5.46 (18.0)	N 8° 16' 48" E	東側に張り出し部あり 北南側 1 間
6	S B 426	844 - 44	付添 2 × 1 間	3.33 (11.0) × 2.73 (9.0)	N 10° 36' 32" E	
6	S B 427	850 - 30	付添 2 × 1 間	4.24 (14.0) × 3.94 (13.0)	N 6° 32' 2" E	
6	S B 428	854 - 34	付添 4 × 2 間	6.06 (20.0) × 4.09 (13.5)	N 9° 55' 5" E	
6	S B 429	858 - 30	付添 2 × 2 間	3.64 (12.0) × 2.88 (9.5)	N 11° 20' 38" E	
6	S B 430	858 - 26	付添 2 × 1 間	4.39 (14.5) × 1.68 (5.5)	N 8° 51' 32" E	
6	S B 431	864 - 18	付添 4 × 3 間	4.85 (16.0) × 3.79 (12.5)	N 10° 57' 58" E	
6	S B 432	864 - 18	付添 3 × 2 間	6.36 (21.0) × 4.09 (13.5)	N 8° 29' 13" E	
6	S B 433	868 - 24	付添 2 × 1 間	2.27 (7.5) × 1.68 (5.5)	N 11° 26' 31" E	
6	S B 434	874 - 28	付添 2 × 2 間	4.55 (15.0) × 3.49 (11.5)	N 8° 10' 12" E	
7	S B 435	834 - 46	付添 2 × 1 間	6.21 (20.5) × 2.73 (9.0)	N 6° 46' 41" W	
7	S B 436	844 - 44	付添 1 × 1 間	4.24 (14.0) × 3.33 (11.0)	N 6° 10' 41" W	
7	S B 437	858 - 28	付添 3 × 2 間	5.60 (18.5) × 3.64 (12.0)	N 0° 10' 19" W	
7	S B 438	892 - 34	付添 2 × 1 間	3.03 (10.0) × 1.21 (4.0)	N 3° 14' 35" W	
8	S B 439	828 - 16	付添 2 × 1 間	3.33 (11.0) × 3.79 (12.5)	N 16° 28' 8" W	
8	S B 440	840 - 30	付添 2 × 2 間	2.58 (8.5) × 3.33 (11.0)	N 21° 31' 37" W	
8	S B 441	872 - 32	付添 1 × 1 間	3.33 (11.0) × 2.88 (9.5)	N 15° 9' 0" W	
9	S B 442	834 - 48	付添 2 × 1 間	4.39 (14.5) × 2.42 (8.0)	N 36° 36' 25" E	
9	S B 443	846 - 26	付添 2 × 1 間以上	1.82 (6.0) × 1.67 (5.5)	N 37° 57' 29" E	
10	S B 444	848 - 36	付添 2 × 1 間	3.18 (10.5) × 2.27 (7.5)	N 30° 51' 18" W	
2	S A 446	844 - 22	付添 3 間	6.67 (22.0)	N 8° 37' 30" E	
4	S A 447	856 - 14	付添 1 間 × 1 間	3.18 (10.5) × 2.27 (7.5)	N 24° 40' 59" E	L 字形
4	S A 448	898 - 46	付添 2 間	4.24 (14.0)	N 23° 19' 12" E	
5	S A 449	892 - 50	付添 2 間	2.88 (9.5)	N 17° 4' 48" E	
6	S A 450	840 - 24	付添 3 間 × 3 間	5.45 (18.0) × 6.36 (21)	N 10° 16' 30" E	L 字形
6	S A 451	844 - 44	付添 3 間 × 2 間	5.45 (18.0) × 4.24 (14)	N 11° 7' 34" E	L 字形
6	S A 452	856 - 50	付添 2 間	4.24 (14.0)	N 7° 25' 48" E	
6	S A 453	890 - 52	付添 3 間	4.55 (15.0)	N 10° 34' 26" E	
6	S A 454	866 - 52	付添 2 間	3.64 (12.0)	N 7° 54' 0" E	
8	S A 455	870 - 34	付添 1 間 × 1 間	3.33 (11.0) × 1.06 (3.5)	N 14° 55' 52" W	L 字形
11	S A 456	826 - 18	付添 2 間	3.79 (12.5)	N 4° 23' 2" E	
11	S A 457	828 - 18	付添 2 間	4.85 (16.0)	N 8° 49' 55" W	
11	S A 458	854 - 46	付添 3 間	4.24 (14.0)	N 43° 45' 19" E	
11	S A 459	858 - 52	付添 2 間	3.94 (13.0)	N 6° 2' 35" W	

が重複しており、建て替えなどが行われた可能性がある。

張り出し部 **掘立柱建物** S B 404 の構造は梁行を南北とし、身舎の桁行 2 間、梁行 2 間である。身舎の南側桁の西側から 1 間目に、南へ 1 間延びる張り出し部がある。柱穴は長径 60 ~ 119cm、短径 38 ~ 102cm の楕円形および円形である。柱穴 S P 150・169 は、掘形の覆土に多量の礫を含む。S B 405 の構造は桁行を南北とし、桁行 4 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 25 ~ 85cm、短径 22 ~ 48cm の楕円形および円形である。主に主軸方向と位置から第 2 群に分類したが、比較的小型の柱穴を持つことから、主軸方向が近く小型の柱穴を持つ第 6 群に分類される可能性もある。S B 406 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 23 ~ 126cm、短径 18 ~ 83cm の楕円形および円形である。S B 407 の構造は桁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 18 ~ 43cm、短径 15 ~ 36cm の楕円形および円形である。主軸方向から第 2 群に分類したが、比較的小型の柱穴を持つことから、S B 405 と同じく第 6 群に分類される可能性もある。S B 408 の構造は梁行を南北とし、桁行 1 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 64 ~ 129cm、短径 48 ~ 91cm の楕円形である。S B 403・406・407・413・423 と重複する。柱穴 S P 102 は、掘形の覆土に多量の礫を含む。

掘立柱列 S A 446 は東西 3 間、6.67 m (22 尺) を測る。柱穴は長径 44 ~ 70cm、短径 31 ~ 52cm の楕円形である。

iv 第 3 群 (掘立柱建物 S B 409 ~ 413, 第 90 図)

主軸が座標北から東へ約 19 ~ 22 度振れる一群である。主に掘立柱建物が集中する調査区東側中央部に位置するが、S B 409 のみ北側に離れる。柱穴は中型で楕円形のものが多い。S B 411・412 は、桁行と梁行をほぼ 90 度回転する形で重複しており、建て替えが行われた可能性がある。

掘立柱建物 S B 409 の構造は梁行を南北とし、桁行 1 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 32 ~ 52cm、短径 21 ~ 39cm の楕円形である。S B 410 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 20 ~ 36cm、短径 14 ~ 27cm の楕円形および円形である。S B 411 の構造は桁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 26 ~ 54cm、短径 24 ~ 40cm の楕円形および円形である。S B 412 の構造は梁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 29 ~ 80cm、短径 22 ~ 66cm の楕円形および円形である。柱穴 S P 234 から直径 8cm、長さ 25cm の柱痕が検出された。S B 413 の東側は調査区外に延びる。構造は梁行を南北とし、身舎の桁行 2 間以上、梁行 2 間である。柱穴は長径 30 ~ 47cm、短径 26 ~ 34cm の楕円形である。

v 第 4 群 (掘立柱建物 S B 414 ~ 417, 掘立柱列 S A 447・448, 第 91 図)

主軸が座標北から東へ約 23 ~ 26 度振れる一群である。調査区内の広範囲に配置される。主に小型で円形の柱穴を持つが、一部に中型で楕円形の柱穴が見られる。本群の各建物同士は重複しない。

掘立柱建物 S B 414 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 30 ~ 37cm の円形である。S B 415 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 25 ~ 29cm の円形である。柱穴 S P 104 の掘形の底部には、柱を囲むように石が配置される。S B 416 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間となり、西側一面に庇が付く。

柱穴は直径 32～43cm の円形で、柱穴 S P 105・223 のみやや大型の楕円形となる。S B 417 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 62～73cm の円形であるが、桁行の中心の柱穴は両側とも直径 20cm と小型である。

掘立柱列 S A 447 は南北 1 間、東西 1 間の L 字形の掘立柱列である。柱穴は直径 41～46cm の円形である。S A 448 は南北 2 間である。柱穴は直径 36～40cm の円形である。

vi 第 5 群 (掘立柱建物 S B 418～424, 掘立柱列 S A 449, 第 92 図)

主軸が座標北から東へ約 13～17 度振れる一群である。いずれも梁行を南北とする。調査区東側中央部を主として、調査区内に広範囲に配置される。第 6 群と共通する建物の配置が多く見られるため、重複関係も多数存在する。柱穴は小型で円形のもの、大型で楕円形のものがある。本群の各建物同士は重複しない。

掘立柱建物 S B 418 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 49～57cm の円形である。S B 419 の構造は梁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 31～81cm、短径 26～53cm の楕円形および円形である。S B 420 の構造は梁行を南北とし、身舎の桁行 5 間、梁行 2 間である。身舎の南側桁の東側から 2 間分に、南へ 2 間延びる張り出し部がある。規模は身舎の桁行 15 m (49.5 尺)、梁行 6.06 m (20 尺)、張り出し部の南北 3.64 m (12 尺)、東西 6.06 m (20 尺) を測る大型の建物である。柱穴は直径 41～46cm の円形であるが、一部に大型で楕円形のものを含む。柱穴 S P 178 の掘形の底部には、柱を囲むように石が配置される。また S P 246 では採取痕が確認された。S B 421 の構造は梁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 26～29cm の円形である。柱穴 S P 269 の柱痕の覆土には石が含まれており、柱が抜き取られた可能性がある。S B 422 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 32～42cm の円形である。S B 423 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 22～57cm、短径 21～42cm の楕円形である。S B 424 の構造は梁行を南北とし、身舎の桁行 2 間以上、梁行 1 間以上である。建物の西側と南側は調査区外に延びる。北側一面に庇が付く。柱穴は直径 29～36cm の円形である。

張り出し部

北側に庇

掘立柱列 S A 449 は東西 2 間である。柱穴は直径 25～31cm の円形である。S B 424 に伴う塚と考えられる。

vii 第 6 群 (掘立柱建物 S B 425～434, 掘立柱列 S A 450～454, 第 93 図)

主軸が座標北から東へ約 6～11 度振れる一群である。調査区東側中央部を主として、調査区内に広範囲に配置される。第 5 群と共通する建物の配置が多く見られるため、重複関係も多数存在する。柱穴は小型で円形のもの、大型で楕円形のものがある。本群内では S B 425 と S A 450、S B 426 と S A 451、S B 429 と S B 430、S B 431 と S B 432 がそれぞれ重複する。S B 431 と S B 432 はほぼ同位置で重複しており、建て替えなどが行われた可能性がある。

掘立柱建物 S B 425 の構造は梁行を南北とし、身舎の桁行 2 間、梁行 2 間である。身舎の東側梁の南側から 1 間目に、東へ 1 間延びる張り出し部がある。また、この張り出し部を含む南側 1 面に庇が付く。柱穴は直径 47～53cm の円形である。S B 426 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 34～40cm の円形である。S B 427 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は長径 21～56cm、短径 17～41cm の楕円形お

張り出し部

南側に庇

出土遺物

よび円形である。S B 428 の構造は桁行を南北とし、桁行 4 間、梁行 2 間である。柱穴は主として直径 30 ～ 64cm の円形であるが、一部に大型で楕円形のものを含む。柱穴 S P 330 からは、肥前陶器 (347・349)、近世陶器 (346・348) が出土した。S B 429 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は長径 21 ～ 62cm、短径 21 ～ 36cm の楕円形および円形である。S B 430 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 42 ～ 54cm の円形である。S B 431 の構造は梁行を南北とし、桁行 4 間、梁行 3 間である。規模は桁行 4.85 m (16 尺)、梁行 3.79 m (12.5 尺) を測る。柱穴は直径 38 ～ 42cm の円形である。S B 410・420・432 と重複する。S B 432 の構造は梁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 16 ～ 29cm の円形である。S B 433 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。規模は桁行 2.27 m (7.5 尺)、梁行 1.68 m (5.5 尺) を測る。柱穴は長径 28 ～ 50cm、短径 21 ～ 35cm の楕円形および円形である。S B 405・420 と重複する。S B 434 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 25 ～ 31cm の円形である。

独立柱列 S A 450 は南北 3 間、東西 3 間の L 字形の独立柱列である。柱穴は直径 31 ～ 43 の円形である。S A 451 は南北 2 間、東西 2 間の L 字形の独立柱列である。柱穴は直径 28 ～ 33cm の円形である。S A 452 は東西に延びる独立柱列である。柱穴は直径 29 ～ 34cm の円形、その間隔は一定しない。S A 453 は南北 3 間に延びる。柱穴は直径 30 ～ 38cm の円形である。S A 452 に伴う可能性がある。S A 454 は東西 2 間に延びる。柱穴は直径 39 ～ 46cm の円形である。S A 452・453 に伴う可能性がある。

vii 第 7 群 (独立柱建物 S B 435 ～ 438, 第 94 図)

主軸が座標北から西へ約 0 ～ 7 度振れる一群である。調査区内に広範囲に配置される。柱穴は小型で円形である。本群の各建物同士は重複しない。

独立柱建物 S B 435 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 32 ～ 43cm の円形である。S B 436 の構造は梁行を南北とし、桁行 1 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 38 ～ 48cm の円形である。S B 437 の構造は梁行を南北とし、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 39 ～ 42cm の円形である。S B 438 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 29 ～ 30cm の円形である。

ix 第 8 群 (独立柱建物 S B 439 ～ 441, 独立柱列 S A 455, 第 94 図)

主軸が座標北から東へ約 15 ～ 22 度振れる一群である。調査区東側に配置される。柱穴は小型で円形である。本群内では S B 441 と S A 455 が重複する。

独立柱建物 S B 439 の構造は桁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 40 ～ 48 の円形である。S B 440 の構造は梁行を南北とし、桁行 2 間、梁行 2 間である。柱穴は直径 22 ～ 75cm の円形である。S B 441 の構造は桁行を南北とし、桁行 1 間、梁行 1 間である。柱穴は直径 34 ～ 38cm の円形である。

独立柱列 S A 455 は南北 1 間、東西 1 間の L 字形の独立柱列である。柱穴は直径 37 ～ 40cm の円形である。

x 第 9 群 (S B 442・443, 第 95 図)

主軸が座標北から東へ約 36 ～ 38 度振れる一群である。調査区北側に配置される。柱穴は小型で、円形および楕円形である。本群の各建物同士は重複しない。

掘立柱建物 S B 442の構造は桁行を南北とし、桁行2間、梁行1間である。柱穴は長径24～44cm、短径21～29の楕円形および円形である。S B 443の構造は、桁行2間以上、梁行1間以上である。建物の北側は、S K 16と重複しているため確認できなかった。柱穴は直径34～39cmの円形である。

x i 第10群 (S B 444, 第95図)

S B 444のみであるが、ほかの群と主軸を異にするため、一群とした。

掘立柱建物 S B 444の構造は桁行2間、梁行1間である。柱穴は長径24～42cm、短径21～33cmの楕円形および円形である。

x ii 第11群 (S A 456～459, 第95図)

どの建物とも主軸方向を異にする掘立柱列をまとめた一群である。

掘立柱列 S A 456は東西2間である。柱穴は直径59～40cmの円形である。S A 457は南北2間である。柱穴は28～25cmの円形である。S A 458は南北3間である。柱穴は直径29～27cmの円形である。S A 459は東西2間である。柱穴は直径41～28cmの円形である。

B 竪穴建物

竪穴建物はS T 15・207の2棟が検出された。平面形は方形を呈し、出入口の可能性ある張り出し部を持つ。床面は固く締まるが、貼床は認められなかった。出入口

竪穴建物S T 15 (第96図) 860・24グリッド付近に位置する。平面規模は掘形上端で長軸290cm、短軸274cm、壁高は調査時で25cmである。西辺に張り出し部を持つ。床面からは、建物に伴う直径15cm～40cmの柱穴が、北壁と南壁沿いに3基ずつ検出された。S P 474・475は縄文時代の竪穴住居S T 356の柱穴であるため関連はない。主軸方向、位置から掘立柱建物の第2群に伴う可能性が高い。出土遺物はなかった。

竪穴建物S T 207 (第96図) 838・46グリッド付近に位置する。平面規模は掘形上端で長軸352cm、短軸310cm、壁高は調査時で40cmである。東辺南側に張り出し部を持つ。柱穴は検出されなかった。主軸方向からS T 15と同様に掘立柱建物の第2群に伴う可能性が高い。覆土から瓷器系陶器の播鉢(333)が、また張り出し部と重複する土坑S K 213から同一個体と考えられる播鉢(344)が出土している。

C 土坑

土坑は調査区内から多数検出された。内15基を掲載した。いずれも性格は不明であるが、掘立柱建物と主軸方向を共にするものも多い。主軸方向を共に

土坑S K 16 (第97図) は844・28グリッド付近に位置する。平面形は長軸668cm、短軸165cmの長方形である。遺構検出面からの深さは26cmを測る。主軸方向が近いこと、掘立柱列S A 446に隣接することなどから、掘立柱建物第2群に伴う可能性が高い。

土坑S K 32・124・357 (第97図) は878・28グリッド付近に位置する。3基の土坑が重複しており、その新旧関係は古い方からS K 357、S K 124、S K 32の順である。平面形は、S K 32が長軸215cm、短軸186cmの長方形、S K 124が長軸不明、短軸205cmの長方形、S K 357が長軸280cm、短軸185cmの楕円形となる。遺構検出面からの深さはS K 32・124と

も30cm、SK 357は12cmを測る。主軸方向と位置から掘立柱建物の第1群に伴う可能性が高いと考えられる。SK 124から、かわらけ2点(338・339)、変器系陶器の播鉢(341)、近世磁器(340)が出土した。

土坑SK 11(第98図)は844・26グリッド付近に位置する。平面形は長軸120cm、短軸106cmの隅丸長方形である。遺構検出面からの深さは24cmを測る。土坑SK 12(第98図)は844・20グリッド付近に位置する。平面形は長軸120cm、短軸110cmの隅丸長方形である。遺構検出面からの深さは48cmを測る。土坑SK 67(第98図)は848・24グリッド付近に位置する。平面形は長軸108cm、短軸88cmの楕円形である。遺構検出面からの深さは18cmを測る。

土坑SK 79(第98図)862・16グリッド付近に位置する。平面形は長軸104cm、短軸96cmの隅丸長方形である。遺構検出面からの深さは32cmを測る。土坑SK 134(第98図)は840・30グリッド付近に位置する。平面形は長軸110cm、短軸95cmの隅丸長方形である。深さは35cmを測る。位置などから掘立柱建物の第6群に伴う可能性がある。土坑SK 135(第98図)は838・32グリッド付近に位置する。平面形は長軸130cm、短軸95cmの長方形である。深さは45cmを測る。SK 134同様、掘立柱建物の第6群に伴う可能性がある。

土坑SK 55(第99図)872・20グリッド付近に位置する。平面形は長軸310cm、短軸88cmの長楕円形である。深さは31cmを測る。主軸方向と位置から掘立柱建物の第6群に伴う可能性が高い。覆土に多量の礫を含む。土坑SK 56(第99図)872・18グリッド付近に位置する。平面形は長軸283cm、短軸144cmの長方形である。深さは32cmを測る。SK 55の東側に並列し、SK 55と同様、掘立柱建物の第6群に伴う可能性が高い。覆土に礫と炭化物を含む。土坑SK 98(第99図)は872・22グリッド付近に位置する。平面形は長軸150cm、短軸83cmの楕円形である。深さは25cmを測る。SK 55の西側に並列する。掘立柱建物の第6群に伴う可能性が高い。覆土に礫を含む。青磁(336)、肥前陶器(337)が出土した。

土坑SK 132(第99図)は878・34グリッド付近に位置する。平面形は長軸234cm、短軸98cmの楕円形である。深さは32cmを測る。主軸方向、位置から掘立柱建物の第1群に伴う可能性が高い。土坑SK 161(第99図)は882・48グリッド付近に位置する。平面形は長軸243cm、短軸160cmの隅丸長方形である。深さは30cmを測る。

2 遺物

時期区分 中世・近世の遺物(第100～102図)は、遺構外または遺構から単独で出土するものが多い。複数出土している遺構(SK 98・124・SP 330)についても遺物に年代幅が認められる。そこで、大まかに13～14世紀、15～16世紀、16世紀末～17世紀初頭、近世以降に分類し、各時期の特徴的な遺物について記述する。13～14世紀と16世紀末～17世紀初頭のものが比較的点数が多い。

13～14世紀(333～335・341・344・351・353～357)

東北地方産と考えられる変器系陶器の甕と播鉢が出土している。胎土が灰色を呈するものが多く、播鉢は須恵器系陶器との判別が難しい。灰色を呈するものの中に胎土が粗雑な一群(333・344)が認められる。

341・353 は胎土が赤褐色を呈するタイプで、表面の質感が類似する。甕（353）の胎土がやや緻密という違いはあるが、同じ産地の可能性がある。353 は外面に須恵器系陶器に多い装飾技法である櫛掻波状文が施される。櫛掻文の瓷器系陶器は秋田県雄勝町館掘城跡に類例がある。（秋田県埋蔵文化財センター 2001）

15～16世紀（336・338・339・343・358・364・366）かわらけ、中国産の磁器が出土している。かわらけ（338・339）は外面に段状の強いロクロ調整痕が残る。明確な共存遺物はないが、器高が高く体部が直線上に開く形状からこの時期と推定した。

364 は外面無文の青花皿、358 は軸が厚く粗雑な作りの白磁皿で、この時期の中でも後出するタイプと考えられる。

16世紀末～17世紀初頭（337・342・345・349・350・361～363）華南地方産と考えられる青花碗、肥前陶器皿が出土している。肥前陶器皿は砂目段階のものが1点（363）のほかは、すべて胎土目段階である。口縁部を打ち欠き、煤が付着するもの（345・350）は灯明皿として使用されたと考えられる。

灯 明 皿

近世以降（340・346～348・359・360・365・367）肥前磁器、大塚相馬、産地不明の陶器が出土している。

磁石・転用磁

上記のほか、磁石（368）、須恵器片（352）が出土している。352 は打ち欠きにより方形に整形され、内面には擦痕が認められることから、転用磁と考えられる。368 は棒状の礫が磁石として用いられたと考えられる。使用痕は6面全てに及び、最終的に直方体へ変形したと考えられる。

転 用 磁

V 理化学的分析

1 小反遺跡における AMS - ^{14}C 年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ

A 概要

小反遺跡竪穴住居 ST5、ST 34、ST 35 出土炭化材について AMS- ^{14}C 年代測定を行った。測定の結果、暦年較正の結果 2900 cal BC ~ 2600 cal BC の範囲にあると考えられる。年代幅の広い較正值であるものの、測定上はほぼ同一の年代を示す試料と考えることができ、土器や住居形態、複式炉の形態からの知見と矛盾しない。

B 測定試料の概要と測定

測定試料は村本周三¹¹が 2004 年 7 月に (財) 山形県郷土文化財センターの水戸部秀樹氏の協力を得て採取した竪穴住居覆土中の炭化材 15 点 (ST 5 は 6 点、ST 34 は 5 点、ST 35 は 4 点) から選択した。出土土器、住居跡の形態、複式炉の形態から、いずれの遺構もほぼ同一時期のものと考えられる。

試料は竪穴住居跡 ST 5、ST 34、ST 35 の炉、柱穴検出時に採取した。採取にあたり、採取地点周辺を洗浄した移植ゴテで 1 cm ほど削り、新鮮な面を露出させた後、試料となる炭化材を探した。採取した試料は純水中で超音波洗浄し、付着した土を除去して、110℃で数日乾燥させ、保存した。

測定試料の前処理²¹は村本が国立歴史民俗博物館年代測定資料実験室の自動 A A A 処理装置 (Sakamoto et al, 2004) を用いて行い、AMS による ^{14}C 測定は (株) パレオ・ラボ社 (機関番号 PLD) に委託した。

C 測定結果

測定結果一覧を表 2 に、RHcal²¹ で計算した暦年較正の結果を図 6 に示した。

ST 5 は S P 230 採取試料 1 点、S P 229 採取試料 2 点の計 3 点測定した。S P 229 採取試料 (No.5、No.6) はやや古い値が得られているが、確率分布から見れば似た分布を示すため、

表 2 測定試料一覧

遺構名	試料番号	出土場所	試料種類	測定機関番号	測定値 (^{14}C BP)	登録試料番号
ST 5	No.2	S P 230 覆土	炭化材	PLD-4807	4155 ± 20	YGTMB-C3
ST 5	No.5	S P 229 覆土	炭化材	PLD-4808	4285 ± 25	YGTMB-C5
ST 5	No.6	S P 229 覆土	炭化材	PLD-4809	4215 ± 20	YGTMB-C6
ST 34	No.1	E L 217 竪穴部覆土	炭化材	PLD-4810	4125 ± 20	YGTMB-C7
ST 34	No.4	竪穴部覆土	炭化材	PLD-4811	4115 ± 20	YGTMB-C10
ST 35	No.1	E L 222 竪穴部覆土	炭化材	PLD-4812	4145 ± 25	YGTMB-C12
ST 35	No.2	E L 283 竪穴部覆土	炭化材	PLD-4813	4210 ± 25	YGTMB-C13
ST 35	No.3	S P 250 覆土	炭化材	PLD-4814	4180 ± 20	YGTMB-C14

ほとんど差がないと考えられる（第6図参照）。

ST 34 は E L 217 の前底部採取試料1点、周溝採取試料1点の計2点測定し、較正年代で 2800 cal BC ~ 2600 cal BC の値が得られている。

ST 35 は E L 222 前底部覆土1点、E L 283 前底部覆土1点、S P 250 覆土1点を測定した。発掘調査により前後関係が明らかな E L 222 と E L 283 の覆土採取試料では、発掘調査と同様に測定値が前後している。しかし、1事例のみで使用時期について推定することが危険である上に、較正年代では大きな差は見いだせないため、時期差があるとはいえない。

D ま と め

ST 5、ST 34、ST 35 の測定結果について報告した。土器、住居の形態、炉の形態からはいずれの遺構もほぼ同一時期と考えられ、年代測定結果もその知見と矛盾しない。ただし、大半の測定値が較正曲線のなだらかな場所に位置しており、年代幅の狭い較正值が困難いため、測定値を以って、より詳細な前後関係を議論することは困難である。

本報告は西本豊弘⁴⁾、小林謙一⁴⁾、坂本登⁴⁾の指導の下、村本周三が執筆した。測定は、平成17年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-」（研究代表 西本豊弘）、国立歴史民俗博物館平成17年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（研究代表者 今村峯雄）の成果の一部である。また、以下の方々からご指導、ご協力を得た。末筆ならご芳名を記し感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

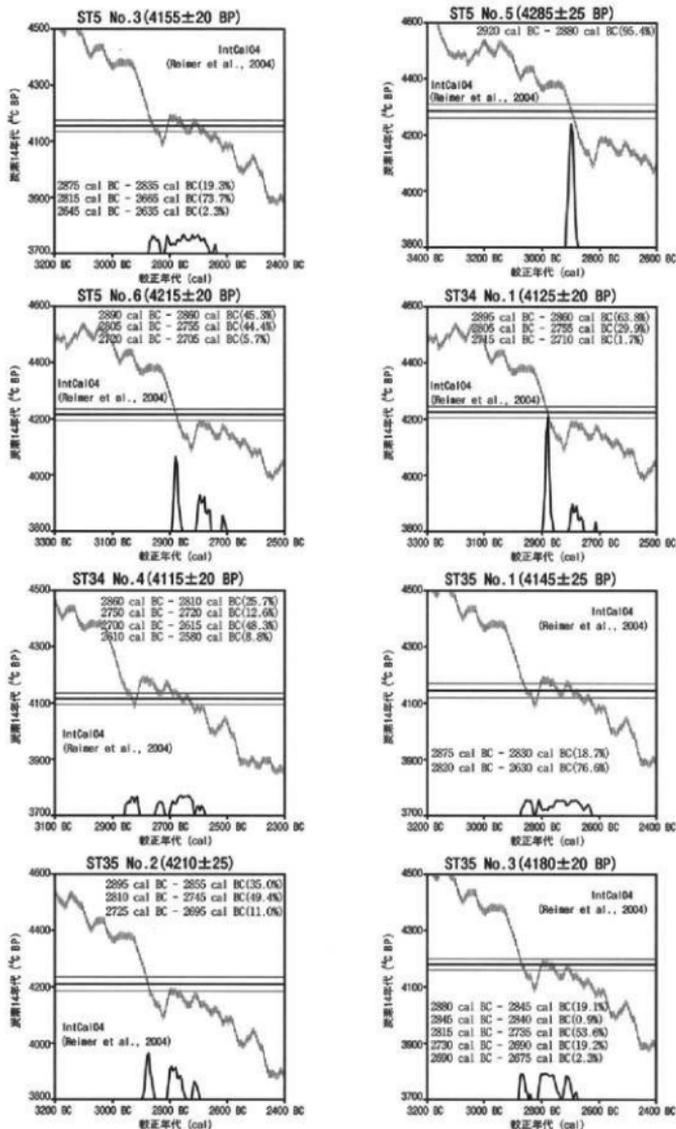
鈴木健太郎 渋谷純子 水戸部秀樹（財）山形県埋蔵文化財センター

注

- 1) 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士課程
- 2) 前処理は、80℃に維持して1規定塩酸で2回、1規定水酸化ナトリウム溶液で5回洗浄した後、1規定塩酸で中和、純水で洗浄した。その後の試料処理と測定、測定値の補正については今村龍（2003）、村本龍（2006）に従った。
- 3) 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループでは、IntCal04の較正曲線をもとに、OxCal（Ramsey 2001）に準じた計算法で較正を行う暦年較正プログラム RHeal を用いて暦年較正を行っている。
- 4) 国立歴史民俗博物館研究部。

参考文献

- 今村峯雄・小林謙一・坂本登・西本豊弘（2003）「AMS¹⁴C年代測定と土器編年との対比による高精度編年の研究」【考古学と自然科学】45 pp.1-18 文化財科学会
- 村本周三・坂本登・松崎浩之（2005）「東京都神明上遺跡における¹⁴C年代測定」【神明上遺跡】pp.223-224 アルケリーサーチ
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon calibration program OxCal. Proceedings of the 17th International 14C Conference, Radiocarbon, 43, (2A), pp.355-363
- M.Sakamoto, et al. (2004) An automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 298-301, pp.223-224
- P.J.Reimer et al. (2004) IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP. Radiocarbon, 46 (3), pp. 1029-1058



第 6 図 暦年校正の結果

VI 総括

調査区の百領を南北に走る県道以西まで遺跡は広がっているが、その中心部分はほぼすべて調査された。遺跡が立地する台地は、調査区外を北西に向かい若干延びている。検出された縄文時代の竪穴住居は、いずれもこの台地の縁辺部に立地し、その配置は弧状をなしている。

弧状の配置

これら 14 棟の住居はいずれも縄文時代中期末葉に位置付けられる。ほかに中期中葉の土器、後期初頭・中葉の土器がわずかに出土した。また、後期初頭では貯蔵穴などの土坑が幾つか検出されたが、本章では中期中葉の集落を中心に総括してみたい。

竪穴住居内に構築された複式炉は S T 5 を除き、いずれも類似した構造を有しており、属する時期も近いと考えられる。複式炉に埋設された土器には、大木 9 式新段階と大木 10 式古段階のものがある。両者の違いはわずかであり、大木 9 式と 10 式の過渡期の土器群としてとらえられる。そのため、同じ複式炉に埋設された土器でも分類が異なる場面が幾度も見られた。

過渡期
分類が異なる

複式炉に埋設された土器は、通常の使用（煮沸など）を経てから再利用されたものが多い。また、複式炉が作り替えられたり、改修を受けた際に土器が入れ替えられることもあった。逆に複式炉を作り替える際に、再び同じ土器が埋設されることもある。よって、安易に複式炉の埋設土器のみで竪穴住居の時期を決定することはできないことが分かった。住居の時期が、複式炉に埋設された土器より新しくなることも考慮に入れなければならない。

竪穴住居自体も、床面積の拡張や柱穴の作り替えなどの改修を受けるものや、受けないものがある。各住居の存続期間も当然まちまちなのであろう。また、各住居同士は一部を除いて、重複することがほとんどなかった。重複して検出されたのは S T 4・280・356 の 3 基のみであり、S T 356、S T 4、S T 280 の順に構築されたことが確認されている。ほかの住居はい

重複した住居

ずれも単独で検出されている。狭い台地上の縁辺部のみを選択して住居を構築しながらも、重複することが少ないということは、新たに住居を構築する際には、その時点で現存している住居は当然であるが、すでに廃屋となった住居の位置さえも避けていると推察される。住居は自然堆積により埋没している場合がほとんどであるため、廃絶された後も一定期間は開口していたことになる。同じ場所に住居を構築するより、その場所を避けて構築する方法が選択されたと考えられる。その結果として、住居の配置が弧状になったと言える。また、これらの住居群の時間差は非常に小さいことは出土土器の面からも明らかである。よって、本集落は短期間の内に、しかも間断なく営まれたと推察される。

先に述べたとおり短期間の集落であるが、複式炉の埋設土器を用いてその変遷を追うと次のようになる。S T 3 は拡張前後で埋設土器の時期が分かれるため二つに分けた。古層となる大木 9 式土器のみが埋設された複式炉を備えた住居は、S T 2・拡張前の S T 3・S T 4・S T 5・S T 9・S T 28・S T 33・S T 50・S T 338・S T 356、大木 10 式土器が埋設土器の中に含まれる複式炉を備えた住居は、S T 1・拡張後の S T 3・S T 34・S T 35・S T 280 となる。前者は一定でないが、後者の住居内における複式炉の位置は、南東側に固定される。ただし、S T 35 は三つある複式炉の内最古である E L 283 を基準とした。これも住居が構築される際

住居の変遷

南東側に複式炉

方形の平面形 西側に複式炉の一つの傾向と書えよう。また、前者の住居群にはS T 4・5・9・28・338のように方形に近い平面形を有し複式炉を住居の西側に配置するものが、調査区の中央付近に集中するという傾向も読み取れる。原則として前者から後者へと住居は変遷したと考えられるが、結果的なものであり、実際はある程度混在していたと考えられる。埋設された土器群の時間差が非常に小さいため型式分類が時間差を表さない場合が想定されること、埋設された土器が常に住居を使用した時期を示すものとは限らないこと、住居自体が幾度も改修を受ける場合とそうでない場合がありその存続期間に大きな差が想定されることなどの理由による。

被熱の痕跡 いずれの複式炉の埋設土器にも、被熱の痕跡は明瞭に確認された。土器埋設部と石組部に埋設土器は存在するが、両者ともである。一方石組部では被熱の痕跡よりも煤の付着が顕著であった。埋設土器の場合は、土器を越え地山まで赤化したものも多いが、石組部では石同士の間隙の土層にすら被熱した痕跡が見られなかった。石組部の埋設土器内から排出した炭や灰などを石組部の底部へ掻き出したために煤の付着のみが残されたと推察される。そのために埋設土器は打ち欠きなどの調整を受け、石組部と高さがそろえられたと考えられる。また、石組部の埋設土器が石組部の底部側へ向かい傾斜するものが多いことや、埋設土器と石組部の底部との間に使われる石が、寝かせた状態の大型の板状石であることなどを合理的に解釈すれば、同様の推察が可能であろう。

独立棟持柱 独立棟持柱を持つ独立柱建物で確認された遺跡は県内で3例目となる。検出した独立棟持柱を持つ独立柱建物はS B 349のみである。柱穴から出土した土器166によれば、大木9式新段階に属することとなるが、小破片が1点のみであり確定しがたい。しかし本遺跡内で集落が営まれた期間内以外で構築されたとは考えられないため、大木9式新段階から10式古段階の遺構として位置付けたい。県内では現時点で最古の検出例となる。

県内最古 S B 349は調査区の西端に位置しており、検出された全ての竪穴住居から一定の距離を保っている。またその棟の指す方向に近い中軸を持つ住居も大木9・10式を問わず数見られる。特に大木10式古段階に多い。この方角の先には小反遺跡から見わたせる山々の中でも最も高く、シンボリックな山である鳥海山がそびえている。S B 349の上部構造やその性格は、やはり確定し得ないが、当時の集落において重要な建物であったことはいかばかりいわれる。

ほかに検出された住居の数、直径9mを越える大型の竪穴住居S T 5の存在なども含め、小反遺跡の縄文時代中期末葉の集落は、当地域における拠点的な地位を占めるものであったと考えられる。ただしその存続期間は短く、大木9式新段階から開始され、大木10式古段階の内に、終了している。

出土した土器は大木9式と10式の過渡期的のものであり、その変遷を如実に物語るものが数多く出土している。大木9式新段階に位置づけた土器には大木10式古段階の萌芽が、逆に大木10式古段階に位置づけた土器には大木9式新段階の名残がある。

その変遷は第5図に示した。大木9式新段階が第Ⅲ群、大木10式古段階が第Ⅳ群、またそれぞれを系統ごとにa・b・c類に細分した。第Ⅲ群a・b類の文様は楕円形区画文・円状区画文が主となり、それぞれ縦方向に配置される。原則的に各文様単位は縦方向に展開し、横方向には展開しない。これらは典型的な大木9式新段階の特徴であるものの、その一部に10式への胎動が見られる。前述の定型化した第Ⅲ群の文様構成は徐々に解体され新たな文様を醸成

縦方向に展開

するようになる。第Ⅲ群 a 類の土器 62 には依然として楕円形区画文と㊦状区画文が残るが、これらを縫うように施される沈線による波状文が横方向に展開している。同群の土器 133・123 に見られる楕円形区画文と㊦状区画文を内包する㊦状沈線文から変化したものと考えられる。横方向に展開される文様は、大木 10 式の特徴である。ほかにも第 40 図 2、第 42 図 11 に見られる不定形区画文なども第Ⅲ群に含めたが、これらには形状的な制約を解かれた楕円形区画文と㊦状区画文が、新たな文様を模索する様子が看取できる。隣接する各区画文同士が結合したり、区画文の形状を自由に变化させている。

横方向に展開

第Ⅳ群に至り、a 類の 109 では大木 10 式古段階に特徴的な S 字状区画文や、横方向に展開する波状区画文が施される。しかし同時に大木 9 式以降はあまり姿を見せなくなる双頭渦巻文も残っており、やはり過渡的な様相を残す。同じく同群の 118・98 の胴部下半に施された U 字状区画文も、第Ⅲ群の区画文から変化したものと考えられる。つまり、大木 10 式に見られる C・e・S・U 字状などの多様な区画文は、大木 9 式新段階において解体された楕円形区画文と㊦状区画文などから変化して生み出されたものと言えよう。その際文様の施文方向が、縦から横方向に変化することが可能になったことが大きな影響を及ぼしたと考えられる。

縦から横へ

第Ⅲ群 a 類の 62 と第Ⅳ群 a 類の 109 の胴部下半には文様が施されない。62 は縄文のみ、109 は無文である。文様が横方向に展開することにより生じた空白部分である。後続の大木 10 式では顕著に見られる特徴である。さらに胴部上半と下半を画する沈線などが施されることとなるが、第Ⅳ群の土器には未だ発現していない。第Ⅳ群 b・c 類の 98・1・4 は器体中央に大きいくびれ部を有し、上下に文様帯が分割されている。一方第Ⅲ群の縦方向に文様が展開する土器 155・123 では器形の起伏が乏しい。大木 10 式に限ったことではないが、器形と文様帯構成は密接に関連していると考えられる。62 と 109 の器形も、胴部上半と下半の境界がわずかに屈曲し始めている。やはり後続する大木 10 式ではさらに明瞭となり、文様を上下に分割し得るが、同様に第Ⅳ群では未発達な部分である。定型化する大木 10 式への途上の様相を示していると考えられる。

空白部分

器形と文様帯

第Ⅲ群 c 類の 119 は隆線により、80 は半内彫的手法により文様が施される。119 はくびれ部が未発達であるが、第Ⅳ群 c 類の 1・4 に至ると大きいくびれ部を有するようになり、文様をも上下に分割している。第Ⅲ群 c 類の文様は縦にも横にも展開せず、完結した単位文様が上下 2 段に分かれて横方向に配列されるにとどまる。第Ⅳ群 c 類になると文様は区画文により施され、a・b 類と共通するものが多くなる。また、119 の隆線による同心円文や双頭渦巻文は沈線と区画文に置き換えられ、第Ⅳ群 b 類の 98 などに施されることとなる。よって第Ⅲ群 c 類から第Ⅳ群 c 類への変化は、文様施文方法の交代、くびれ部の明確化、a・b 類との文様の交流などによって特徴付けられる。

文様の置換

本遺跡で出土した大木 9 式から 10 式の土器はその過渡的状況を示し、さらに変化の道程上であるため錯綜した状況を示す。集落自体が非常に短期間に営まれているため土器の時間幅も小さい。そのため良好な出土状況が存在したとしても、土器の新旧関係を推し量るには限界がある。複式炉内に同時に埋設されていたり、新旧の複式炉が重複していたとしてもその出土状況をそのまま土器の新旧関係に対応させるのではなく、なお型式学的な検討を加える必要があると考えられる。

縦長剥片 石器の出土点数は少ないが、中でも特徴的なのが掻器（第72図）である。いずれも縦長剥片を利用し、末端部の厚みを最大限に生かした技法により製作されている。最厚部の位置により形態は変化するが、一連の製作技法は全てに共通するものであった。

石鏝には定型的なものがなく、剥片の形状を大きく変化させることなく末端部を錐部とするもののみである。石核や接合資料には、縦長剥片を主に生産するものと矩形の剥片を求心的な剥片剥離により生産するものが見られた。いずれにも打面調整と打面再生、打面転移の痕跡が認められた。

本遺跡からは縄文時代中期末葉の遺構以外に、後期初頭に属する貯蔵穴などの遺構が調査区南端部に集中して検出されている。住居群が廃絶されたのは大木10式古段階の中でも最も古い時期であり、その後の大木10式期の間は本遺跡では空白期間となる。その空白期間を経て、貯蔵穴を主とする利用が行われたことになる。

縄文時代のほかに中世あるいは近世に属する掘立柱建物・掘立柱列・土坑が数多く検出されている。遺物は13世紀から近世以降までのものが含まれており、その間断続的に集落が営まれたものと考えられる。現在も調査区に隣接して集落が存在している。小反遺跡が水田化される以前から継続されている集落なのであろう。

引用文献

- 秋田県埋蔵文化財センター 2001 『館塚城跡：県省は場整備事業（寺沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第321集
- 大友義助 2002 『縄文人の祭り 庭月観音堂遺跡の環状列石』『図説 最上の歴史』郷土出版社
- 黒坂雅人ほか 2001 『中台4・5遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 黒坂雅人 2003 『釜淵C遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 鮎川村教育委員会 1989 『鮎川村庭月観音堂遺跡確認調査報告書』(鮎川村文化財調査報告書)
- 佐竹桂一ほか 2002 『中川原C遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第98集) 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 渋谷孝雄ほか 2004 『分布調査報告書(30)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第204集) 山形県教育委員会
- 鈴木道之助 1995 『石鏝』『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣
- 高田和徳 2005 『縄文のイエとムラの風景 御所野遺跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」015) 新泉社
- 長沢正機ほか 1986 『釜淵C遺跡発掘調査報告書』(山形県最上郡真室川町文化財調査報告書第1集) 真室川町教育委員会
- 長沢正機 1981 『本町遺跡発掘調査報告書』金山町教育委員会
- 長沢正機 2002 『縄文時代晩期のおびただしい遺物群』『図説 最上の歴史』郷土出版社
- 矢高國雄・前山精明 1995 『石鏝』『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣

表3 縄文土器

※器高の列の括弧で括った値は残存高を、口径・底径の列では図上復元による推計値を表す。単位はミリメートル。

番号	分類	器形	出土遺構	層位	グリッド	地文	器高	口径	底径	備考
1	IV c	深鉢	E L 87	複式伊理段	822-22	2段R L	(214)	-	-	S T 1の複式伊, 最大径430mm
2	III a	深鉢	E L 87	複式伊理段	822-22	2段L R	(300)	300	-	S T 1の複式伊
3	III	深鉢	E L 87	複式伊理段	822-22	2段L R	(164)	-	-	S T 1の複式伊, 2の内部より出土
4	IV c	深鉢	S D 126	覆土	822-26	-	(167)	240	-	S T 1の崩壊, 黒色処理
5	III c	深鉢	S T 1	覆土	824-22	-	(59)	-	-	-
6	III	深鉢	S T 1	覆土	822-22	2段L R	(38)	-	-	-
7	III	深鉢	S T 1	覆土	824-22	1段L	(42)	-	55	-
8	IV a	深鉢	S T 1	覆土	824-24	2段R L	(96)	-	-	-
9	V b	深鉢	S T 1	覆土	824-26	2段L R	(171)	-	-	-
10	III a	深鉢	E L 92	複式伊理段	830-24	3段R L R	(337)	(335)	-	S T 2の複式伊
11	III a	深鉢	E L 92	複式伊理段	830-24	2段L R	312	(252)	78	S T 2の複式伊, 10の下位に埋設
12	III a	深鉢	E L 92	複式伊理段	830-24	2段R L	(132)	328	-	S T 2の複式伊, 逆位状態で埋設
13	IV	浅鉢	E L 92	覆土	832-22	2段L R	76	184	50	S T 2の複式伊
14	III a	深鉢	E L 92	覆土	830-24	2段L R	(225)	316	-	S T 2の複式伊
15	III a	深鉢	E L 352	覆土	832-24	2段R L	(122)	-	-	S T 2の複式伊
16	II	深鉢	S T 2	覆土	830-24	2段R L	(48)	-	-	黒色処理
17	III a	深鉢	S T 2	覆土	830-26	2段L R	(163)	(293)	-	-
18	III a	深鉢	S T 2	覆土	832-24	2段L R	(127)	282	-	-
19	III b	深鉢	S T 2	覆土	830-28	2段L R	(67)	-	-	-
20	III	深鉢	S T 2	覆土	832-26	-	(51)	-	-	-
21	III	深鉢	S T 2	覆土	830-24	-	(41)	-	-	赤色顔料を塗布
22	IV c	深鉢	S T 2	覆土	830-26	2段L R	(51)	-	-	23と同一個体, 黒色処理
23	IV c	深鉢	S T 2	覆土	830-26	2段L R	(25)	-	-	36 22と同一個体, 黒色処理
24	IV c	深鉢	S T 2	覆土	830-24	2段R L	(92)	(232)	-	-
25	IV	浅鉢	S T 2	覆土	832-26	2段L R	(134)	(190)	-	黒色処理
26	III	円盤状土製品	S T 2	覆土	830-26	2段L R	-	-	-	縦48mm, 横45mm, 打ち欠き成形
27	V	脚付方形皿	S T 2	覆土	832-26	-	38	-	-	長方形の皿形土器に4本の脚が付く
28	IV	浅鉢	E L 154	複式伊理段	840-22	2段R L	(167)	-	96	S T 3の複式伊, 最大径300mm
29	III	深鉢	E L 154	複式伊理段	840-22	3段R L R	(280)	-	96	S T 3の複式伊
30	III b	深鉢	E L 154	覆土	840-22	2段L R	(71)	-	-	S T 3の複式伊, 31と同一個体
31	III b	深鉢	E L 154	覆土	840-22	2段L R	(56)	-	-	S T 3の複式伊, 30と同一個体
32	III	浅鉢	E L 154	覆土	840-22	-	(27)	-	62	S T 3の複式伊
33	III b	深鉢	E L 324	覆土	840-22	2段L R	(99)	-	-	S T 3の複式伊
34	II	鉢	S T 3	覆土	840-22	-	(28)	-	-	-
35	III	深鉢	E L 166	複式伊理段	866-26	2段R L	(315)	-	104	S T 4の複式伊, 補修孔あり
36	III	深鉢	E L 308	覆土	866-28	2段L R	(40)	-	(41)	S T 5の複式伊, 赤色顔料を塗布
37	III	円盤状土製品	E L 308	覆土	866-28	2段R L	-	-	-	S T 5の複式伊, 縦43mm, 横48mm, 打ち欠き成形
38	III c	深鉢	S P 228	覆土	868-30	2段R L	(70)	-	-	S T 5の柱穴
39	V	壺	S P 232	覆土	864-26	-	(56)	-	50	S T 5の柱穴
40	III c	深鉢	S D 289	覆土	862-32	2段R L	(57)	-	-	S D 5の崩壊
41	V c	深鉢	E L 308	複式伊理段	866-30	2段L R	(416)	-	106	S T 5の複式伊
42	V c	深鉢	E L 308	複式伊理段	866-30	2段R L	(472)	-	100	S T 5の複式伊
43	II	深鉢	S T 5	覆土	870-28	-	(78)	-	-	-
44	II	深鉢	S T 5	覆土	870-28	2段R L	(62)	-	-	-
45	III a	深鉢	S T 5	覆土	866-32	2段L R	(164)	-	-	46・47と同一個体
46	III a	深鉢	S T 5	覆土	864-32	2段L R	(132)	-	-	45・47と同一個体
47	III a	深鉢	S T 5	覆土	864-30	2段R L	(208)	-	-	45・46と同一個体
48	III a	深鉢	S T 5	覆土	864-30	2段L R	(182)	-	-	-
49	III b	深鉢	S T 5	覆土	866-32	2段L R	(117)	(188)	-	-
50	III b	深鉢	S T 5	覆土	864-30	2段L R	(79)	-	-	-
51	III	深鉢	S T 5	覆土	866-32	2段L R	(70)	-	-	赤色顔料を塗布
52	III	深鉢	S T 5	覆土	864-30	2段L R	(203)	-	-	-
53	III	深鉢	S T 5	覆土	864-32	2段L R	(85)	-	50	-
54	III	深鉢	S T 5	覆土	866-26	2段L R	(68)	-	-	-

遺物調査表

番号	分類	細分	形状	出土遺構	層位	グリッド	地文	高さ	口径	底径	備考
55	Ⅴ	d	深鉢	S T 5	覆土	866-30	1段L	140	212	87	
56	Ⅴ		深鉢	S T 5	覆土	866-28	-	(21)	-	92	底部に副穴あり
57	Ⅴ		深鉢	S T 5	覆土	864-30	2段L R	(90)	-	77	
58	Ⅲ		深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段L R	(148)	-	-	S T 9の複式伊
59	Ⅲ		深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段L R	(151)	-	-	S T 9の複式伊
60	Ⅲ		深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段R L	(120)	-	-	S T 9の複式伊
61	Ⅲ		深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段R L	(140)	-	-	S T 9の複式伊
62	Ⅲ	a	深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段L R	288	269	73	S T 9の複式伊, 内面に多量の煤が付着
63	Ⅲ		深鉢	E L 136	複式伊埋設	838-28	2段R L	(228)	-	-	S T 9の複式伊, 62の内部より出土
64	Ⅱ		鉢	S T 9	覆土	838-28	2段L R	(37)	-	-	
65	Ⅳ	b	深鉢	S T 9	覆土	836-28	2段L R	(109)	-	-	
66	Ⅲ		深鉢	E L 167	複式伊埋設	860-16	-	(103)	-	90	S T 28の複式伊
67	Ⅲ	c	深鉢	E L 167	複式伊埋設	860-16	2段R L	(290)	-	-	S T 28の複式伊
68	Ⅲ	a	深鉢	E L 167	覆土	860-18	2段R L	(156)	-	-	S T 28の複式伊
69	Ⅲ		深鉢	E L 167	覆土	860-18	2段L R	(90)	-	-	S T 28の複式伊
70	Ⅲ		深鉢	E L 167	覆土	860-18	2段L R	(155)	-	-	S T 28の複式伊
71	Ⅲ		深鉢	E L 167	覆土	860-18	2段L R	(99)	-	-	S T 28の複式伊
72	Ⅲ		深鉢	E L 167	覆土	860-16	-	(32)	-	47	S T 28の複式伊
73	Ⅲ	e	深鉢	E L 167	覆土	860-16	2段L R	(107)	(162)	-	S T 28の複式伊
74	Ⅲ	a	深鉢	S T 28	覆土	860-16	2段R L	(206)	-	-	補輪あり
75	Ⅲ	b	深鉢	S T 28	覆土	860-18	2段L R	(71)	-	-	
76	Ⅲ		深鉢	S T 28	覆土	860-18	2段R L	(63)	-	-	
77	Ⅲ	a	深鉢	S T 28	覆土	860-16	2段L R	(128)	-	-	
78	Ⅲ	a	深鉢	S T 28	覆土	862-16	2段L R	(140)	-	-	
79	Ⅲ	e	深鉢	S T 28	覆土	860-18	2段L R	146	152	52	
80	Ⅲ	c	深鉢	E L 218	複式伊埋設	888-34	2段L R	(85)	-	-	S T 33の複式伊, 81と同一個体
81	Ⅲ	c	深鉢	E L 218	複式伊埋設	888-34	2段L R	(140)	-	-	S T 33の複式伊, 80と同一個体
82	Ⅲ		深鉢	E L 218	複式伊埋設	888-34	2段L R	(185)	-	-	S T 33の複式伊
83	Ⅲ	a	深鉢	E L 218	複式伊埋設	888-34	2段L R	(234)	304	-	S T 33の複式伊, 内面に多量の煤が付着
84	Ⅳ	a	深鉢	E L 218	覆土	888-34	2段R L	(61)	-	-	S T 33の複式伊
85	Ⅴ	b	深鉢	E L 218	覆土	888-34	2段R L	(225)	-	-	S T 33の複式伊
86	Ⅰ		深鉢	S T 33	覆土	888-36	2段L R	(59)	-	-	
87	Ⅲ	a	深鉢	S T 33	覆土	888-34	2段L R	(100)	-	-	
88	Ⅲ	a	深鉢	S T 33	覆土	888-34	2段L R	(90)	-	-	
89	Ⅲ	b	深鉢	S T 33	覆土	888-34	2段R L	(63)	(284)	-	
90	Ⅲ		深鉢	S T 33	覆土	888-36	2段R L	(113)	-	-	内面に赤色顔料付着
91	Ⅳ	c	深鉢	S T 33	覆土	888-34	3段RLR	(55)	(240)	-	
92	Ⅳ		鉢	S T 33	覆土	888-34	2段R L	(45)	-	-	
93	Ⅳ		深鉢	S T 33	覆土	888-34	2段L R	(25)	-	58	
94	Ⅳ		住口土器	S T 33	覆土	888-34	2段R L	(43)	-	-	
95	Ⅴ		浴台	S T 33	覆土	888-36	2段R L	(91)	-	-	復元された台径 188mm
96	Ⅴ	a	深鉢	S T 33	覆土	886-34	2段L R	(102)	-	-	
97	Ⅴ		深鉢	S T 33	覆土	888-34	2段R L	(104)	-	-	
98	Ⅳ	b	深鉢	E L 217	複式伊埋設	888-26	2段L R	(242)	(304)	-	S T 34の複式伊
99	Ⅲ		深鉢	E L 217	複式伊埋設	888-26	2段L R	(151)	-	71	S T 34の複式伊
100	Ⅳ		深鉢	E L 217	複式伊埋設	888-26	2段L R	(154)	-	-	S T 34の複式伊
101	Ⅳ		深鉢	E L 217	複式伊埋設	888-26	2段L R	(109)	-	-	S T 34の複式伊, 99の下位に埋設
102	Ⅳ	c	深鉢	S T 34	覆土	888-26	2段R L	(87)	(294)	-	
103	Ⅲ		円錐状土製品	S T 34	覆土	890-26	2段L R	-	-	-	縦37mm, 横32mm, 打ち欠き成形
104	Ⅳ		深鉢	E L 283	覆土	896-42	2段R L	(88)	-	-	S T 35の複式伊
105	Ⅳ	c	深鉢	E L 283	覆土	896-42	2段R L	(97)	-	-	S T 35の複式伊
106	Ⅴ		深鉢	E L 263	複式伊埋設	894-42	2段L R	(240)	-	-	S T 35の複式伊
107	Ⅴ	b	深鉢	E L 263	複式伊埋設	894-42	2段L R	(506)	288	-	S T 35の複式伊
108	Ⅴ		深鉢	E L 263	覆土	894-42	2段L R	(95)	-	-	S T 35の複式伊
109	Ⅳ	a	深鉢	E L 222	複式伊埋設	894-40	2段R L	343	360	72	S T 35の複式伊, 内面に多量の煤が付着
110	Ⅲ		深鉢	E L 222	覆土	894-40	2段R L	(45)	-	-	S T 35の複式伊

番号	分類	細分	器形	出土遺構	層位	グリッド	地文	器高	口径	底径	備考
111	IV	c	深鉢	E L 222	覆土	804・40	-	(29)	-	-	S T 35の複式伊, 小型土器
112	III		円盤状土製品	E L 222	覆土	804・40	2段R L	-	-	-	S T 35の複式伊, 縦38mm, 横48mm, 打ち欠き成形
113	III	a	深鉢	S T 35	覆土	802・40	2段L R	(33)	-	-	-
114	III		注口土器	S T 35	覆土	802・40	2段R L	(27)	-	-	-
115	V		深鉢	S T 35	覆土	806・44	-	(37)	-	96	-
116	V		深鉢	S T 35	覆土	806・44	R・右巻き	(76)	-	-	-
117	V		深鉢	S T 35	覆土	804・42	L・左巻き	(92)	-	-	-
118	IV	a	深鉢	E L 222	複式伊埋設	804・40	2段R L	(608)	-	-	110 S T 35の複式伊, 補修孔あり
119	III	c	深鉢	E L 74	複式伊埋設	824・48	2段L R	(229)	367	-	S T 50の複式伊
120	III	a	深鉢	E L 74	複式伊埋設	824・48	2段R L	(311)	-	-	S T 50の複式伊
121	III	b	深鉢	E L 74	覆土	824・48	2段L R	(122)	-	-	S T 50の複式伊
122	III	b	深鉢	S P 91	覆土	824・50	2段R L	(132)	-	-	S T 50の柱穴
123	III	b	深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	(231)	(320)	-	-
124	III	b	深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(109)	-	-	-
125	III	b	深鉢	S T 50	覆土	822・52	1段L	(65)	-	-	-
126	III	b	深鉢	S T 50	覆土	822・48	2段R L	(63)	-	-	-
127	III	b	深鉢	S T 50	覆土	824・48	1段L	(171)	-	72	-
128	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	(63)	-	-	-
129	III		深鉢	S T 50	覆土	826・48	2段R L	(140)	-	-	-
130	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	(179)	-	-	-
131	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(80)	-	-	-
132	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(54)	-	48	-
133	III		深鉢	S T 50	覆土	824・50	2段R L	(102)	-	-	赤色顔料を塗布
134	III	c	深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	(66)	-	-	-
135	IV	b	深鉢	S T 50	覆土	826・48	2段R L	(70)	-	-	-
136	IV		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	(77)	-	54	-
137	IV		浅鉢	S T 50	覆土	826・50	2段R L	(98)	145	-	-
138	III	a	深鉢	S T 50	覆土	824・50	2段R L	(209)	(316)	-	-
139	III	b	深鉢	S T 50	覆土	822・52	2段L R	(197)	(310)	-	-
140	III	a	深鉢	S T 50	覆土	824・50	2段L R	(237)	-	-	-
141	III	e	深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(114)	118	-	-
142	III		深鉢	S T 50	覆土	822・48	1段L	(81)	-	-	-
143	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(71)	-	(68)	-
144	III		深鉢	S T 50	覆土	824・48	2段R L	(52)	-	71	-
145	III		脚付鉢	S T 50	覆土	824・48	2段L R	80	70	40	-
146	III		円盤状土製品	S T 50	覆土	826・48	不明	-	-	-	縦38mm, 横38mm, 打ち欠き成形
147	III		円盤状土製品	S T 50	覆土	824・48	2段L R	-	-	-	縦41mm, 横42mm, 打ち欠き成形
148	IV	c	深鉢	E L 266	複式伊埋設	858・22	2段L R	(201)	280	-	S T 280の複式伊
149	IV		深鉢	E L 266	複式伊埋設	858・22	2段L R	(60)	-	64	S T 280の複式伊
150	III		浅鉢	E L 266	覆土	858・22	2段L R	(45)	-	-	S T 280の複式伊, 赤色顔料を塗布
151	IV	a	深鉢	E L 266	覆土	858・22	2段L R	(121)	-	-	S T 280の複式伊
152	III	b	深鉢	E L 46	複式伊埋設	852・18	2段R L	(318)	316	-	S T 338の複式伊
153	III		深鉢	E L 46	複式伊埋設	852・18	2段L R	(94)	-	-	S T 338の複式伊
154	III		深鉢	E L 46	複式伊埋設	852・18	2段L R	(95)	-	-	S T 338の複式伊
155	III	a	深鉢	E L 247	複式伊埋設	856・26	2段L R	223	(206)	66	S T 356の複式伊
156	III	c	深鉢	E L 247	複式伊埋設	856・26	2段L R	(40)	-	-	S T 356の複式伊, 157と同一個体, 赤色顔料を塗布
157	III	c	深鉢	E L 247	複式伊埋設	856・26	2段R L	(58)	-	-	S T 356の複式伊, 156と同一個体, 赤色顔料を塗布
158	III	b	深鉢	S P 75	覆土	858・30	2段L R	(90)	-	-	S T 356の柱穴
159	V		深鉢	S P 75	覆土	858・30	2段L R	(139)	-	78	S T 356の柱穴
160	III		円盤状土製品	S P 76	覆土	862・22	2段R L	-	-	-	S T 356の柱穴, 縦27mm, 横67mm, 打ち欠き成形
161	III		円盤状土製品	S P 241	覆土	856・22	-	-	-	-	S T 356の柱穴, 縦38mm, 横49mm, 打ち欠き成形
162	III		深鉢	E L 73	複式伊埋設	846・12	2段R L	(97)	-	148	複式伊, 底部に割代痕あり
163	III		深鉢	E L 115	複式伊埋設	878・26	2段L R	(161)	-	88	複式伊
164	III	a	深鉢	E L 115	覆土	878・26	2段R L	(62)	-	-	複式伊
165	III		深鉢	E L 115	覆土	878・26	2段L R	(34)	-	-	複式伊
166	III		深鉢	S P 331	覆土	852・62	2段R L	(20)	-	-	掘立柱建物S B 349の柱穴

遺物観察表

番号	分類	細分	形状	出土遺構	層位	グリッド	地文	跡高	口径	底径	備考
167	V		深鉢	E U 63	埋設	852-22	-	(60)	-	(90)	
168	Ⅳ	c	深鉢	E U 268	埋設	858-24	2段LR	(438)	314	-	- 逆位で出土
169	V		深鉢	S X 284	覆土	842-58	-	(43)	-	-	
170	Ⅲ	b	深鉢	S K 311	覆土	904-42	2段LR	(60)	-	-	
171	V		深鉢	S K 36	覆土	892-44	R・右巻き	(63)	-	-	57 底部に木炭痕あり
172	V		深鉢	S K 44	覆土	904-40	2段LR	(67)	-	-	173と同一個体
173	V		深鉢	S K 44	覆土	904-40	2段LR	(102)	-	-	172と同一個体
174	V		深鉢	S K 44	覆土	904-40	2段LR	(70)	-	-	
175	V		深鉢	S K 44	覆土	904-40	2段LR	(215)	-	-	176と同一個体
176	V		深鉢	S K 44	覆土	904-40	2段LR	(95)	-	-	106 176と同一個体。底部内面に赤色顔料付着
177	V		深鉢	S K 248	覆土	892-42	2段RL	(50)	-	-	
178	V		深鉢	S K 248	覆土	892-42	L・左巻き	(46)	-	-	
179	V		深鉢	S K 37	覆土	904-38	R・右巻き	(92)	-	-	
180	V		深鉢	S K 37	覆土	904-38	-	(54)	-	-	
181	V		深鉢	S K 37	覆土	904-38	R・右巻き	(88)	(106)	-	
182	V		深鉢	S K 282	覆土	906-36	R・右巻き	(219)	-	-	
183	V		深鉢	S K 282	覆土	906-36	不明	(20)	-	(116)	底部に割代痕あり
184	V		深鉢	S K 282	覆土	906-36	R・右巻き	(69)	-	-	
185	V		深鉢	S K 282	覆土	906-36	R・右巻き	(64)	-	-	186と同一個体
186	V		深鉢	S K 282	覆土	906-36	R・右巻き	(58)	-	-	185と同一個体
187	Ⅲ		深鉢	S P 329	覆土	892-38	-	(64)	-	75	
188	Ⅲ	c	深鉢	S C 8	覆土	814-26	-	(48)	-	-	
189	Ⅲ		円盤状土製品	S D 353	覆土	-	2段RL	-	-	-	縦 38mm、横 39mm、打ち欠き成形
190	Ⅲ		円盤状土製品	S D 353	覆土	822-26	2段RL	-	-	-	縦 36mm、横 44mm、打ち欠き成形
191	Ⅱ		鉢	北西盤	遺物包含層	-	-	(38)	-	-	
192	Ⅲ	a	深鉢	-	遺物包含層	828-52	3段RLR	(350)	375	-	
193	Ⅲ	b	深鉢	北盤	遺物包含層	-	2段RL	(61)	-	-	
194	Ⅲ		深鉢	-	遺物包含層	830-24	-	(30)	-	-	
195	Ⅵ		深鉢	-	遺物包含層	830-46	2段RL	(42)	-	-	
196	Ⅵ		深鉢	-	遺物包含層	830-46	2段RL	(34)	-	-	
197	Ⅵ		深鉢	南端	遺物包含層	-	-	(13)	-	(102)	底部に割代痕あり
198	Ⅵ		深鉢	北端	遺物包含層	-	-	(42)	-	(88)	底部に割代痕あり
199	Ⅲ		円盤状土製品	-	遺物包含層	828-52	-	-	-	-	縦 37mm、横 39mm、打ち欠き成形
200	V		円盤状土製品	不明	遺物包含層	-	不明	-	-	-	縦 36mm、横 35mm、打ち欠き成形

表4 石器

※長さ・幅・厚さの単位はミリメートル、重量はグラムである。

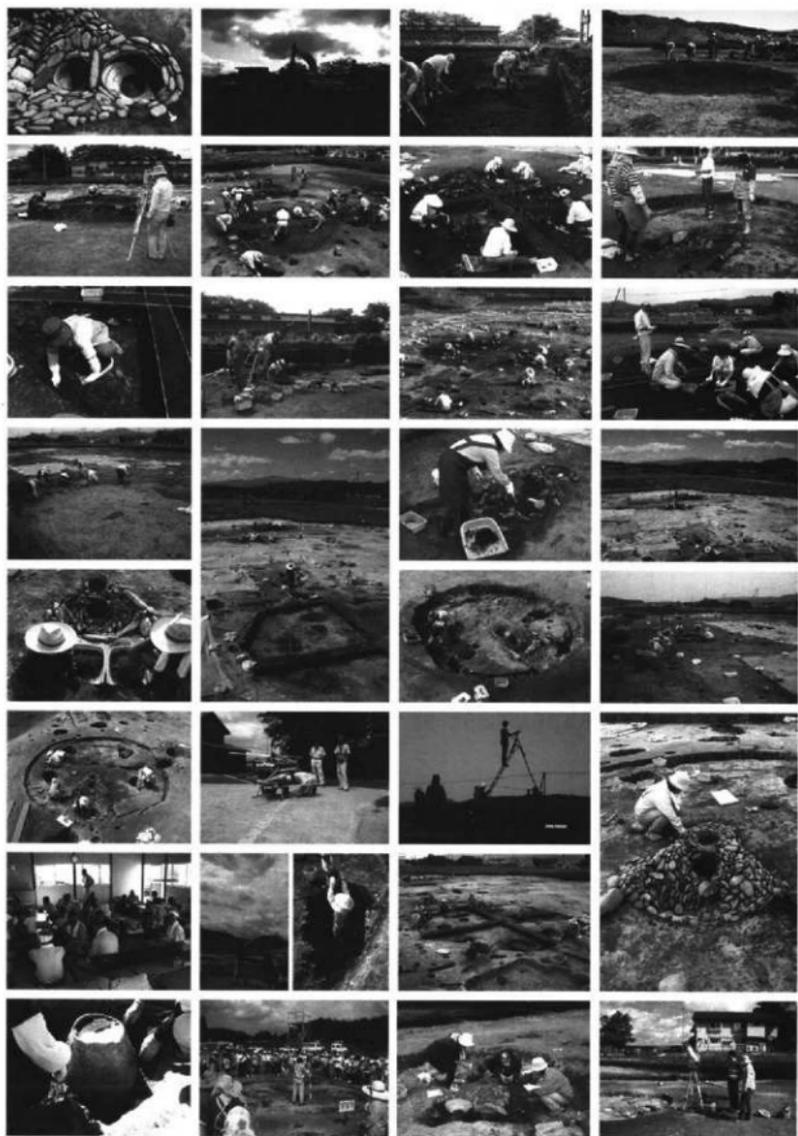
番号	器種	分類	出土遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
201	石劔	西基無蓋	S K 248		802-42	20.4	18.2	6.8	2.3	鉄石英	
202	石劔	西基無蓋	S T 35		804-40	22.5	15.0	3.7	0.9	珪質頁岩	ケール付着, 先端部欠損
203	石劔	西基無蓋	S T 35		804-42	24.6	15.6	5.9	1.1	黒曜石	先端部欠損
204	石劔	西基無蓋	S T 35		804-42	28.4	16.4	4.3	1.1	珪質頁岩	ケール付着
205	石劔	西基無蓋	E L 74		824-48	44.6	16.8	5.1	3.2	珪質頁岩	
206	石匙	縦型	北端	遺物包含層	-	45.3	17.6	6.9	4.5	玉髄	
207	石匙	縦型	中央	遺物包含層	-	47.1	20.5	7.3	5.1	珪質頁岩	下層部欠損
208	石匙	縦型	S T 2		832-26	63.8	16.1	8.4	7.0	珪質頁岩	
209	石匙	縦型	S D 239		886-34	86.8	48.2	15.6	37.0	珪質頁岩	下層部欠損
210	石匙	縦型	S T 33		888-36	83.5	30.1	14.8	24.7	珪質頁岩	
211	石匙	斜型	S K 39		898-48	74.1	24.7	12.0	13.2	珪質頁岩	
212	石匙	斜型	S P 147		852-28	93.5	33.4	15.1	26.3	珪質頁岩	
213	石匙	中央	遺物包含層		-	80.9	40.2	18.2	60.6	珪質頁岩	
214	石鎌	D1	S T 28		860-18	41.9	15.8	10.5	5.9	珪質頁岩	
215	石鎌	D1	E L 136		838-28	41.8	31.0	9.1	7.7	珪質頁岩	
216	石鎌	D2	S T 28		-	36.3	31.6	5.3	3.7	珪質頁岩	先端部欠損
217	石鎌	D2	E L 263		894-42	47.9	35.2	8.6	7.9	珪質頁岩	
218	石鎌	D2	S P 270		890-26	69.8	60.0	18.3	47.8	珪質頁岩	先端部欠損
219	石鎌	D2	S D 239		-	105.2	57.1	23.4	86.0	珪質頁岩	
220	石鎌	D2	S D 155		842-22	87.9	64.6	12.0	34.3	珪質頁岩	
221	接砂	S T 3			842-22	58.6	24.0	15.1	13.6	珪質頁岩	
222	接砂	S D 155			840-20	45.0	31.0	10.0	11.3	珪質頁岩	
223	接砂	S T 2			830-22	50.0	29.0	9.0	9.8	珪質頁岩	
224	接砂	S T 2			830-22	59.0	25.0	13.0	15.9	珪質頁岩	
225	接砂	S T 50			824-48	59.6	32.8	12.3	21.3	珪質頁岩	
226	接砂	S D 155			842-24	82.0	32.0	15.0	27.5	珪質頁岩	
227	接砂	S T 2			832-24	81.0	29.0	11.0	19.5	珪質頁岩	
228	接砂	E L 263			894-42	72.0	33.0	12.0	25.5	珪質頁岩	
229	接砂	S P 288			864-32	49.5	23.6	8.5	8.3	珪質頁岩	
230	削器	両側縁加工	S T 35		892-42	120.0	44.0	15.0	63.6	珪質頁岩	
231	削器	両側縁加工	S T 1		822-22	89.0	43.0	20.0	66.1	珪質頁岩	下層部欠損
232	削器	両側縁加工	S T 5		866-32	66.0	33.0	11.0	16.8	珪質頁岩	先端部欠損
233	削器	両側縁加工	E L 154		840-22	83.0	31.0	16.0	30.7	珪質頁岩	
234	削器	両側縁加工	S T 4		-	84.0	41.0	11.0	26.3	珪質頁岩	
235	削器	両側縁加工	S T 1		822-22	53.0	27.0	11.0	15.3	珪質頁岩	下半部欠損
236	削器	両側縁加工	E L 92		832-20	38.0	34.0	8.0	9.9	珪質頁岩	
237	削器	両側縁加工		遺物包含層	886-46	29.0	41.0	10.0	12.3	黒曜石	
238	削器	片側縁加工	S T 50		822-48	68.0	29.0	11.0	14.5	珪質頁岩	
239	削器	片側縁加工	S T 50		826-50	68.0	39.0	19.0	50.0	珪質頁岩	下層部欠損
240	削器	片側縁加工	S T 50		826-48	77.0	48.0	18.0	36.4	珪質頁岩	
241	削器	片側縁加工	S T 3		842-22	67.0	45.0	14.0	30.0	珪質頁岩	下層部欠損
242	縦長剥片	E L 167			890-18	28.0	16.0	4.0	1.8	珪質頁岩	
243	縦長剥片	S T 33			888-36	49.0	15.0	4.0	1.9	珪質頁岩	
244	縦長剥片	S X 208			844-24	30.0	24.0	7.0	4.1	珪質頁岩	先端部欠損
245	縦長剥片	S T 4			856-24	62.0	18.0	5.0	4.6	珪質頁岩	裏面左側縁に二次加工あり
246	縦長剥片	S D 259			-	44.0	31.0	8.0	9.6	珪質頁岩	
247	縦長剥片	中央	遺物包含層		-	45.0	29.0	10.0	9.8	珪質頁岩	北端部欠損
248	縦長剥片	S D 289			862-30	54.0	26.0	5.0	6.5	珪質頁岩	先端部欠損
249	縦長剥片	中央	遺物包含層		-	53.0	22.0	8.0	7.4	珪質頁岩	
250	縦長剥片	中央	遺物包含層		-	68.0	48.0	19.0	33.7	珪質頁岩	
251	石核	S T 50			824-48	45.1	51.1	35.3	76.0	珪質頁岩	
252	石核	S K 227			840-52	49.5	62.9	36.5	79.4	珪質頁岩	
253	石核	S T 5			864-30	73.5	53.0	37.5	148.4	珪質頁岩	
254	石核	北端	遺物包含層		-	123.2	64.5	38.0	278.8	黒曜石	

番号	器種	分類	出土遺構	層位	グリッド	長さ	幅	高さ	重量	石材	備考
255+256	接合資料		S D 259		896-40	48.2	67.2	23.8	32.9	珧質頁岩	2点接合
255	割片		S D 259		896-40	35.8	25.8	11.3	4.7	珧質頁岩	256と接合
256	割片		S D 259		896-40	48.1	61.5	16.3	28.2	珧質頁岩	255と接合
257+258	接合資料		S D 259		896-40	63.5	59.3	35	107.0	珧質頁岩	2点接合
257	割片		S D 259		896-40	64.1	57.2	21.5	75.5	珧質頁岩	258と接合
258	割片		S D 259		896-40	52.2	54.6	14.7	31.5	珧質頁岩	257と接合
259+260	接合資料		S D 259		896-40	72.0	54.1	17.6	51.8	珧質頁岩	2点接合
259	割片		S D 259		896-40	61.2	41.0	10.6	13.7	珧質頁岩	260と接合
260	割片		S D 259		896-40	73.8	53.6	17.4	38.1	珧質頁岩	259と接合
261+262	接合資料		S D 259		896-40	53.7	38.9	15.2	30.7	珧質頁岩	2点接合
261	割片		S D 259		896-40	35.8	29.8	12.2	14.7	珧質頁岩	262と接合
262	割片		S D 259		896-40	39.0	37.3	14.2	16.0	珧質頁岩	261と接合
263 ~ 271	接合資料		S P 116		832-24	49.6	56.4	53.2	138.1	黒曜石	9点接合
263	割片		S P 116		832-24	39.7	38.0	8.5	8.3	黒曜石	263 ~ 271と接合
264	割片		S P 116		832-24	37.1	11.8	5.0	1.3	黒曜石	263 ~ 271と接合
265	割片		S P 116		832-24	54.7	46.6	16.5	29.3	黒曜石	263 ~ 271と接合
266	割片		S P 116		832-24	38.3	36.1	8.3	9.2	黒曜石	263 ~ 271と接合
267	割片		S P 116		832-24	30.1	15.1	6.5	2.1	黒曜石	263 ~ 271と接合
268	割片		S P 116		832-24	38.8	28.6	23	17.9	黒曜石	263 ~ 271と接合
269	割片		S P 116		832-24	12.5	20.3	4.0	0.7	黒曜石	263 ~ 271と接合
270	割片		S P 116		832-24	37.8	32.7	13.6	7.2	黒曜石	263 ~ 271と接合
271	石核		S P 116		832-24	29.6	51.1	48.2	62.1	黒曜石	263 ~ 271と接合
272	磨製石斧	分銅形	S T 33		886-36	75.0	46.0	31.0	137.6	緑色凝灰岩	下部欠損
273	磨製石斧	分銅形		表土	-	86.0	47.0	25.0	148.4	緑色凝灰岩	上部欠損
274	磨製石斧	分銅形	E L 283		896-40	103.0	65.0	32.0	246.0	泥岩	
275	磨製石斧	分銅形	S P 279		856-24	128.0	68.0	35.0	397.4	緑色凝灰岩	
276	磨製石斧	小型	S T 1		822-22	36.0	18.0	7.0	8.9	純紋岩	
277	磨製石斧	小型	S T 50		826-48	38.0	17.0	8.0	8.3	純紋岩	刃部欠損
278	石鏃			遺物包含層	890-48	51.0	24.0	14.0	23.3	粘板岩	
279	石鏃		S T 35		896-44	84.0	50.0	20.0	115.3	安山岩	ケール付着
280	軽石製石製品		S T 35		894-44	84.0	82.0	28.0	23.5	軽石	
281	円盤状石製品		S K 248		892-42	52.0	50.0	14.0	48.8	緑色凝灰岩	
282	円盤状石製品			表土	-	60.0	59.0	10.0	51.3	粘板岩	
283	磨石			表土	-	35.0	33.0	20.0	24.0	安山岩	
284	磨石		S T 34		888-26	39.0	33.0	32.0	51.7	安山岩	
285	磨石		S T 9		864-32	46.0	40.0	33.0	72.8	安山岩	
286	磨石		S T 50		822-48	69.0	59.0	40.0	228.5	安山岩	
287	磨石	南端		遺物包含層	-	81.0	81.0	31.0	268.4	安山岩	
288	磨石		S T 50		824-48	85.0	84.0	62.0	531.8	安山岩	
289	磨石		S T 1		822-26	87.0	83.0	40.0	259.7	安山岩	被蝕
290	磨石		S T 50		824-48	106.0	94.0	68.0	700.8	安山岩	
291	磨石		S P 116		832-24	104.0	100.0	84.0	1265.7	安山岩	
292	磨石		S K 53		-	111.0	82.0	59.0	794.5	安山岩	
293	磨石			表土	-	114.0	89.0	56.0	805.4	安山岩	
294	磨石		E U 968		858-24	115.0	88.0	56.0	742.4	安山岩	
295	磨石		S T 50		822-50	116.0	96.0	60.0	947.1	安山岩	
296	磨石		S K 282		906-36	116.0	102.0	56.0	868.6	安山岩	
297	磨石		S K 44		906-40	130.0	89.0	66.0	1010.4	安山岩	
298	磨石		S T 2		830-22	135.0	65.0	45.0	610.3	安山岩	
299	磨石		S T 2		830-24	135.0	106.0	55.0	1001.1	安山岩	
300	磨石		S X 284		842-58	189.0	170.0	149.0	5899.0	安山岩	
301	磨石			表土	-	256.0	78.0	53.0	1639.0	安山岩	棒状、断面台形
302	磨石		E L 74		824-48	239.0	74.0	65.0	1599.5	安山岩	被蝕、棒状、断面四角形
303	磨石		E L 324		840-22	157.0	58.0	36.0	905.6	安山岩	棒状、断面台形
304	磨石		E L 218		888-34	120.0	86.0	32.0	523.8	泥岩	板状
305	磨石		S T 33		888-36	65.0	95.0	25.0	181.9	安山岩	U字形

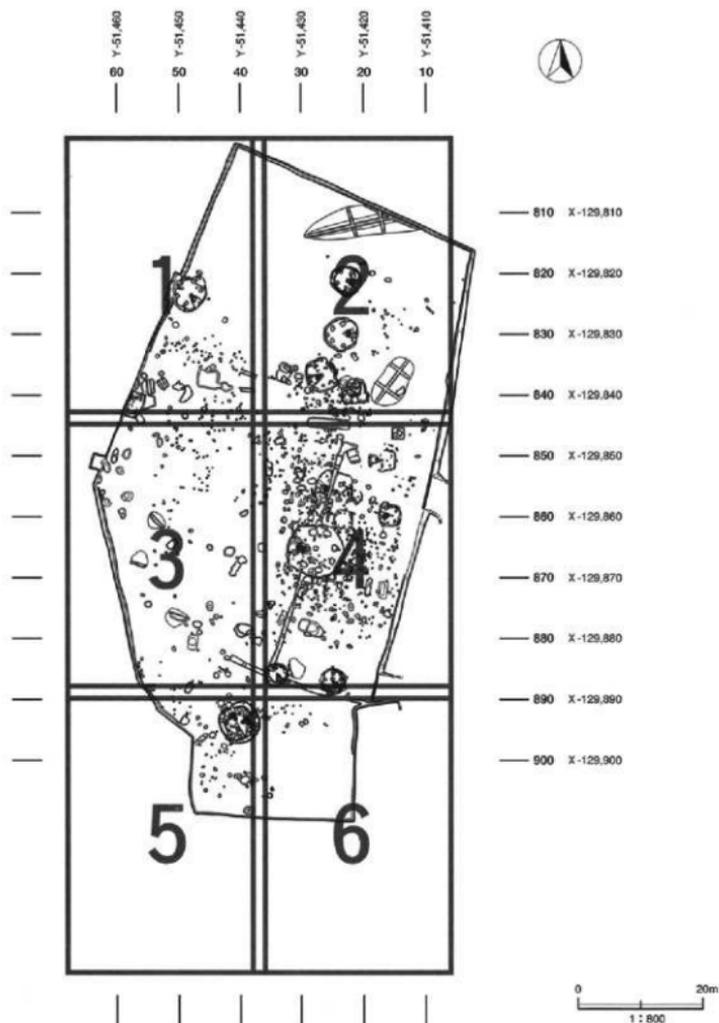
番号	器種	分類	出土遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
306	磨石		E L 136		838・28	97.0	117.0	76.0	961.9	安山岩	下半部欠損
307	磨石		E L 218		888・34	209.0	143.0	52.0	2022.6	閃緑岩	被熱, 大型
308	磨石		S T 28		862・16	213.0	176.0	65.0	2826.0	安山岩	大型, 楕円の磨面痕あり
309	磨石		S T 28		860・18	77.0	71.0	40.0	344.1	安山岩	凹部あり
310	磨石		E L 218		888・34	107.0	82.0	41.0	505.1	安山岩	凹部あり
311	磨石		E L 167		860・18	100.0	89.0	43.0	481.9	安山岩	凹部あり
312	磨石		S T 33		888・36	104.0	91.0	49.0	601.8	安山岩	凹部あり
313	磨石		S T 28		862・18	110.0	86.0	59.0	658.4	安山岩	凹部あり
314	磨石		S T 50		824・48	112.0	92.0	45.0	565.0	安山岩	凹部あり
315	磨石		中央	遺物包含層	-	94.0	90.0	73.0	664.0	安山岩	凹部あり
316	磨石		E L 167		860・16	117.0	96.0	55.0	868.9	安山岩	凹部あり
317	磨石		E L 46		852・18	124.0	99.0	56.0	925.7	安山岩	凹部あり, 下層部欠損
318	磨石		E L 222		894・40	110.0	130.0	52.0	822.5	安山岩	凹部あり, 下半部欠損
319	磨石		E L 46		852・18	140.0	104.0	49.0	1092.8	安山岩	凹部あり, 下半部欠損
320	磨石		E L 218		888・34	141.0	64.0	42.0	506.4	安山岩	凹部あり, 上層部欠損
321	凹石		E L 136		838・28	219.0	119.0	74.0	2217.0	安山岩	被熱, 下半部欠損
322	凹石		E L 136		838・28	134.0	104.0	68.0	1166.7	安山岩	下半部欠損
323	石皿	定型	S T 50		824・50	158.0	111.0	55.0	1170.1	砂岩	石皿の一部のみ
324	石皿		E L 46		852・18	285.0	217.0	82.0	7647.0	安山岩	被熱
325	石皿		S K 59		894・30	385.0	224.0	112.0	8960.0	砂岩	
326	石皿		E L 154		840・22	384.0	280.0	88.0	13888.0	閃緑岩	
327	石皿		E L 283		896・40	269.0	200.0	52.0	2853.0	安山岩	
328	石皿		S K 32		880・32	233.0	204.0	53.0	4071.0	閃緑岩	被熱
329	石皿		E L 217		888・26	245.0	222.0	79.0	5442.0	安山岩	
330	石皿		E L 217		888・26	277.0	224.0	61.0	5756.0	閃緑岩	
331	石皿		E L 218		888・34	338.0	227.0	60.0	5626.0	泥岩	
332	石皿		S X 284		842・58	421.0	156.0	141.0	13869.0	安山岩	角柱状

表5 中世・近世の遺物

番号	出土地点	住居跡など	器種	野面積 (mm) 【埋深(層)】	部位 (形状等)	量 (個数)	土質	成形	調査	編年	文書等	付属物	使用痕 など	年代
S T 307 862-24		染織系陶器	頸鉢	高 (96) 口縁部 1.0以下	1 (1)	25Y7/1灰白色 (石 系少量, 白色粒少量)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	内周跡目 (幅 30mm に7本)					内周跡目	13~14世紀
S K 56 874-15		染織系陶器	頸鉢	高 (61) 口縁部 1.0以下	1 (1)	5Y6/1灰色 (石系多 量, 白色粒少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	内周跡目 (幅 18mm に8本)					内周跡目	13~14世紀
S K 83 868-20		染織系陶器	頸鉢	高 (67) 口縁部 1.0以下	1 (1)	25Y6/2灰黄色 (石 系少量, 白色粒少量 混入)	外周ロクロナデ	内周跡目 (幅 17mm に5本)					内周跡目	13~14世紀
S K 98 872-22		青磁	碗	高 (58) 口縁部 1.0以下	1 (1)	N6/0灰色 (顔色粒 少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	内周青磁染 織系 25Y6/1オリーブ 色					被熱	15世紀
S K 98 872-22		肥前陶器	皿	高 (16) 口縁部 1.0以下	1 (1)	5Y6/1灰色 (白色粒 少量混入)	外周ロクロナデ+ケ ズリ, 底部ケズリ	外周灰白色 75Y6/3 外周下半一部赤褐色						土主目段降 (1590~1610)
S K 124 880-28		かわらけ	高 (17) 口縁部 1.0以下	1 (1)	10Y7/3に多い黄褐色 (白色粒少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ, 底部 面ロクロナデ	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ, 底部 面ロクロナデ							15世紀中
S K 124 880-25		かわらけ	高 (30) 口縁部 1.0以下	2 (1)	10Y7/3に多い黄褐色 (白色粒少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ, 底部 面ロクロナデ	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ, 底部 面ロクロナデ							15世紀中
S K 124 880-30		肥前陶器小	碗小	高 (13) 口縁部 1.0以下	1 (1)	N8/0灰白色	内周面透明釉 (75Y5/6明褐色), 内周面透明釉 文							近世後半中
S K 124 880-30		染織系陶器	頸鉢	高 (76) 口縁部 1.0以下	1 (1)	10Y7/2に多い黄褐色 (砂粒少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	内周自然釉 (5Y6/3 明褐色)						13~14世紀
S K 149 896-30		青花 (唐)	碗 (唐)	高 (44) 高 (42) 口縁部 1.0以下	2 (1)	N7/0灰白色 (顔色 少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	外周面緑+複物文, 裏面赤褐色					緑磁器	16世紀末~ 17世紀初頃
S K 161 882-45		青磁	碗 (28) 口縁部 1.0以下	1 (1)	N7/0灰白色 (顔色 少量混入)	内周面青磁染 織系 (25Y7/1灰白色)	内周面青磁染 織系							15世紀
S K 213 880-44		染織系陶器	頸鉢	高 (41) 口縁部 1.0以下	3 (1)	25Y7/1灰白色 (砂 粒少量混入)	外周ナデ, 底部砂底	内周 面青磁 染織系 (幅 12mm 以上に4 本以上)						13~14世紀
S P 152 862-32		肥前陶器	皿	高 (50) 口縁部 1.0以下	1 (1)	75Y8/3に多い黄褐色 (白色粒少量混入)	外周ロクロナデ+ケ ズリ, 内周ロクロナ デ, 底部ケズリ	内周自然釉 (5Y5/2 灰白色)					口縁部打 欠, 見込磨 成り明瓦	土主目段降 (1590~1610)
S P 330 858-32		唐海不明陶器	碗	高 (30) 口縁部 1.0以下	1 (1)	5Y8/4に多い黄色 (石系少量, 白色粒 少量混入)	内周面青磁染 織系 オリーブ黄色						外周 面青磁 染織系	近世後半中
S P 330 858-32		肥前陶器	碗	高 (57) 口縁部 1.0以下	1 (1)	N7/0灰白色 (顔色 少量混入)	内周面青磁染 織系 (幅 10Y6/1 灰白色), 内面白濁							17世紀前半中
S P 330 858-32		肥前不明陶器	碗小	高 (44) 口縁部 1.0以下	1 (1)	75Y7/1灰白色 (顔 色少量, 白色粒多 量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ	内周面灰褐色 (25G7/1灰白色)						近世中
S P 330 858-32		肥前陶器	皿	高 (41) 高 (28) 口縁部 1.0以下	1 (1)	10Y8/3に多い黄褐色 (白色粒少量混入)	外周ロクロナデ, 内 周ロクロナデ+ケ ズリ, 底部ケズリ	内周面青磁染 織系 (幅 12mm 以上に4 本以上)						土主目段降 (1590~1610)

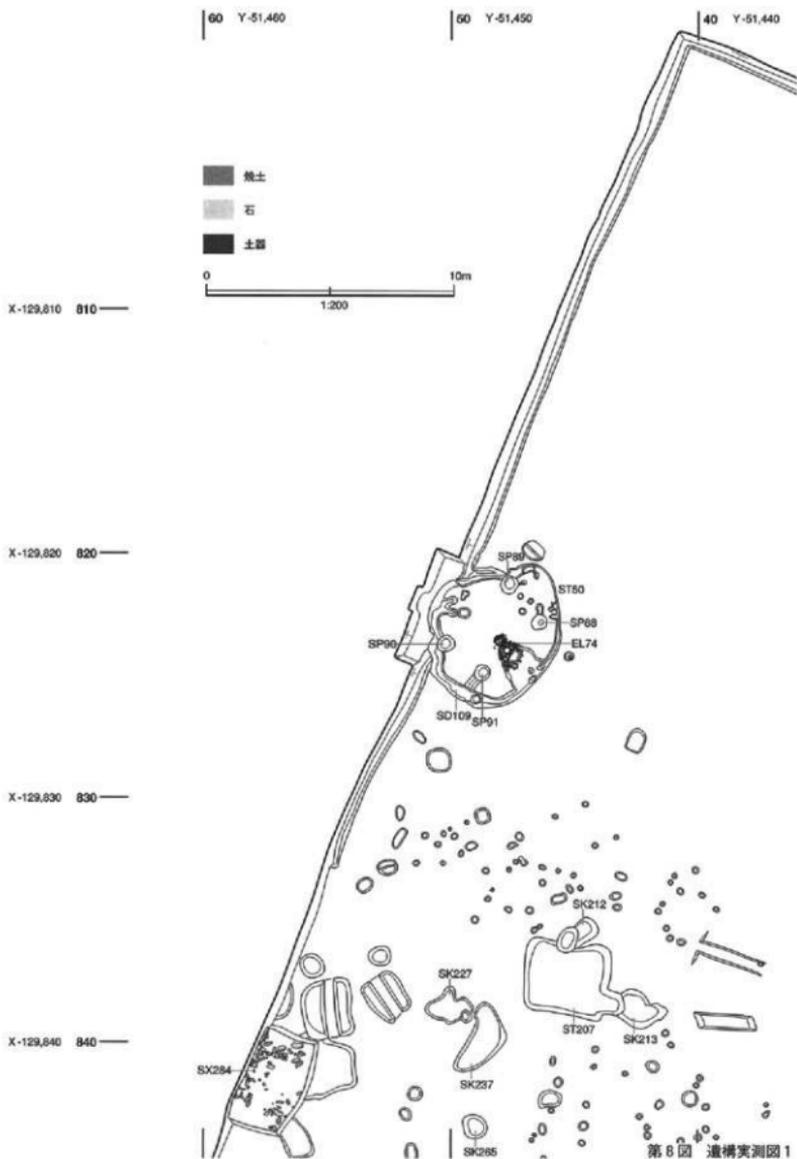


作業状況



※これらを結合した図 (1:200) は付図に収録

第7図 遺構実測図の新付

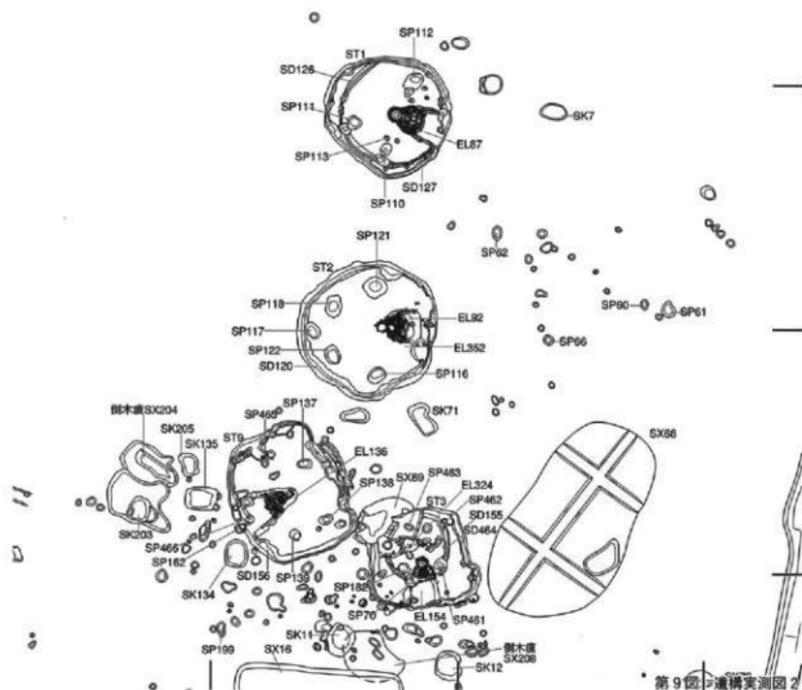
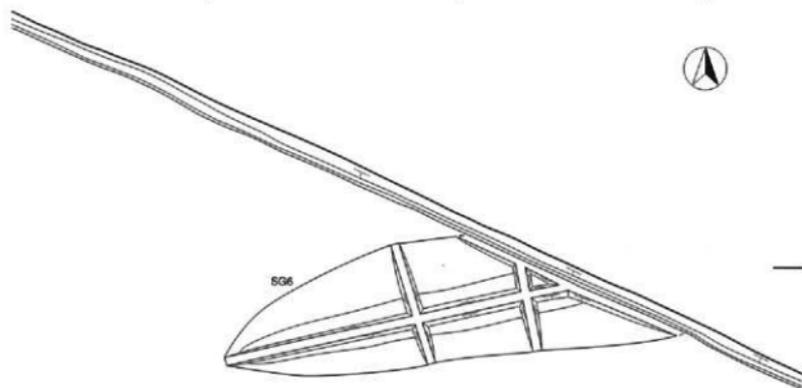


第6図 遺構実測図1

30 Y-51,430

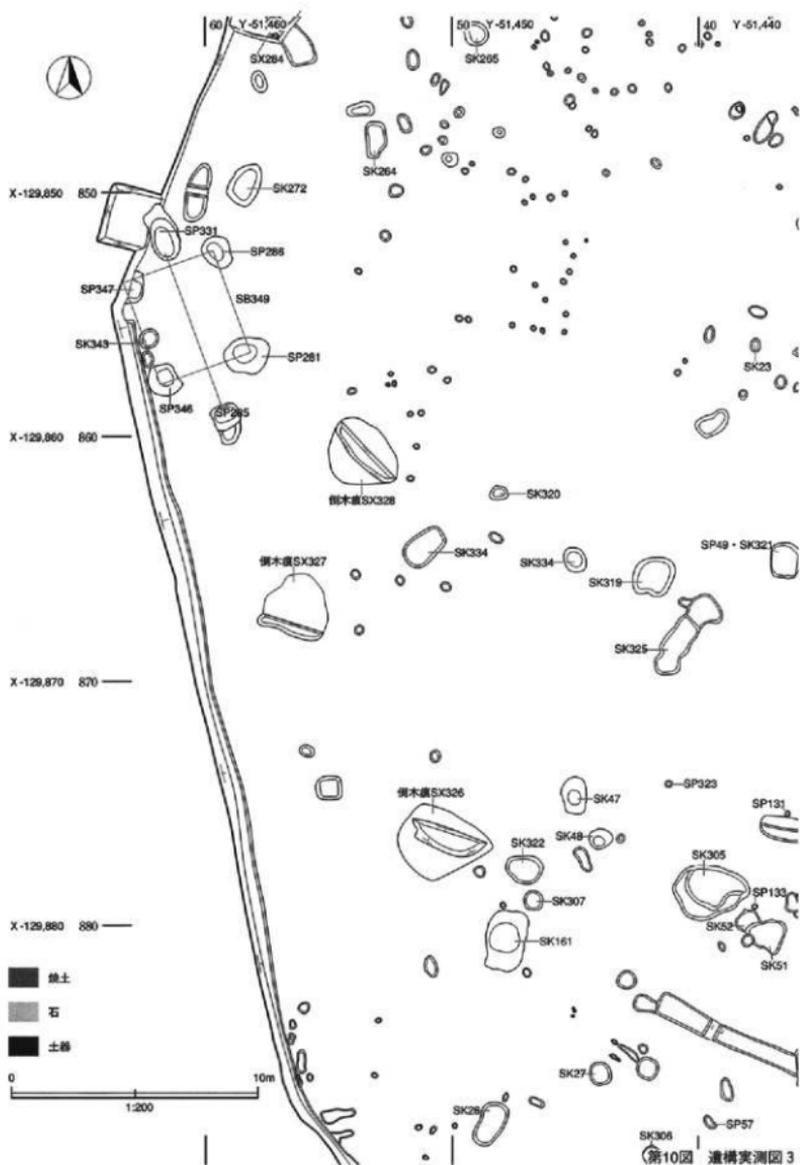
20 Y-51,420

10 Y-51,410

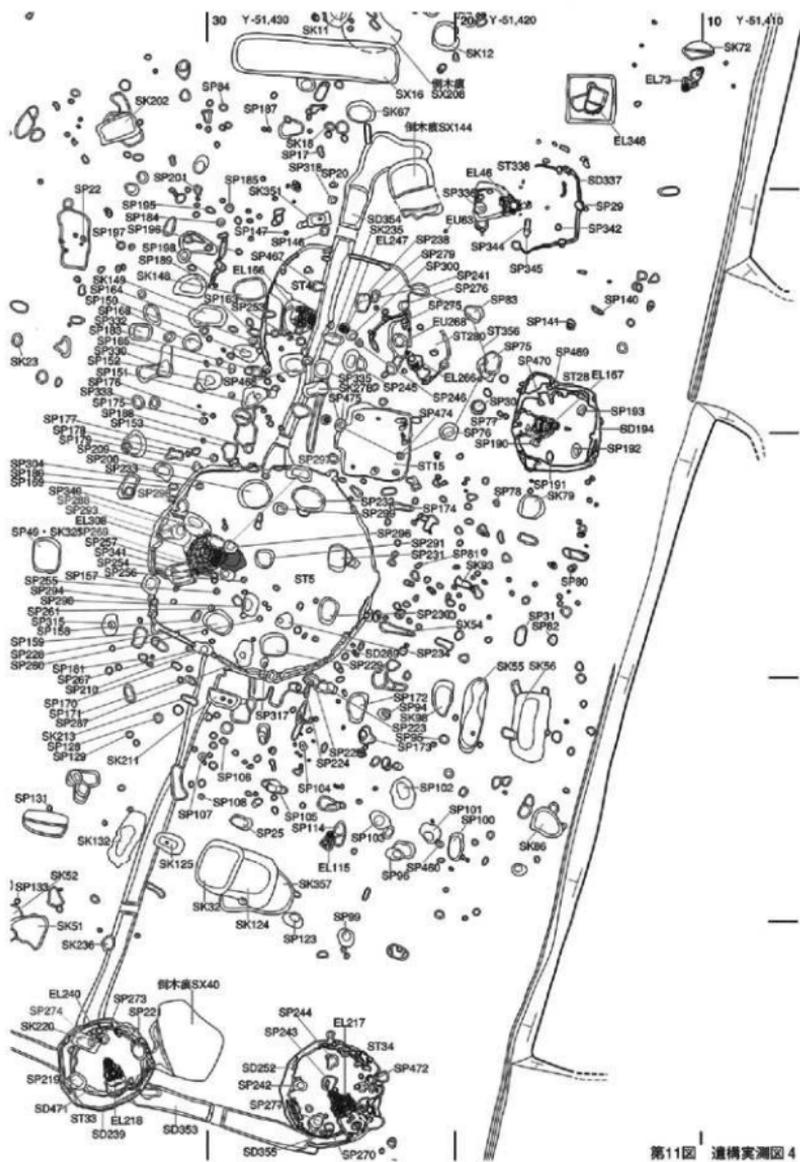


第9図 遺構実測図 2

遺構実測図



(第10図) 遺構実測図 3

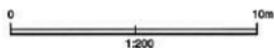


第11図 遺構実測図 4

遺構実測図

X-129,890 890

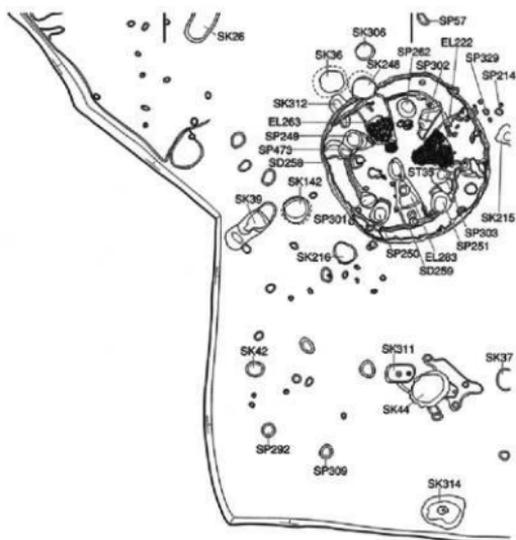
X-129,900 900



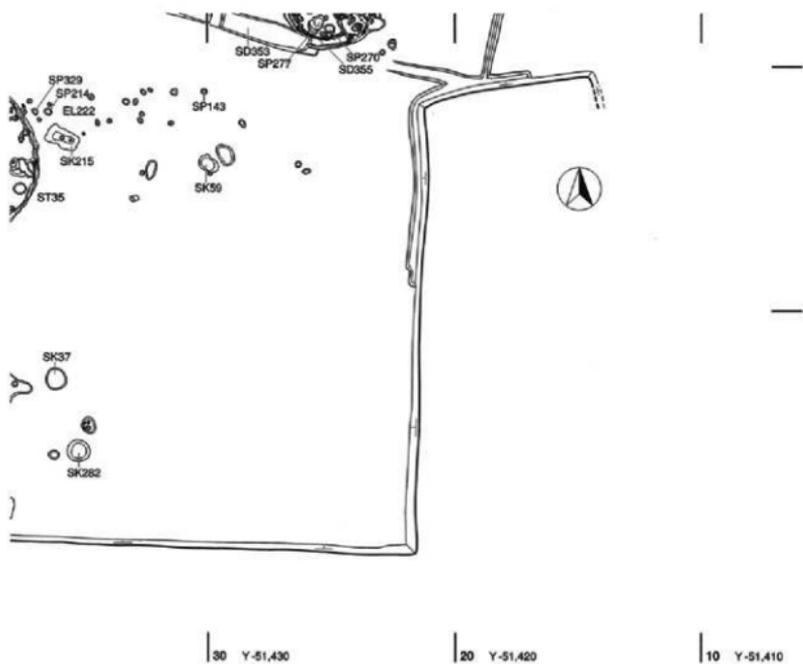
60 Y-51,460

50 Y-51,450

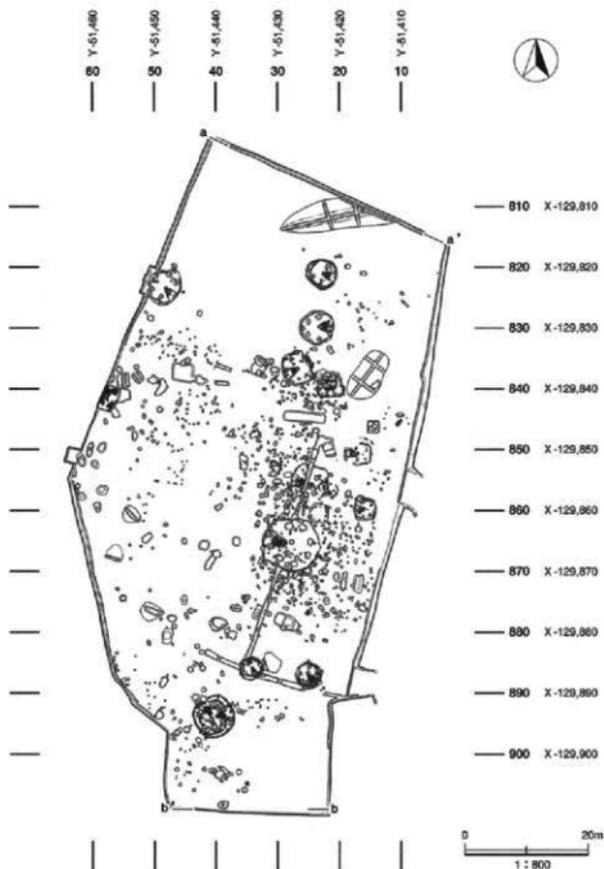
40 Y-51,440



第12図 遺構実測図 5



第13図 遺構実測図 6



調査区壁土層図 a-a'

1. 表土
2. 旧表土
3. 旧表土
4. 雑乱
5. 雑乱
6. 雑乱
7. 雑乱
8. 雑乱
9. 雑乱
10. 10YR4/4褐色砂質土
11. 10YR1.7/1黒色シルト
12. 10YR4/4褐色砂質土

砂と石を多く含む 以下13層まで土坑
層を含む
10YR1.7/1黒色シルトと砂と石を多く含む

13. 10YR1.7/1黒色シルト
14. 10YR1.7/1黒色シルト
15. 10YR1.7/1黒色シルト
16. 10YR1.7/1黒色シルト
17. 10YR2/1黒色シルト
18. 10YR1.7/1黒色シルト
19. 10YR2/3黒褐色シルト
20. 10YR5/6黄褐色砂
21. 10YR3/4暗褐色シルト
22. 10YR2/3黒褐色シルト
23. 10YR2/3黒褐色砂質土
24. 10YR3/4暗褐色シルト

層を含む 以下17層までSG6

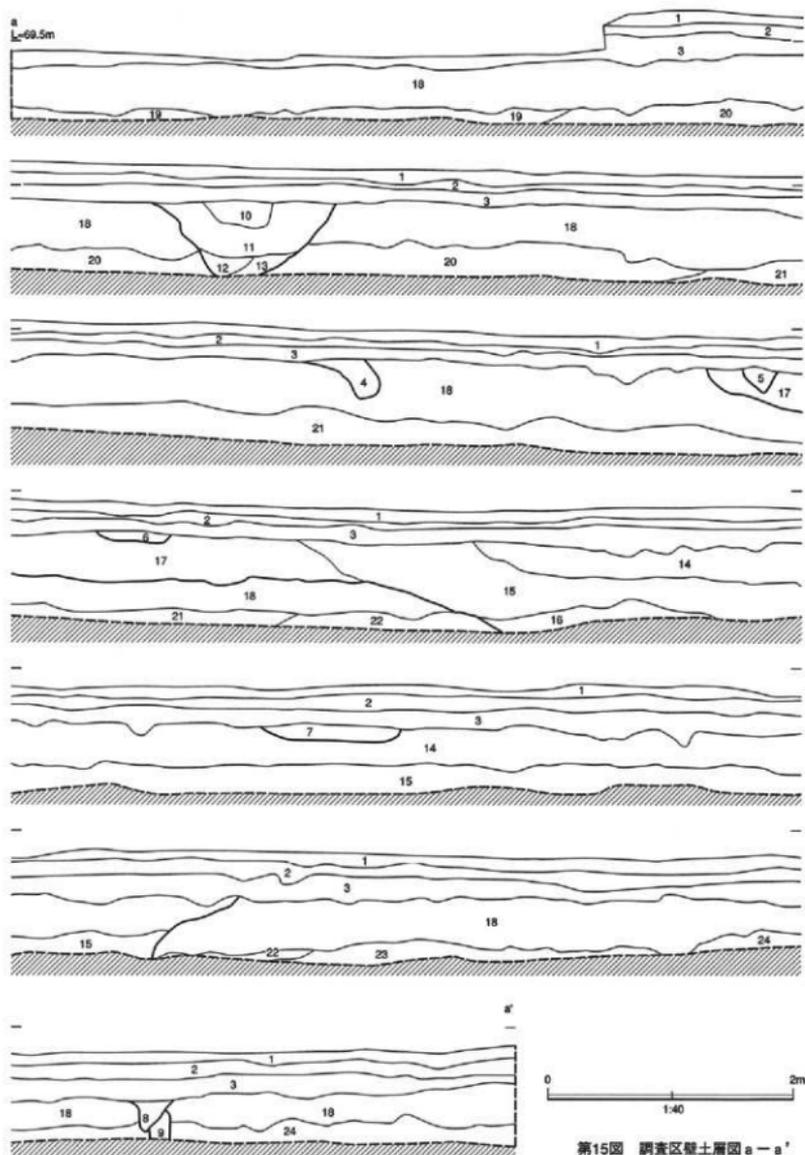
層を多く含む

10YR3/4暗褐色シルトを含む 遺物包含層
以下地山

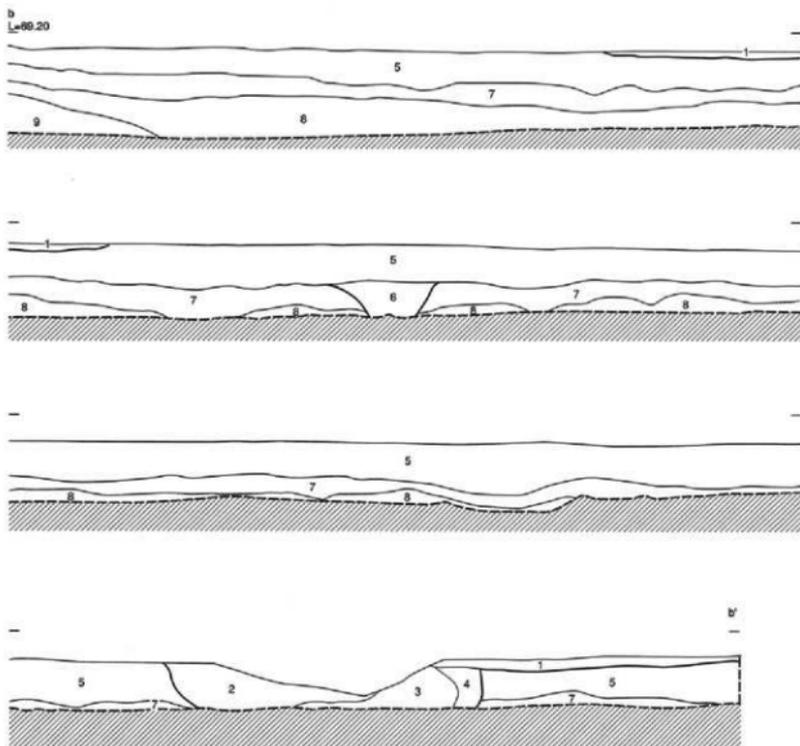
層を多く含む

層を多く含む

第14図 調査区壁土層図セクションポイントの配置



遺構実測図

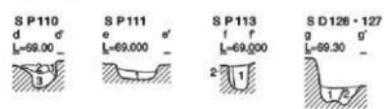
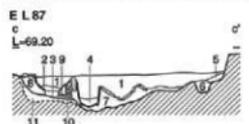
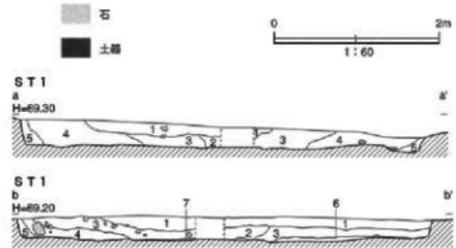
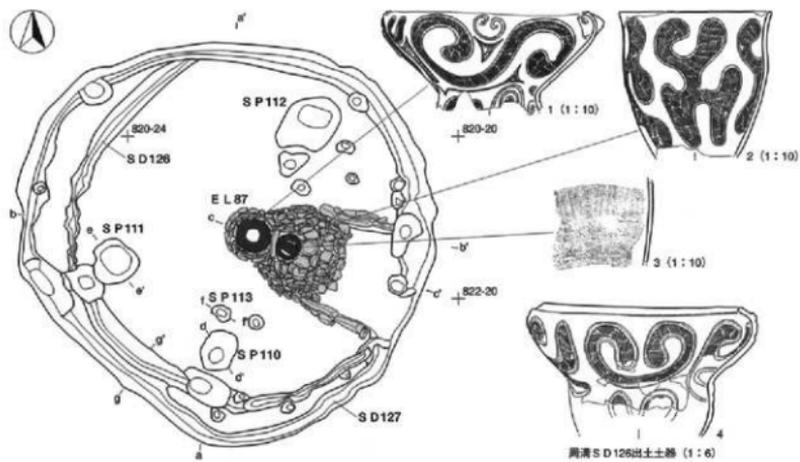


調査区南壁土層図

1. 雑瓦
2. 雑瓦
3. 雑瓦
4. 雑瓦
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR3/4暗褐色シルトを含む 遺物包含層
6. 10YR2/1黒色粘質土 10YR3/4暗褐色シルトのブロックを含む 土坑
7. 10YR3/4暗褐色シルト 10YR1.7/1黒色シルトを含む 以下地山
8. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
9. 礫層



第16図 調査区南壁土層図 b-b'



- 複式炉 E L 87**
- 10YR17/1黒色シルト 炭と焼土を含む
 - 10YR2/3黒褐色シルト
 - 10YR17/1黒色シルト
 - 10YR17/1黒色シルト
 - 10YR2/1黒色シルト
 - 10YR3/1黒褐色シルト
 - 10YR3/3暗褐色シルト 炭と焼土を含む 以下10層まで顕形ピット
 - 10YR2/3黒褐色シルト 炭と焼土と小石を含む
 - 10YR17/1黒色シルト 炭と焼土を含む
 - 10YR3/1黒褐色シルト 小石を含む
 - 10YR6/6明黄褐色シルト 小石を含む 堆山
- 10YR5/6黄褐色砂を含む 周溝



高溝 S D 126出土土器 (1:6)

壁穴住居 S T 1 出土土器 (1:6)

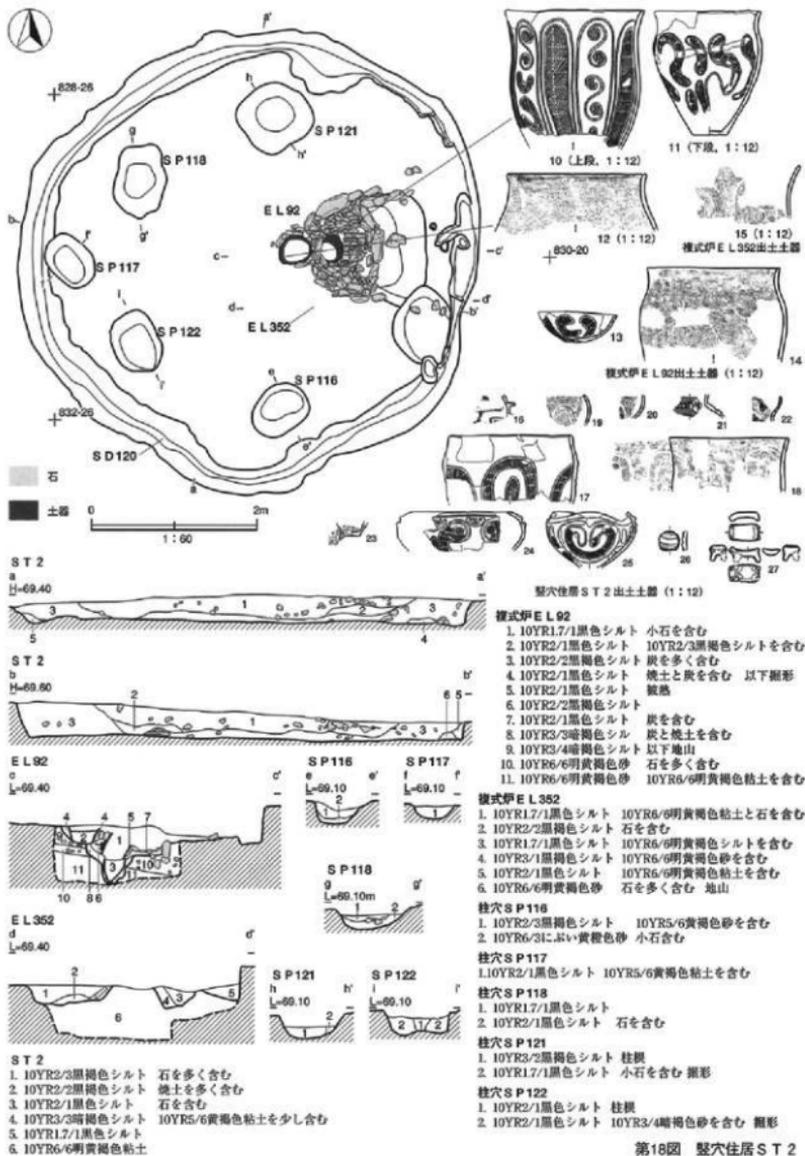
- 壁穴住居 S T 1**
1. 10YR17/1黒色シルト 砂利を少し含む
 2. 10YR2/3黒褐色シルト 砂利と炭を少し含む
 3. 10YR2/1黒色シルト 炭を少し含む
 4. 10YR2/3黒褐色シルト 炭と炭を多く含む
 5. 10YR2/3黒褐色シルト 10YR4/6褐色礫砂のブロックを含む
 6. 10YR2/1黒色シルト
 7. 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/6褐色シルトのブロックを含む 貼土

- 柱穴 S P 110**
1. 10YR4/4褐色シルト 10YR5/6黄褐色粘土を含む 以下顕形
 2. 10YR4/6褐色粘土 10YR2/2黒褐色シルトを含む
 3. 10YR4/4褐色シルト 10YR2/2黒褐色シルトと 10YR4/6褐色粘土を含む

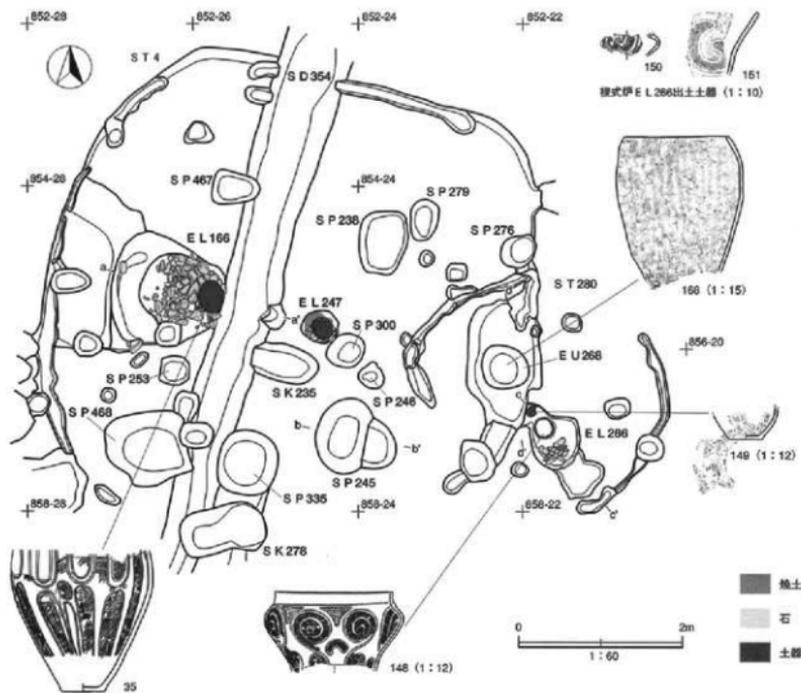
- 柱穴 S P 111**
1. 10YR2/3黒褐色シルト 10YR5/6黄褐色砂を含む
- 柱穴 S P 113**
1. 10YR17/1黒色シルト 柱底
 2. 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色シルト 掘形

- 周溝 S D 126・127**
1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む S D 127
 2. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む S D 126

第17図 壁穴住居 S T 1



第18図 壁穴住居 ST 2



様式炉 E L 166

a
L=69.00

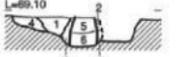
柱穴 S P 245

b
L=69.10

様式炉 E L 266

c
L=69.20

埋設土器遺構 E U 266

d
L=69.10

様式炉 E L 166

- 10YR6/6明黄褐色砂 10YR2/1黒色シルトと石を含む 掘形
- 10YR6/6明黄褐色砂 小石を多く含む 地山

柱穴 S P 245

- 10YR2/1黒色シルト 以下3層までゼット
- 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
- 10YR2/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む 以下 S P 245 柱穴取板
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む 以下掘形
- 10YR2/1黒色シルト
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む

様式炉 E L 266

- 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
- 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む 以下4層まで掘形
- 10YR6/6明黄褐色砂 灰を多く含む
- 10YR6/6明黄褐色砂 以下地山
- 10YR6/6明黄褐色砂 石を多く含む

埋設土器遺構 E U 266

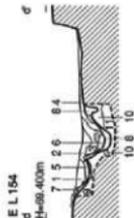
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む 石を含む S P 275
- 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトと10YR17/1黒色シルトを多く含む 以下 E U 266
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
- 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色シルトと10YR17/1黒色シルトを多く含む
- 10YR17/1黒色シルト
- 10YR2/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む

第19図 竪穴住居 S T 4・280, 埋設土器遺構 E U 266

型穴住居 ST3 出土土器 (1:6)



複式炉 E L 154 出土土器 (1:6)



複式炉 E L 154

- 1. 10YR22/1黒色シルト
 - 2. 10YR17/1黒色シルト
 - 3. 10YR17/3黒色シルト
 - 4. 10YR17/1黒色シルト
 - 5. 10YR17/3黒色シルト
 - 6. 10YR17/3黒色シルト
 - 7. 10YR22/2黒褐色シルト
 - 8. 10YR22/1黒色シルト
 - 9. 10YR56/6明黄褐色砂を含む
 - 10. 10YR56/6明黄褐色砂
 - 11. 10YR56/6明黄褐色粘土
- 以下6層まで覆土
- 10YR4/1黒灰色シルトを含む
- 10YR2/6明黄褐色粘土を含む
- 10YR7/6明黄褐色粘土を含む
- 灰を含む
- 灰を含む
- 灰を含む
- 灰を含む
- 以下6層まで埋砂
- 以下埋山
- 小石を含む

SP182

- 1. 10YR56/6明黄褐色粘土
 - 2. 10YR17/1黒色シルト
 - 3. 10YR22/1黒色シルト
 - 4. 10YR22/1黒色シルト
 - 5. 10YR17/1黒色シルト
- SP182
- L=69.20
- 柱穴 S P 182
- 形風土
1. 10YR56/6明黄褐色粘土を少し含む
2. 10YR56/6明黄褐色粘土を含む
3. 10YR22/1黒褐色シルト
4. 10YR22/1黒褐色シルト
5. 10YR56/6明黄褐色粘土と10YR22/2黒褐色シルトを多く含む



型穴住居 ST9 出土土器 (1:6)



複式炉 E L 136

- 1. 10YR22/1黒色シルト
 - 2. 10YR22/1黒色シルト
 - 3. 10YR22/1黒色シルト
 - 4. 10YR17/1黒色シルト
 - 5. 10YR22/1黒色シルト
 - 6. 10YR22/1黒色シルト
 - 7. 10YR22/1黒色シルト
 - 8. 10YR56/6明黄褐色シルト
- 焼土を多く含む 以下5層まで覆土
- 10YR56/6明黄褐色砂を含む
- 灰を多く含む
- 10YR56/6明黄褐色砂を含む
- ピット S P 466
- 10YR56/6明黄褐色砂を含む
- 埋山

柱穴 S P 137

- 1. 10YR22/1黒色シルト
 - 2. 10YR22/1黒色シルト
 - 3. 10YR56/6明黄褐色砂を含む
 - 4. 10YR56/6明黄褐色砂を含む
 - 5. 10YR56/6明黄褐色砂
- 柱穴取痕
- 10YR56/6明黄褐色シルトを含む
- 10YR22/1黒色シルトを含む
- 以下埋砂
- 以下埋砂

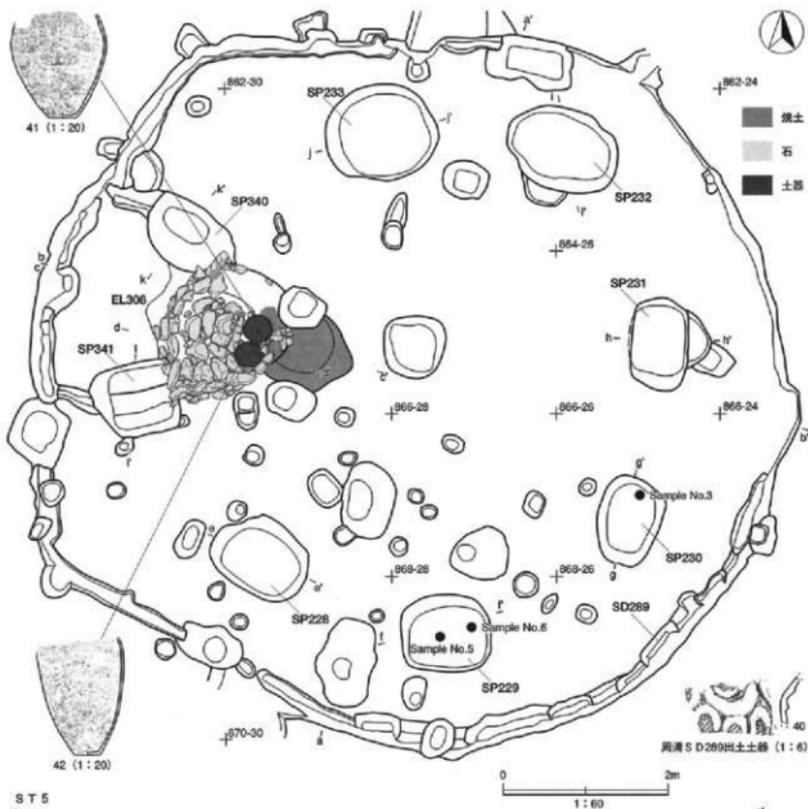
柱穴 S P 138

- 1. 10YR22/1黒色シルト
 - 2. 10YR56/6明黄褐色砂
- 以下埋砂
- 以下埋砂

柱穴 S P 139

- 1. 10YR22/1黒色シルト
 - 2. 10YR22/1黒色シルト
 - 3. 10YR56/6明黄褐色砂
- 柱穴取痕
- 10YR22/1黒色シルト
- 小石を含む
- 柱穴
- 10YR56/6明黄褐色砂
- 10YR22/1黒色シルトを含む
- 埋砂

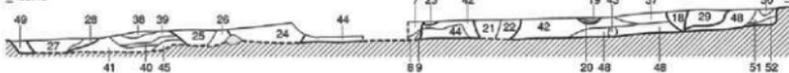
第21回 型穴住居 ST3・9



ST 5
a
L=69.10



ST 5
b
L=69.10



E L 308 燻土
c
H=68.80

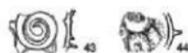


E L 308 掘形
d
H=68.70



様式伊 E L 308出土土器 (1:6)

第22団 竪穴住居 ST 5



複式炉 E L 308 覆土

1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR17/1黒色シルト
3. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
4. 10YR7/6明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色シルトと石を含む
5. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
6. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
7. 10YR6/6明黄褐色粘土
8. 10YR3/1黒褐色粘土
9. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色シルトを多く含む
10. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
11. 10YR2/1黒色シルト 灰土と灰を含む
12. 10YR2/1黒色シルト 灰を含む
13. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む ビット

複式炉 E L 308 覆土

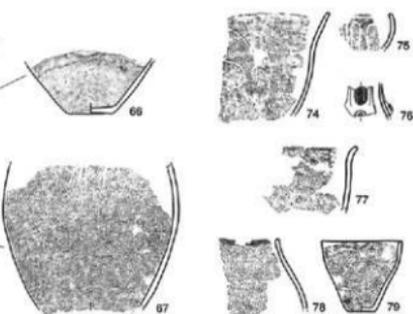
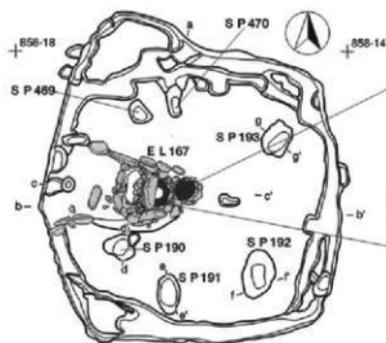
1. 10YR2/3黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと炭と焼土を多く含む
2. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む 被焼 以下地山
3. 10YR6/6明黄褐色シルト
4. 10YR6/6明黄褐色砂
5. 10YR6/6明黄褐色砂 石を含む
6. 10YR6/6明黄褐色シルト
7. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR6/6明黄褐色シルトと石を含む

竪穴住居 S T 5

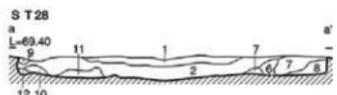
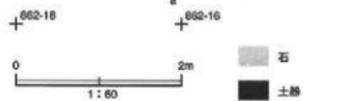
1. 10YR17/1黒色シルト ビット
2. 10YR17/1黒色シルト 以下4層まで S P 287
3. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
4. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR17/1黒色シルトを多く含む
5. 10YR17/1黒色シルト 10YR3/1黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色砂を多く含む S P 290
6. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む ビット
7. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む 以下9層まで S P 291
8. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
9. 10YR6/6明黄褐色砂
10. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 以下12層まで S P 299
11. 10YR17/1黒色シルト
12. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
13. 10YR17/1黒色シルト 以下17層まで土坑
14. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
15. 10YR17/1黒色シルト 10YR3/1黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘土を含む
16. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
17. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む ビット
18. 10YR17/1黒色シルト ビット
19. 10YR2/1黒色シルト 10YR3/1黒褐色シルトを含む 以下20層までビット
20. 10YR2/1黒色シルト 10YR3/1黒褐色シルトを多く含む
21. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む 以下22層までビット
22. 10YR2/1黒色シルト 10YR3/1黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
23. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む ビット
24. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む S P 296
25. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと石を多く含む 以下26層まで S P 298
26. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む
27. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/1黒褐色シルトを含む 以下28層まで S P 298
28. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
29. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む 土坑
30. 10YR3/1黒褐色シルト 石を含む 以下 S T 5 の覆土
31. 10YR6/6明黄褐色シルト 石を含む
32. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と石を含む
33. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
34. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
35. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と石を少し含む
36. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
37. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
38. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
39. 10YR17/1黒色シルト 10YR2/1黒色シルトを多く含む
40. 10YR2/1黒色シルト 焼土を多く含む
41. 10YR3/1黒褐色シルト
42. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR2/1黒色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトと石を含む
43. 10YR17/1黒色シルト ビット
44. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と石を少し含む
45. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを少し含む
46. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
47. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
48. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
49. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
50. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
51. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを含む
52. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む

竪穴住居 S T 5 出土土器 (1:10)

第23図 竪穴住居 S T 5



竪穴住居 S T 28出土土器 (1 : 10)

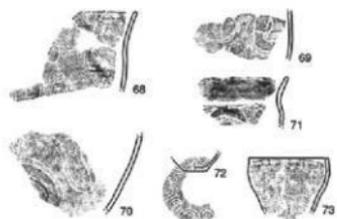


竪穴住居 S T 28

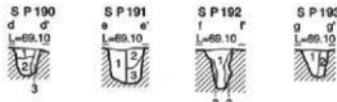
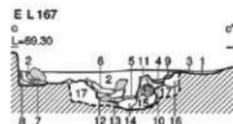
1. 10YR1.7/1黒色シルト
 2. 10YR2.2黒褐色シルト
 3. 10YR2.3黒褐色シルト
 4. 10YR1.7/1黒色シルト
 5. 10YR2.1黒色シルト
 6. 10YR1.7/1黒色シルト
 7. 10YR2.2黒褐色シルト
 8. 10YR2.1黒色シルト
 9. 10YR2.1黒色シルト
 10. 10YR2.1黒色シルト
 11. 10YR2.1黒色シルト
 12. 10YR1.7/1黒色シルト
- 10YR6.6明黄褐色シルトを少し含む
 10YR6.6明黄褐色シルトを少し含む
 10YR4.2灰黄褐色シルトを含む
 柱状
 10YR6.6明黄褐色シルトを少し含む
 10YR6.6明黄褐色砂を少し含む

複式炉 E L 167

1. 10YR2.1黒色シルト
 2. 10YR2.1黒色シルト
 3. 10YR3.1黒褐色シルト
 4. 10YR1.7/1黒色シルト
 5. 10YR1.7/1黒色シルト
 6. 10YR1.7/1黒色シルト
 7. 10YR6.6明黄褐色粘土
 8. 10YR2.2黒褐色シルト
 9. 10YR2.1黒褐色シルト
 10. 10YR2.2黒褐色シルト
 11. 10YR2.2黒褐色シルト
 12. 10YR3.1黒褐色シルト
 13. 10YR2.2黒褐色シルト
 14. 10YR2.1黒色シルト
 15. 10YR3.1黒褐色シルト
 16. 10YR6.6明黄褐色粘土
 17. 10YR6.6明黄褐色砂
- 以下6層まで覆土
 10YR6.6明黄褐色粘土を少し含む
 10YR6.6明黄褐色砂を含む
 10YR2.1黒色シルトを含む
 10YR6.6明黄褐色シルトを含む以下15層まで掘形
 10YR6.6明黄褐色粘土を含む
 10YR6.6明黄褐色粘土と石を含む
 10YR6.6明黄褐色砂と石を含む
 10YR6.6明黄褐色砂を含む
 10YR6.6明黄褐色砂を含む
 10YR6.6明黄褐色粘土を多く含む
 以下地山
 石を多く含む



複式炉 E L 167出土土器 (1 : 10)



竪穴 S P 190

1. 10YR6.6明黄褐色粘土
 2. 10YR6.6明黄褐色粘土
 3. 10YR3.1黒褐色シルト
- 10YR2.1黒色シルトを含む 以下2層まで柱状取戻
 10YR6.6明黄褐色粘土
 10YR3.1黒褐色シルトを少し含む
 10YR6.6明黄褐色粘土を少し含む 掘形

竪穴 S P 191

1. 10YR1.7/1黒色シルト
 2. 10YR2.1黒色シルト
 3. 10YR2.2黒褐色シルト
- 10YR6.6明黄褐色砂を含む 柱状
 10YR6.6明黄褐色砂を含む 以下掘形

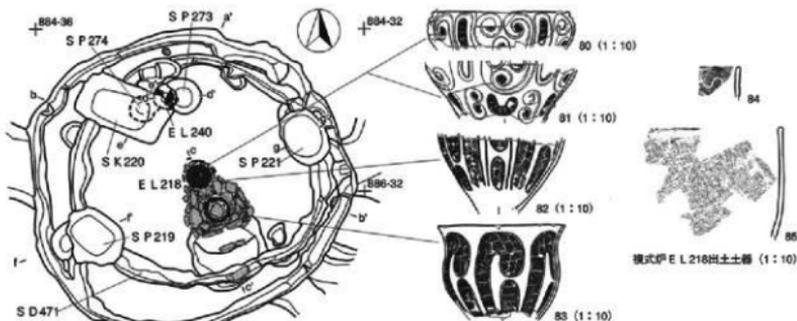
竪穴 S P 192

1. 10YR1.7/1黒色シルト
 2. 10YR6.6明黄褐色粘土
- 10YR6.6明黄褐色粘土を含む 柱状取戻
 10YR1.7/1黒色シルトを含む 掘形

竪穴 S P 193

1. 10YR2.1黒色シルト
 2. 10YR6.6明黄褐色粘土
- 10YR6.6明黄褐色粘土と10YR6.6明黄褐色砂
 と10YR3.1黒褐色シルトを含む 柱状取戻
 10YR6.6明黄褐色砂を含む 掘形

第25図 竪穴住居 S T 28



竪穴住居 S T 33

1. 10YR1.7/1黒色シルト 8層まで覆土
2. 10YR2/1黒色シルト 焼土と炭を多く含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと石を少し含む
4. 10YR2/1黒色シルト
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む 石を含む
6. 10YR1.7/1黒色シルト
7. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む 石を少し含む
8. 10YR1.7/1シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
9. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む 周溝 S D 239
10. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトを少し含む

柱穴 E L 218

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む 覆土
2. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色焼土と炭を含む 掘形
3. 10YR6/6明黄褐色シルト 以下地山
4. 10YR6/6明黄褐色シルト 石を多く含む

地床 E L 240

1. 10YR6/6明黄褐色シルト
2. 10YR1.7/1黒色シルト 炭と焼土を多く含む
3. 10YR6/6明黄褐色砂 土器を含む
4. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む

地床 E L 240, ビット S P 273

1. 10YR6/6明黄褐色シルト 4層まで E L 240
2. 10YR1.7/1黒色シルト 炭と焼土を多く含む
3. 10YR6/6明黄褐色砂 土器を含む
4. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む
5. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを少し含む 以下 S P 273
6. 10YR6/6明黄褐色砂
7. 10YR5/6黄褐色シルト
8. 10YR5/6黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトと炭を含む

陥穴 S K 220, ビット S P 274

1. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを含む S P 274
2. 10YR1.7/1黒色シルト 石を含む 以下 S K 220
3. 10YR3/1黒褐色シルト
4. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR2/1黒色シルトを含む
5. 10YR2/1黒色シルト

柱穴 S P 219, 周溝 S D 239

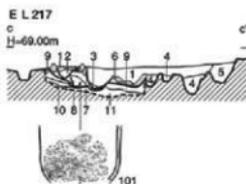
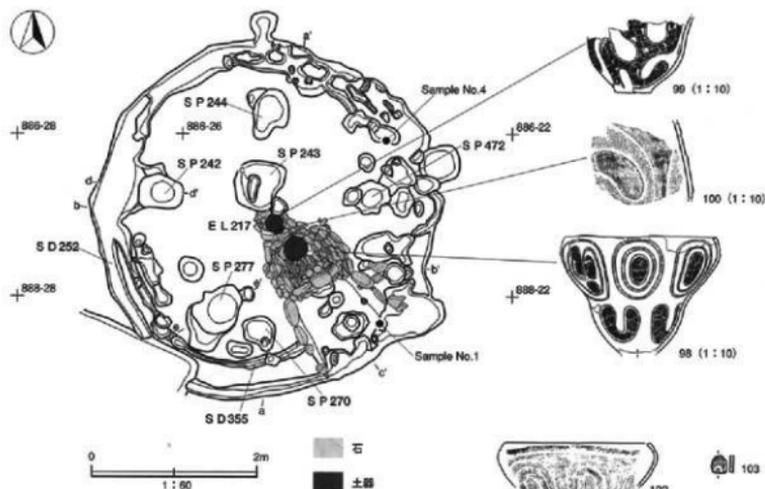
1. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む ビット
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む S D 239
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 4層まで柱床取
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と石を含む 柱床
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む 以下掘形
6. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
7. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
8. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む

柱穴 S P 221

1. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 3層まで柱床取
2. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/1黒褐色シルトを含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
4. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/1黒褐色シルトを含む 掘形

竪穴住居 S T 33出土土器 (1:10)

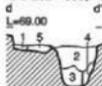
第26圖 竪穴住居 S T 33



複式坪 E L 217

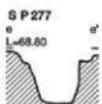
- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1. 10YR1.7/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む |
| 2. 10YR2/1黒色シルト | 焼土と炭を含む |
| 3. 10YR1.7/1黒色シルト | 炭を多く含む |
| 4. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを含む |
| 5. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを含む |
| 6. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR2/1黒色シルトを含む |
| 7. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトと焼土と炭を多く含む |
| 8. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを含む |
| 9. 10YR6/6明黄褐色シルト | 以下地山 |
| 10. 10YR6/6明黄褐色シルト | 小石を多く含む |
| 11. 10YR6/6明黄褐色シルト | |

溝 S D 252・355, S P 242

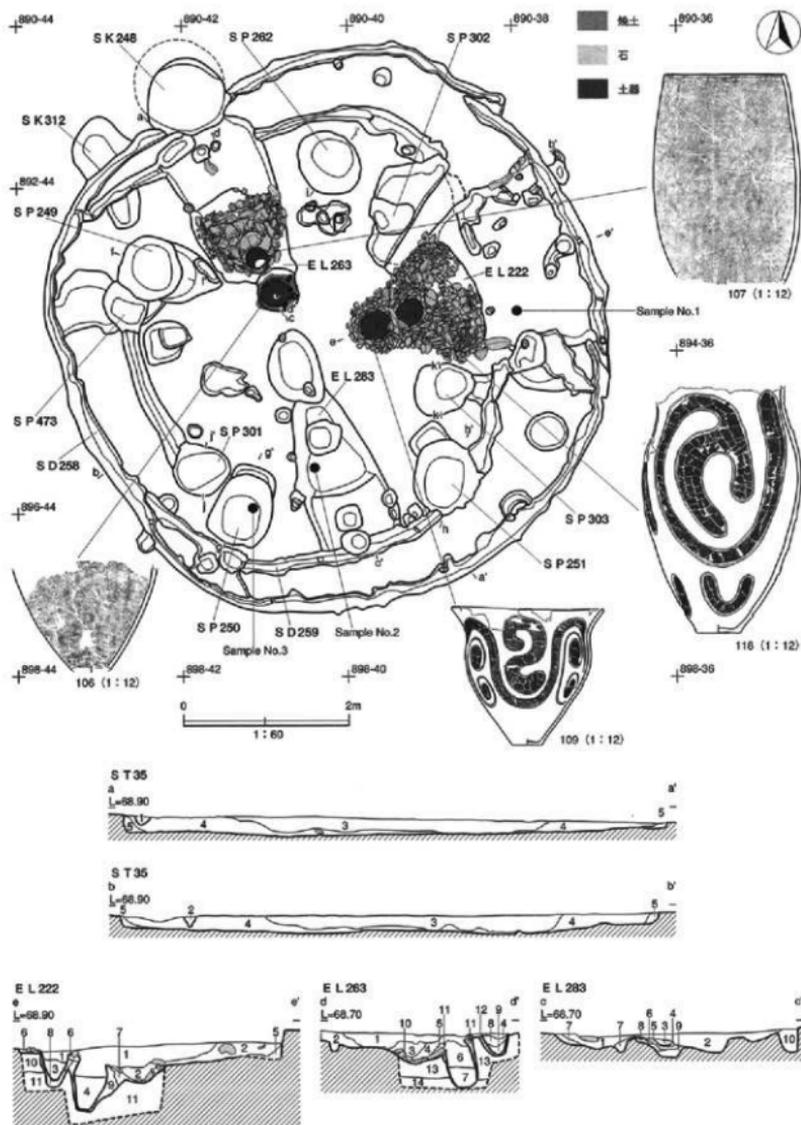


溝 S D 252・355, 柱穴 S P 242

- | | | |
|-------------------|---------------------|-------------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む | 周溝 S D 252 |
| 2. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色粘土を含む | 以下4層まで S P 242 3層まで柱状取戻 |
| 3. 10YR6/6明黄褐色シルト | 10YR3/1黒褐色シルトを含む | |
| 4. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを含む | 掘形 |
| 5. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを含む | 周溝 S D 355 |



第27図 竪穴住居 S T 34



第28図 竪穴住居 S T 35



竪穴住居 S T 35

1. 10YR3/1黒褐色シルト ビット
2. 10YR2/1黒色シルト ビット
3. 10YR1/7/1黒色シルト 以下覆土
4. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む

複式竪穴 E L 222

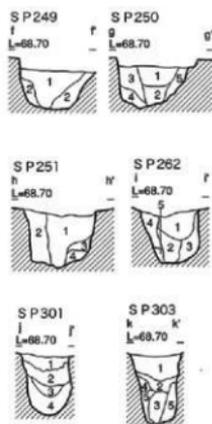
1. 10YR1/7/1黒色シルト 以下覆土
 2. 10YR2/1黒色シルト
 3. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
 4. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と焼土と灰を含む
 5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
- 周溝 S D 253
6. 10YR2/2黒褐色シルト 灰と焼土を含む 被熱 以下掘形
 7. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR1/7/1黒色シルトを含む 被熱
 8. 10YR3/1黒褐色シルト 灰と焼土を含む 被熱
 9. 10YR3/4暗褐色シルト 10YR1/7/1黒色シルトを少し含む 被熱
 10. 10YR6/6明黄褐色シルト 被熱 以下地山
 11. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR6/6明黄褐色シルトを含む 被熱

複式竪穴 E L 263

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂と石を多く含む
 2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む ビット
 3. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを含む
 4. 10YR2/1黒色シルト
 5. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトと
 6. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色砂と石を含む
7. 10YR1/7/1黒色シルト
 8. 10YR2/1黒色シルト 焼土と灰を含む
 9. 10YR1/7/1黒色シルト 灰を多く含む
 10. 10YR2/2黒褐色シルト 灰を含む 以下12層まで掘形
 11. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR2/1黒色シルトを含む 被熱
 12. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む 被熱
 13. 10YR6/6明黄褐色シルト 小石を含む 以下地山
 14. 10YR6/6明黄褐色粗砂 小石を含む

複式竪穴 E L 283

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
 2. 10YR2/1黒色シルト 以下2層まで覆土
 3. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
 4. 10YR2/1黒色シルト
 5. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR3/2黒褐色シルトを少し含む
 6. 10YR1/7/1黒色シルト 焼土層
 7. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
 8. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを少し含む
 9. 10YR3/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
 10. 10YR3/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
- 周溝 S D 259



柱穴 S P 249

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む 柱状取灰
2. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む 掘形

柱穴 S P 250

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
2. 10YR2/1黒色シルト 以下柱状取灰
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む
4. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 以下掘形
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む

柱穴 S P 251

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
2. 10YR3/1黒褐色シルト 柱状取灰
3. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と
4. 10YR1/7/1黒色シルト 10YR2/1黒色シルトを多く含む 以下掘形
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む

柱穴 S P 262

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む 以下柱状取灰
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む
3. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 以下掘形
4. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルト
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む

柱穴 S P 301

1. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを少し含む
2. 10YR2/1黒色シルト 以下柱状取灰
3. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と砂を多く含む

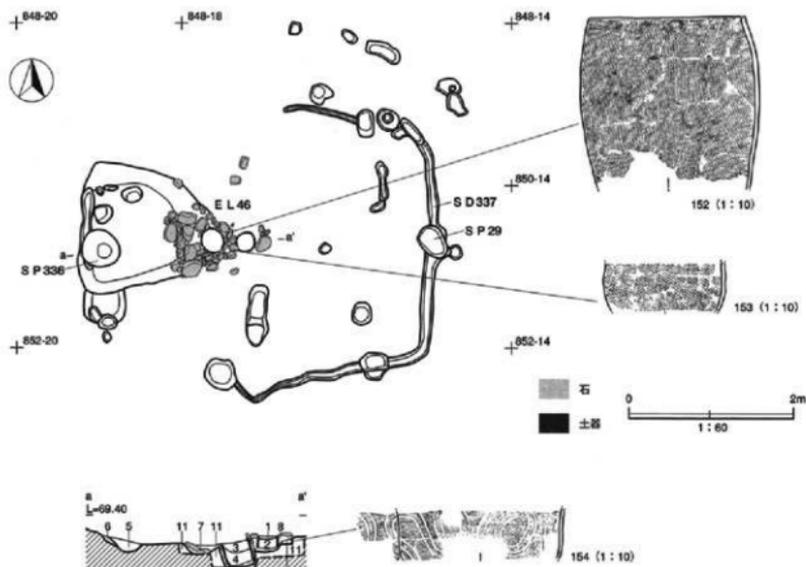
柱穴 S P 303

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
2. 10YR1/7/1黒色シルト 以下柱状取灰
3. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を多く含む
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む 以下掘形

第29図 竪穴住居 S T 35

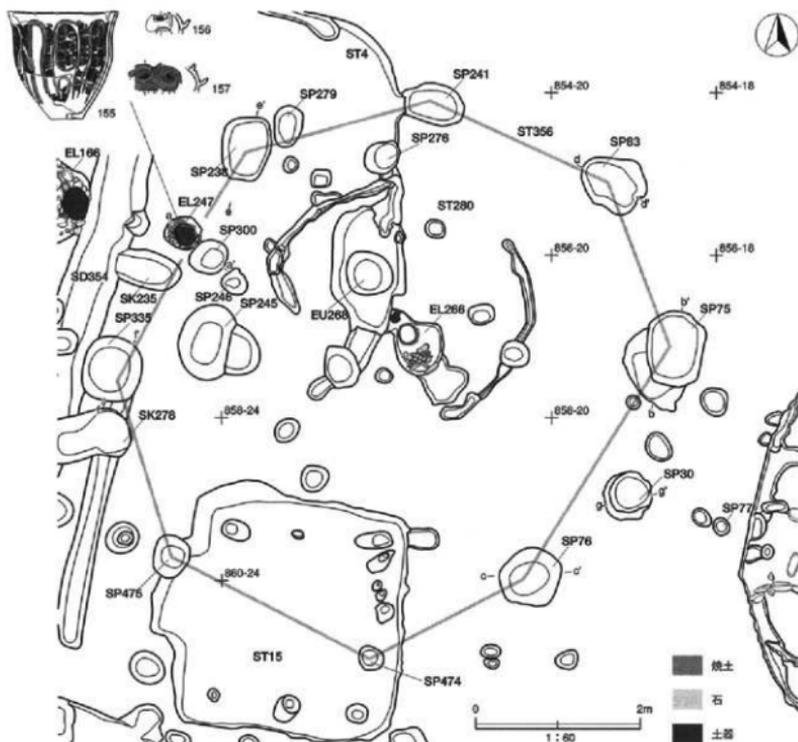


第30図 竪穴住居 S T 50

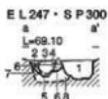


竈式炉 E L 46、柱穴 S P 336、周溝 S D 337

- | | | |
|-------------------|-----------------------|------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトと焼土を含む | 以下4層までE L 46の覆土 |
| 2. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む | |
| 3. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む | |
| 4. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む | |
| 5. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む | ビット S P 336 |
| 6. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む | 周溝 S D 337 |
| 7. 10YR6/6明黄褐色シルト | 10YR2/1黒色シルトを含む | 以下10層までE L 46の掘形 |
| 8. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 炭を含む | |
| 9. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 10YR2/3黒褐色シルトと炭と焼土を含む | |
| 10. 10YR3/1黒褐色シルト | 10YR6/6明黄褐色粘土と炭と焼土を含む | |
| 11. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 以下地山 | |
| 12. 10YR6/6明黄褐色砂 | 石を多く含む | |



複式炉 E L 247・ピット S P 300



- | | | |
|-------------------|--------------------------|------------------|
| 1. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む | S P 300 |
| 2. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む | 以下5層までE L 247 覆土 |
| 3. 10YR2/1黒色シルト | 10YR6/6明黄褐色シルトのブロックを多く含む | |
| 4. 10YR6/6明黄褐色シルト | 10YR2/1黒色シルトのブロックを含む | |
| 5. 10YR2/1黒色シルト | | |
| 6. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 10YR2/1黒色シルトを含む | 竈形 |
| 7. 10YR6/6明黄褐色粘土 | 以下地山 | |
| 8. 10YR6/6明黄褐色砂 | 小石を多く含む | |



柱穴 S P 75

- | | | |
|-------------------|------------------------------|----------------|
| 1. 10YR2/1黒色シルト | 土器片を含む | 以下2層まで別の土坑 |
| 2. 10YR1.7/1黒色シルト | 10YR6/4に黄褐色シルトのブロックと竈と土器片を含む | |
| 3. 10YR1.7/1黒色シルト | 竈を含む | 以下 S P 75 柱採取根 |
| 4. 10YR1.7/1黒色シルト | 10YR6/4に黄褐色シルトを含む | 竈形 |



柱穴 S P 75出土土器 (1:10)



柱穴 S P 241出土土器 (1:6)

S P 76



柱穴 S P 76

1. 10YR1.7/1黒色シルト 柱根
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/6黄褐色シルトのブロックを含む 以下掘形
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/6黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/6黄褐色シルトの大ブロックを含む
5. 10YR5/6黄褐色シルト
6. 10YR2/1黒色シルト



柱穴 S P 76出土土層 (1:6)

S P 83



柱穴 S P 83

1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックを含む
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトを層状に含む
4. 10YR2/1黒色砂質シルト
5. 10YR3/3暗褐色砂
6. 10YR1.7/1黒色シルト

S P 238



柱穴 S P 238

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む 柱根取直
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと石を多く含む 以下掘形

S P 335



柱穴 S P 335

1. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む 柱根
2. 10YR6/6明黄褐色シルト 以下掘形
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトのブロックを含む

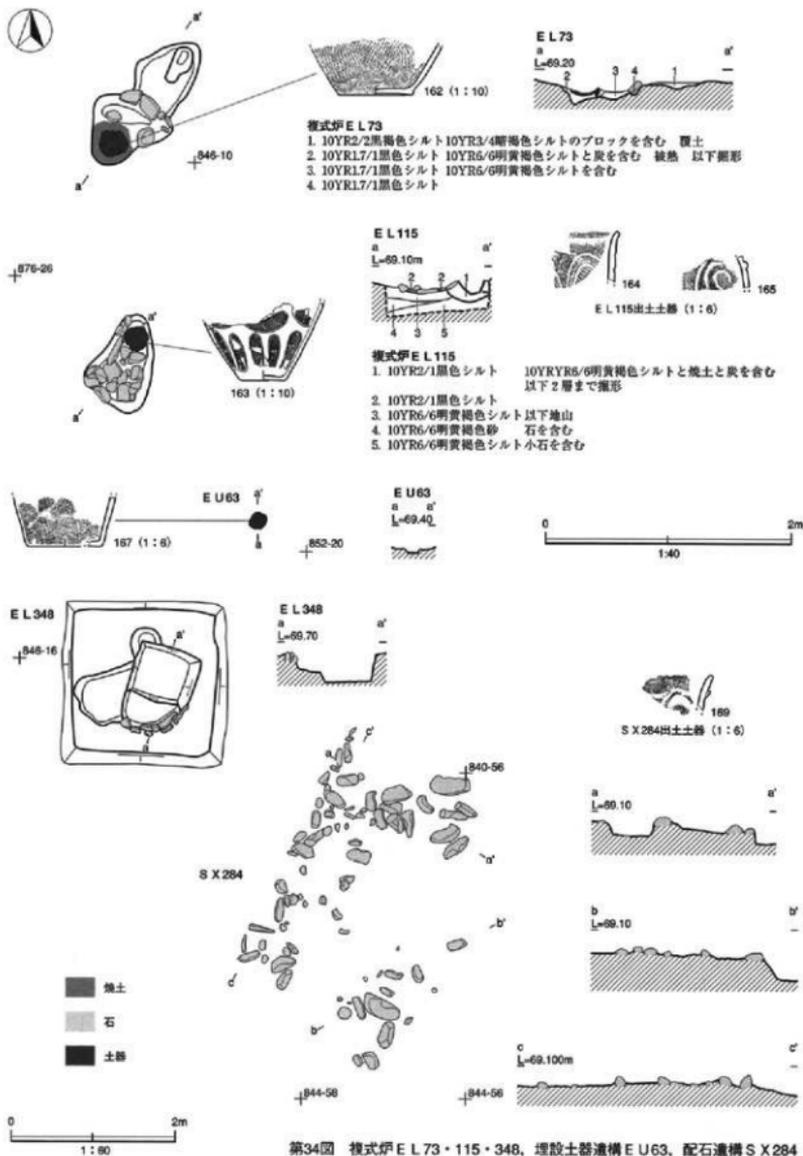
S P 30



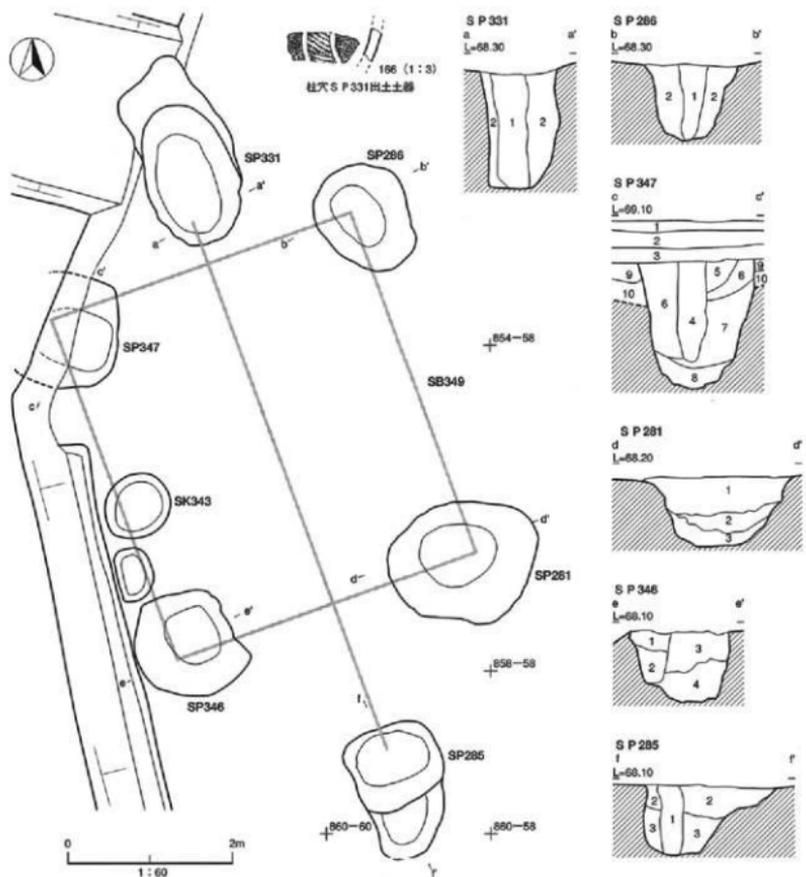
柱穴 S P 30

1. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックを少し含む 柱根取直
2. 10YR3/1黒褐色砂質シルト 10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックを少し含む 掘形





第34図 複式炉 E L 73・115・348、埋設土器遺構 E U 63、配石遺構 S X 284



柱穴 S P 281

- 10YR1.7/1黒色シルト 石を多く含む
- 10YR1.7/1黒色粘土 焼土を少し含む
- 10YR1.7/1黒色粘土 石を含む

柱穴 S P 286

- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 石を含む 以下擬形
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2.3黒褐色砂と石を含む

柱穴 S P 286

- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2.3黒褐色砂と石を多く含む 擬形

柱穴 S P 331

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2.1黒色シルトを含む 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2.1黒色シルトと砂を含む 擬形

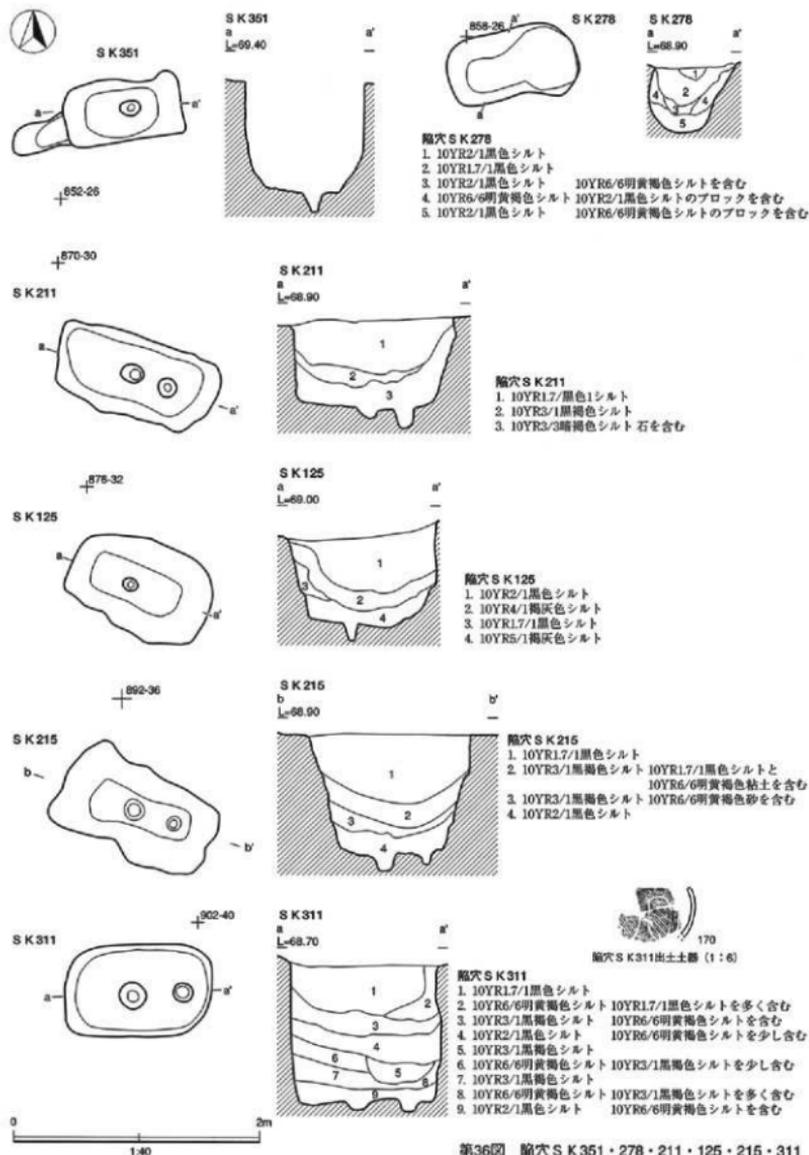
柱穴 S P 346

- 10YR1.7/1黒色シルト 以下擬形
- 10YR1.7/1黒色シルト 石を含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR2.3黒褐色シルトと石を含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 石を含む

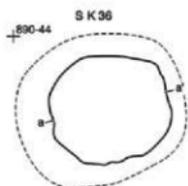
柱穴 S P 347

- 10YR2.1黒色シルト 灰土
- 10YR2.2黒褐色シルト 団灰土
- 10YR2.1黒色シルト 団灰土
- 10YR1.7/1黒色シルト 石を少し含む 柱根
- 10YR1.7/1黒色シルト 以下擬形
- 10YR2.3暗褐色シルトと石を多く含む
- 10YR3.3暗褐色シルト 石を多く含む
- 10YR1.7/1黒色シルト
- 10YR2.1黒色シルト 遺物包含層
- 10YR4.3/1灰褐色シルト 石を多く含む 地山

第35図 掘立柱建物 S B 349



第36図 船穴 S K 351・278・211・125・215・311

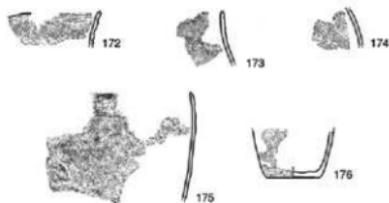
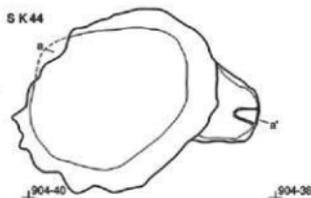


貯蔵穴 S K 36出土土器 (1 : 10)

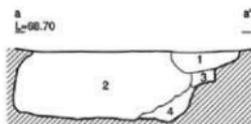


貯蔵穴 S K 36

1. 10YR3/1黒褐色シルト
2. 10YR2/1黒色シルト
3. 10YR1.7/1黒色シルト
4. 10YR1.7/1黒色シルト
5. 10YR2/1黒色シルト
6. 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む焼土を含む
7. 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
8. 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
9. 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む
10. 10YR6/6明黄褐色粘土を多く含む

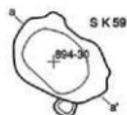


貯蔵穴 S K 44出土土器 (1 : 10)



貯蔵穴 S K 44

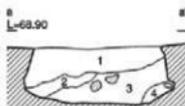
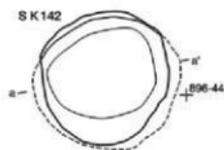
1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR2/1黒色シルト
3. 10YR5/1褐灰色シルト
4. 10YR2/1黒色シルト
5. 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
6. 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR2/1黒色シルトを多く含む
7. 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR2/1黒色シルトを多く含む
8. 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR2/1黒色シルトを多く含む



貯蔵穴 S K 59

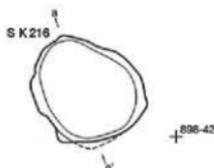
1. 10YR2/2黒褐色シルト焼土と炭を多く含む
2. 10YR1.7/1黒色シルト
3. 10YR1.7/1黒色シルト
4. 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
5. 10YR1.7/1黒色シルト
6. 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む





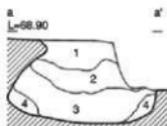
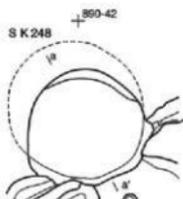
貯蔵穴 S K 142

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR3/1黒褐色シルトと石を含む
2. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/1黒色シルトを少し含む
3. 10YR2/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と10YR2/1黒色シルトを多く含む
4. 10YR2/1黒褐色シルト



貯蔵穴 S K 216

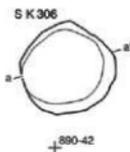
1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
2. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を少し含む



貯蔵穴 S K 248出土土層 (1:6)

貯蔵穴 S K 248

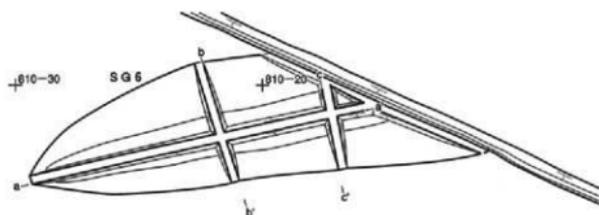
1. 10YR2/1黒色シルト 石を含む
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土と燧土と炭を含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
4. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む



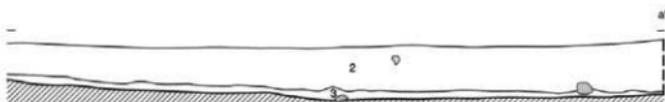
貯蔵穴 S K 306

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
2. 10YR1.7/1黒色シルト
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む





SG 6
a
L=69.10m



b
L=69.10



c
L=69.10m



川跡 SG 6

1. 10YR1.7/1黒色シルト 礫を少し含む 以下覆土
2. 10YR2/1黒色シルト 砂利と礫を少し含む
3. 10YR2/3黒褐色シルト 砂利を少し含む
4. 10YR2/2黒褐色シルト 砂利と礫を多く含む
5. 10YR3/1黒褐色シルト 礫を多く含む



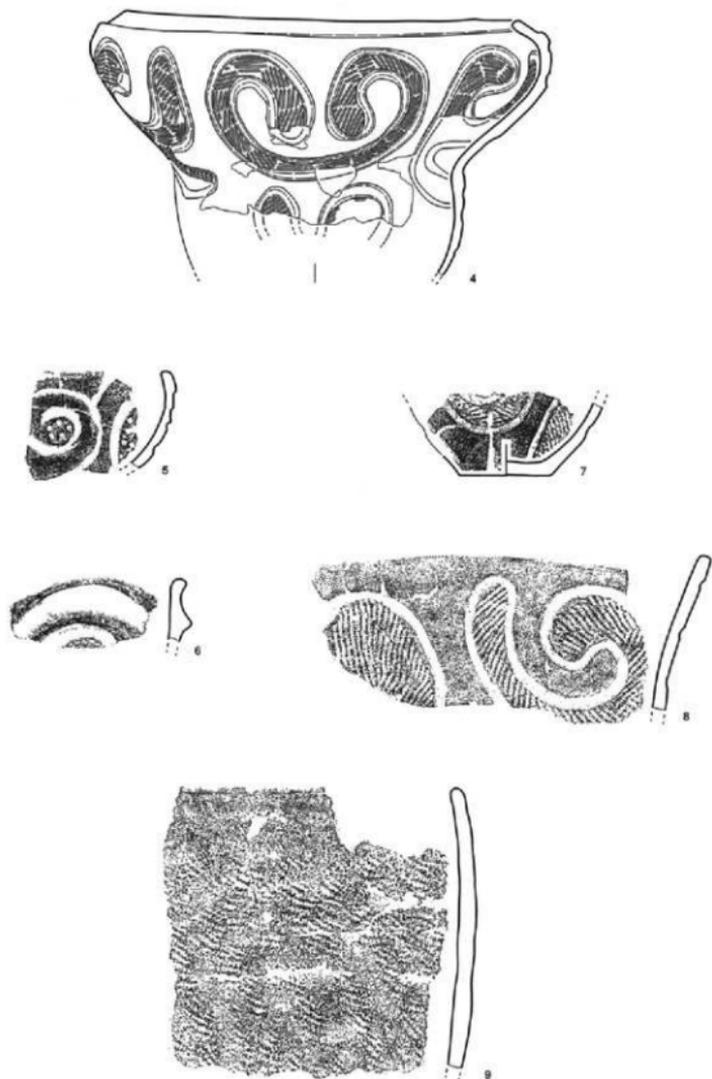
川跡 SG 6 出土土器 (1:3)



第39図 川跡 SG 6

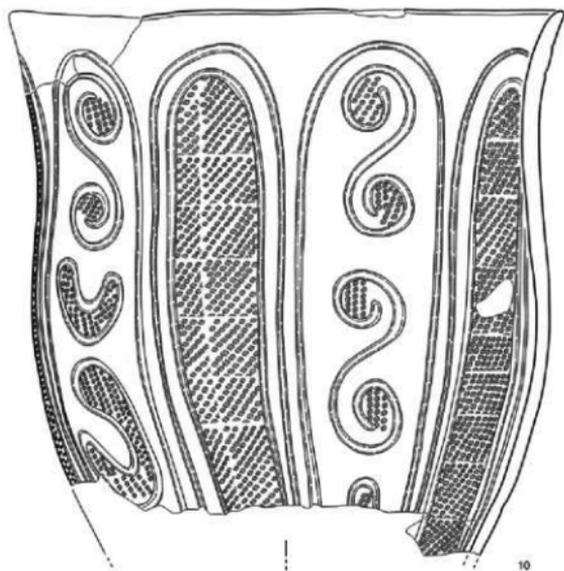


第40図 竪穴住居ST1の模式埴E L 87埋設土器

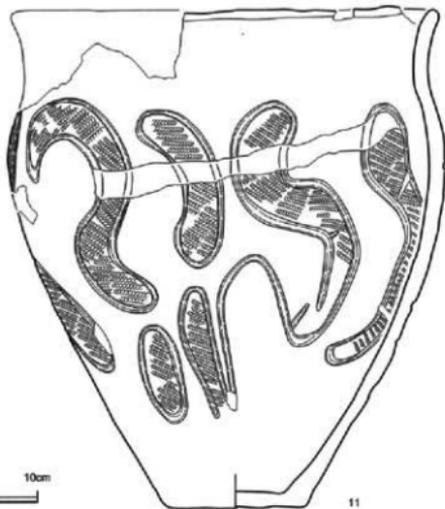


周溝 S D 126 4
竪穴住居 S T 1 5~9

第41図 竪穴住居 S T 1 とその周溝 S D 126 出土土器



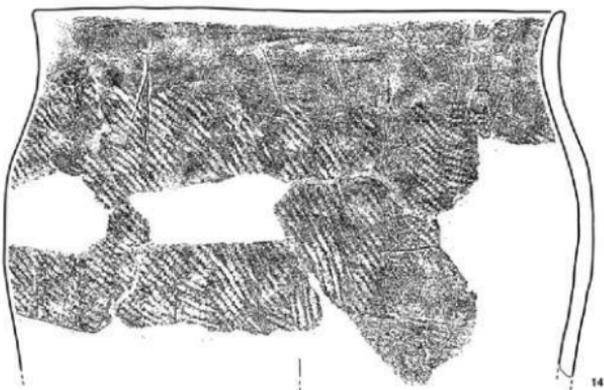
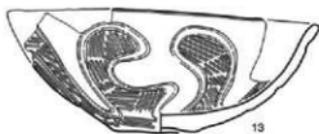
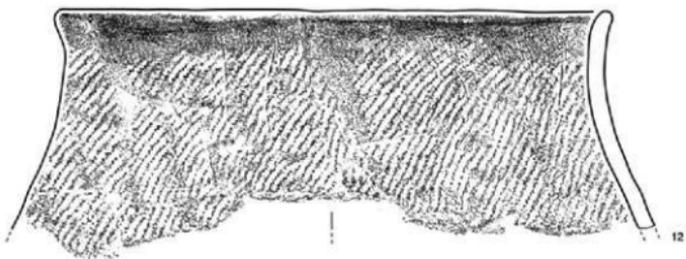
10



11

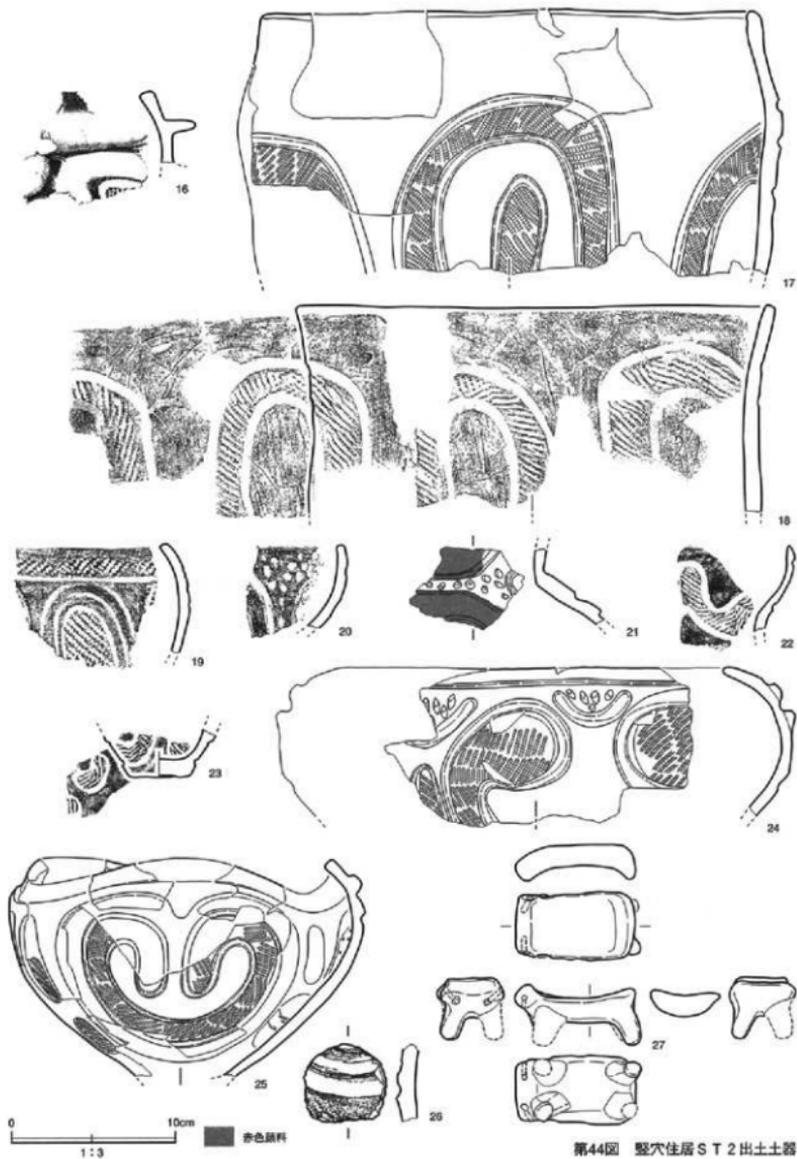


第42図 竪穴住居ST2の模式炉EL92埋設土器

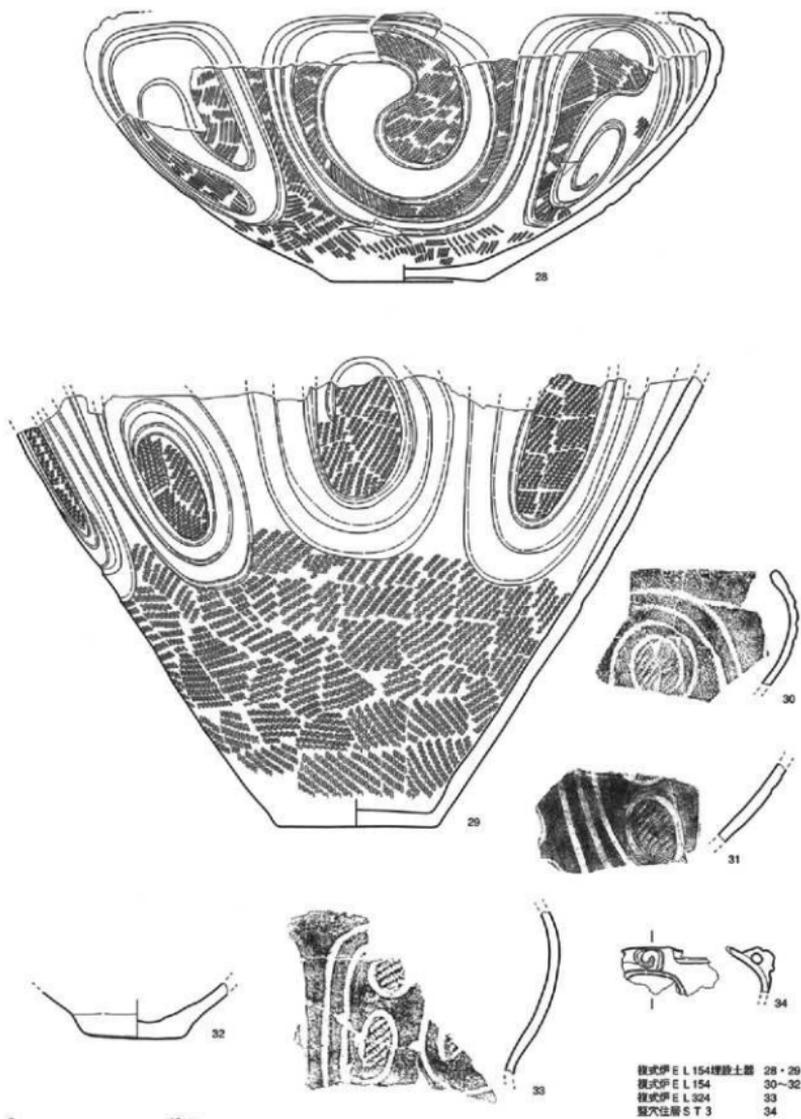


模式伊 E L 92埋没土器	12
模式伊 E L 92	13・14
模式伊 E L 352	15

第43図 竪穴住居 S T 2 の模式伊 E L 92・352の出土土器

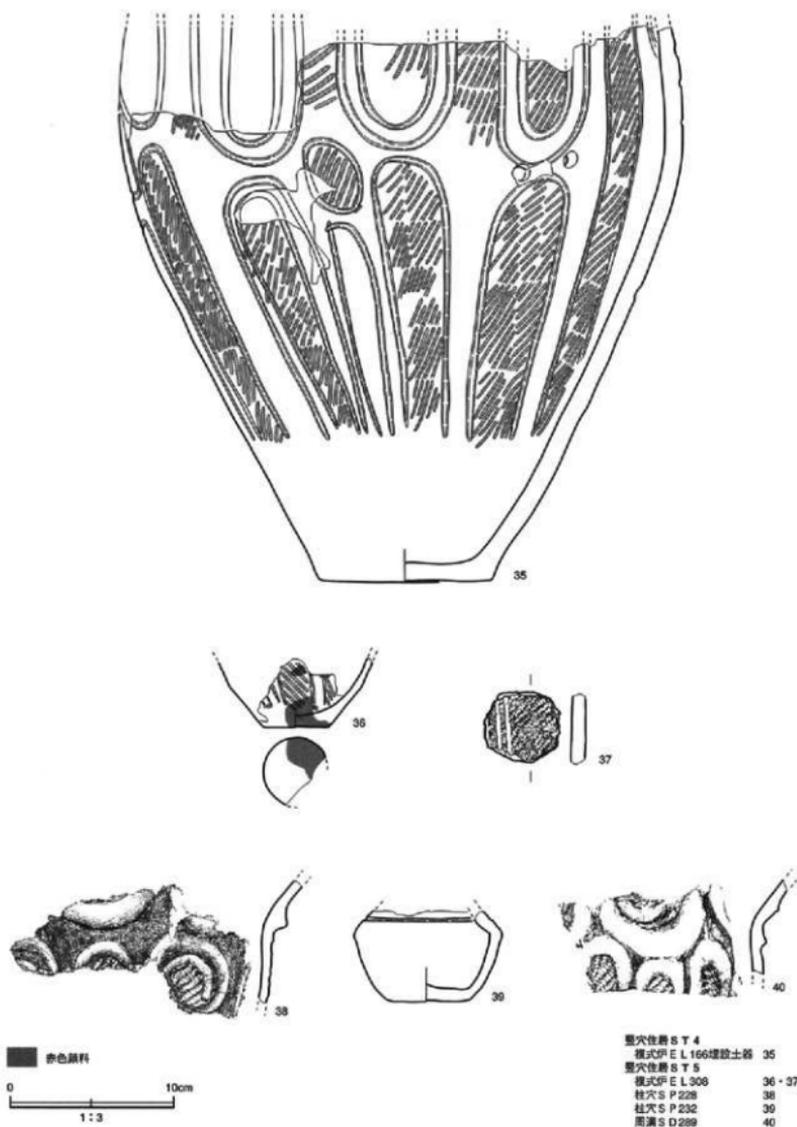


第44図 竪穴住居ST2出土土器



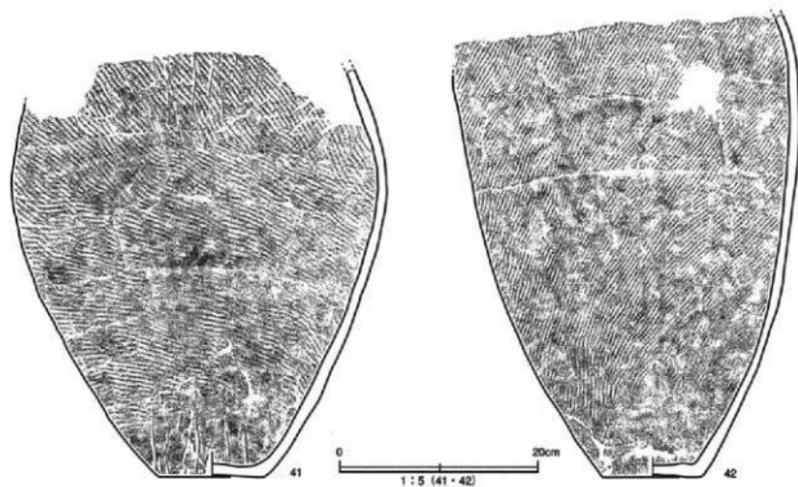
様式伊 E L 154 埋没土器 28・29
 様式伊 E L 154 30～32
 様式伊 E L 324 33
 竪穴住居 S T 3 34

第45図 竪穴住居 ST 3 とその様式伊 E L 154・324 出土土器

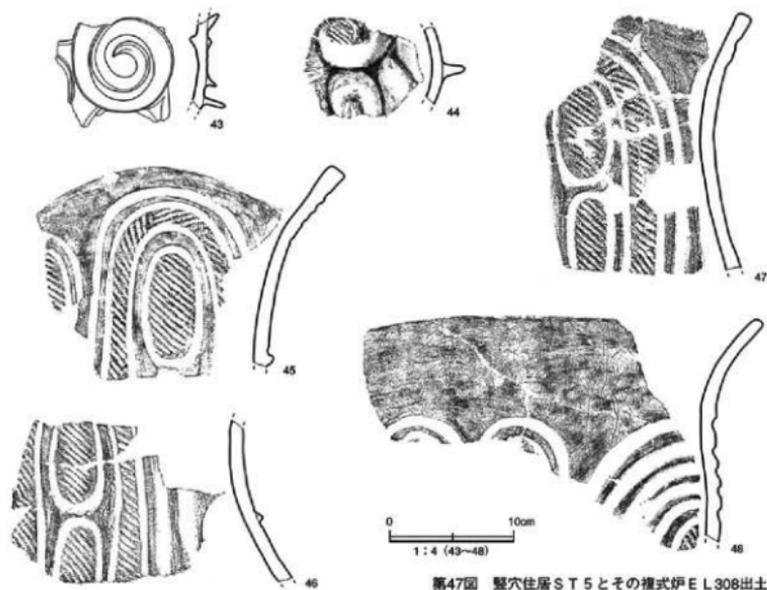


竪穴住居 S T 4	
模式炉 E L 166埋設土器	35
竪穴住居 S T 5	
模式炉 E L 308	36・37
柱穴 S P 228	38
柱穴 S P 232	39
周溝 S D 289	40

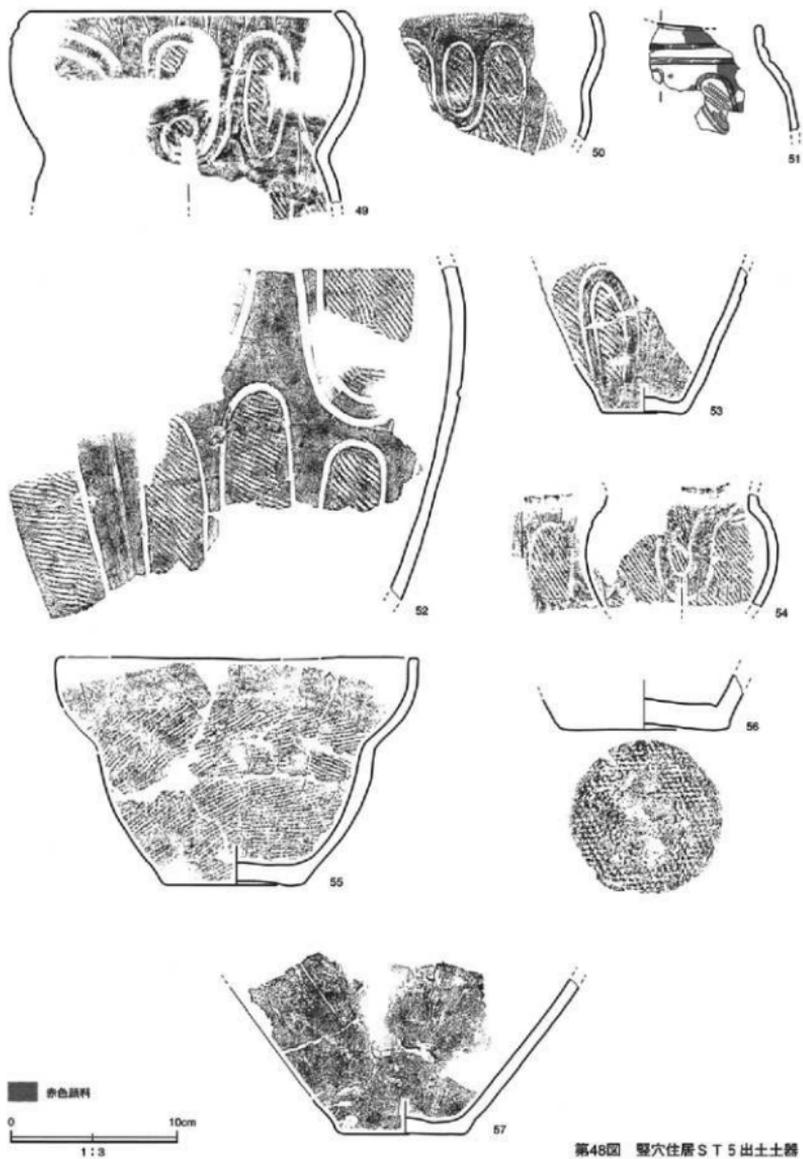
第46図 竪穴住居 S T 4 の模式炉埋設土器と竪穴住居 S T 5 の模式炉・柱穴・周溝出土土器



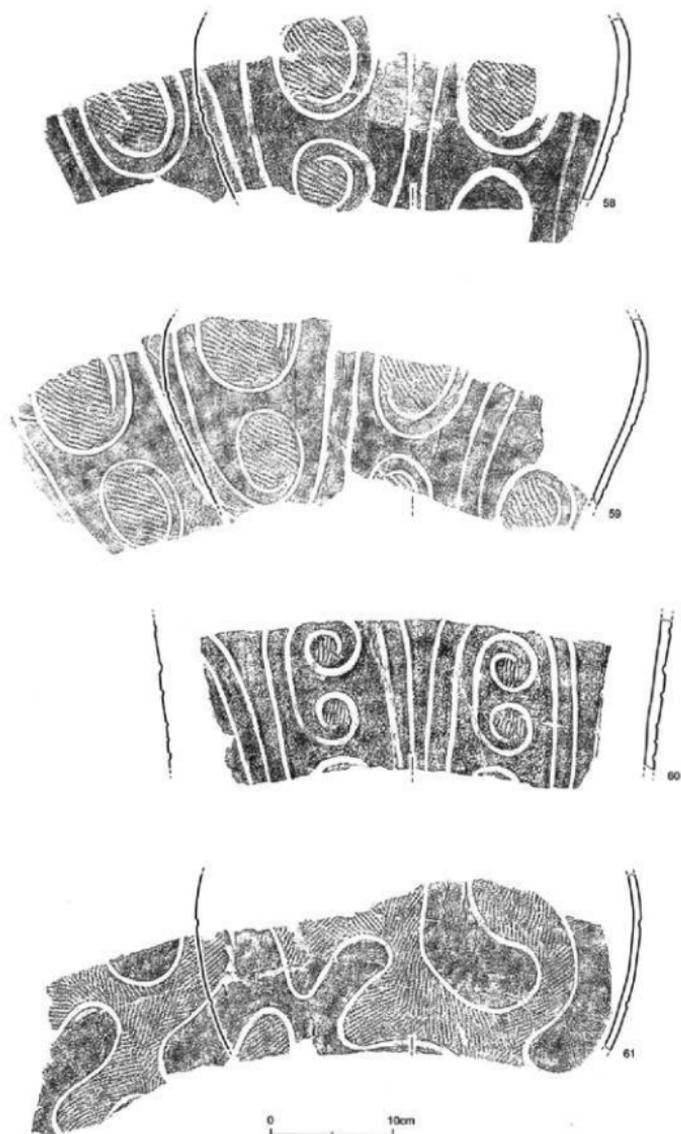
模式伊 E L308埋藏土器 41・42
 竪穴住居 S T 5 43~48



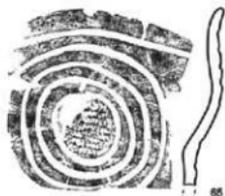
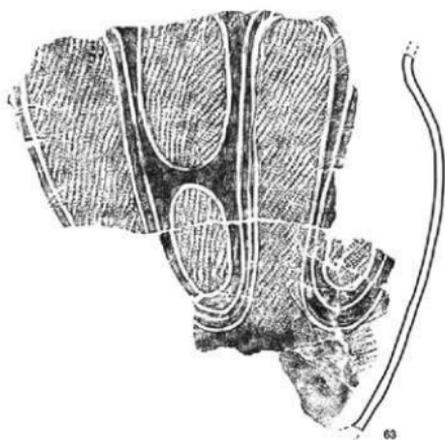
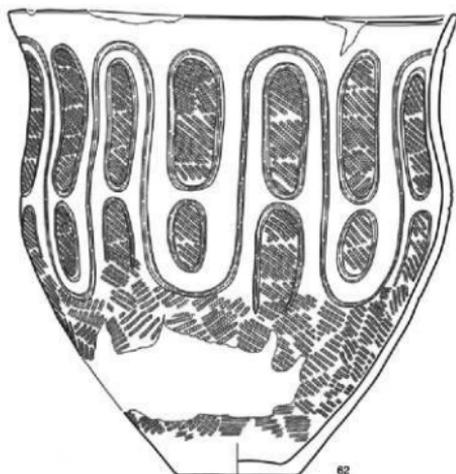
第47図 竪穴住居 S T 5 とその模式伊 E L308出土土器



第48図 聖穴住居ST5出土土器



第49図 竪穴住ST9の複式炉E L136埋設土器

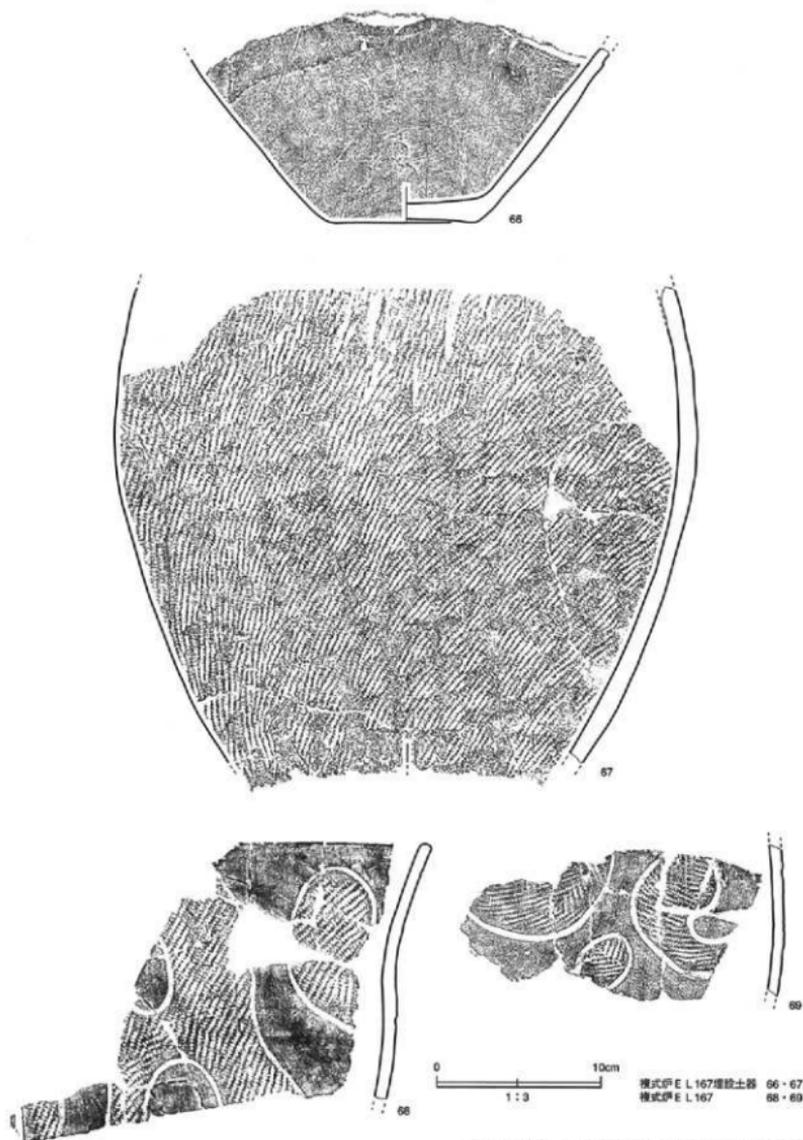


■ 赤色顔料

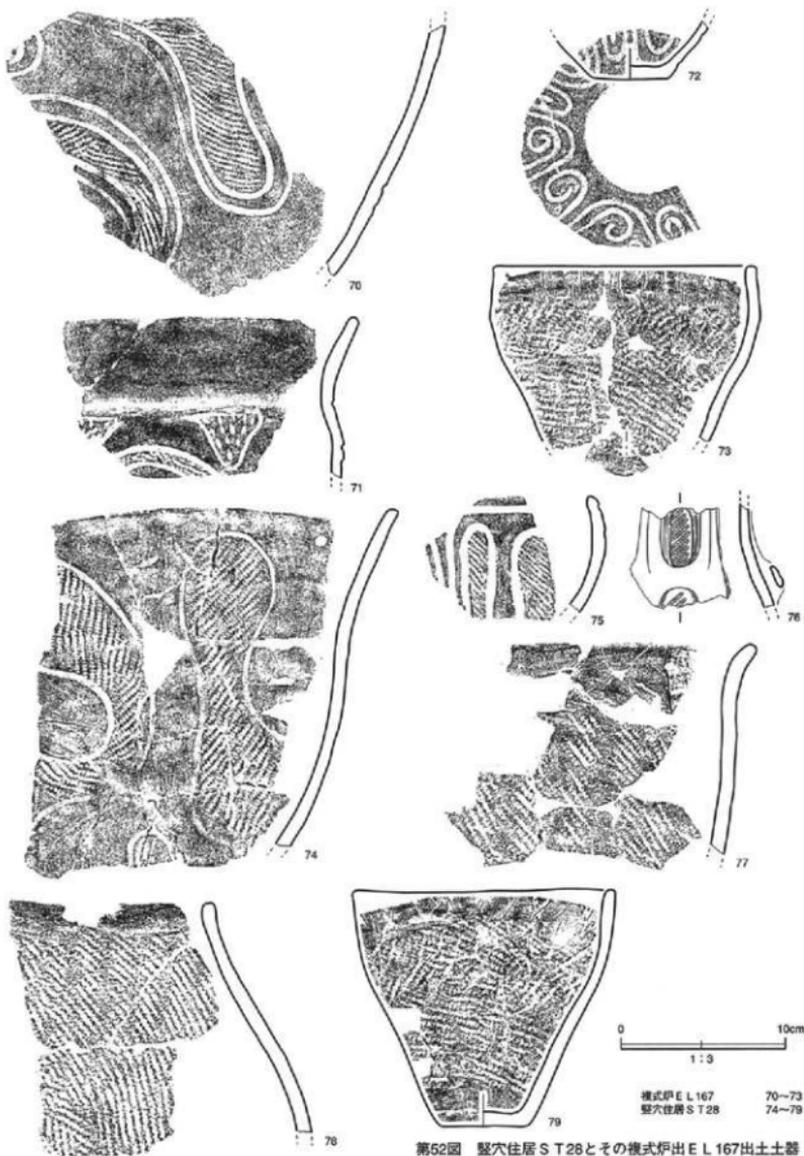


複式炉 E L 136 埋設土器 62・63
 竪穴住居 S T 9 64・65

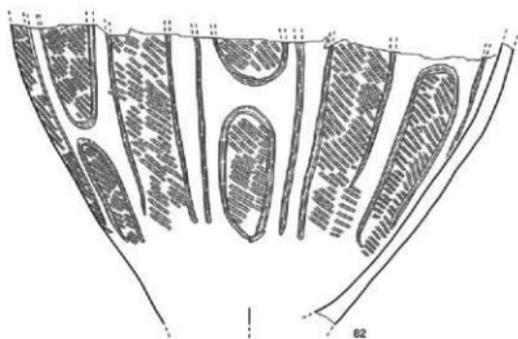
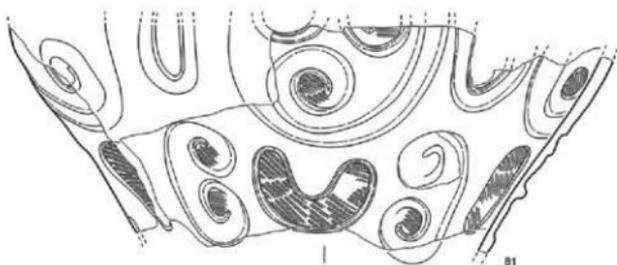
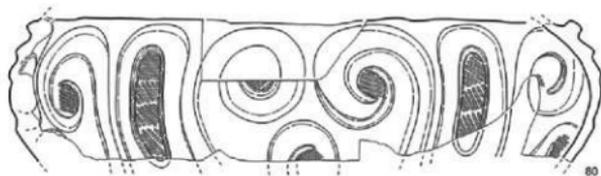
第50図 竪穴住居 S T 9 とその複式炉 E L 136 埋設土器



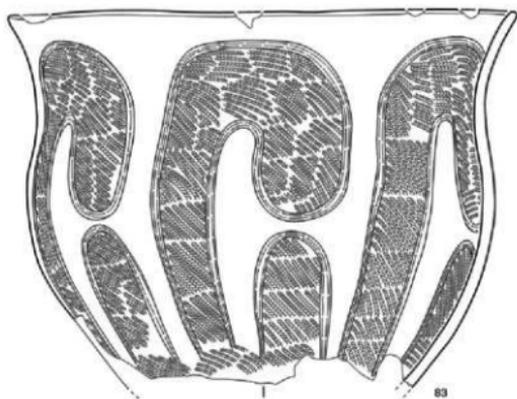
第51図 竪穴住居 S T 28 の複式伊 E L 167 出土土器



第52図 竪穴住居 S T 28とその複式炉出 E L 167出土土器



第53図 竪穴住居S T 33の複式炉E L 218埋設土器



83



84

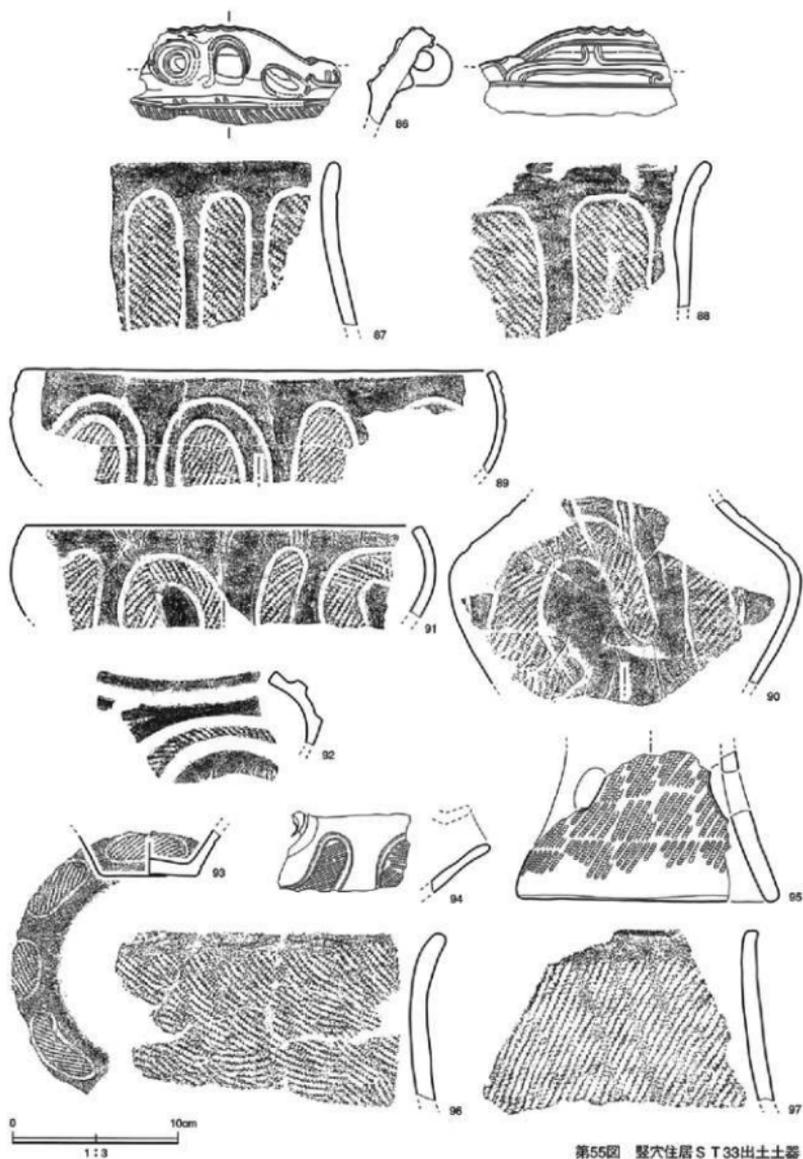


85

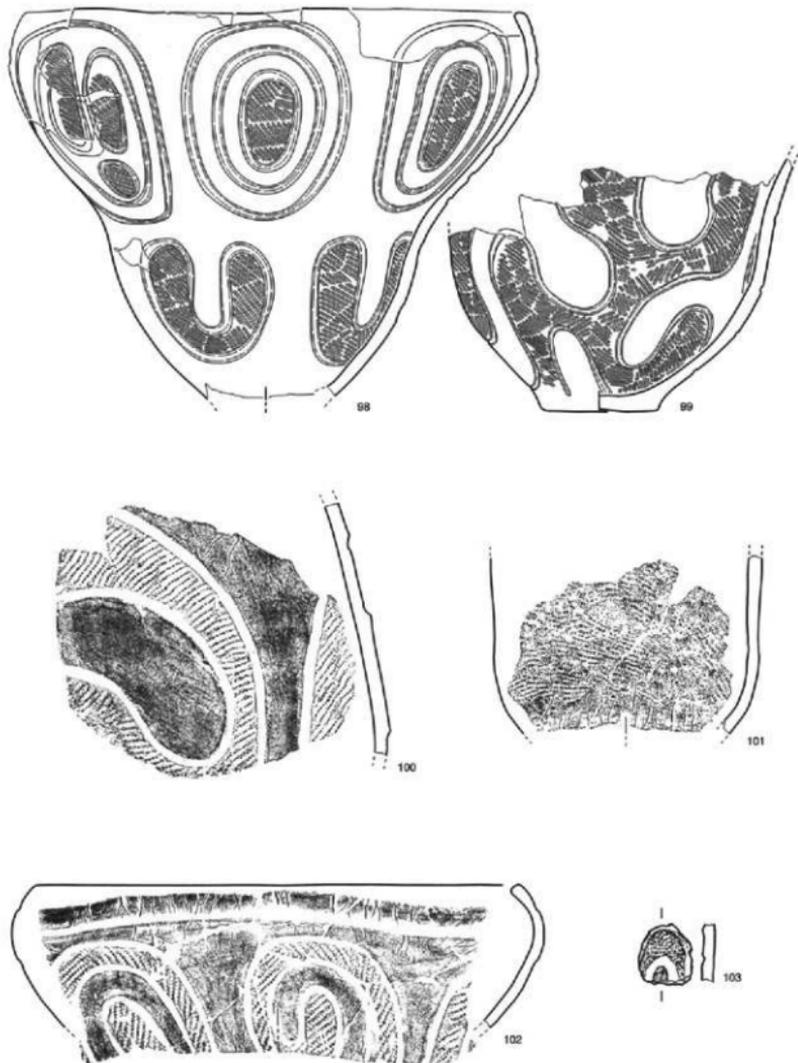


複式炉 E L 218 壁段土器 83
複式炉 E L 218 84・85

第54図 壑穴住居 S T 33の複式炉 E L 218出土土器

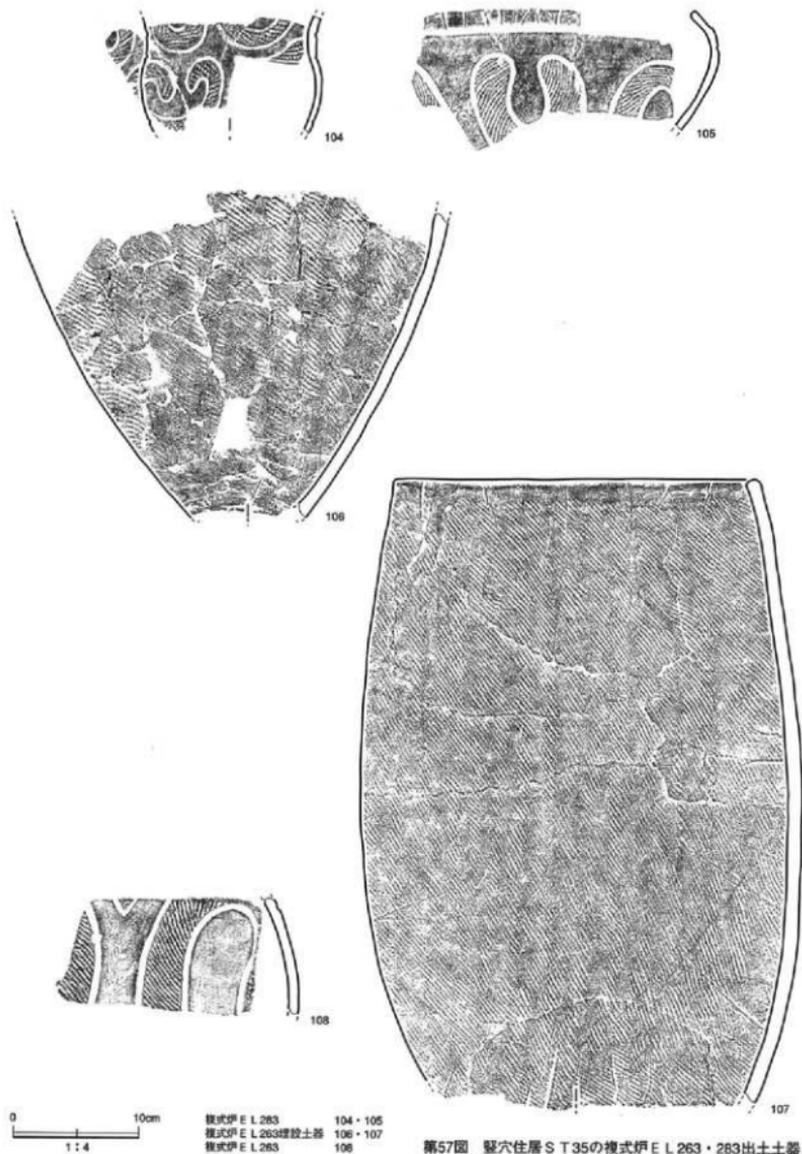


第55図 竪穴住居 S T 33出土土器



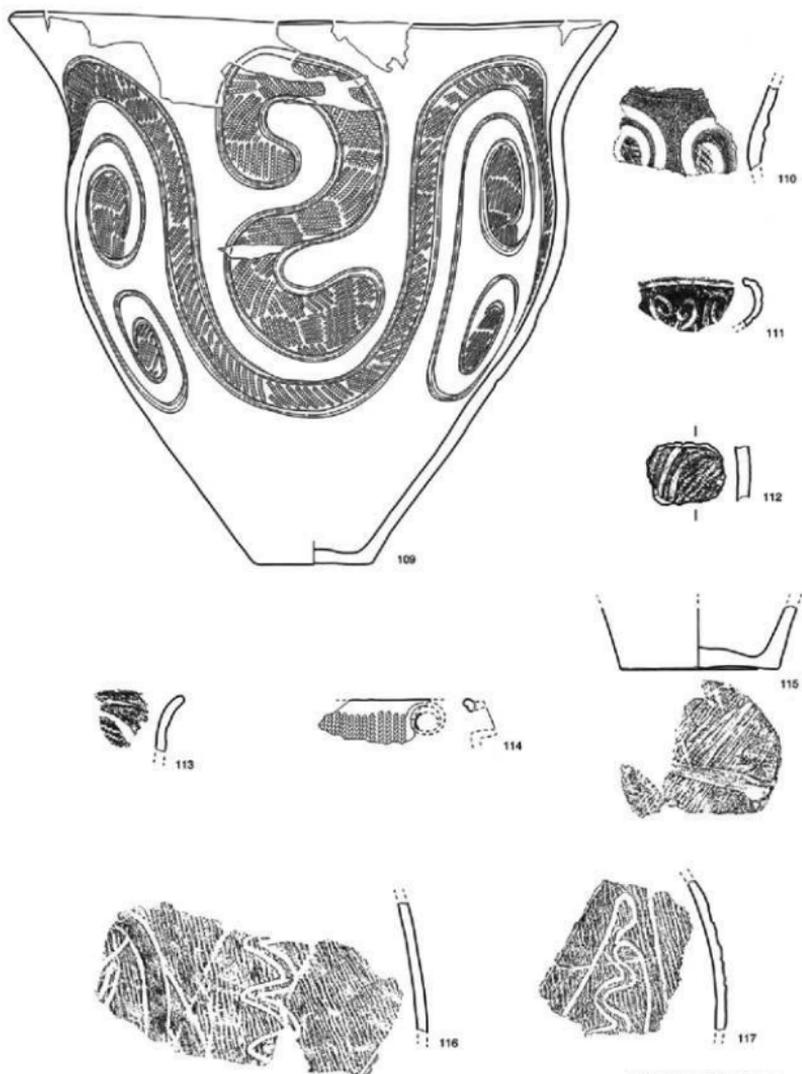
後式伊 E L217埋設土器 98-101
 竪穴住居 S T 34 102-103

第56図 竪穴住居 S T 34とその複式炉 E L 217出土土器



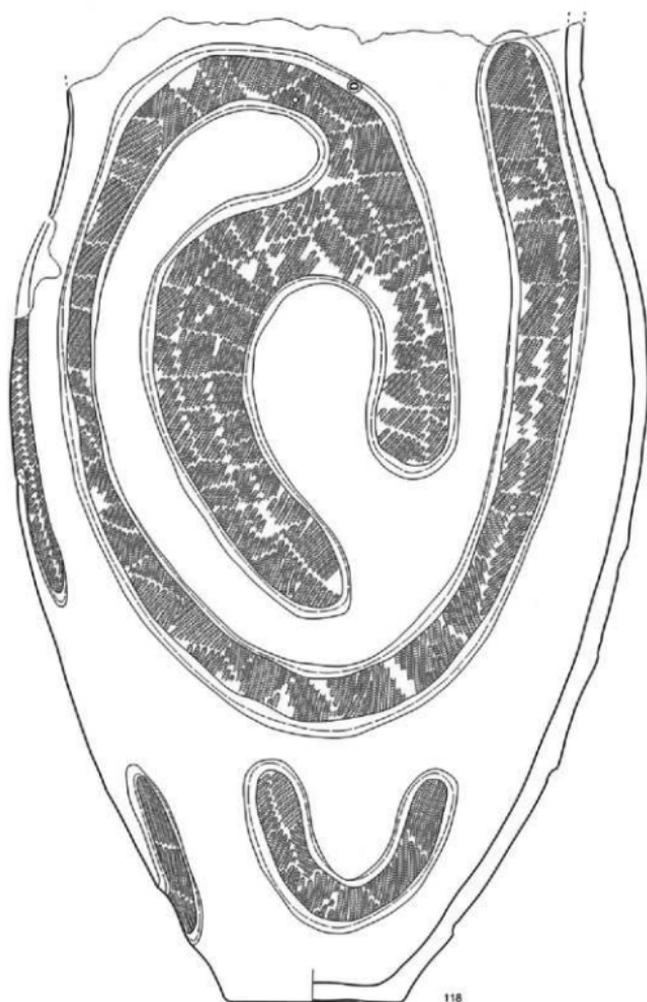
複式伊 E L 263	104・105
複式伊 E L 263 埋設土器	106・107
複式伊 E L 263	108

第57図 竪穴住居 S T 35 の複式伊 E L 263・263 出土土器

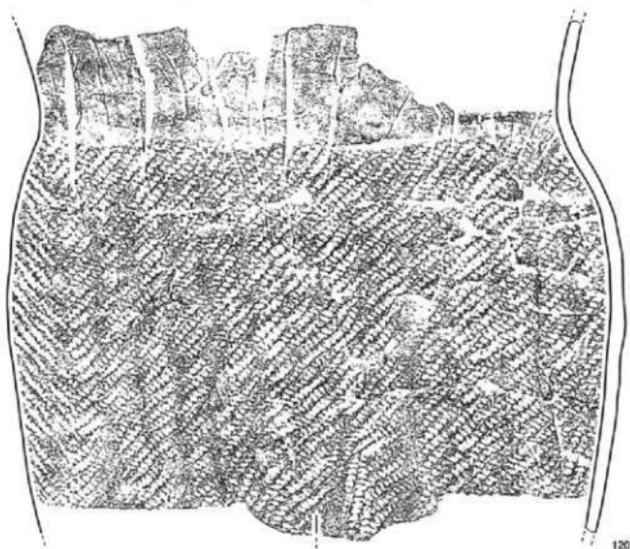
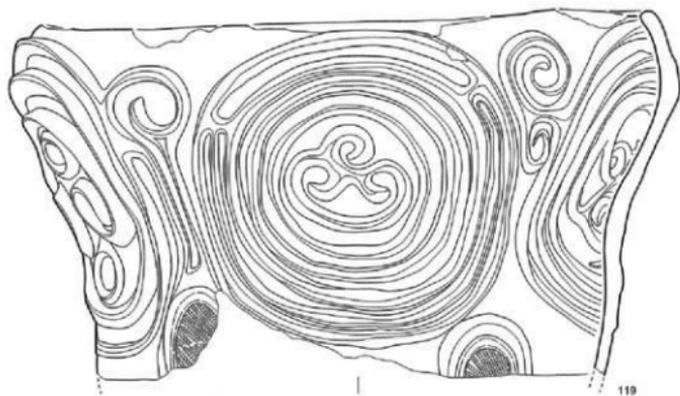


様式炉 E L 222埋設土器 109
 様式炉 E L 222 110~112
 竪穴住居 S T 35 113~117

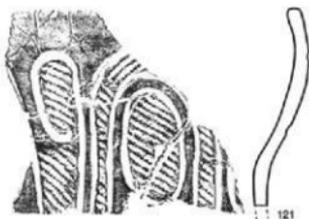
第58図 竪穴住居 S T 35とその様式炉 E L 222出土土器



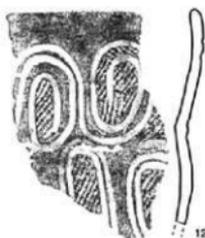
第59図 竪穴住居 S T 35 の複式伊 E L 222 埋設土器



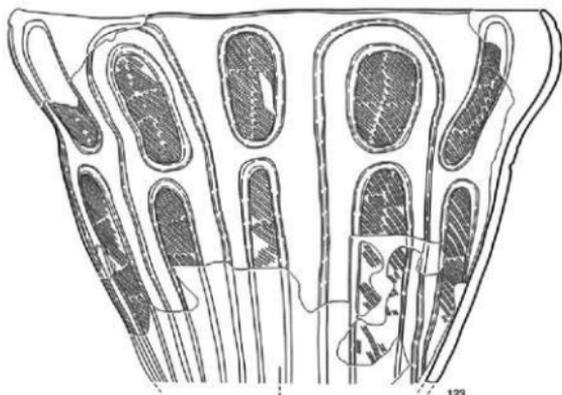
第60図 竪穴住居 S T 50の模式炉 E L 74埋設土器



121



122



123



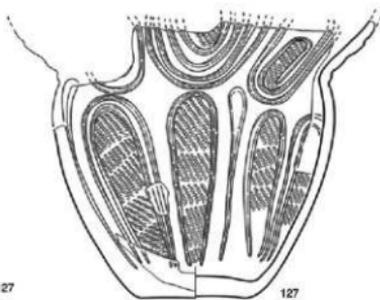
124



125



126



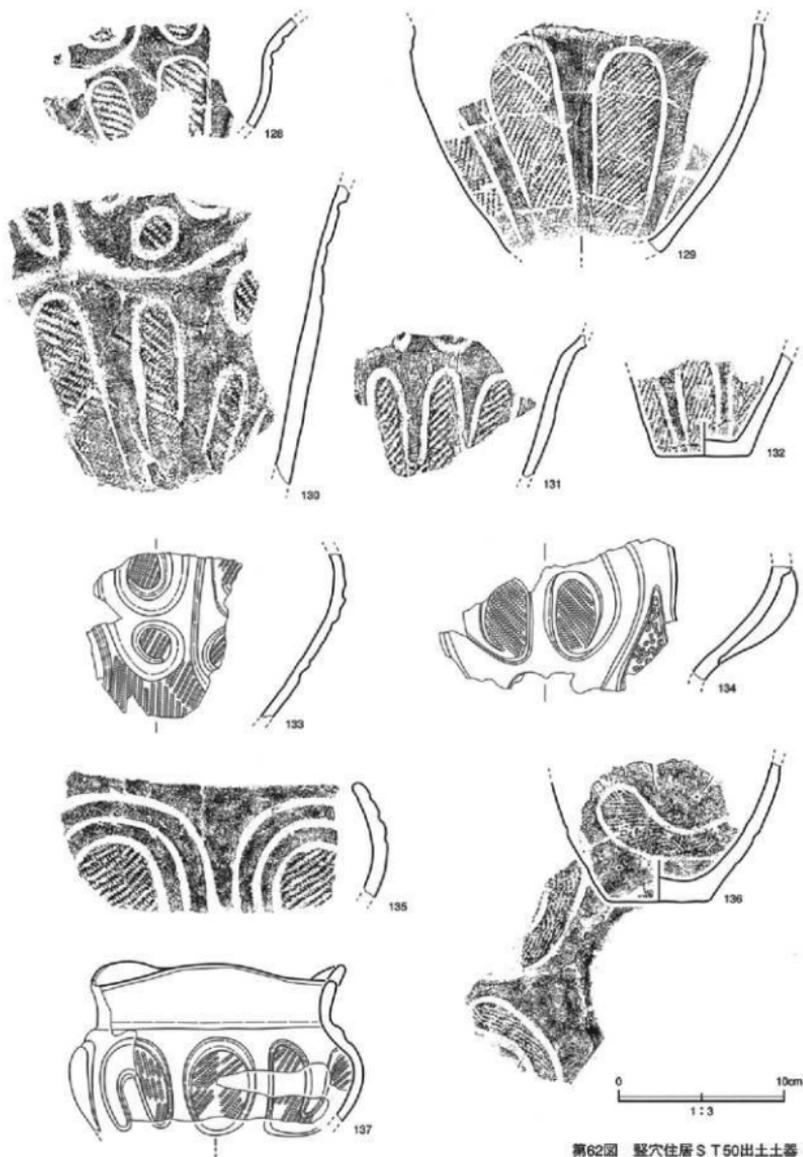
127

■ 赤色原料

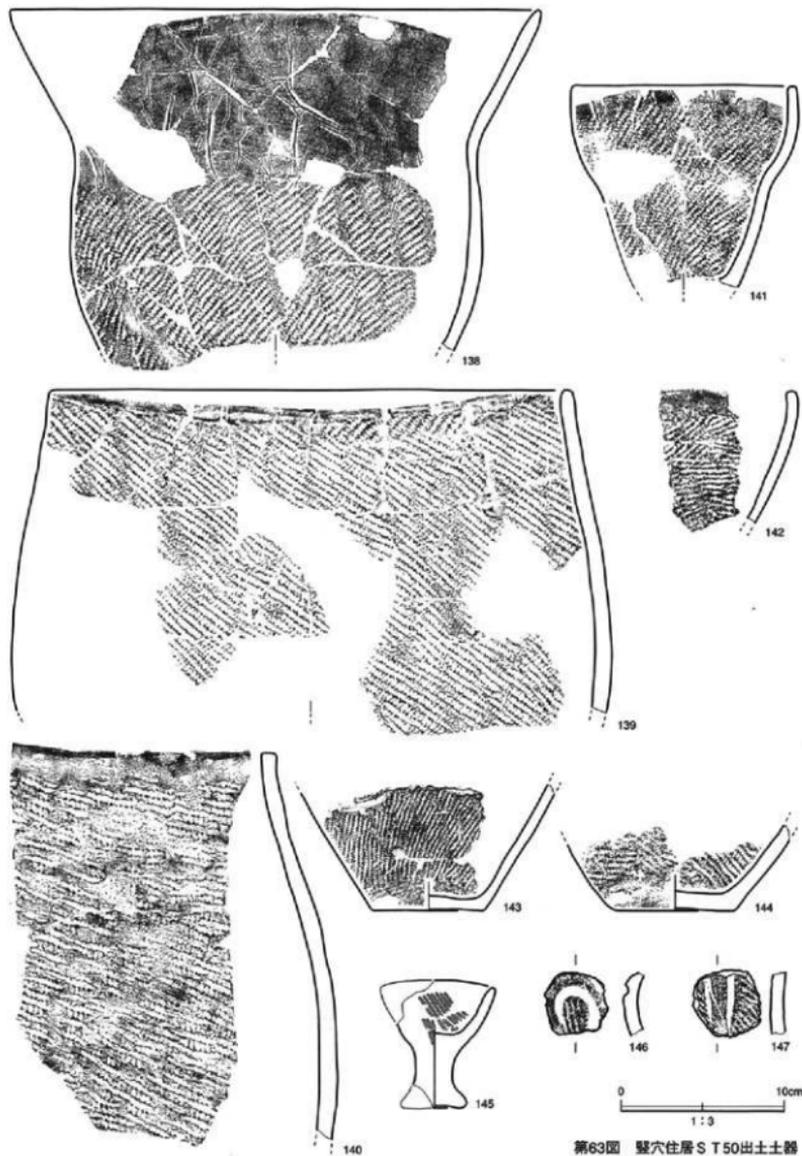


複式炉 E L 74 121
柱穴 S P 91 122
竪穴住居 S T 50 123-127

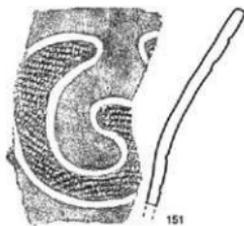
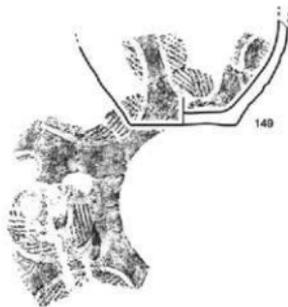
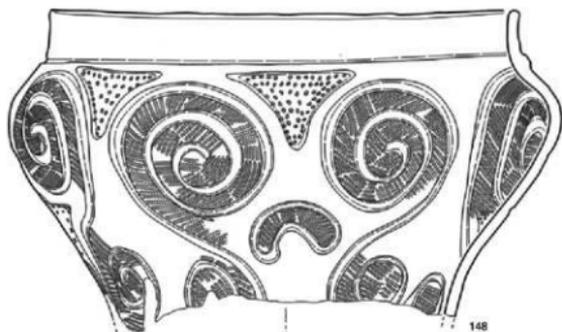
第61図 竪穴住居 S T 50とその複式炉 E L 74・柱穴 S P 91出土土器



第62図 竪穴住居 S T 50出土土器



第63図 竪穴住居 S T 50出土土器

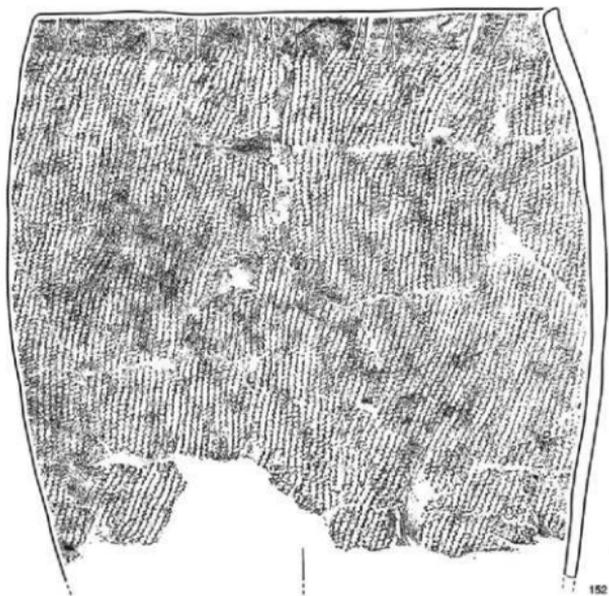


赤色顔料



様式伊 E L 266a 模範土器 148・149
様式伊 E L 266 150・151

第64図 竪穴住居 S T 280 の様式伊 E L 266 出土土器



152



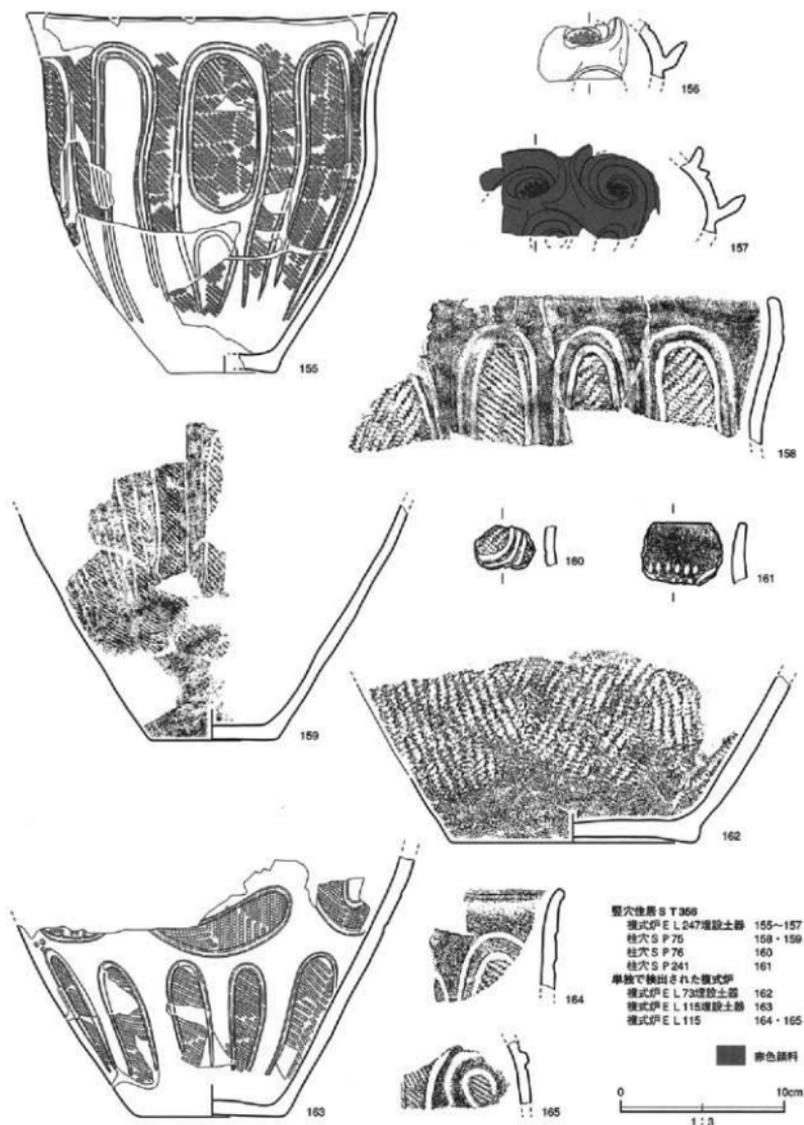
153



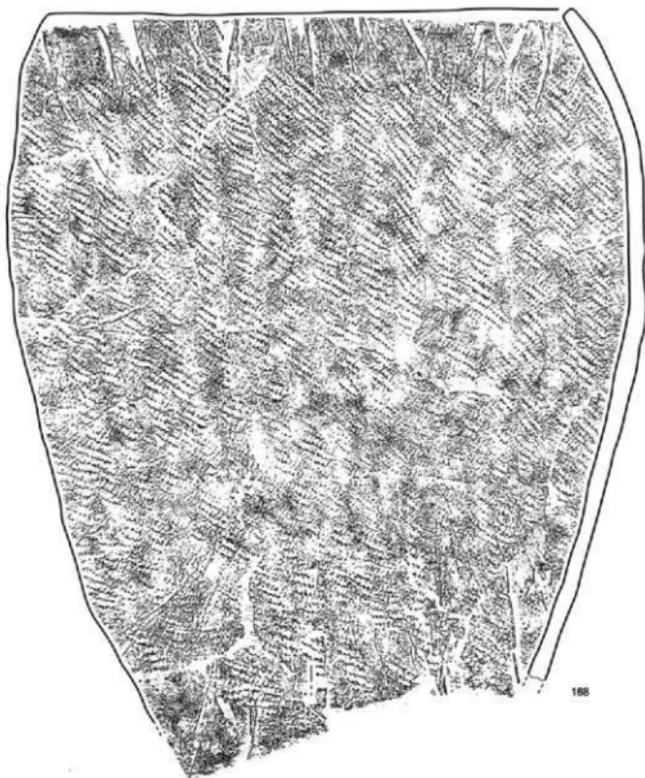
154



第65図 竪穴住居 S T 338 の複式炉 E L 46 埋設土器

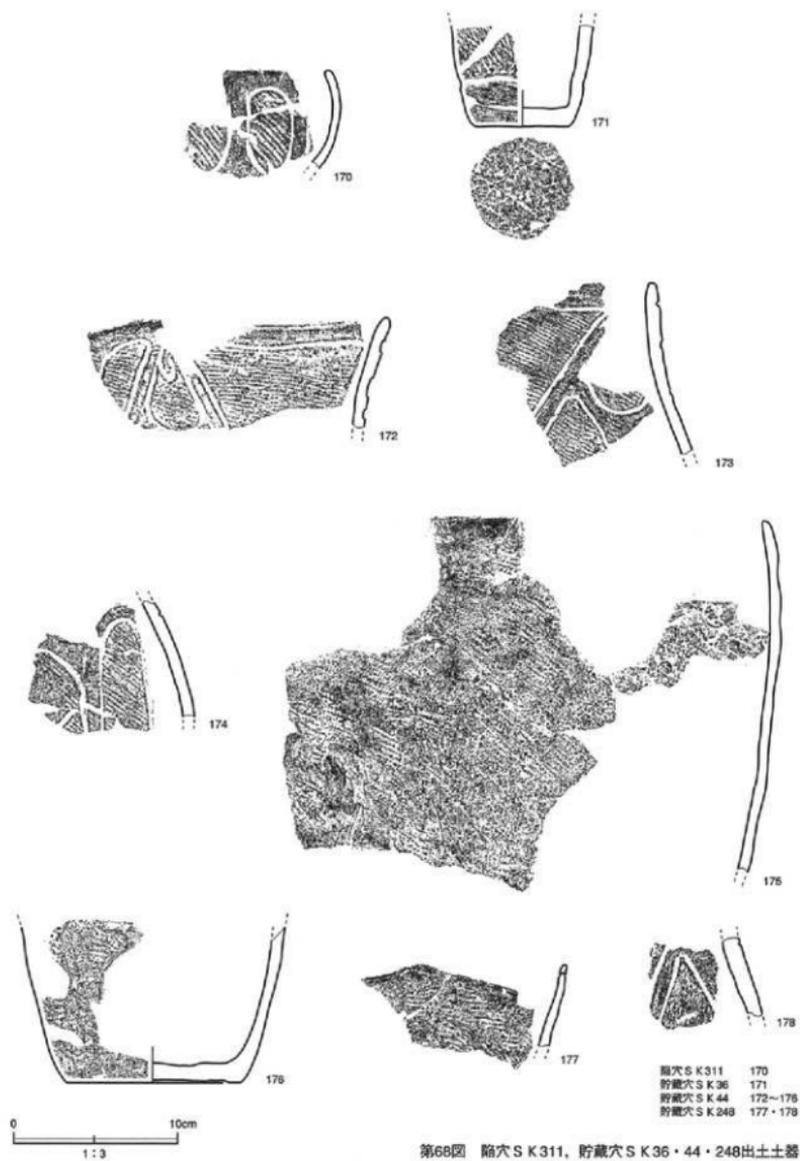


第66図 竪穴住居 S T 358の複式炉・柱穴、複式炉 E L 73・115出土土器

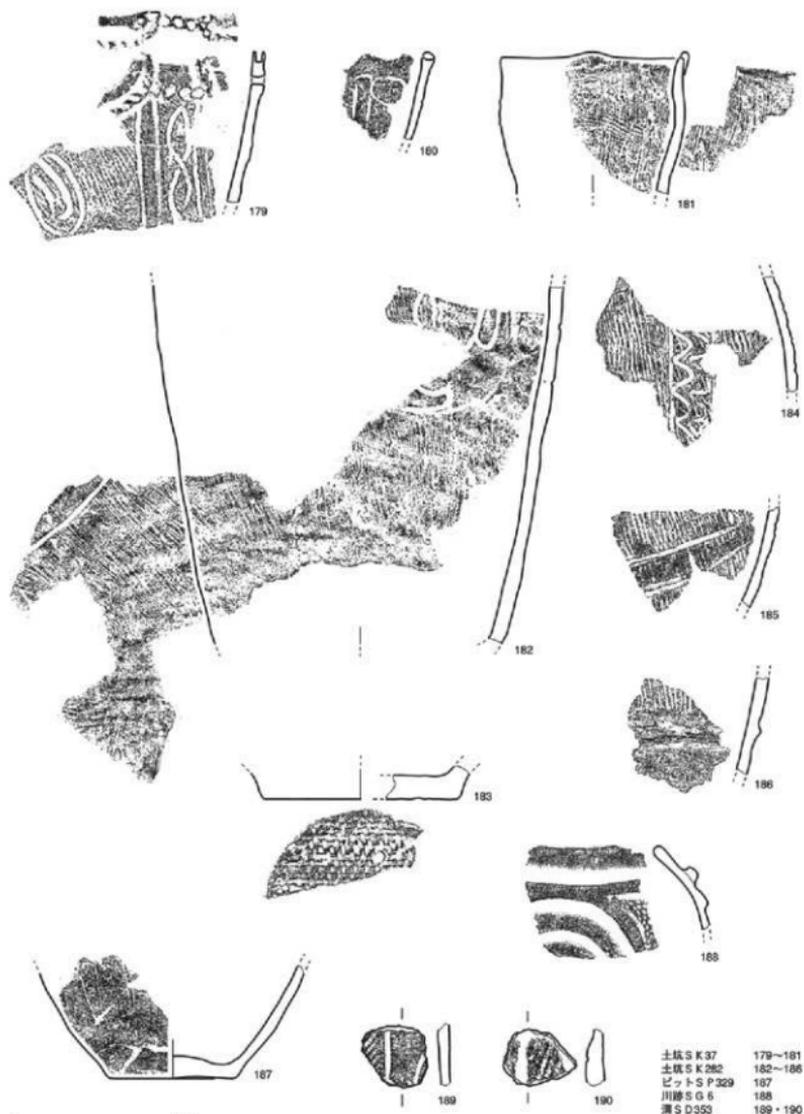


柱穴 S P 331 166
埋設土器遺構 E U63 167
埋設土器遺構 E U268 168
配石遺構 S X 284 169

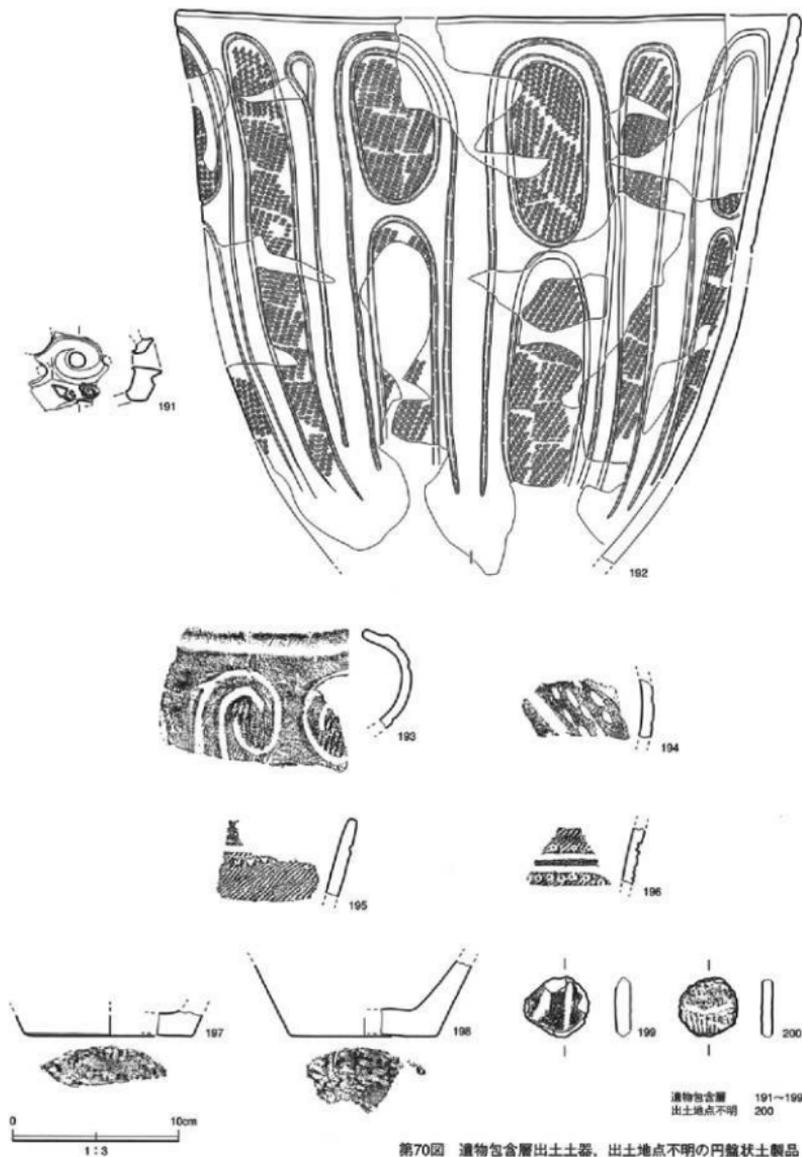
第67図 掘立柱建物 S B 349 の柱穴 S P 331, 埋設土器遺構 E U 63・268, 配石遺構 S X 284 出土土器



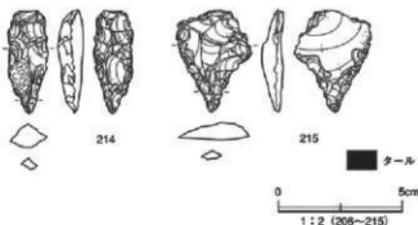
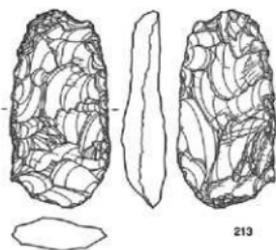
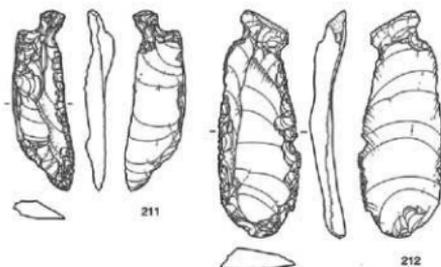
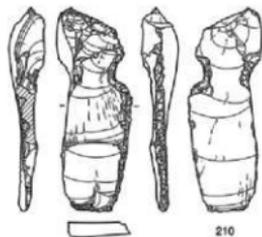
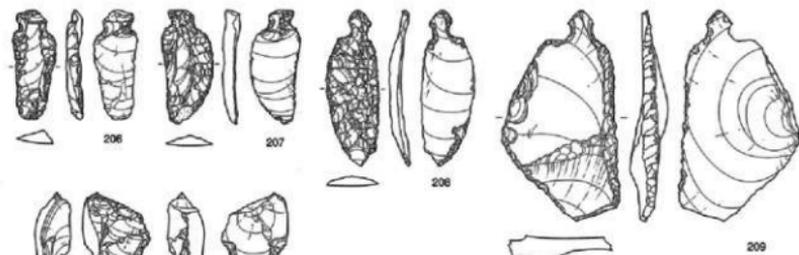
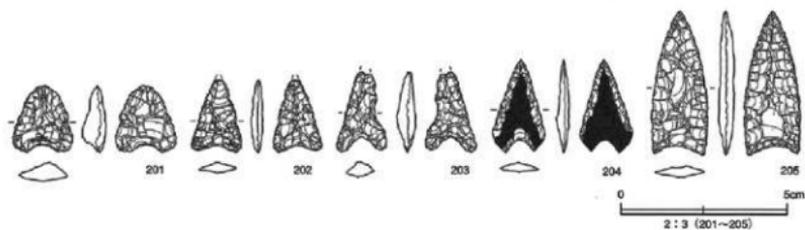
第68図 窟穴 S K 311, 貯藏穴 S K 36・44・248出土土器



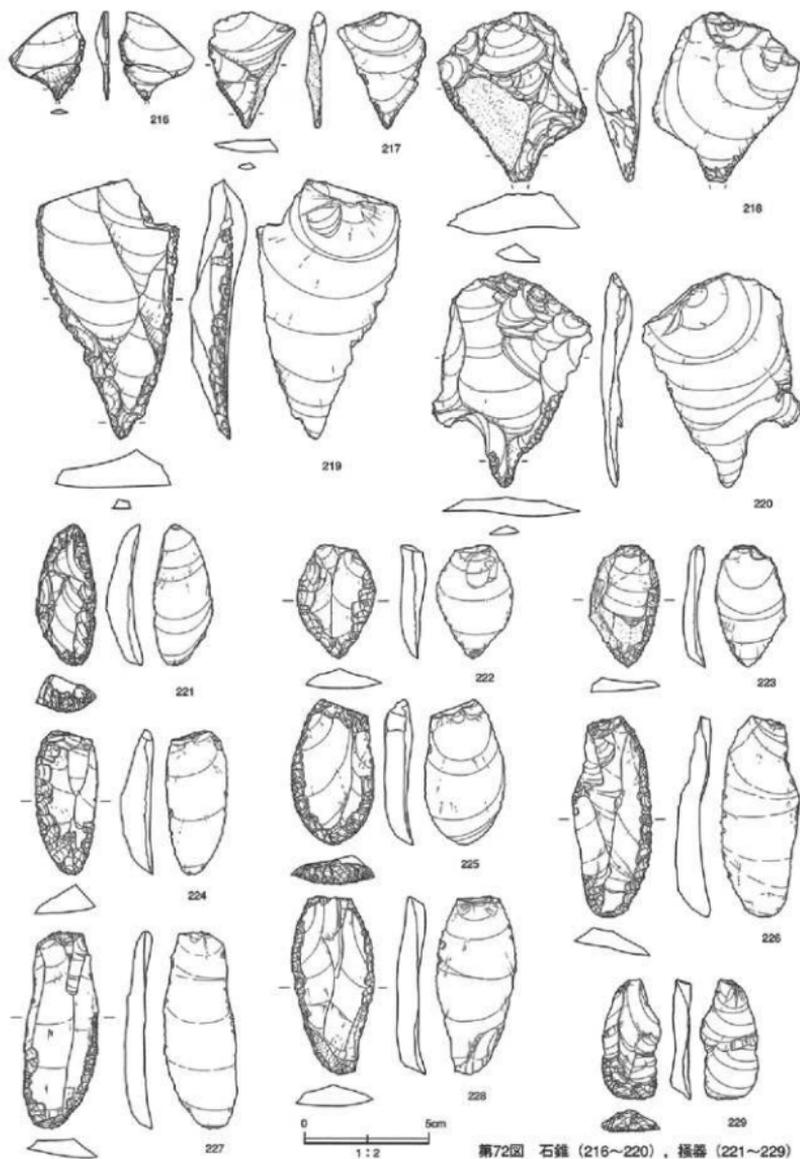
第69図 土坑 S K 37・282, ピット S P 329, 川跡 S G 6, 溝 S D 353出土土器



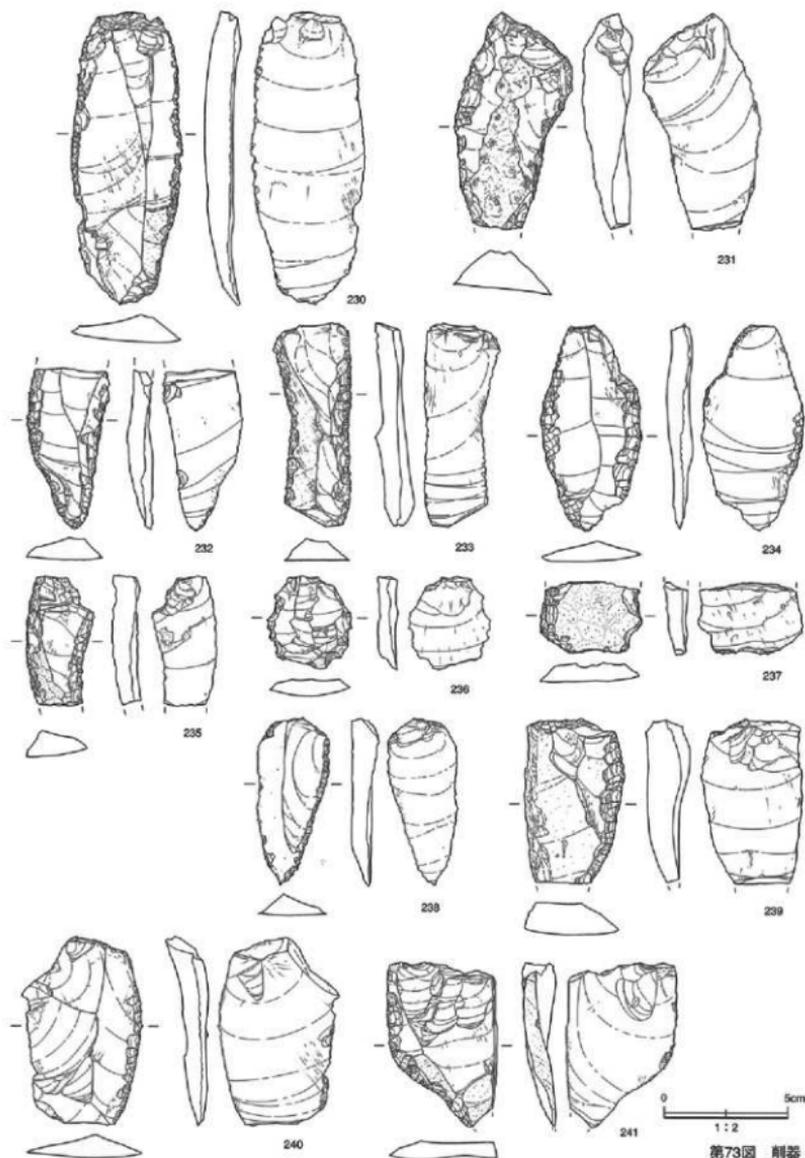
第70図 遺物包含層出土土器。出土地点不明の円盤状土製品



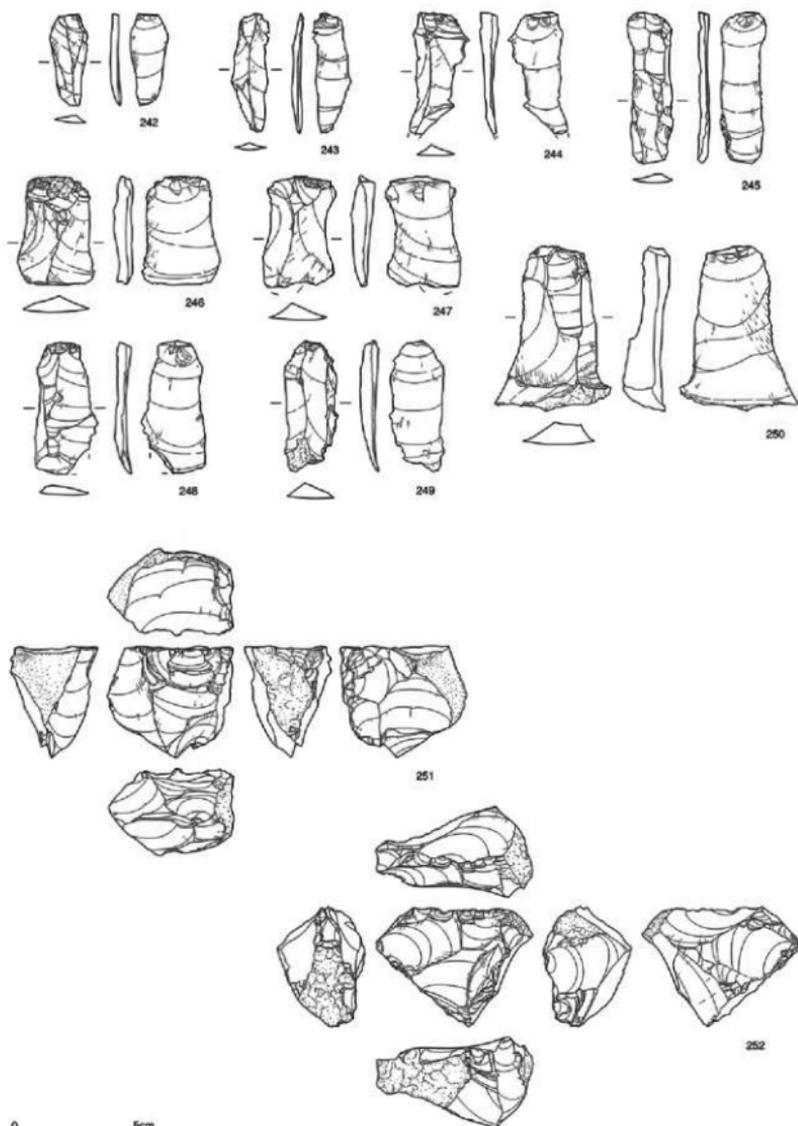
第71回 石鏃 (201~205), 石匙 (206~212), 石鏃 (213), 石匙 (214・215)



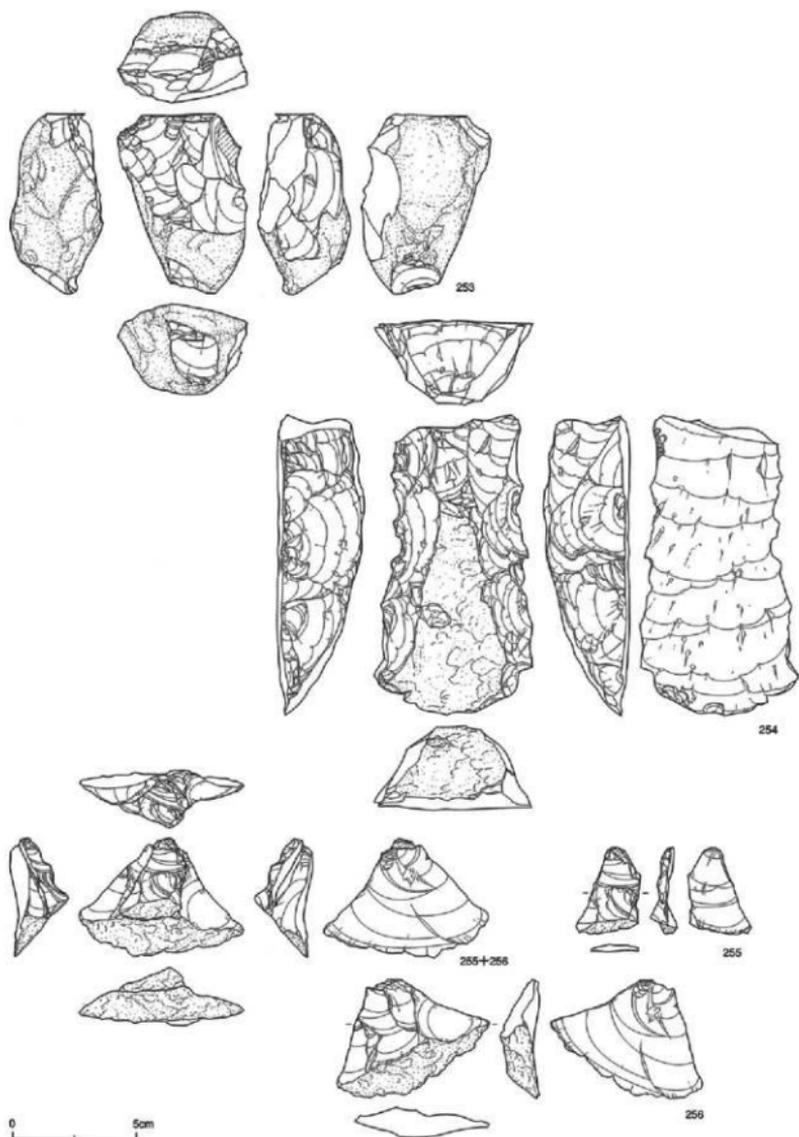
第72図 石錐(216~220), 標器(221~229)



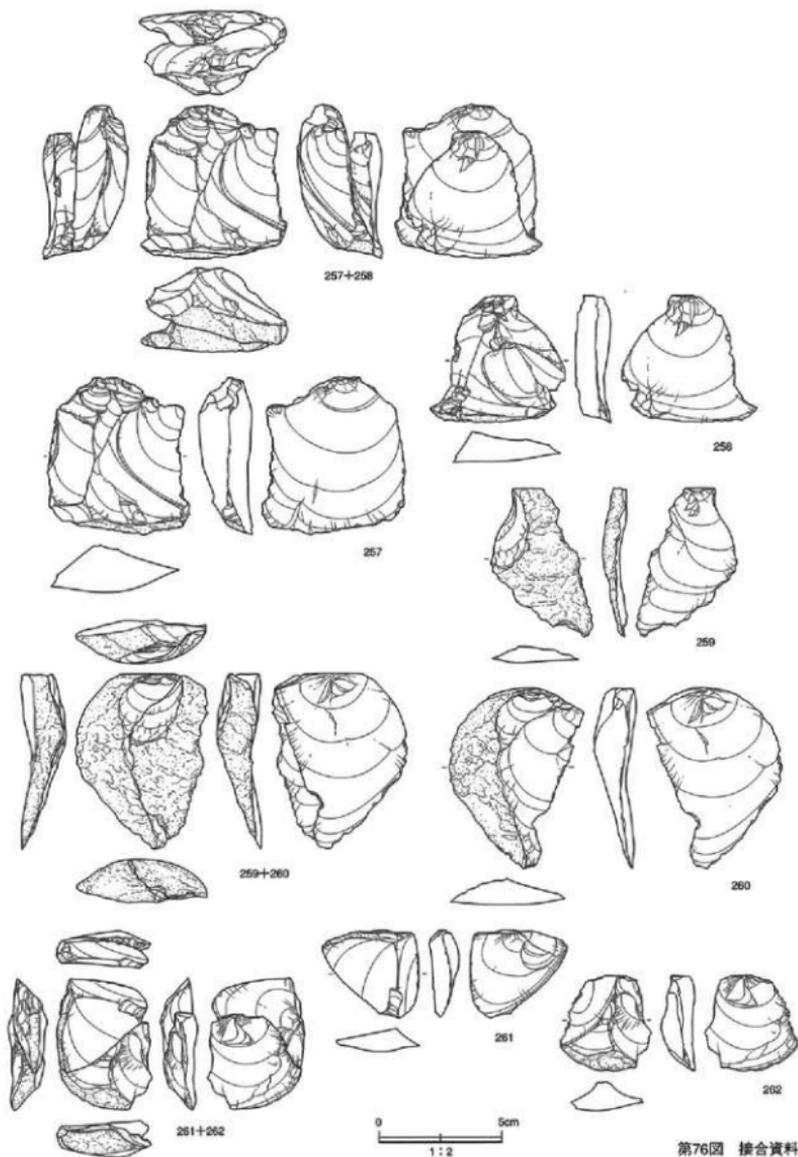
第73図 削器



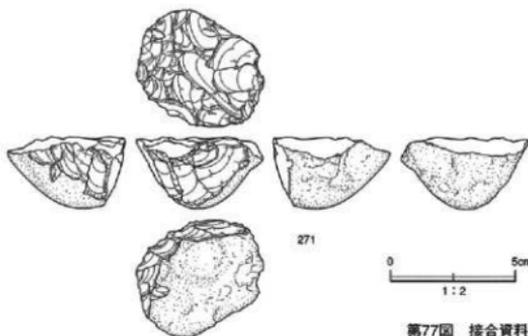
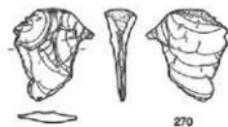
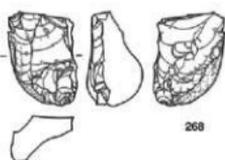
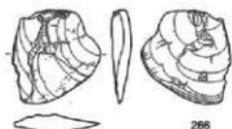
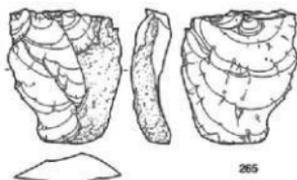
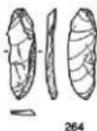
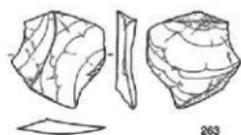
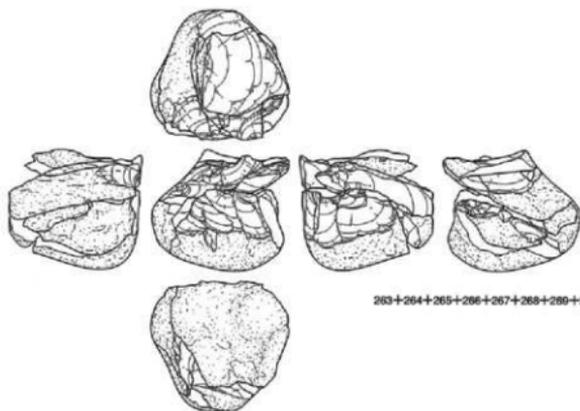
第74図 縦長剥片(242~250), 石核(251・252)



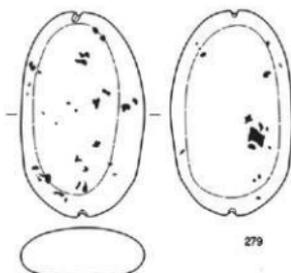
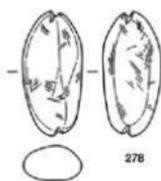
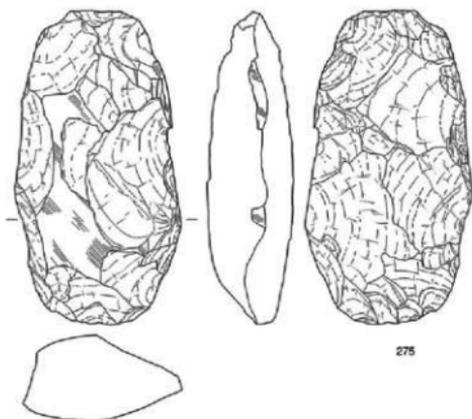
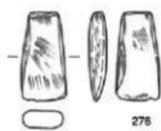
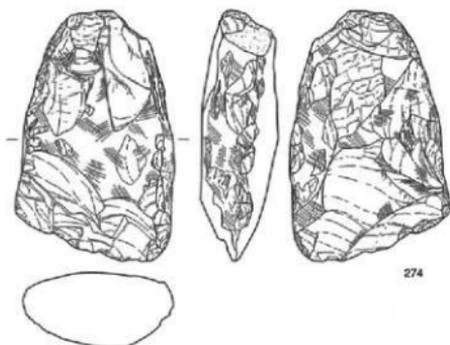
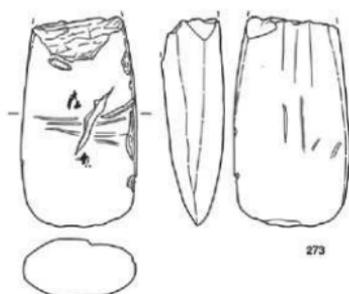
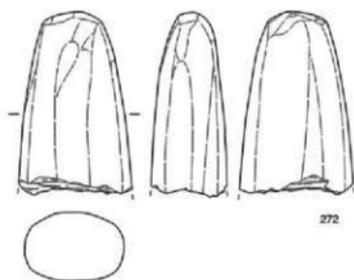
第75図 石核 (253・254), 接合資料 (255・256)



第76図 接合資料

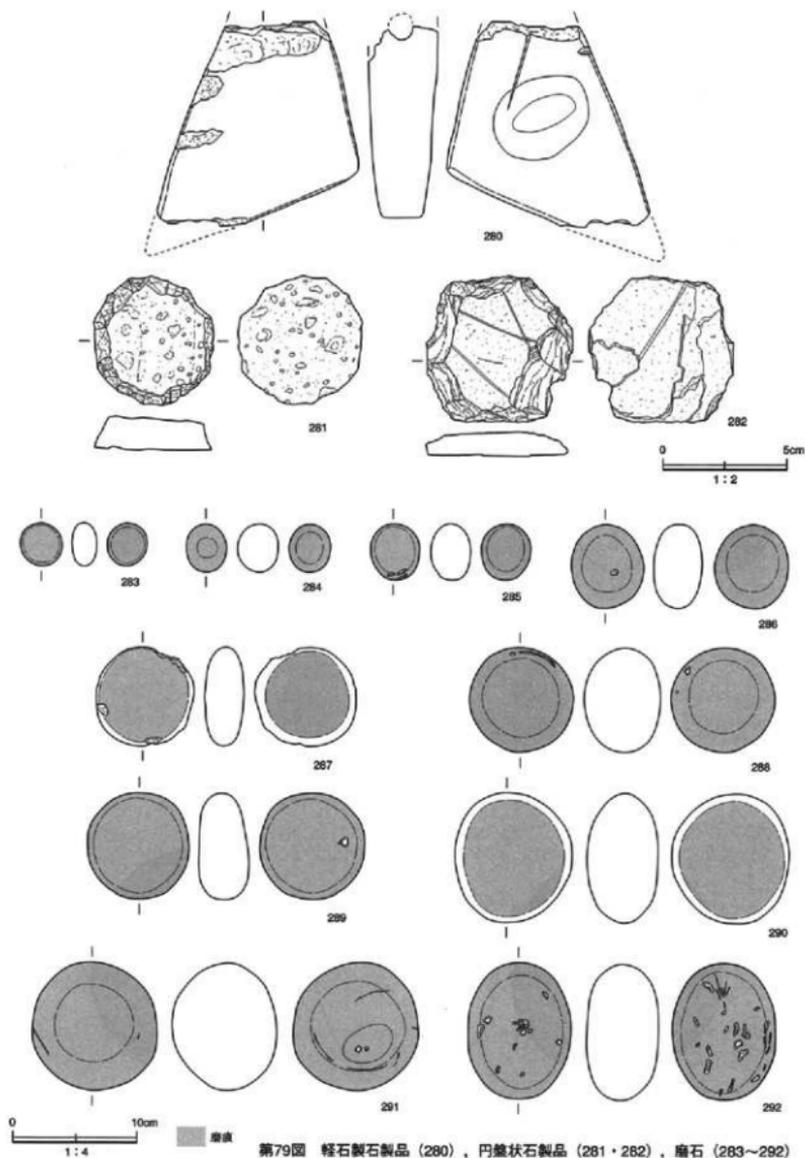


第77図 接合資料

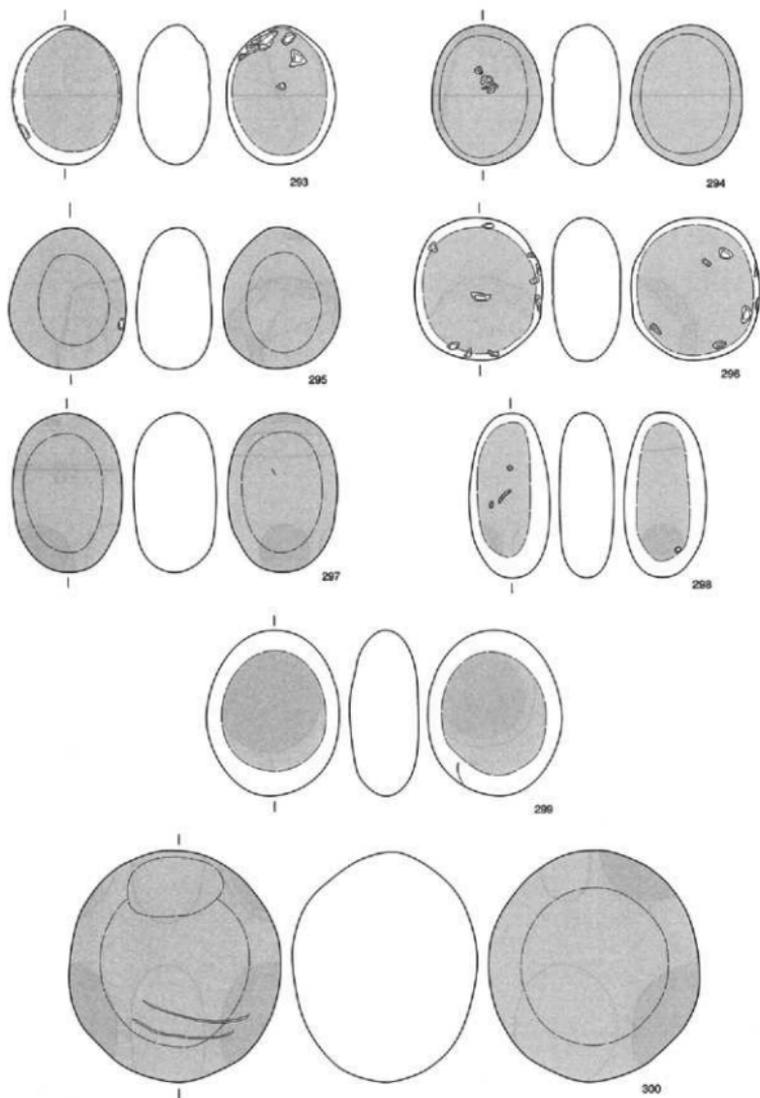


■ タール

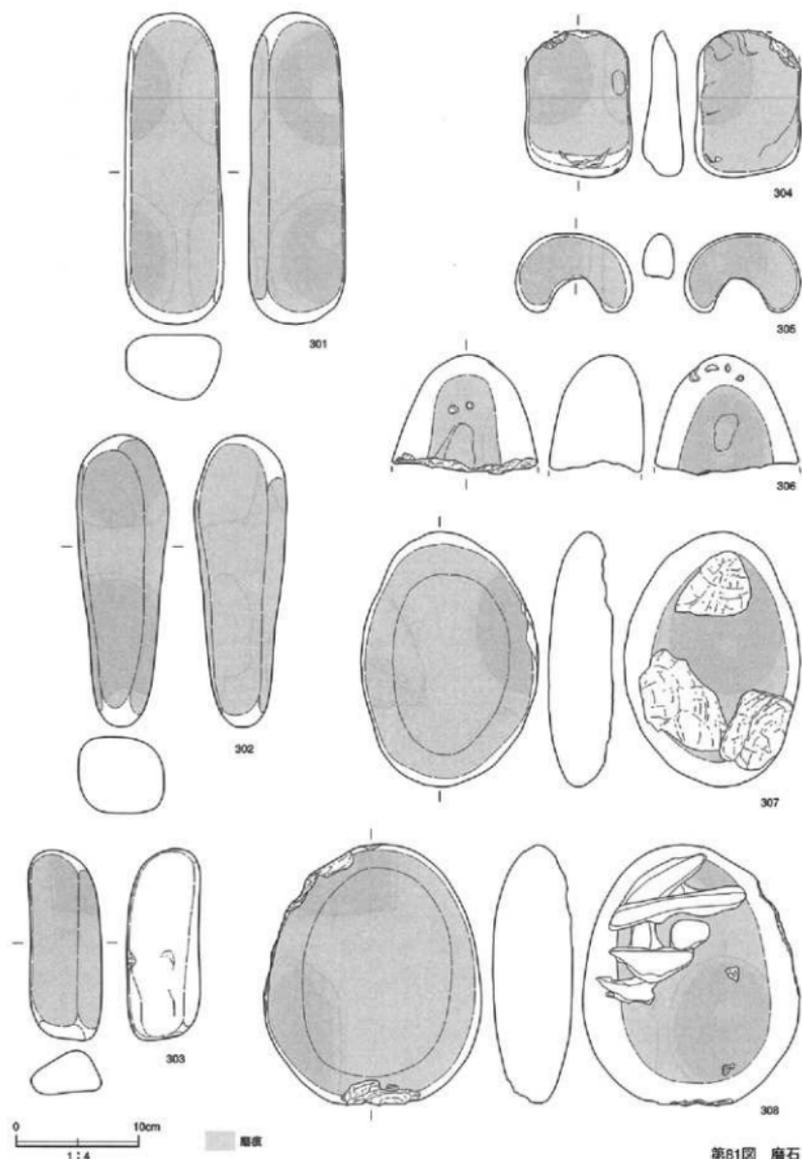
第78図 磨製石斧(272~277)、石錘(278・279)



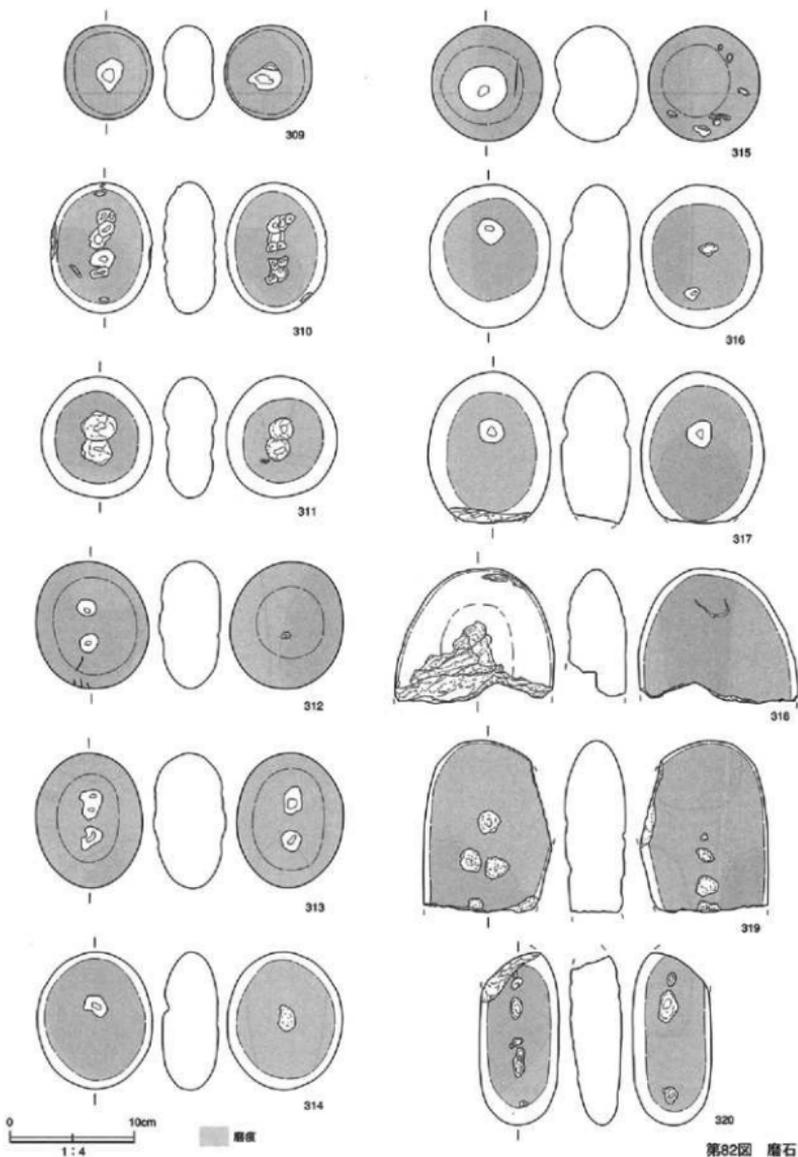
第79図 軽石製品(280)、円盤状石製品(281・282)、磨石(283~292)



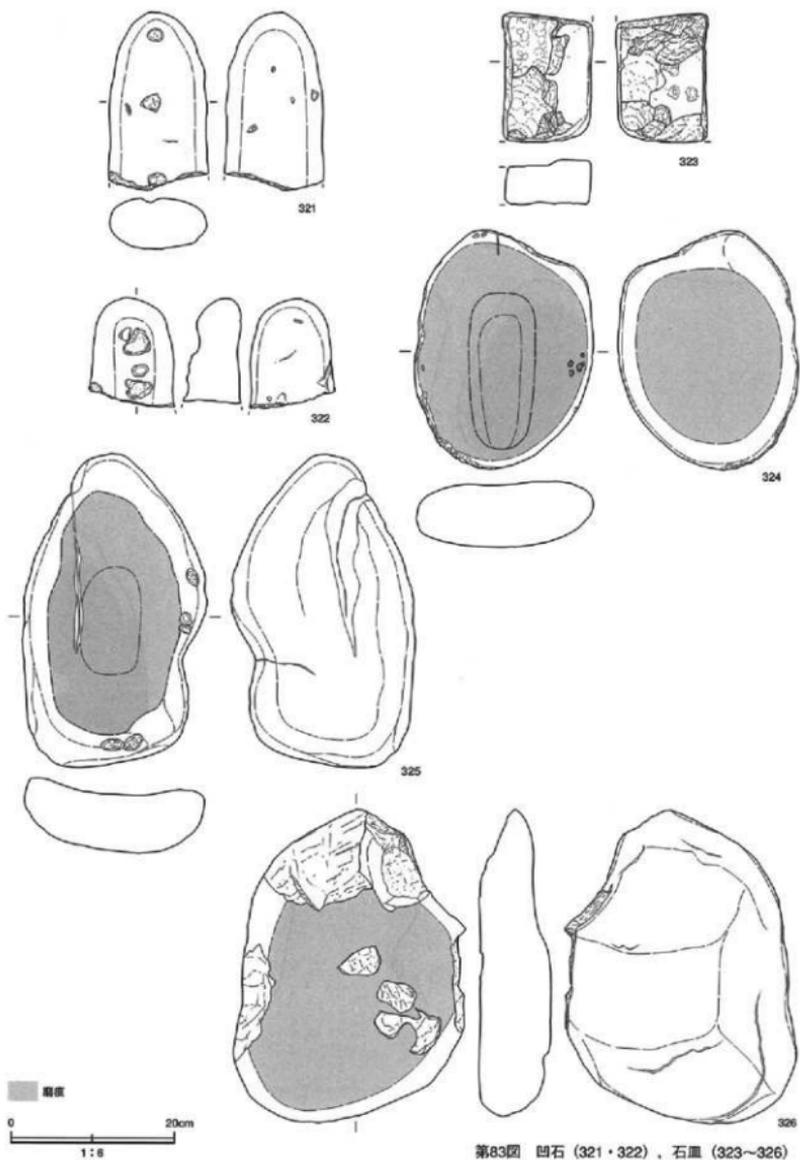
第80図 磨石



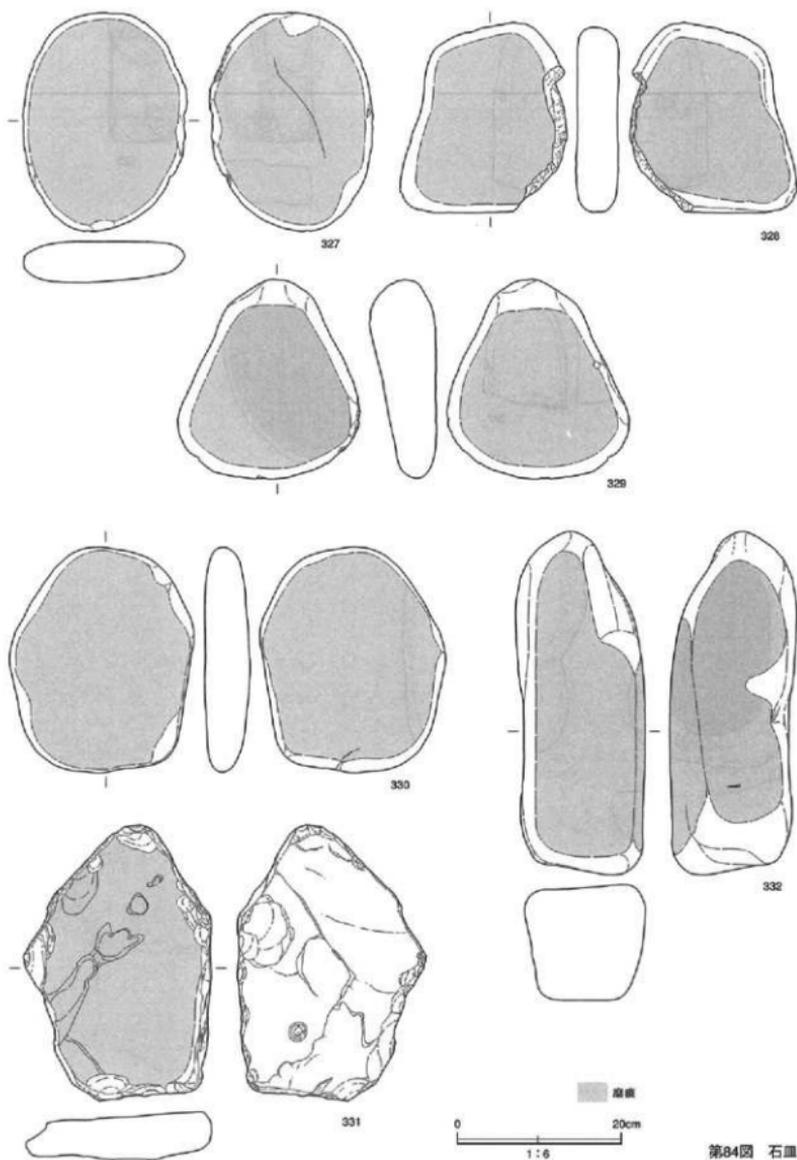
第81図 磨石



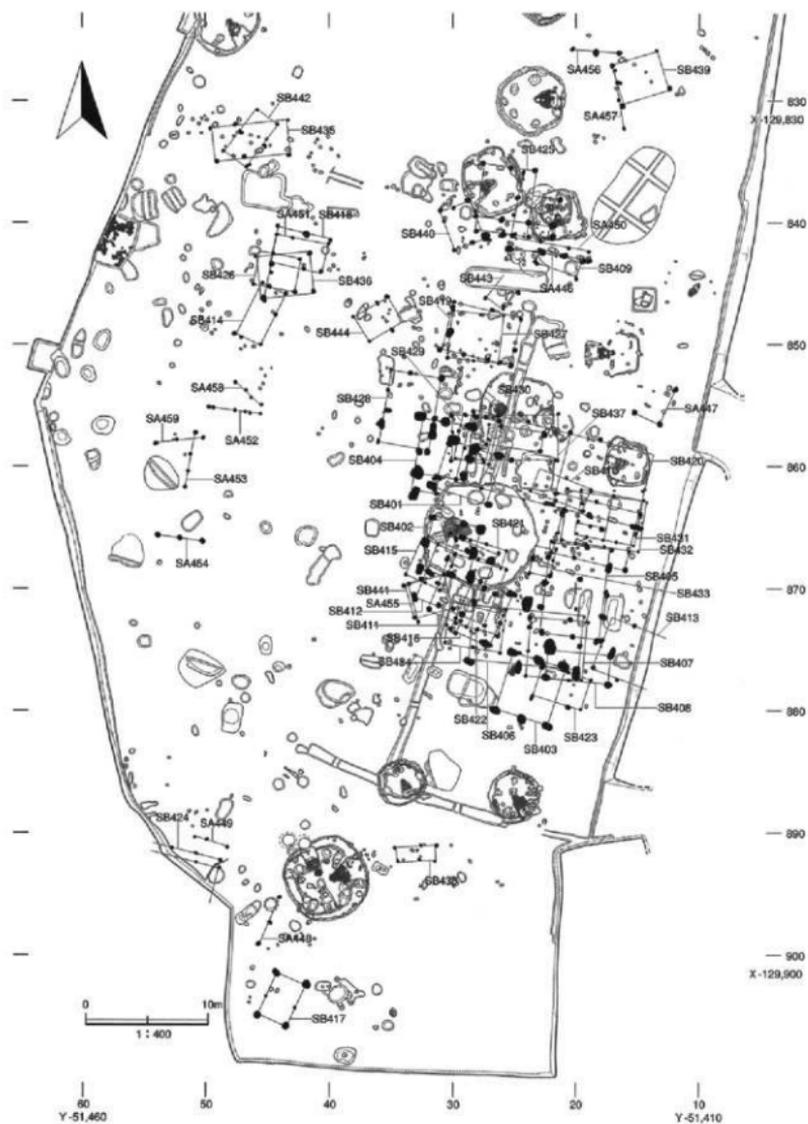
第82図 磨石



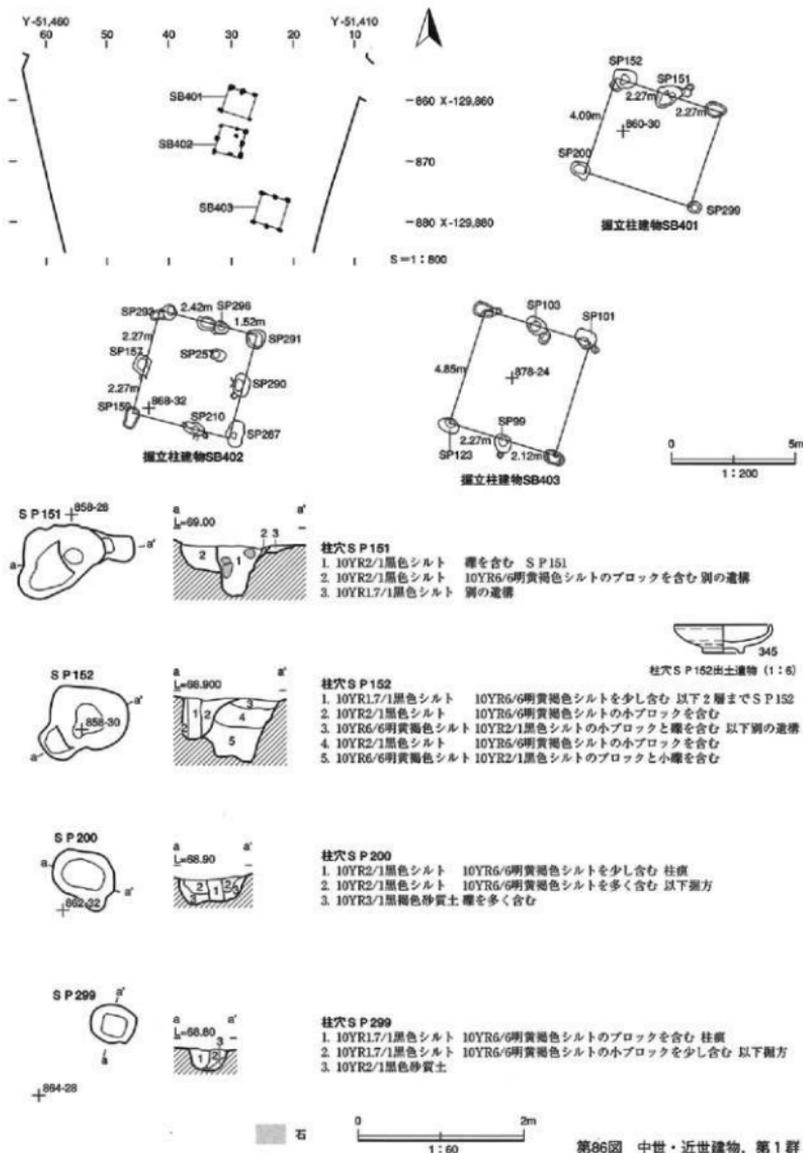
第83図 凹石 (321・322), 石皿 (323~326)

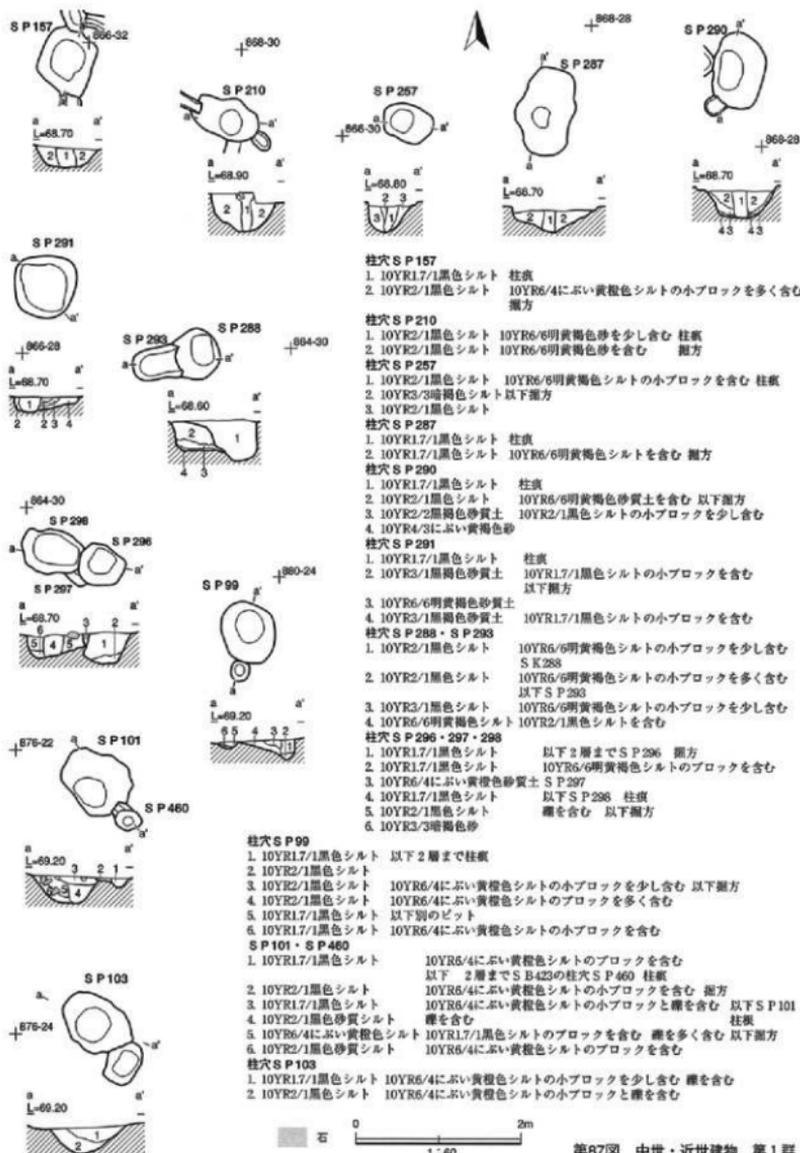


第84図 石皿

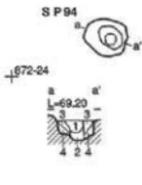
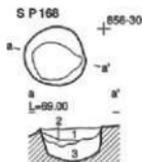
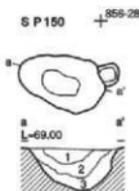
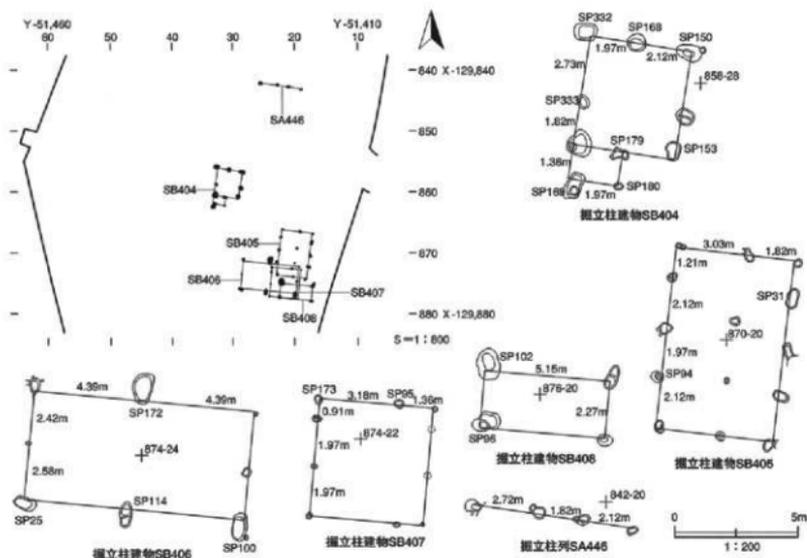


第85図 中世・近世の建物配置図





第87図 中世・近世建物, 第1群



柱穴 SP150

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む 礫を含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
10YR1.7/1黒色シルトのブロックを含む

柱穴 SP168

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
2. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトのブロックを含む
3. 10YR2/1黒色シルト 礫を多く含む

柱穴 SP169

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR3/2黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトを含む
以下2層まで柱残取
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR3/2黒褐色シルトを多く含む
10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
以下掘方
4. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトの小ブロックを多く含む

柱穴 SP94

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む
柱残取
2. 10YR1.7/1黒色シルト 柱残
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
以下掘方
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む

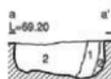
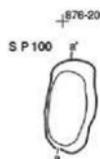


第89図 中世・近世建物, 第2群



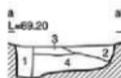
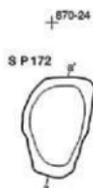
柱穴 S P 25

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
- 10YR6/4にぶい黄褐色シルト 10YR1.7/1黒色シルトを含む



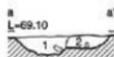
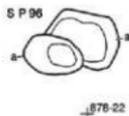
柱穴 S P 100

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む 柱底
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを層状を含む 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを多く含む 側方



柱穴 S P 172

- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む 柱根
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む 以下層方
- 10YR3/2暗褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR2/1黒色シルトと
- 10YR6/6明黄褐色砂 10YR3/1黒褐色シルトを含む



柱穴 S P 96

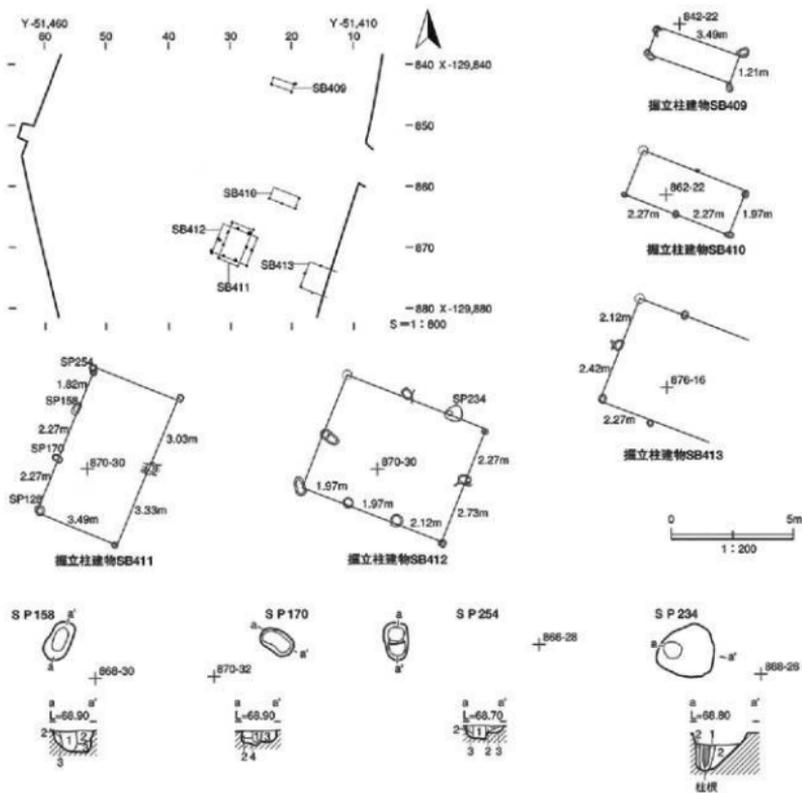
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを多く含む



柱穴 S P 102

- 10YR1.7/1黒色シルト S P 102 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 礎を含む 別の柱穴の柱根
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 以下層方
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 以下層方
- 10YR6/6明黄褐色砂質シルト 10YR2/1黒色シルトのブロックを含む 礎を多く含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 礎を多く含む





柱穴 S P 158

- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 以下層方
- 10YR2.1/1黒色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを含む

柱穴 S P 170

- 10YR2.1/1黒色シルト 柱痕
- 10YR2.1/1黒色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを含む 以下層方
- 10YR3.3/3暗褐色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを含む
- 10YR6.6明黄褐色シルト 10YR2.1/1黒色シルトの小ブロックを含む

柱穴 S P 254

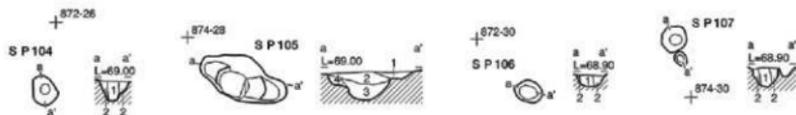
- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR2.1/1黒色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 以下層方
- 10YR3.3/3暗褐色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む

柱穴 S P 234

- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR2.1/1黒色シルト 10YR6.6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 礫を含む 層方



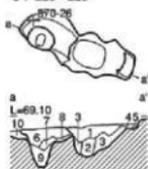
第90図 中世・近世建物, 第3群



柱穴 S P 104

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 柱痕
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む 堀方

S P 223・225



柱穴 S P 105

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを多く含む 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
- 10YR6/6明黄褐色砂質土 10YR1.7/1黒色シルトを含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを多く含む

柱穴 S P 106

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを多く含む 堀方

柱穴 S P 107

- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む 堀方

S P 223・225

- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む 以下 S P 223
- 10YR2/1黒色シルト 柱痕
- 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む 以下堀方
- 10YR2/1黒色シルト
- 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを少し含む
- 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトの小ブロックを多く含む 以下 S P 225
- 10YR1.7/1黒色シルト
- 10YR6/4にぶい黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトの小ブロックを含む
- 10YR2/3暗褐色砂質シルト 礫を含む
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む 別の遺構

柱穴 S P 317

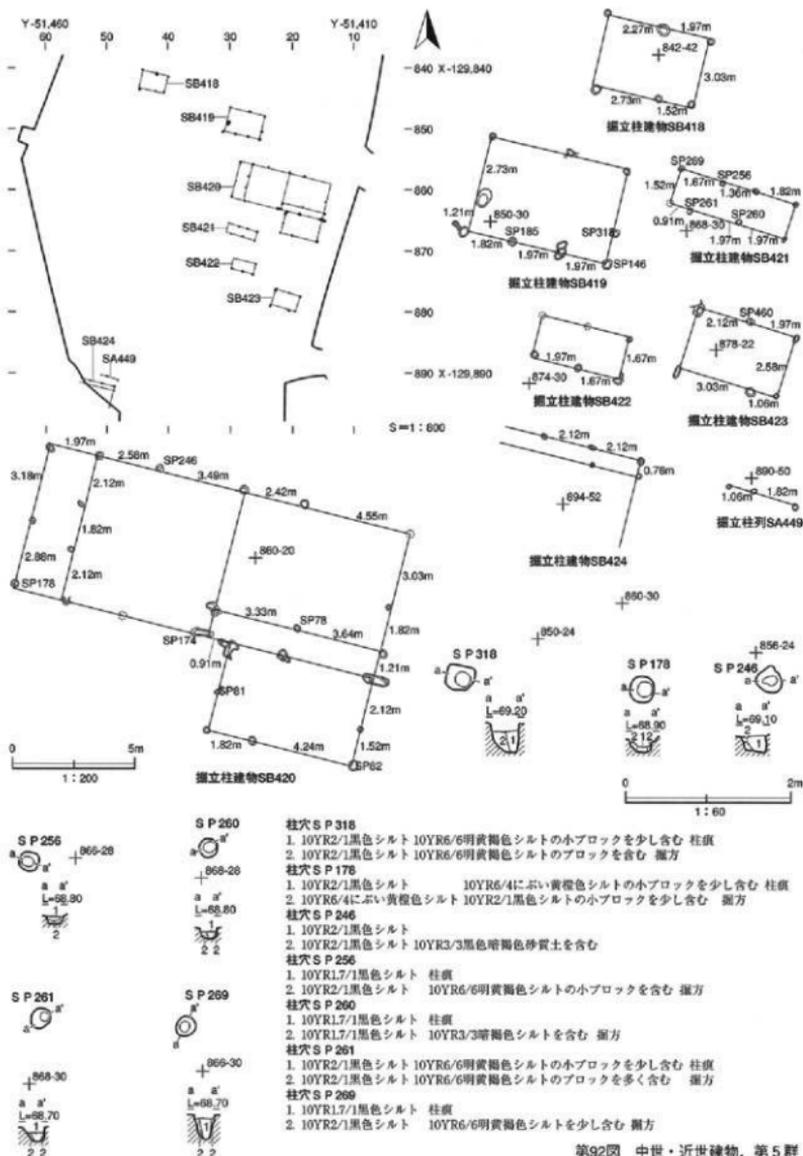
- 10YR1.7/1黒色シルト 柱痕
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂質土の小ブロックを含む 以下堀方

柱穴 S P 141

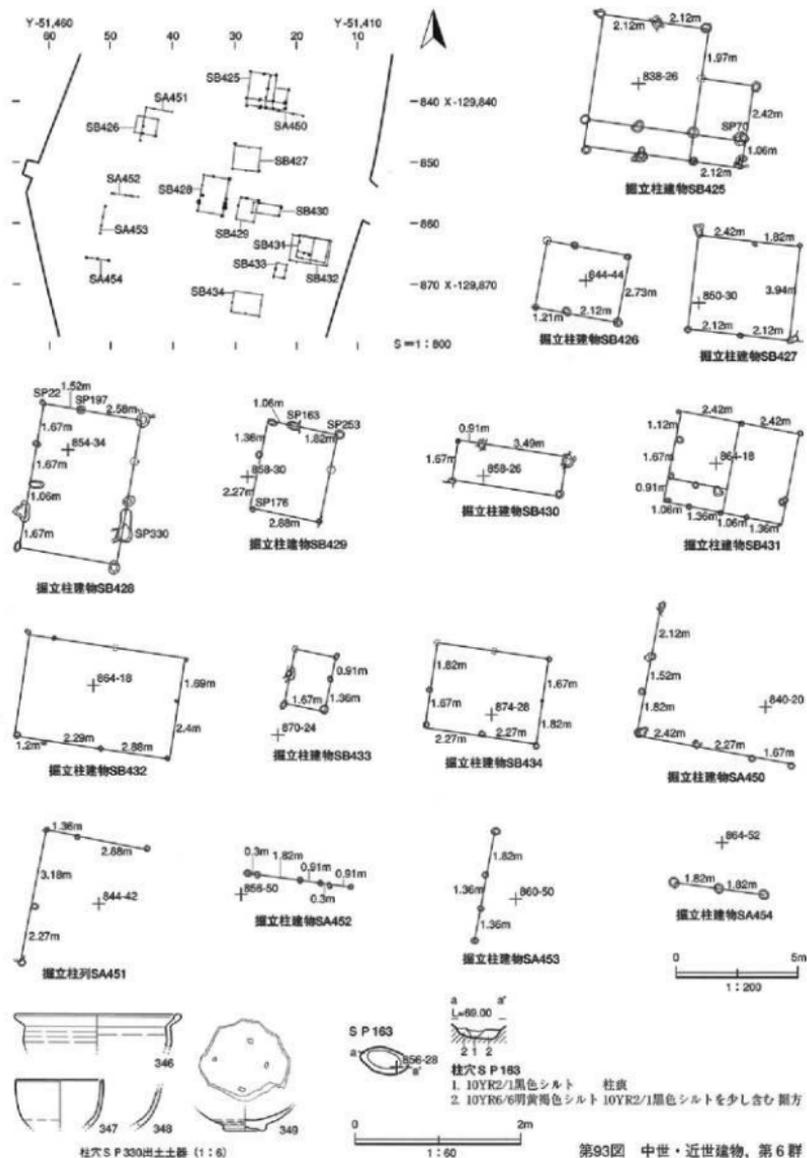
- 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックを含む 柱痕
- 10YR1.7/1黒色シルト 堀方

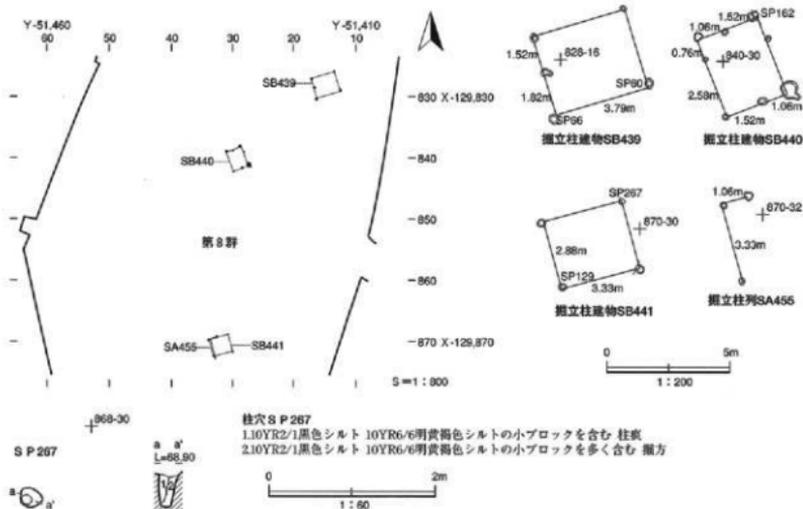
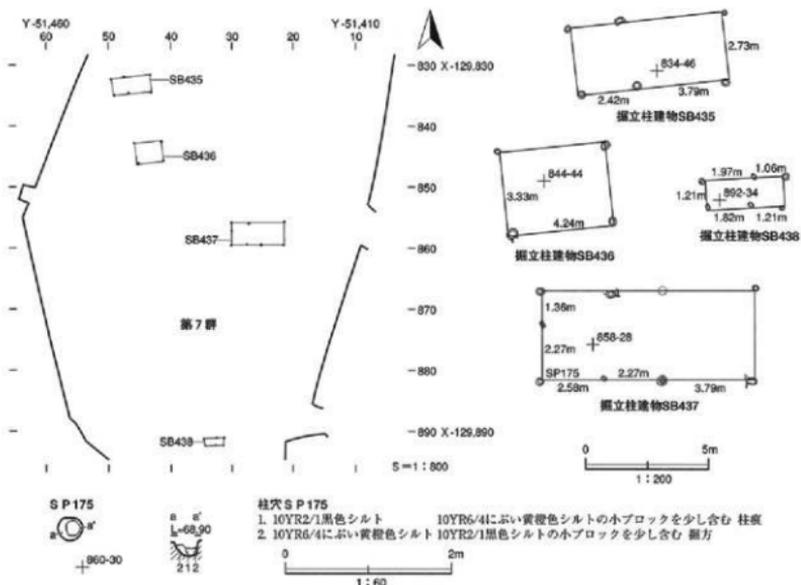


第91図 中世・近世建物、第4群

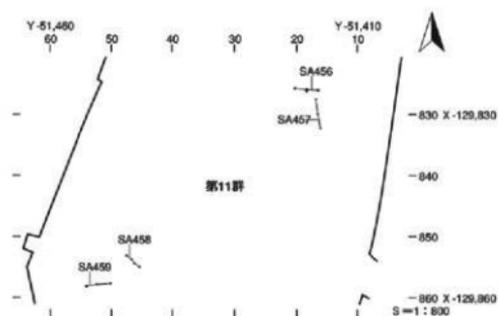
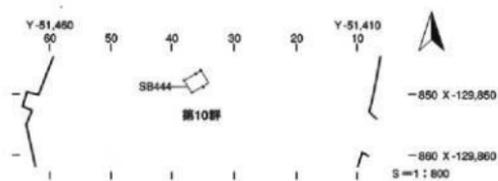
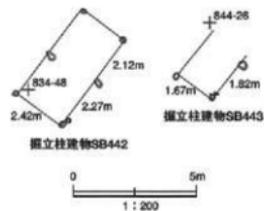
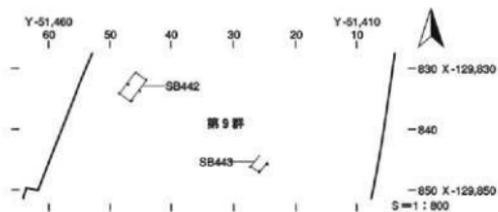


第92図 中世・近世建物, 第5群

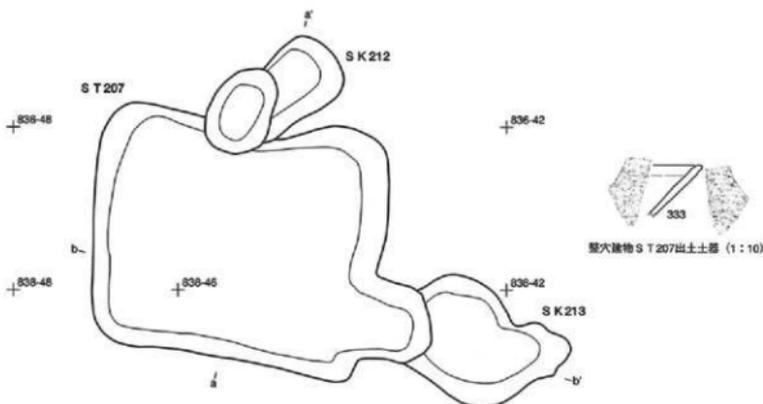
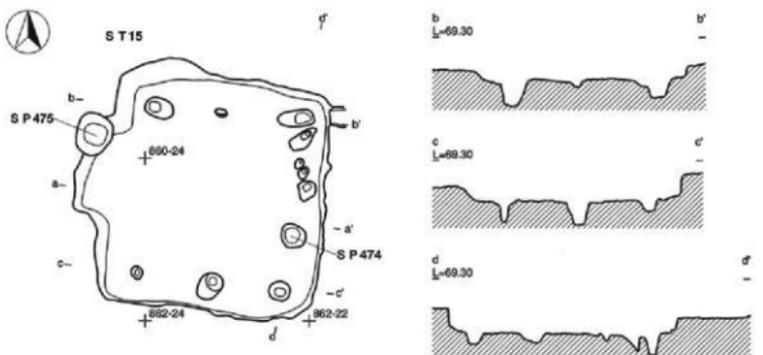




第94図 中・近世建物, 第7・8群



第95図 中世・近世建物，第9・10・11群



竪穴建物 S T 207出土土器 (1:10)

S T 207・S K 212



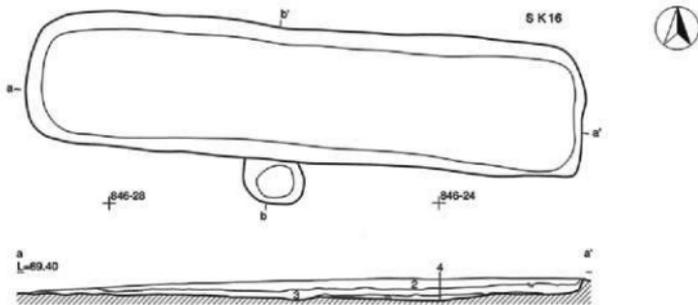
竪穴建物 S T 207, S 土坑 K 212・213

1. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む
4層まで S T 207
2. 10YR2/1黒色砂質土 礫を多く含む
3. 10YR1.7/1黒色シルト
4. 10YR1.7/1黒色シルト 礫を多く含む
5. 10YR2/1黒色シルト S K 212
6. 10YR2/1黒色シルト 以下 S K 213
7. 10YR2/2黒褐色砂質土 礫を多く含む

S T 207・S K 213

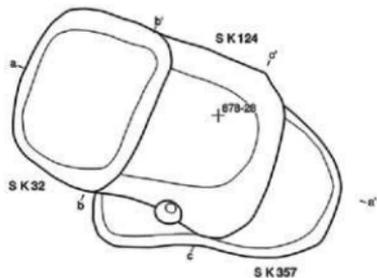


第96図 竪穴建物 S T 15・207, 土坑 S K 212・213

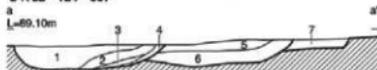


土坑 S K 16

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色粘土を含む
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色粘土を少し含む
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色粘土を少し含む
4. 10YR3/2黒褐色シルト



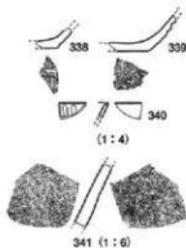
S K 32・124・357



S K 32



S K 124



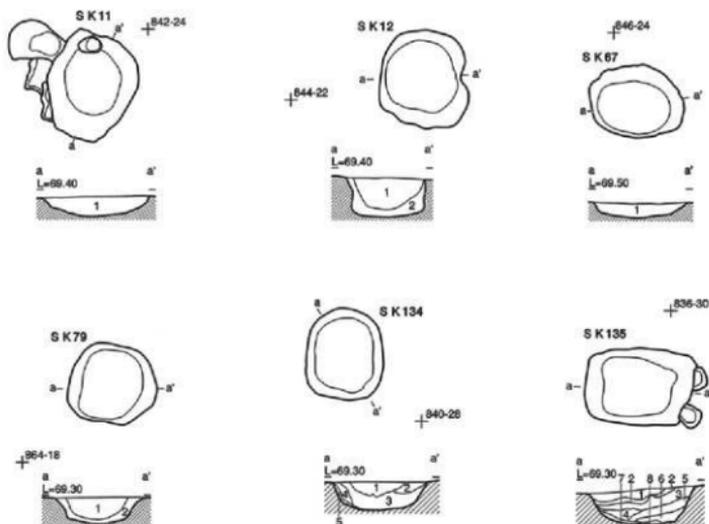
土坑 S K 124出土土器

土坑 S K 32・124・357

1. 10YR2/1黒色シルト 以下 S K 32
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックを多く含む
3. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
4. 10YR6/6明黄褐色シルト
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックを含む 以下 S K 124
6. 10YR1.7/1黒色シルト
7. 10YR2/1黒色砂質土 S K 357



第97図 土坑 S K 16・32・124・357

**土坑 S K 11**

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色粘土を少し含む

土坑 S K 12

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR5/6黄褐色砂質土の大ブロックを含む
2. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR5/6黄褐色砂質土の小ブロックを含む

土坑 S K 67

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色粘土を少し含む

土坑 S K 79

1. 10YR1.7/1黒色シルト
2. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR3/4暗褐色シルトのブロックを含む

土坑 S K 134

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと小石を多く含む
3. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを厚状に含む
4. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR2/1黒色シルトを少し含む
5. 10YR5/6黄褐色砂 10YR2/3黒褐色シルトを少し含む

土坑 S K 135

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR6/6明黄褐色砂を含む
2. 10YR2/1黒色シルト
3. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR2/1黒色シルトを含む
4. 10YR3/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を少し含む
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR2/3黒褐色シルトを含む
6. 10YR6/6明黄褐色砂 10YR1.7/1黒色シルトを含む
7. 10YR2/1黒色シルト
8. 10YR6/6明黄褐色砂



第98図 土坑 S K 11・12・67・79・134・135

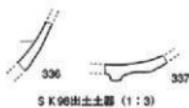


S K 55

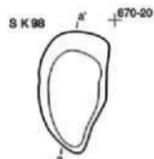


土坑 S K 55

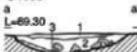
1. 10YR1.7/1黒色シルト 礫を少し含む
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックと礫と炭化物を少し含む
3. 10YR2/1黒色シルト
4. 10YR2/1黒色砂質土 石を多く含む
5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックを多く含む
6. 10YR1.7/1黒色シルト



S K 98出土土器 (1:3)



S K 98



土坑 S K 56出土土器 (1:6)

S K 56



土坑 S K 56

1. 10YR2/1黒色シルト 石と炭化物を少量含む
2. 10YR3/4暗褐色砂 礫を含む

土坑 S K 98

土坑 S K 98

1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR2/1黒色シルト 石と10YR4/4褐色シルトのブロックを含む
3. 10YR4/4褐色シルト 砂と石を含む

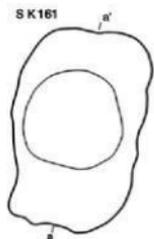


S K 132



土坑 S K 132

1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR1.7/1黒色シルト
3. 10YR6/4にぶい黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトのブロックを含む
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックを含む
5. 10YR1.7/1黒色シルト 10YR6/4にぶい黄褐色シルトのブロックを含む



S K 161



土坑 S K 161

1. 10YR2/1黒色シルト 10YR2/2黒褐色シルトを含む
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色粘土を含む
3. 10YR2/2黒褐色シルト
4. 10YR6/6明黄褐色粘土 10YR2/2黒褐色シルトを含む



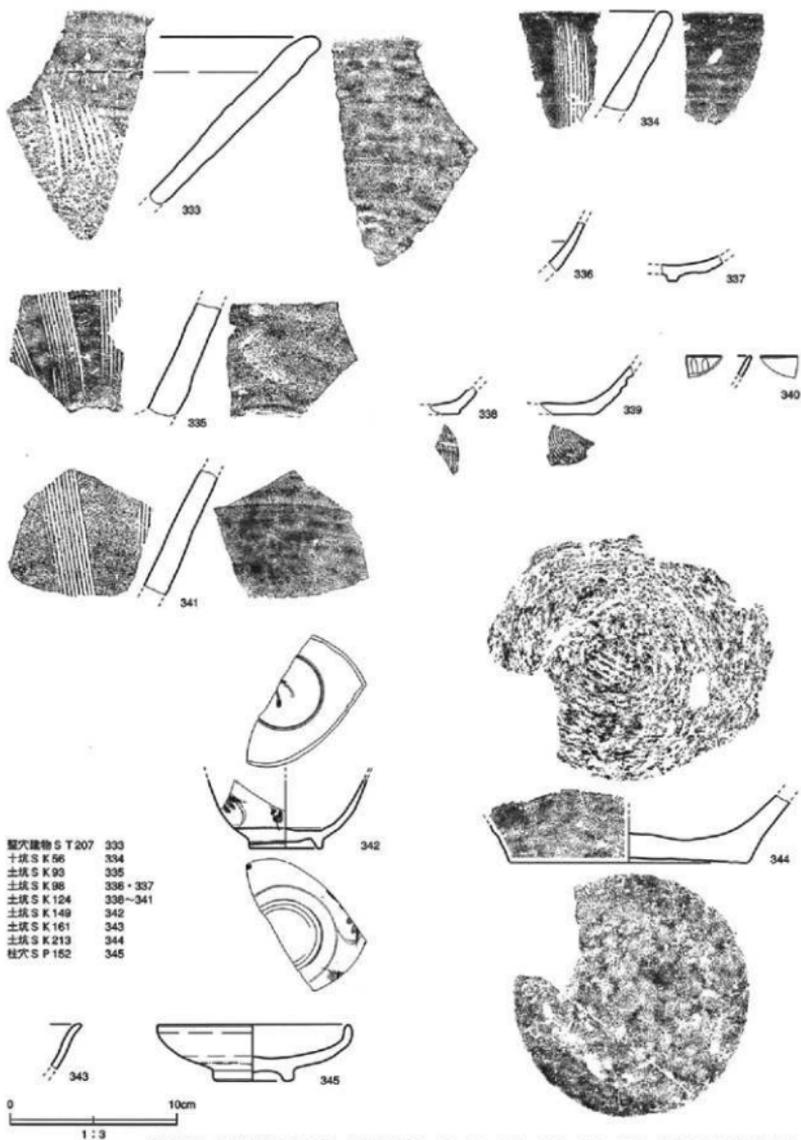
土坑 S K 161出土土器 (1:3)



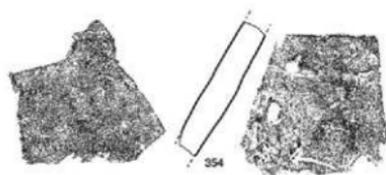
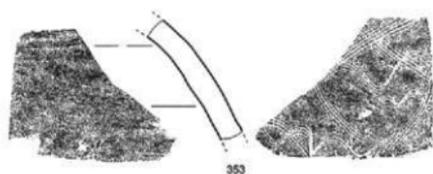
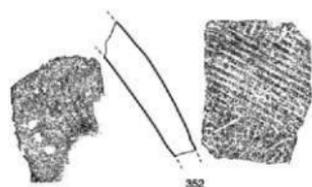
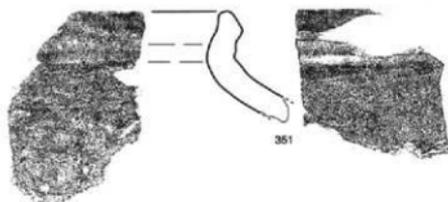
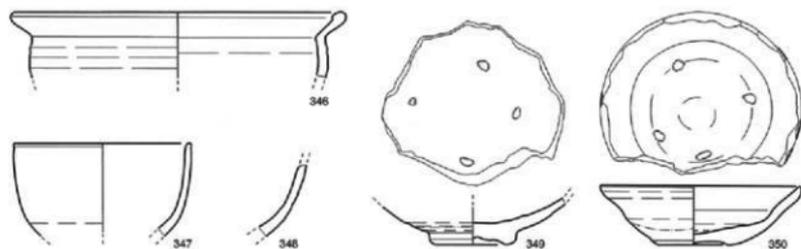
石



第99図 土坑 S K 55・56・98・132・161

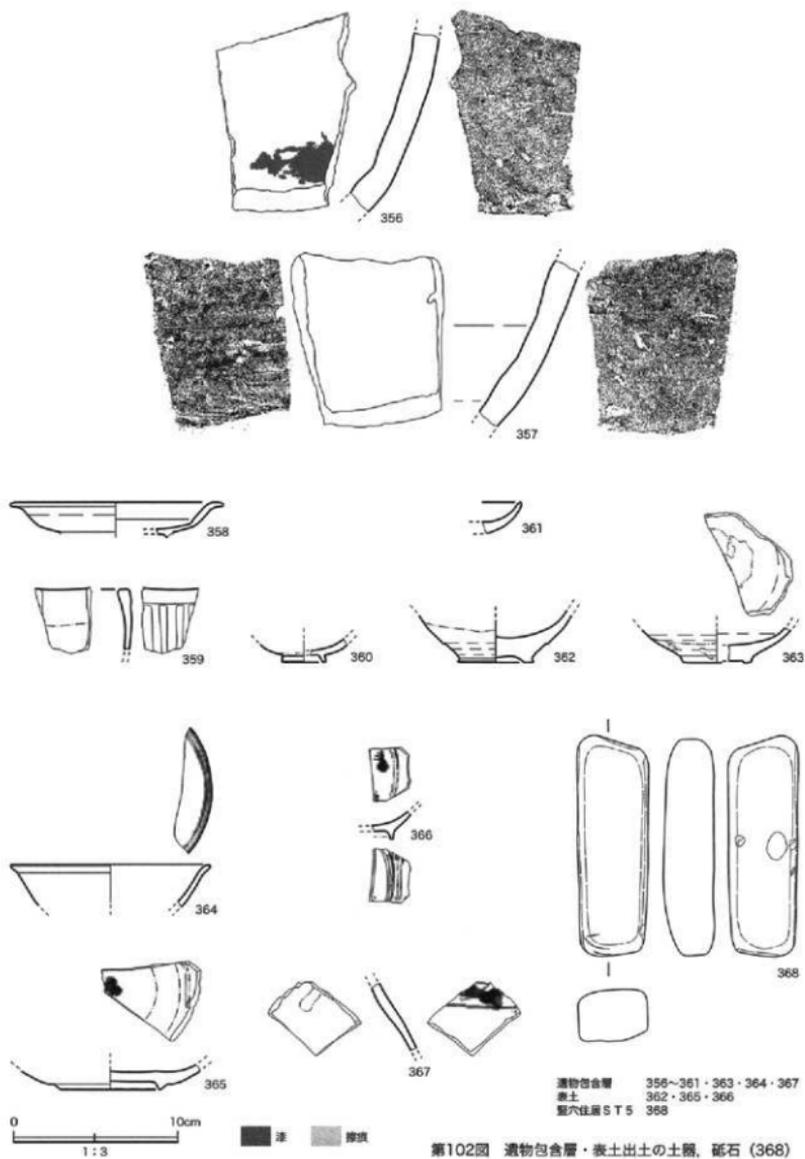


第100図 竪穴建物 S T 207, 土坑 S K 56・93・98・124・149・161・213, 柱穴 S P 152出土土器



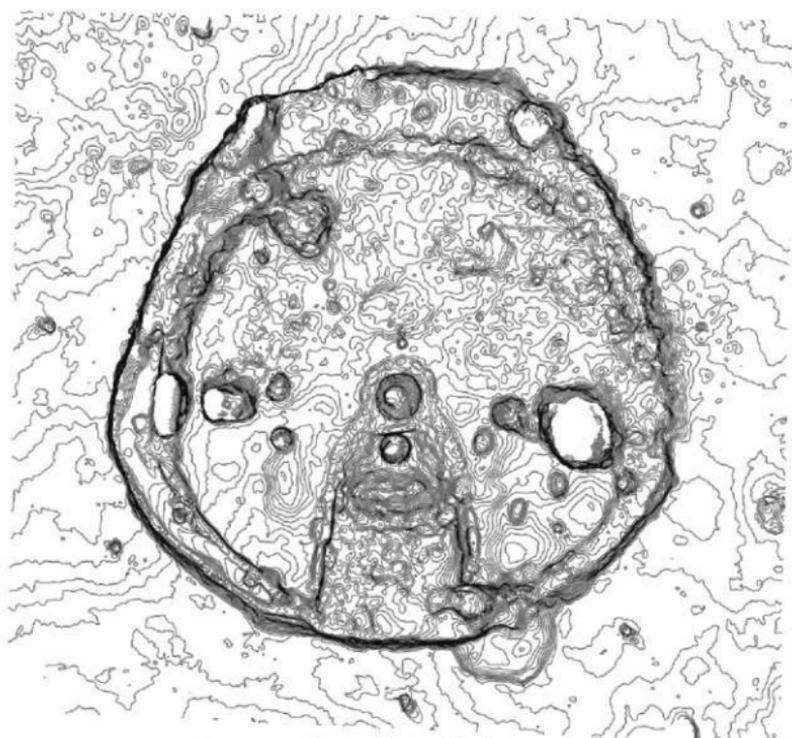
柱穴 S P 330 346~349
 配石遺構 S X 284 350
 遺物古 layers 351~355

第101図 柱穴 S P 330, 配石遺構 S X 284, 遺構包含層出土土器



第102図 遺物包含層・表土出土の土器、礫石(368)

写真図版



壱穴住居ST1コンター図 1cm pitch (協力:大手前大学 史学研究所 オープン・リサーチセンター 岡本篤志)



遺構検出状況（南から）

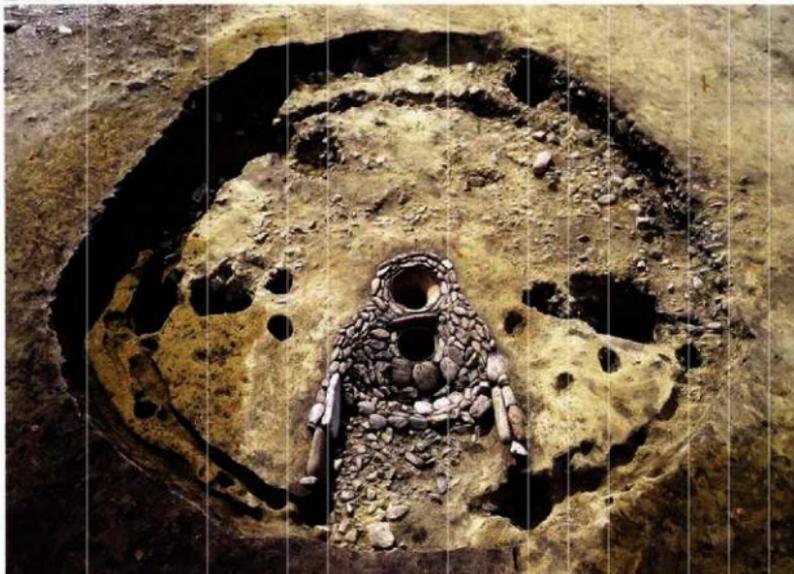


調査区北壁（南東から）

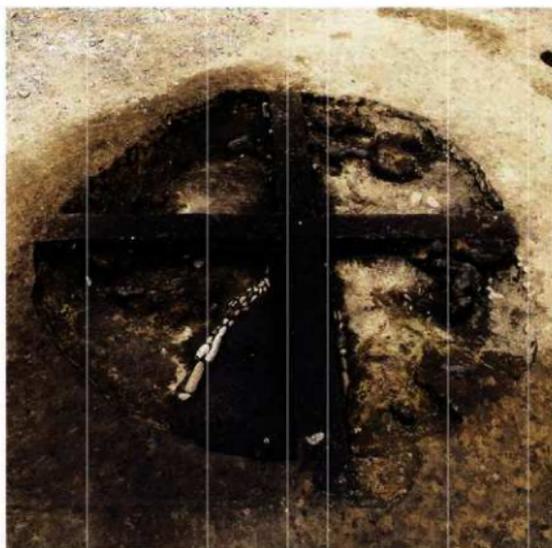


調査区南壁（北東から）

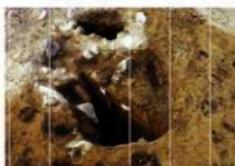
竪穴住居ST1



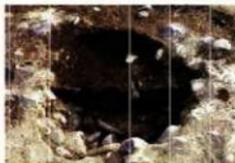
竪穴住居ST1 (南東から)



炭・焼土出土状況 (東から)



柱穴SP110 (南から)



柱穴SP111 (北東から)



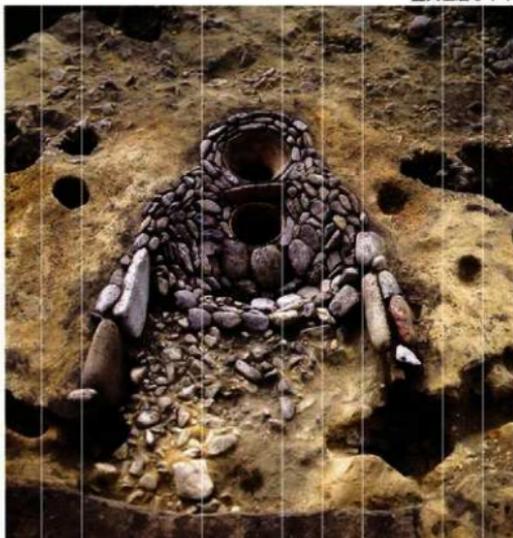
柱穴SP112 (東から)



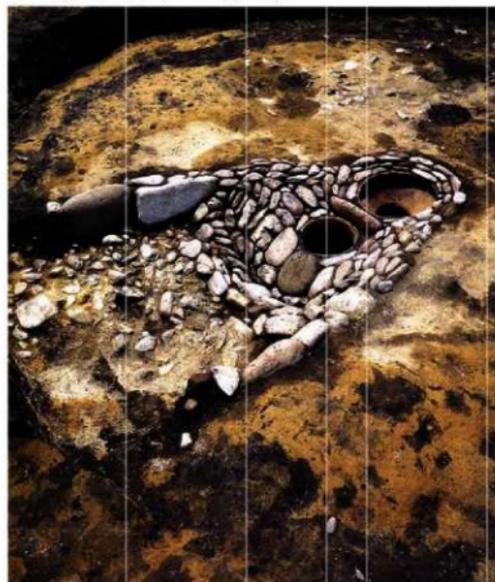
周溝 S D126・127 (東から)



深鉢 4 出土状況 (S D126, 東から)



複式炉 E L87 (南東から)



複式炉 E L87 (北東から)

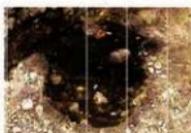


複式炉 E L87 断面 (南から)



複式炉 E L87 掘方 (南東から)

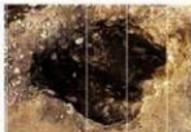
竪穴住居 ST 2



柱穴 S P 117 (南東から)



柱穴 S P 118 (南西から)

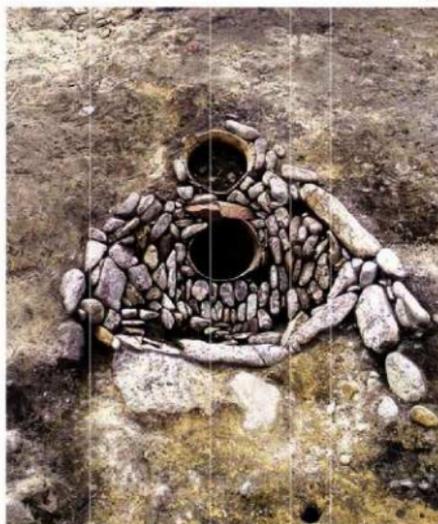


柱穴 S P 121 (南から)



竪穴住居 ST 2 (東から)

柱穴 S P 122 (南から)



複式炉 E L 92 (東から)



複式炉 E L 92 断面 (南東から)



複式炉 E L 352 断面 (北東から)



竪穴住居 ST 3 (南から)



複式炉 E L 154 (中央)・324 (左上)・南から



柱穴 S P 182 (南西から)

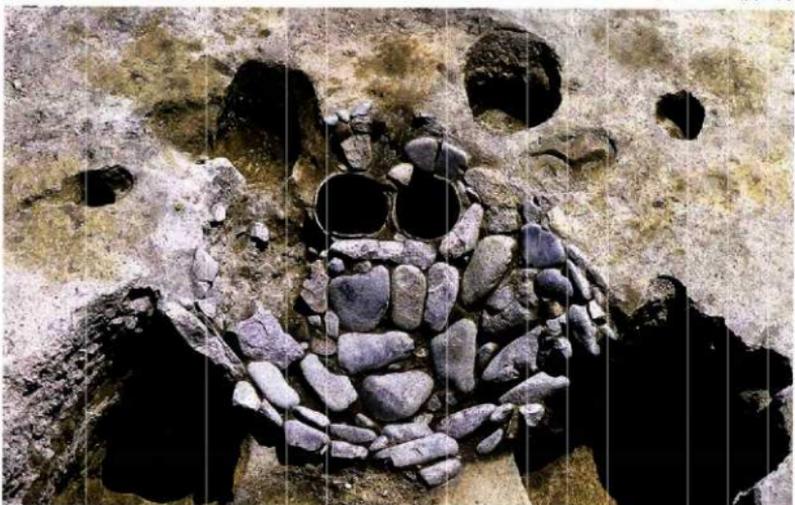


複式炉 E L 154 断面 (南西から)

竪穴住居ST5



竪穴住居ST5 (西から)



模式炉E L308 (西から)



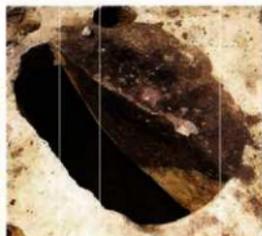
複式炉 E L 308 覆土断面 (北西から)



複式炉 E L 308 掘方断面 (南西から)



竪穴住居 ST 5 検出状況 (北西から)



柱穴 S P 228 (南から)



柱穴 S P 229 (南東から)



柱穴 S P 230 (東から)



柱穴 S P 231 (北から)



柱穴 S P 232 (南東から)



柱穴 S P 233 (南東から)



柱穴 S P 340 (西から)



柱穴 S P 341 (北西から)

竪穴住居ST4



竪穴住居ST4 (北西から)



複式炉E L 166 (北西から)



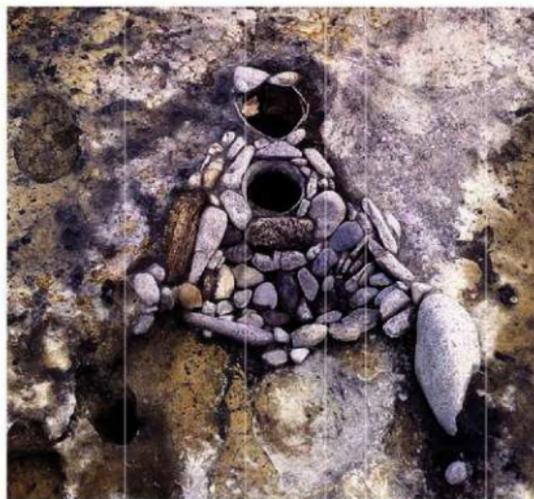
複式炉E L 166 断面 (南東から)



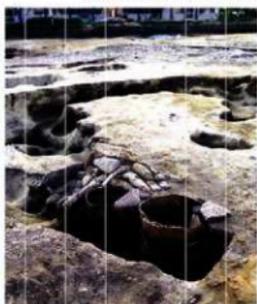
柱穴P 245 (南から)



竪穴住居 ST 9 (西から)



複式炉 E L 136 (西から)



複式炉 E L 136 断面 (南東から)



柱穴 S P 137 (北から)

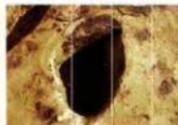
竪穴住居 S T 28



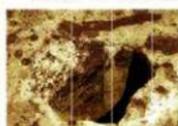
柱穴 S P 190 (西から)



柱穴 S P 191 (西から)

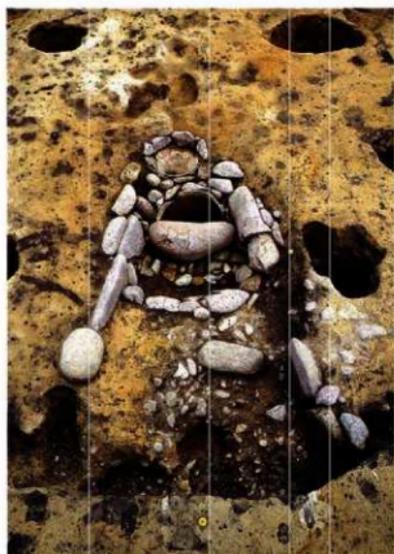


柱穴 S P 192 (北から)



柱穴 S P 193 (西から)

竪穴住居 S T 28 (西から)



複式炉 E L 167 (西から)



竪穴住居 S T 28 断面 a-a' (南西から)



複式炉 E L 167 断面 (北東から)



竪穴住居 S T 33 (南東から)



柱穴 S P 219
周溝 S D 239 (東から)



柱穴 S P 221 (南から)



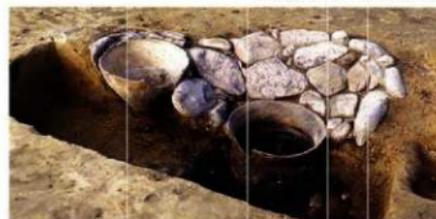
竪穴住居 S T 33 断面 a-a' (西から)



複式炉 E L 218 (南西から)



地床炉 E L 240 (南から)



複式炉 E L 218 断面 (南西から)

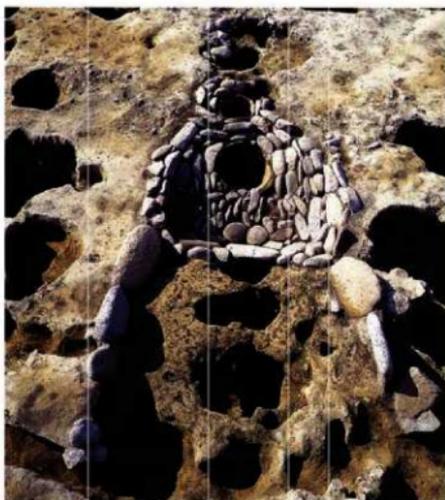


ビット S P 274・陥穴 S K 220 断面
E L 240・ビット S P 273 完掘 (北西から)

雙穴住居 S T34



雙穴住居 S T34 (南東から)



複式炉 E L217 (南東から)



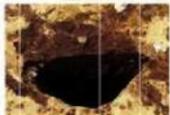
複式炉 E L217 断面 (南西から)



柱穴 S P242, 円溝 S D252・355 (南東から)



竪穴住居 S T50



柱穴 S P88 (南東から)



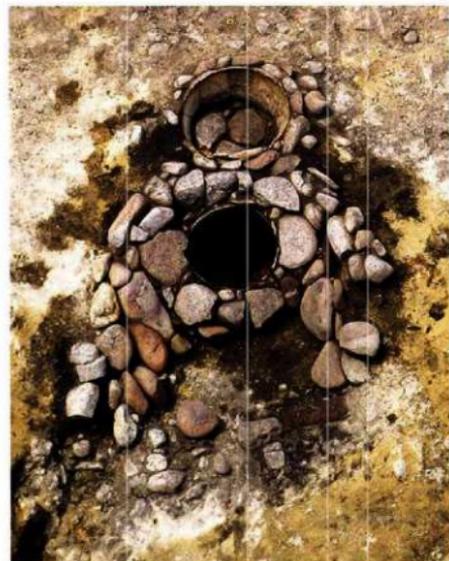
柱穴 S P89 (東から)



柱穴 S P90 (南から)



竪穴住居 S T50 (南東から) 柱穴 S P91 (東から)



複式炉 E L74 (南東から)



竪穴住居 S T50 (北東から)



複式炉 E L74 断面 (南から)

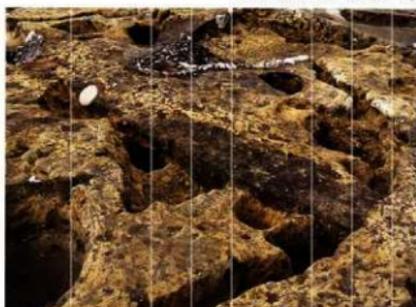
竪穴住居 S T35



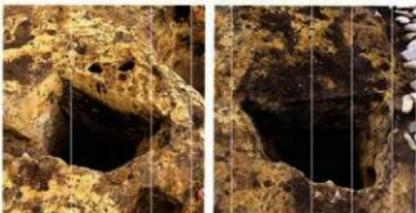
竪穴住居 S T35 (北東から)



複式炉 E L283 掘方 (南東から)

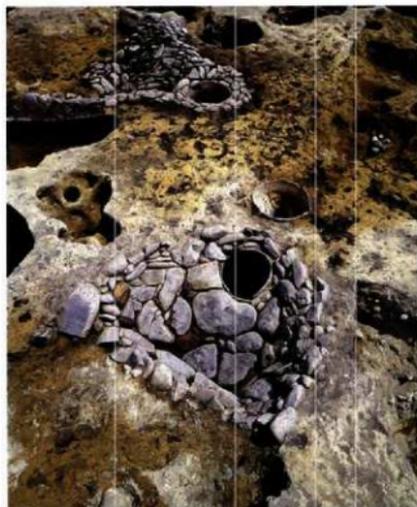


複式炉 E L283 覆土断面 (南西から)



柱穴 S P301 (西から)

柱穴 S P303 (東から)



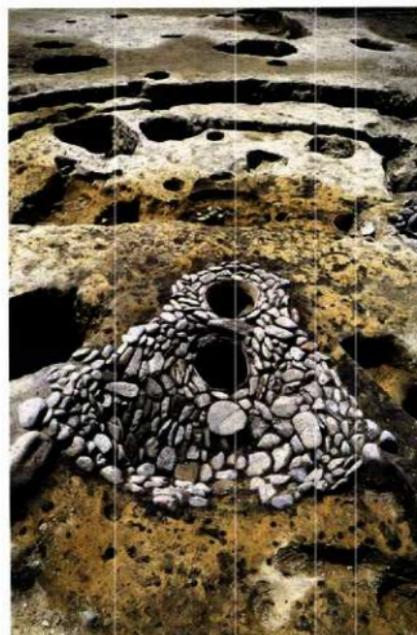
複式炉 E L 263 (北西から)



複式炉 E L 263 覆土断面 (北東から)



複式炉 E L 263 掘方断面 (南西から)



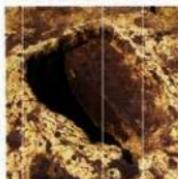
複式炉 E L 222 (北東から)



複式炉 E L 222 掘方断面 (南から)



柱穴 S P 249 (北から)



柱穴 S P 250 (北東から)



柱穴 S P 251 (南西から)



柱穴 S P 262 (北から)

竪穴住居 S T 280



竪穴住居 S T 280 (南東から)



複式炉 E L 266 断面 (北から)



複式炉 E L 266 (北東から)



複式炉 E L 46 断面 (南西から)



竪穴住居 S T 338 (北西から)



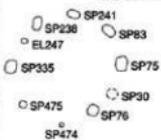
複式炉 E L 46 (北西から)



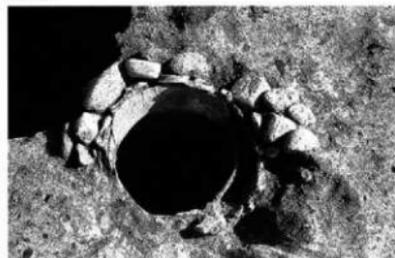
竪穴住居 S T 356 (上が北)



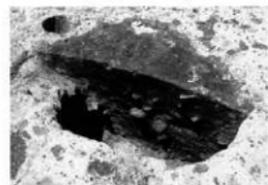
複式炉 E L 247 掘方断面 (北から)



複式炉 E L 247, 柱穴 S P 300 掘土断面 (西から)



複式炉 E L 247, 柱穴 S P 300 (北西から)



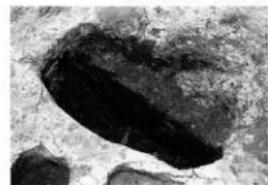
柱穴 S P 75 (東から)



柱穴 S P 76 (南から)



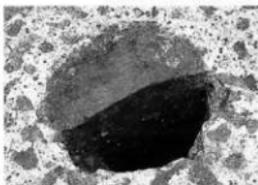
柱穴 S P 83 (南西から)



柱穴 S P 238 (東から)



柱穴 S P 335 (東から)



柱穴 S P 30 (南から)

単独で検出された複式炉,埋設土器遺構,配石遺構



複式炉 E L 73 (南東から)



複式炉 E L 73 断面 (北西から)



複式炉 E L 115 (南から)



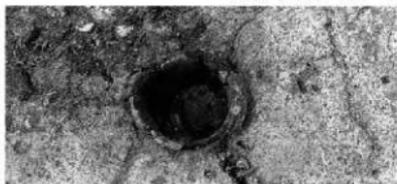
複式炉 E L 115 断面 (北西から)



複式炉 E L 348 (北から)



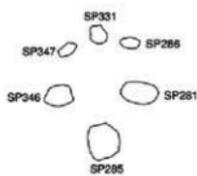
埋設土器遺構 E U 268 (東から)



埋設土器遺構 E U 63 (南西から)



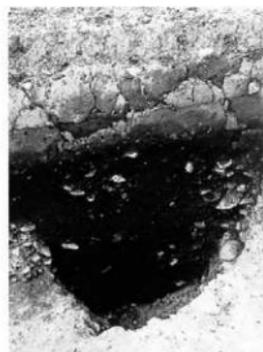
配石遺構 S X 284 (北東から)



掘立柱建物 S B 349



掘立柱建物 S B 349 (南東から)



柱穴 S P 347 (南東から)



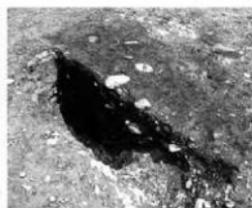
柱穴 S P 331 (北から)



柱穴 S P 286 (北から)



柱穴 S P 346 (北から)



柱穴 S P 285 (南西から)

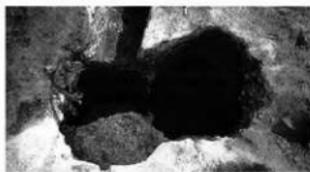


柱穴 S P 281 (北西から)

陥穴



陥穴S K 351 (西から)



陥穴S K 278 (北から)



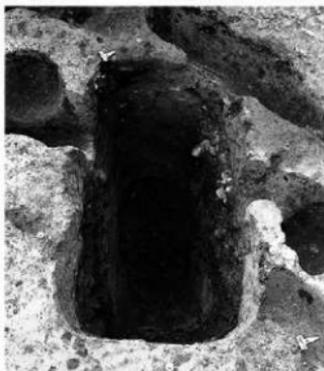
陥穴S K 278 断面 (西から)



陥穴S K 211 (南東から)



陥穴S K 125 (北から)



陥穴S K 220 (南東から)



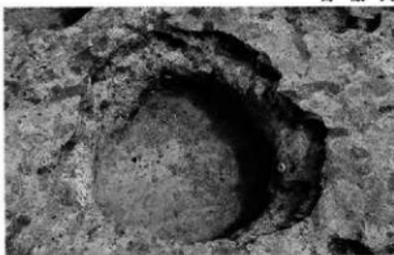
陥穴S K 215 (南東から)



陥穴S K 311 (北から)



貯蔵穴S K 12 断面 (南西から)



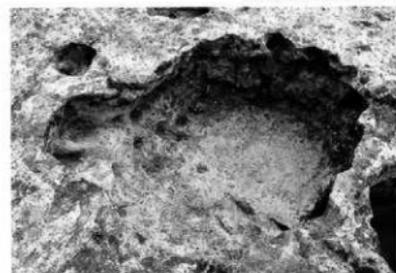
貯蔵穴S K 12 (南西から)



貯蔵穴S K 36 (北から)



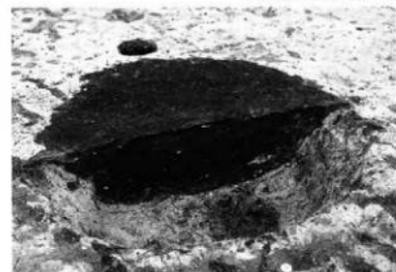
貯蔵穴S K 44 断面 (南西から)



貯蔵穴S K 44 (北から)



貯蔵穴S K 59 (南西から)



貯蔵穴S K 79 (南から)



貯蔵穴S K 142 (南から)

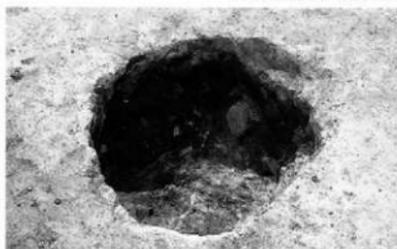
貯蔵穴、土坑、川跡



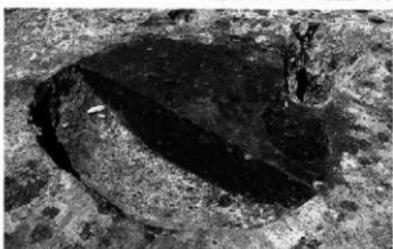
貯蔵穴 S K 216 (西から)



貯蔵穴 S K 248 (南東から)



貯蔵穴 S K 306 (西から)



土坑 S K 11 (東から)



土坑 S K 67 (南から)



川跡 S G 6 (東から)



作業状況



1



2



3

型穴住居ST1の複式炉E L87 埴輪土器



竪穴住居 S T 1
 甕溝 S D 126
 竪穴住居 S T 1
 竪穴住居 S T 2
 様式伊 E L 92 埋設土器 10

10



竪穴住居 S T 1 とその甕溝 S D 126、竪穴住居 S T 2 の様式伊 E L 92 出土土器

複式伊 E L 92 罐状土器 11～12
 複式伊 E L 92 13～14
 複式伊 E L 352 15



11



14



15



12



12



13



13

竪穴住居 ST 2 の複式伊 E L 92・352 出土土器



17



18



23



25



27



26



27

雙穴住居S T 2出土土器



28



28



29



29



左:36 右:37



上:38 下:40



39



整穴住居 S T 3	
複式炉 E L 154 増設土器	28・29
複式炉 E L 154	30～32
複式炉 E L 324	33
整穴住居 S T 3	34
整穴住居 S T 5	
複式炉 E L 308	36・37
柱穴 S P 228	38
柱穴 S P 232	39
岡溝 S D 289	40



整穴住居 S T 3・5とその複式炉・柱穴・岡溝出土土器



35



41



43



左上:45 左下:46 右:47



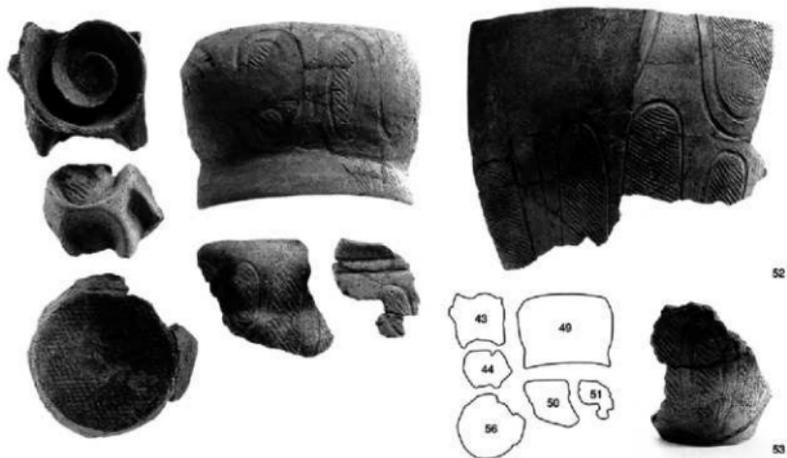
42



48

竪穴住居 S T 4
 様式炉 E L 106 曜紋土器 35
 竪穴住居 S T 5
 様式炉 E L 308 曜紋土器 41・42
 竪穴住居 S T 5 45~48

竪穴住居 S T 4・5 とその複式炉出土土器



54



55



57



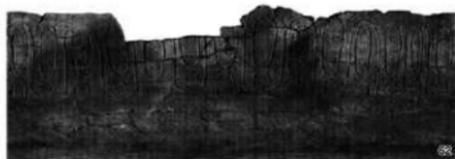
竪穴住居 S T 5 43・44・49～57
 竪穴住居 S T 9
 複式炉 E L 136 埋設土器 58～61



竪穴住居 S T 5 と竪穴住居 S T 9 の複式炉 E L 136 出土土器



62



69



63



66



左: 65 右: 64



67

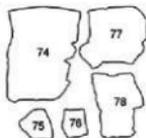
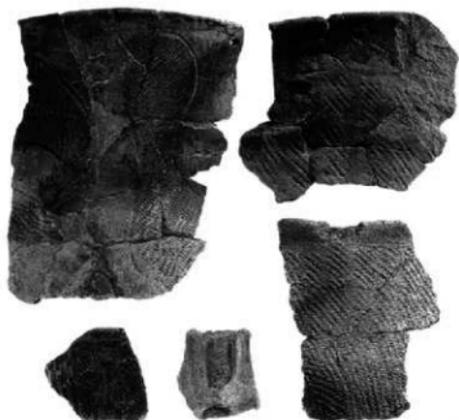


72



整穴住居 S T 9
 模式炉 E L 136 埴土器 62・63
 整穴住居 S T 9
 整穴住居 S T 28
 模式炉 E L 167 埴土器 65・67
 模式炉 E L 167 68～73

整穴住居 S T 9・28 とその模式炉出土土器



79



80



81



82



81



82

壺穴住居 S T 28 74~79
壺穴住居 S T 33
模式炉 E L 218 環紋土器
80~82

壺穴住居 S T 28 と壺穴住居 S T 33 の模式炉 E L 218 出土土器

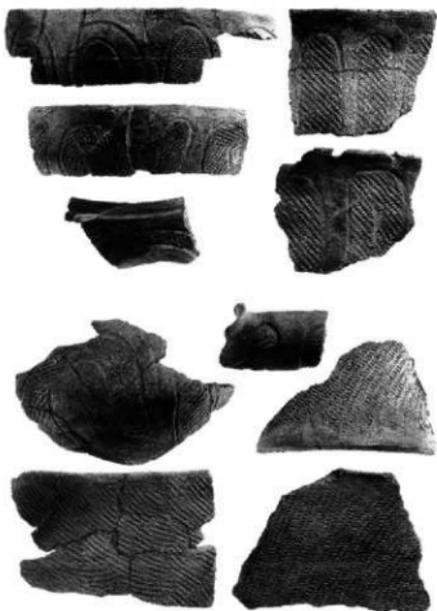


左:85 右:84

複式炉 E L 218 埋設土器 83
 複式炉 E L 218 84-85
 竪穴住居 S T 33 86-87



93



竪穴住居 S T 33 とその複式炉 E L 218 出土土器



98



98



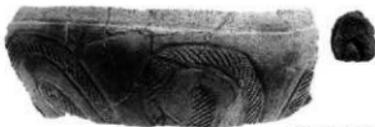
99



99



友:101 右:100



友:102 右:103

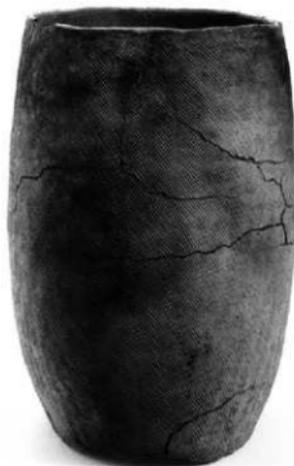
模式伊 E L 217 埴段土器 98~101

壁穴住居 S T 34 102・103

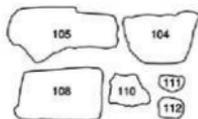
壁穴住居 S T 34 とその模式伊 E L 217 出土土器



106



107



109



複式炉 E L 283 104・105
 複式炉 E L 263 埋設土器 106・107
 複式炉 E L 263 108
 複式炉 E L 222 埋設土器 109
 複式炉 E L 222 110～112

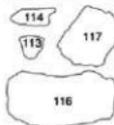
竪穴住居 S T 35 の複式炉 E L 222・263・283 出土土器



118



模式炉 E L 222 埴師土器 118
 竪穴住居 S T 35 113 ~ 117



115

竪穴住居 S T 35 とその模式炉 E L 222 出土土器



119



119



121

模式炉 E L 74 埋没土器 119・120
 模式炉 E L 74 121

120

整穴住居 S T 50 の模式炉 E L 74 出土土器



127



123



129



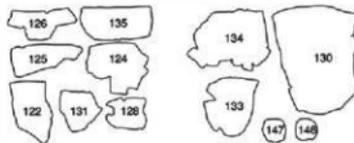
132



126



136



柱穴 S P 91 122
 竪穴住居 S T 50 123 ~ 136 · 146 · 147

竪穴住居 S T 50 とその柱穴 S P 91 出土土器



137



138



139



139



145



左:140 右:142



143



144



141

壑穴住居 S T 50 出土土器



148



148



149



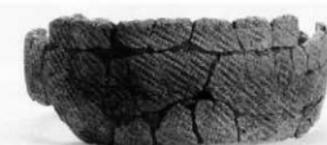
151



150



152



153



154

竪穴住居 S T 280
 様式伊 E L 265 埋設土器 148・149
 様式伊 E L 266 150・151
 竪穴住居 S T 338
 様式伊 E L 46 埋設土器 152・153・154

竪穴住居 S T 280・338 の複式炉出土土器



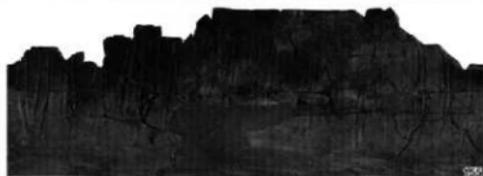
155



158



159



161



160



161



左:157 右:156



162



163



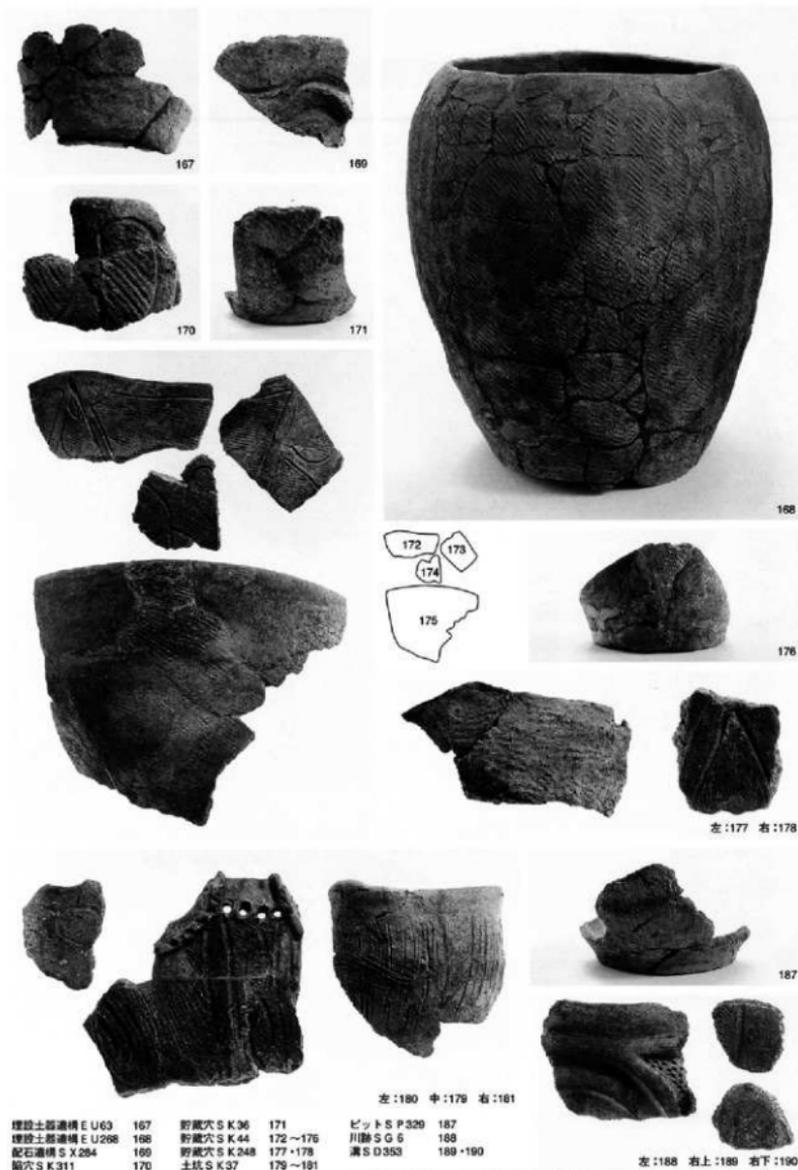
上:164 下:165



166

- 竪穴住居 S T 356
 模式炉 E L 247 埋設土器 155~157
 柱穴 S P 75 158・159
 柱穴 S P 76 160
 柱穴 S P 241 161
 単組で検出された模式炉
 模式炉 E L 73 埋設土器 162
 模式炉 E L 115 埋設土器 163
 模式炉 E L 115 164・165
 竪立柱建物 S B 349
 柱穴 S P 331 166

竪穴住居 S T 356 の模式炉・柱穴、模式炉 E L 73・115、竪立柱建物 S B 349 出土土器



埋設土器遺構 E U63 167 貯蔵穴 S K 36 171
 埋設土器遺構 E U268 168 貯蔵穴 S K 44 172~176
 配石遺構 S X 284 169 貯蔵穴 S K 248 177・178
 陥穴 S K 311 170 土坑 S K 37 179~181

ビット S P 320 187
 川跡 S G 5 188
 溝 S D 353 189・190

左:188 右:上:188 右下:190

埋設土器遺構、配石遺構、陥穴、貯蔵穴、土坑、ビット、川跡、溝出土土器



182



183



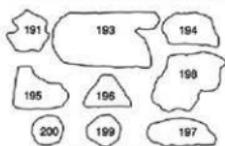
184



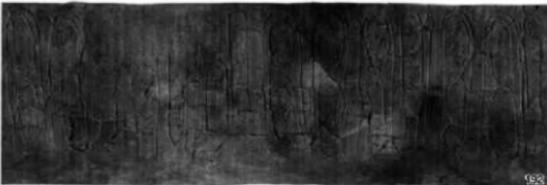
185



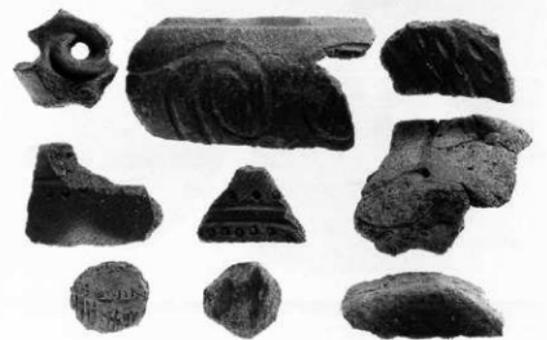
186



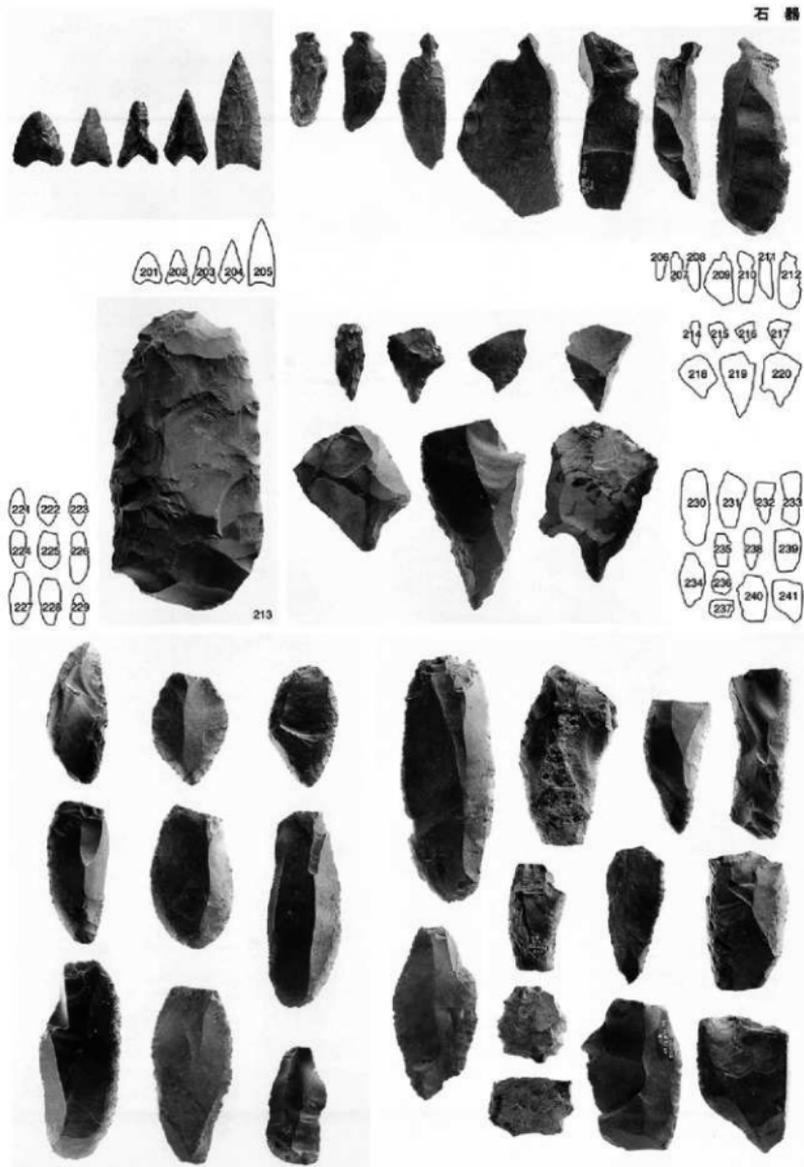
192



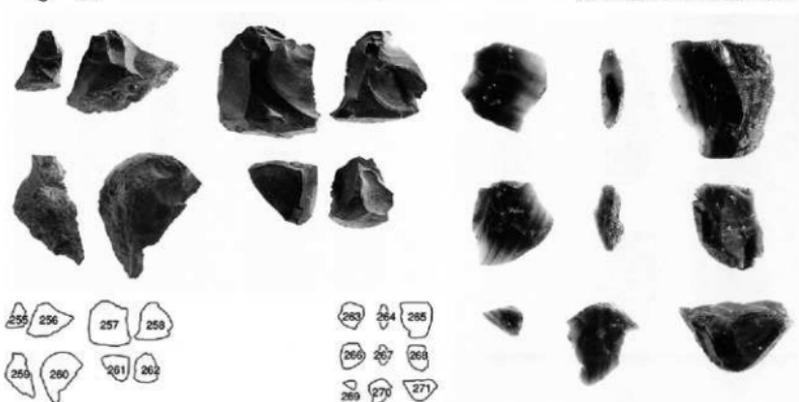
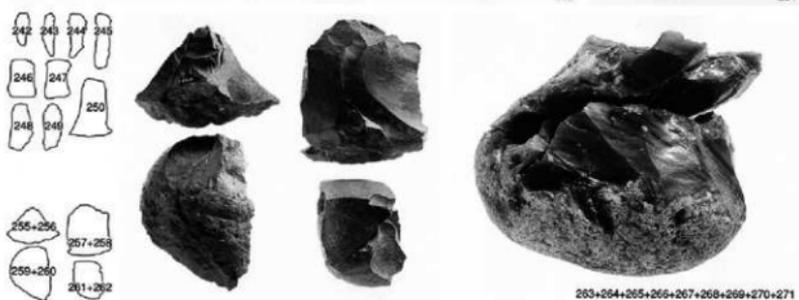
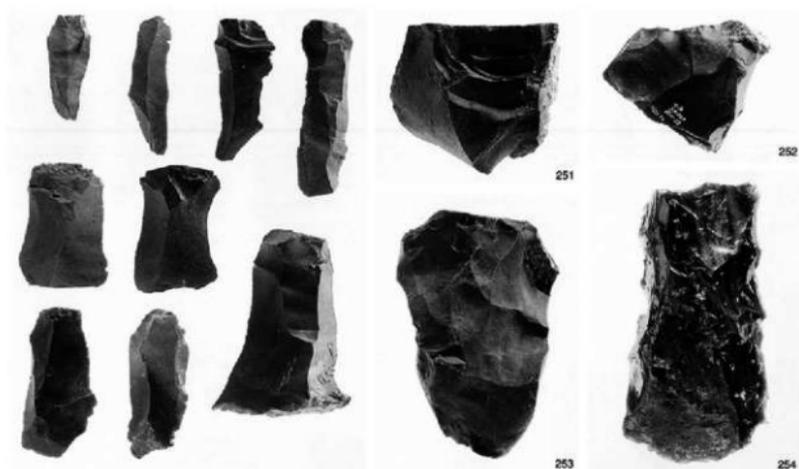
193



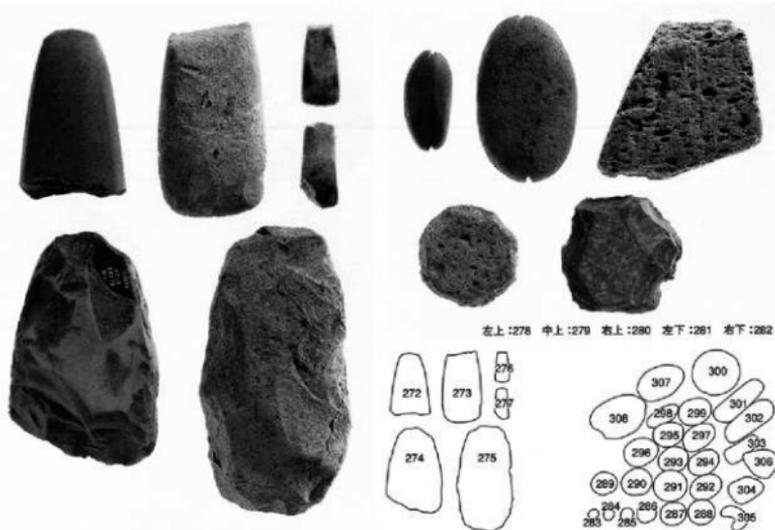
土坑 S K 282 (182 ~186), 遺物包含層 (191 ~199) 出土の土器、および出土地点不明の円盤状土製品 (200)



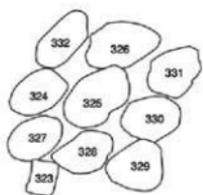
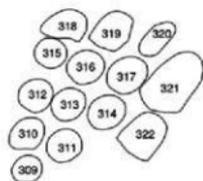
石鏃 (201 ~205), 石片 (206 ~212), 石篋 (213), 石鏃 (214 ~220), 鏃器 (221 ~229), 箭鏃 (230 ~241)



縦長剥片 (242~250), 石核 (251~254), 接合資料 (255~271)

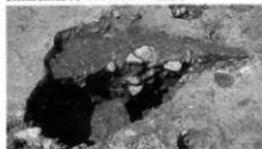


麻製石斧 (272~277)、石錘 (278・279)、軽石製石製品 (280)、円盤状石製品 (281・282)、磨石 (283~308)



磨石 (309~320), 凹石 (321・322), 石皿 (323~332)

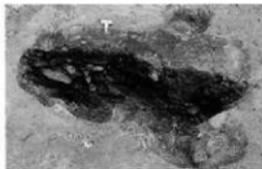
掘立柱建物S B401の柱穴



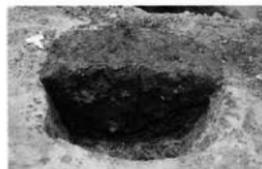
柱穴S P151 (南から)



柱穴S P152 (東から)

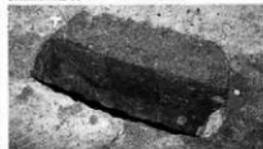


柱穴S P200 (南から)



柱穴S P299 (東から)

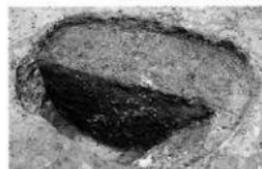
掘立柱建物S B402の柱穴



柱穴S P157 (東から)



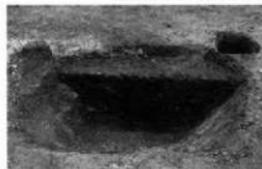
柱穴S P210 (南から)



柱穴S P257 (南から)



柱穴S P287 (東から)



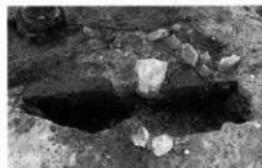
柱穴S P290 (東から)



柱穴S P291 (南西から)



柱穴S P288・293 (北東から)

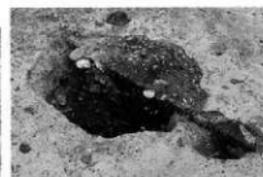


柱穴S P296・297・298 (北から)

掘立柱建物S B403の柱穴



柱穴S P99 (東から)



柱穴S P101・460 (南から)



柱穴S P103 (南から)

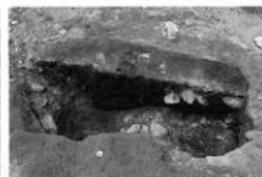
掘立柱建物S B404の柱穴



柱穴S P150 (南から)

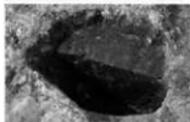


柱穴S P168 (南から)



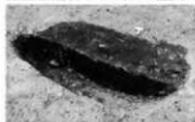
柱穴S P169 (東から)

掘立柱建物 S B 405 の柱穴



柱穴 S P 94 (南から)

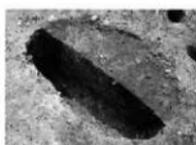
掘立柱建物 S B 406 の柱穴



柱穴 S P 25 (南から)

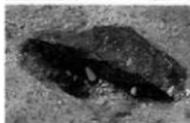


柱穴 S P 100 (南東から)



柱穴 S P 172 (北東から)

掘立柱建物 S B 408 の柱穴



柱穴 S P 96 (南東から)

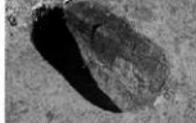


柱穴 S P 102 (東から)

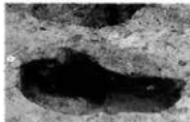


掘立柱建物 S B 411 の柱穴

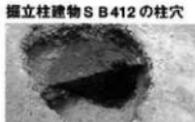
柱穴 S P 158 (北東から)



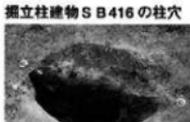
柱穴 S P 170 (南から)



柱穴 S P 254 (西から)



柱穴 S P 234 (北から)

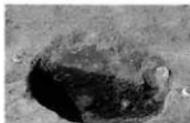


掘立柱建物 S B 416 の柱穴

柱穴 S P 104 (東から)



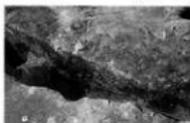
柱穴 S P 105 (南東から)



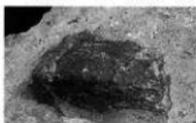
柱穴 S P 106 (南から)



柱穴 S P 107 (北から)

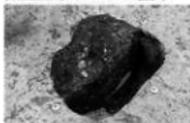


柱穴 S P 223 (南から)

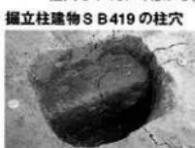


柱穴 S P 317 (東から)

掘立柱列 S A 447 の柱穴

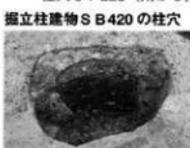


柱穴 S P 141 (北西から)



掘立柱建物 S B 419 の柱穴

柱穴 S P 318 (南から)



掘立柱建物 S B 420 の柱穴

柱穴 S P 178 (南から)

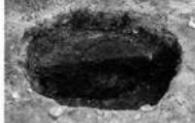


柱穴 S P 246 (南から)

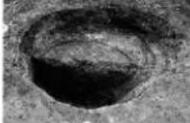
掘立柱建物 S B 421 の柱穴



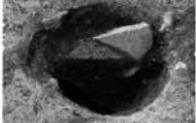
柱穴 S P 256 (南から)



柱穴 S P 260 (南東から)

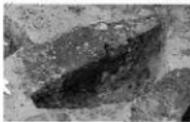


柱穴 S P 261 (北西から)

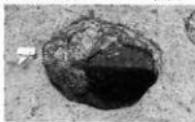


柱穴 S P 269 (南東から)

掘立柱建物 S B 429 の柱穴

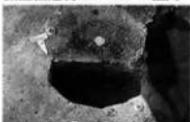


柱穴 S P 163 (南西から)



掘立柱建物 S B 437 の柱穴

柱穴 S P 175 (南から)



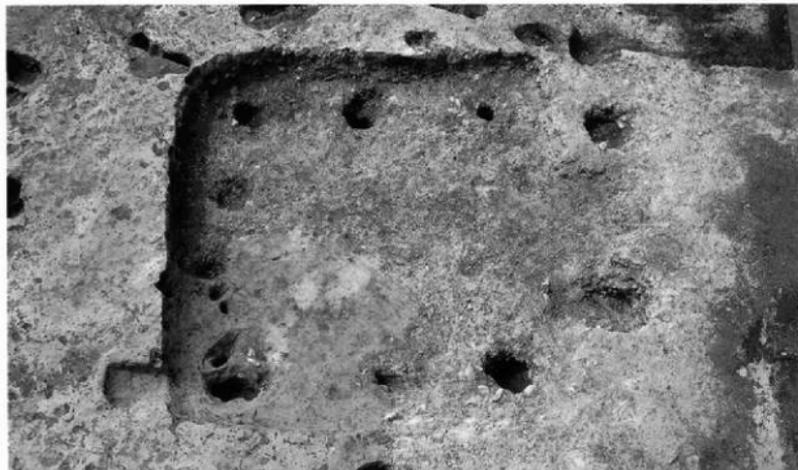
掘立柱建物 S B 441 の柱穴

柱穴 S P 267 (南から)



掘立柱建物 S B 445 の柱穴

柱穴 S P 276 (南から)



竪穴建物 S T 15 (北から)



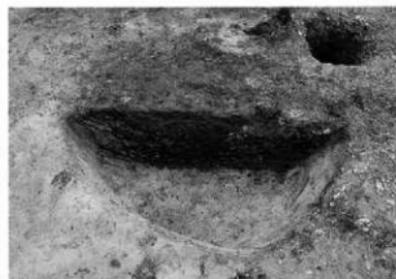
竪穴建物 S T 207, 土坑 S K 212・213 (北から)



土坑 S K 16 (南東から)



竪穴建物 S T 207, 土坑 213 断面 (南西から)



土坑 S K 134 (南西から)

土坑



土坑 S K 32・124・357 断面 (北東から)



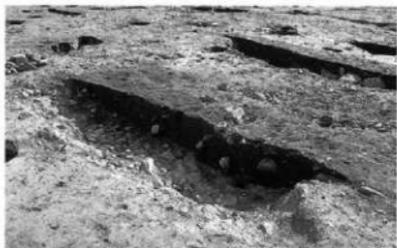
土坑 S K 32・124・357 (南東から)



土坑 S K 135 (南から)



土坑 S K 55 (東から)



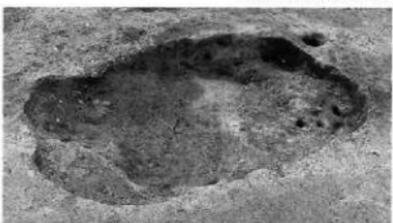
土坑 S K 56 (北東から)



土坑 S K 98 (北西から)

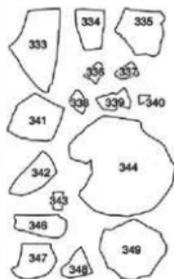
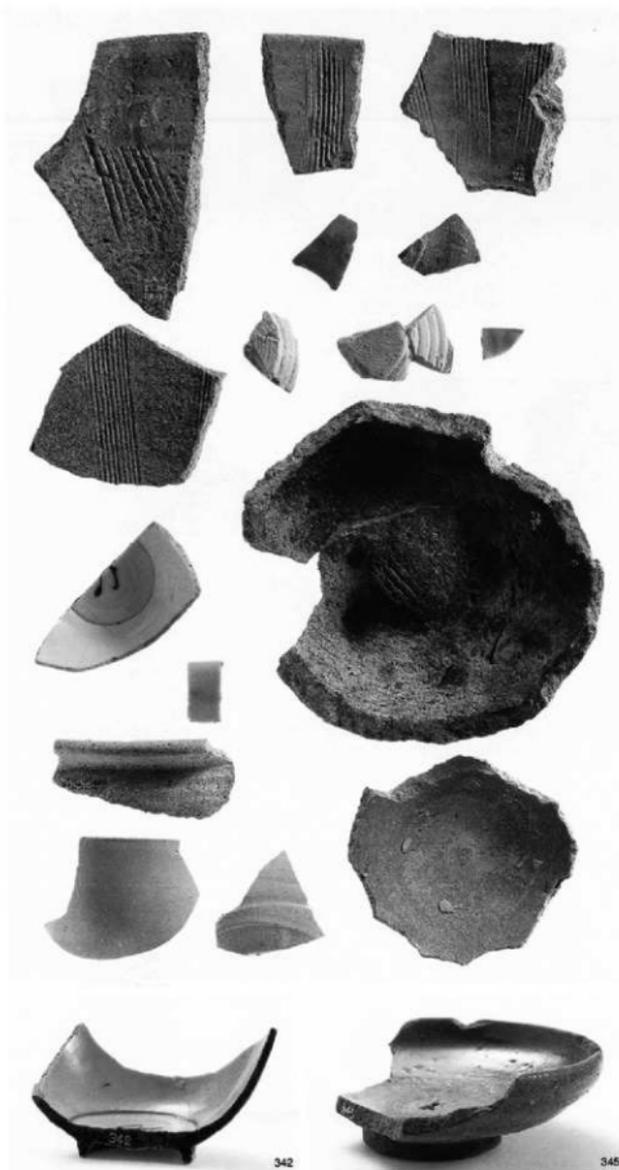


土坑 S K 132 (南から)



土坑 S K 161 (東から)

中世・近世の土器



- | | |
|--------------|---------|
| 壺穴遺物 S T 207 | 333 |
| 土坑 S K 96 | 334 |
| 土坑 S K 93 | 335 |
| 土坑 S K 98 | 336~337 |
| 土坑 S K 124 | 338~341 |
| 土坑 S K 149 | 342 |
| 土坑 S K 181 | 343 |
| 土坑 S K 313 | 344 |
| 柱穴 S P 152 | 345 |
| 柱穴 S P 330 | 346~349 |

壺穴遺物、土坑、柱穴出土の土器

中世・近世の遺物



350



382

配石遺構 S X 284

350

遺物包含層

351 ~ 361・363・364・367

表土

382・365・366

竪穴住層 S T 5

368



配石遺構、遺物包含層、表土出土の土器、および砥石 (368)

報告書抄録

ふりがな	こぞりいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	小反遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	水戸部秀樹 渋谷純子 阪英子 高桑登 村本周三							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2006年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こぞりいせき 小反遺跡	山形県 最上郡 鮭川村 大字京塚 字小反704	6366	1049	38度 49分 46秒	140度 14分 29秒	20040524 } 20040817	4.500	県営ほ場整備事業鮭川左岸地区
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落 狩猟場	縄文時代	竪穴住居	14	縄文土器		縄文時代中期末葉の竪穴住居が14棟検出された。いずれの住居にも複式炉が備えられている。独立棟持柱を持つ掘立柱建物が検出された。		
		掘立柱建物	1	石器				
		陥穴	7			(文化財認定箱数:125箱)		
		貯蔵穴	7					
		配石遺構	1					
	中世・近世	掘立柱建物	44	陶磁器				
		掘立柱列	14					
		竪穴建物	2					
		土坑	15					

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第148集

小反遺跡発掘調査報告書

2006年3月28日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 (023) 672-5301
印刷 株式会社アサヒ印刷
〒990-2251 山形県山形市立谷川2丁目486-14
電話 (023) 686-4331